

捻くれた少年と恥ずかしがり屋の少女

ローリング・ビートル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡が小泉花陽と出会ったら、という話です。

総武高校、音ノ木坂学院のキャラクターはあまり出てきません。あくまで、2人の交流がメインです。

サポートキャラクターとして、八幡側に小町、花陽側に凜が出てきます。

目次

春の歌	1
ルキンフォー	5
渚	11
夢じゃない	15
ヒバリのこころ	20
君が思い出になる前に	24
けもの道	29
海とピンク	33
スピカ	39
さらさら	45
スカーレット	51

冷たい頬	88
フェイクファー	82
空も飛べるはず	23
ハチミツ	69
惑星のかげら	74
不思議	78
正夢	84
猫になりたい	88
醒めない	91
流れ星	96
漣	100
恋する凡人	107
	111

タンポポ	118
テクテク	121
夏の魔物	125
メモリーズ・カスタム	130
胸に咲いた黄色い花	134
青い車	141
夜を駆ける	145
ロビンソン	149
恋のはじまり	153
裸のまま	157
おっぱい	161
初恋クレイジー	167
サンシャイン	173

夕暮れ	179
プール	183
波のり	187
君は太陽	192
群青	198
不死身のビーナス	202
涙がキラリ☆	208
スパイダー	212
テイタム・オニール	219
野生のポルガ	224
りありてい	229
桃	233
ハニーハニー	240

夏が終わる	246
コメット	250
ハイファイ・ローファイ	254
ハネモノ	258
みなど	264
ウサギのバイク	269
どんどどん	275
砂漠の花	280
僕のギター	284
花の写真	292
モニャモニャ	297
幻のドラゴン	301
ハヤテ	308

心の底から	313
ほのほ	321
コスモス	326
黒い翼	330
君だけを	334
Y	338
ビー玉	343
ホタル	350
ほうき星	353
ニノウデの世界	358
ワタリ	362
白い炎	367
日なたの窓に憧れて	371

ナサケモノ	443
ベビーフェイス	438
インディゴ地平線	434
聞かせてよ	429
たまご	424
優しくなりたいな	419
楓	408
ラクガキ王国	402
未来コオロギ	398
エンドロールには早すぎる	392
S J	386
ラズベリー	381
ビギナー	376

ナンプラー日和	500
オパビニア	494
花泥棒	490
485	
N a. d e. n a. d eボーイ	
ブチ	481
エスペランサ	477
子グマ!子グマ!	472
ヘチマの花	467
ハチの針	463
雪風	458
シロクマ	453
ルナルナ	448

俺のすべて	504
魔法のコトバ	508
みそか	512
チエリー	517
歩き出せ、クローバー	522
愛のしるし	527
スピカ #2	531
スカーレット #2	536
ロビンソン #2	540
俺のすべて #2	545
涙がキラリ☆ #2	553
胸に咲いた黄色い花 #2	557
空も飛べるはず #2	561

ルキンフォー #2	565
小さな生き物 #2	570
夜を駆ける #2	574
恋する凡人 #2	578
正夢 #2	583
愛のことば #2	587
君は太陽 #2	591
君だけを #2	595
夢じゃない #2	599
スターゲイザー #2	604
魔法のコトバ #2	609
春の歌	614
AFTER STORY	

夏の魔物 #2

君は太陽 #3

一番深い場所

—

—

—

629 624 618

春の歌

青春のバカヤロウ。

ここ最近の口癖を心で呟きながら、秋葉原の街を妹と歩く。可愛い妹の為とはいえ、貴重な春休みの惰眠時間を削って、何故にマイホームタウン千葉から秋葉原まで来なかりやならんのか。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

「どした？」

我が妹、小町が耳元で囁く。

「そんな腐った眼でじいつと見てたら、メイドさんが恐がっちゃうよ」

はつと我に返る。考え事をしていたせいで、気がつかなかったが、さつきから俺の視線は、知らぬ内に数メートル先でチラシを配っているメイドさんに注がれていた。一方、メイドさんの方はこちらを警戒しながら、健気にチラシを配り続けている。

いや、やましい気持ちなんかないよ。本当だよ。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「お兄ちゃん、気をつけてよ。小町が一緒にいるときにお巡りさんに職務質問なんて、恥ずかしいからやめてね」

「俺が一人の時はいいのかよ……」

妹よ。お兄ちゃんは悲しい。

そもそも東京までわざわざ出てきたのは、小町が浅草寺にお参りして、そのついでにスカイツリーに行きたいと言ったからだ。後者の方がメインだろう、と思つたら、実際そうだった。そして、両親は小町に甘々なので、小町がお願いしたら、俺の分の交通費もあつさり出してくれた。一通り見て回つた後、思つたより両親からもらつたお金が余つたので、メイドさんが見たい、という小町のリクエストに応え、ここ秋葉原までやつてきた。小町が見たいと言いつ出したんだ。もう一度言うが、ハチマン、ウソ、ツカナイ。

ひとまず、メイドさんから申し訳程度にチラシを受け取り、小町と並んで歩きだす。高校生活1年目の春休みに出かける相手が妹しかいないとは。俺のぼっちぶりも様になつてきたじゃないか。もはや悟りの境地に達している。

「ゴミいちゃん、またバカな事考えてる」

「バカ言え。俺はぼっちの素晴らしさを再確認しただけだ」

「はいはい。そんなお兄ちゃんでも小町は見捨てないであげる。あ、今の小町のポイント高い♪」

だから、そのポイントはどこに貯まっていくんだよ……。てか、さり気なくゴミいちゃん言うな。

「あ！あれ何だろ!？」

「おい、いきなり走るな。転ぶぞ」

何か面白いものを見つけたらしい小町の後を追いかける。

「ほえ〜」

UTX学園という綺麗な学校の校舎。その威圧感すら感じるくらいに立派な壁に取り付けられた馬鹿でかいスクリーンに俺と小町は、目が釘付けになっていた。

「スクールアイドルか〜。お兄ちゃん、知ってた?」

「いや、少なくとも総武高校にはない」

スクールアイドル。

馴染みのない言葉だが、要はアイドル部って事らしい。そして今スクリーンに映っている『A-R-I-S-E』という3人組グループはUTX学園どころか、全国でもそこそこの知名度を得ている、とパンフレットに書いてある。ちなみにパンフレットは小町がどこかからもらってきた。

「へえ〜、3人共可愛いな〜。お兄ちゃん、小町のアイドル姿見たい?」

「見たい見たいすごい見たい」

「うわっ、何その棒読み」

「それよか、そろそろ行くぞ」

「はいはい」

「いや、だからいきなり走るなって」

声をかけた矢先、小町はスクリーンを見ていた女の子とぶつかった。

だから言っただのに……。

「何やってんだよ小町。あの……すいません大丈夫ですか？」

謝罪しながら声をかける。

「あ、はい。こちらこそ、ボーツとしてて」

小町の囁くような柔らかな声で、一語一語途切れがちに言いながら、女の子が顔をあげる。

「……………」

言葉が出てこない。

その女の子は、はっきり言って美少女だった。

眼鏡越しにこちらを見るくりくりした眼、柔らかそうな白い頬、形のいい鼻、ほんのり紅い唇。いや、見すぎだろ。

俺はこの時、もちろん知る由もなかった。

この少女がスクールアイドルグループの一員として頂点に立つことも。

この出会いがもたらす新しい日常も。

ルキンフォー

おっと、いけない。

些細な現象にいちいち意味を見出すのは、モテない奴のやることだ。一流のぼつちたるこの俺は、例え美少女とお近づきになれるチャンスがあつたとしても、さつきから美少女が俺の事をじいつと見ていても、決して変な期待はしない。

「……………」

美少女がじいつと俺を見ていても…………。

「……………」

期待は…………。

「……………」

しない…………。

はっ！危うく死地に飛び込むところだった。いかんいかん。さつきとここを離れよう。

「すいません。ウチの妹が」

少女が地面にばらまいた荷物を拾いながら謝る。年下っぽいけど、一応敬語を使って

おいた。

「あ、ありがとうございます……」

「小町もごめんなさいです！」

少女も小町も慌てて拾い出す。

ふと、自分が拾った物を見ると、先程のA—RISEとやらの写真があった。

「スクールアイドル……」

思わず呟く。

「え？」

その呟きに反応した少女が顔を上げる。

「いや、何でもない」

まとめた物を丁寧に袋に入れ、おどおどしている少女に手渡す。よし、ミッションコンプリート。後は早々にここを立ち去ろう。

俺は落ち着かない気持ちを見ないふりして、もう一度謝罪してから小町を促し、その場を離れた。

「あ……」

うん。俺の耳には何も聞こえていない。

「お兄ちゃん」

「どした？」

「さっきの子、すごく可愛かったね！」

両親に秋葉原つぽいお土産を買おうと入ったお店で、小町が先程の事を思い出させる。

「そうだったか？」

とぼけておく事にした。

「またまた。あんなに見つめ合ってたじゃんか」

ダメだったか。なら……

「お、これなんかいいんじゃないか」

「うわ、この人ごまかしたよ。しかもすごい下手」

ここは逃げるが勝ちだ。

「はくあ。あんな可愛い子がお義姉ちゃん候補になってくれないかな」

「いや、それはない」

「なんで？」

「俺は働く気は無い。すると、必然的に奥さんが働く事になる。だがさっきの子は、どちらかといえば家庭を温かく守る専業主婦タイプとみた。てことは俺のライバルという」

「ゴミいちゃん……。さすがにクズすぎるよ……」

あれ、妹の好感度が下がったような……。

「よし、もう帰ろう」

「そだね」

何が何でも明日は絶対に家から出ない。

そんな固い決心と共に、人ごみを縫うように歩いていると、横から誰かぶつかってきた。

その拍子にお土産の袋がばさりと地面に落ちる。

「あ、すすす、すいません」

謝ってきた女子の顔を見る。……………嘘だろ？

「あの、これ……あ」

「あぁ〜♪」

俺と少女は唾然としていたが、小町だけ何故か嬉しそうな声を上げた。

ぶつかっただのは何と……

「さつきはどうも……」

先程の女の子だった。

「へえ〜、花陽ちゃん4月から高校生なんだ〜。私の一個上だね!」

「う、うん……。小町ちゃんはこの辺りの高校うけるの?」

「いえいえ、私達は千葉から来たんですよ」

「そうなんだ……」

女子、というか小町のコミュ力高すぎじゃね。いや、俺がなさすぎるのか。さつきから一言もしやべってない。

奇跡(?)の再会を果たした少女、小泉花陽は、たまにこちらをちらちら見ながら、小町に押し入れ気味に会話している。

女の子同士積もる話もあるだろうが、そろそろ帰らなくてはいけない。

「小町、そろそろ……」

「あ、あのよかつたら連絡先を……」

まあ、そのぐらいなら時間はあるか。

「ほら、小町。はやく交換しとけ」

「……………はあく。まったく、このゴミいちゃんは……」

小町が小声で何か呟く。だがすぐに明るい笑顔を花陽に向けた。

「花陽ちゃん、ごめんなさい!実は私今日スマホ家に忘れて……」

「お前さつき使つ……」足を踏まれる。めっちゃ痛え。

「だ・か・ら、ひとまず兄と交換ししてもらえますか?」

そういつてウインクする。あざと可愛い！

「あ、じゃあ……お、お兄さん。よろしくお願いします」
妹の為か。仕方ない。

「ほら」

自分のスマホを渡す。

小泉は一瞬キョトンとしたが、微笑みながら連絡先を登録してくれた。

「じゃあ、花陽ちゃんまたね！」

「うん、またね！」

初対面の相手をわざわざ駅まで見送るとは。この子、実は天使なんじゃね？

「は……お兄さんもまた会ってください……」

は、て言ったけど俺がいることを忘れてたのだろうか。

「お、おう」

軽く手を上げ、小泉に背を向ける。

「はあ、まったくゴミいちちゃんは……」

小町ちゃん、一日三回は止めようね。

渚

「おおおう……」

思わず気持ち悪い呻き声が漏れる。危ねー、これが教室だったら、また陰でキモ谷呼ばわりされてるところだったぜ。

過去のトラウマに心を再び傷つけられながら、呻き声の原因となったメールを再び凝視する。

FROM 小泉花陽

どうしようどうしようどうしよう。別に女の子とメールをするのが初めてというわけではない。だが、これまでの女の子は、夜7時に就寝しているので、こんな時間にメールが来ることはなかった。健康的だなあ。

………いかにいかに。またトラウマを思い出してしまった。ちくしょう、地雷多すぎだろ。迂闊に踏み込めない。ええい、引つ込め。

気を取り直し、メールを開く。

『こんばんは、夜分遅くにごめんなさい』

そこで、メールは途切れていた。

「……………」

え、何これ？何でいきなり謝られたの？もしかして、俺が好きになって告白する前に事前にごめんなさいって事？

頭を抱えていると、またメールの受信音が鳴る。

『すいませんすいません！間違えて途中で送信してしまいました！あの、お聞きしたい事があるのですが、お兄さんはアイドルはお好きですか？』

あー、操作ミスか。良かった。うっかり死ぬところだったわ。

しかし、アイドルか。アイドル系ビッチなら割と見てきた方だが、生で見た事はない。まあ、俺も男なので、全く興味が無いわけじゃないが。

『嫌いじゃない。今日見たA—R—I—S—Eなんかはいいと思う』

こんなもんか。我ながら当たり障りない。よし、送信。

すると、10秒もせずに着信がきた。

「おおう…」

また気持ち悪い呻き声が漏れる。画面には小泉花陽と表示されている。何なのコイツ、俺の事好きなの？中学時代の俺だったら告白してフラれているところだ。

恐る恐る電話に出る。

「ですよね!!!」

「な、何が？」

小泉のテンションが昼間と全然違う。夜行性なのだろうか。

「A—R—I—S—Eは本当にすごいアイドル何ですよ！3人のバランスの取れたルックスもさることながら、一糸乱れぬ美しいパフォーマンス！そして、3人の素晴らしい歌声が重なった時のあの感動と云ったら、もう……………」

「……………」

小泉は悦に入り、俺は言葉を失った。

いや、そもそも気づくべきだったのだ。秋葉原でアイドルグッズをあんなに買い漁るやつは、間違いなくアイドルオタクなんだから。

だが別に引いたりしない。俺だってマンガ、アニメ、ゲーム、ライトノベルと一通り嗜んでいる。昔はコスプレだって……………。危ねえ。また黒歴史が蘇るところだった。いや、何もしてないよ。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「…………その、なんだ、小泉はアイドルが好きなのか？」

「はい！アイドルと白米なしでは生きていけません！」

そこ同列なんだ……………。

この後、延々とアイドルについて語られてしまった。

女子との初めての夜の長電話がアイドルトークか……………。

まあ、俺らしいといえれば俺らしい。

「あのお兄ちゃんが女の子と長電話してる！小町嬉しいよ！」
……盗み聞きはバレないようにしろよ。

夢じやない

おかしい……。

カレンダーを見る。

何かの間違いだ……。

またカレンダーを見る。

何故、明日から新学期なんだあー……！

受け入れ難い現実がそこにはあった。

「にーかーげーつーたーりーなーいー」

………まあ、どんなにぼやいても、現実是不変ならない。ならば今日だけでも思う存分に惰眠を貪るしかない。

今日のスケジュールが決まったところで、さっそくベッドに飛び込み、目を閉じる。いい夢見れますように！

「お兄ちゃん!!」

我が妹がノックもせずに入ってきた。

「お兄ちゃん、出かけるよ〜♪」

返事はしない。ただの屍のように。

「……………」

「ゴミいちゃん。東京に行くから、さっさと用意して」

「はい？」

あ、やべ。反応しちやつた。

「花陽ちゃんに会いに行くんだよ！」

「花陽ちゃん？誰だ？」

「お兄ちゃん、怒るよ？」

いかん、小町に嫌われる。俺は脳内のデータベースを急いで検索し、花陽という名前を見つげ出した。

「小泉がどうかしたのか？」

「花陽ちゃんが好きなスクールアイドルのイベントがあるらしくて、私も見てみたいって言ったたら、チケット用意してくれたの！」

「そうか、楽しんでこい」

布団にくるまって、光を遮断する。

「てい！」

蹴られた。しかも割と強くて痛い。

「小町ちゃん、乱暴よ」

「お兄ちゃんの分もチケットあるの！てゆうかお兄ちゃん！花陽ちゃんにずっと連絡してないでしょ！」

用事もないのに女子に連絡なんて俺にはできない。同じ轍は踏まないんだよ。

俺の表情から何かを悟った小町が盛大な溜息をついた。

「まったく、これだからゴミいちゃんは……。とにかく着替えて！」

小町セレクトの着替えを渡され、ドアがバタンと閉まる。こうして俺の休日の予定が強制的に決められてしまった。

「あ、小町ちゃん！は……………お兄さん！」

秋葉原駅を出てすぐのところ、小泉がいた。こちらにすぐ気づいて声をかけてきたが、俺を呼ぶ時に間があったけど、本当は来てよかったのだろうか。イヤなんじゃなからうか。

「うーん、まだ無理か……………」

小町が小声で何か呟き、小泉の元へ駆けていく。

「花陽ちゃん、久しぶり♪元気だったー？」

「うん、元気だよ！小町ちゃんも元気そうだね♪」

「そりやもう、1番の取り柄ですから！兄はあんなですけど」

「うす、元気そうだな……」

よし、嘸まなかった。

「は、はい！お兄さんも元気……ですか？」

俺の時は疑問符がつくのか。

「心配すんな。この眼はデフォルトだ」

「い、いえ！そういうわけではなく！」

「まあ、お兄ちゃんの眼なら仕方ないよ。それより花陽ちゃん、今日の服も可愛いね〜！
ね、お兄ちゃん」

仕方ないのか。そうなのか。

小泉の方からは見えないだろうが、小町はこちらを睨んで『誉めろ、さも無くば殺す』
と言わんばかりの目を向けてくる。

「あ、ああ。確かに可愛いじよ」

嘸んじやつた。小町は溜息をついている。いや、半分はお前のせいだ。一方、小泉は

……

「あ、ああ、あ、ありがとうございませう！お、お、お兄さんもすす、素敵です！」

小泉は俺が嘸んだ事に気づいていないようで、顔を紅くしてあたふたしている。そして俺もいきなり誉められたので、かなりテンパリそうだ。

「はやく行くよー！！」

何故か少し頬を染めた小町に呼ばれ、俺達は足早にイベント会場へと向かった。

ヒバリのこころ

「ふう……」

「す、凄かったね……」

A—RISEのイベント終了後、会場を出た俺達はぐったりとしていた。とにかく熱い。会場の熱気にあてられて、気がつけば俺でさえも体を揺らしていた。慣れない事をした精神的な疲れと、慣れない動きをした肉体的な疲れは、俺と小町の体力をかなり削っていた。

「2人共々、飲み物買って来たよ〜!!」

1人だけ体力を削られるどころか、テンション上がりすぎて、ナチュラルハイになつてる奴がいる。

「ありがとう、花陽ちゃん……」

「す、すまん、小泉。いくらだった?」

「いえ、いいですよ!そんな!」

「いや、そういうわけにはいかない。俺は養ってもらう気はあるが、施しをもらう気は無い」

「え、えーと、今日、付き合ってもらったお礼です！」

そういつて小泉は最高にやわらかな笑顔を見せる。

その満面の笑みに、『え、何この子、俺の事好きなの？』などと中学時代のような勘違いをしそうになる。危うくフラれるところだった。

「そうか、ありがとう」

ここまで言われては断れないので、礼を言つて飲み物を受け取る事にした。

僅かに触れた指先は、まだ会場の熱気を残しているように思えた。

「お腹空いたね〜」

体力が回復して食欲がわいてきたのか、小町が甘えるように言う。

「こんな時は定食屋で白米を食べたいな」

日本人として当たり前の主張をすると、小町から脇腹をつねられた。

「バカ、お兄ちゃん！初めてのデートで定食屋なんてあり得ないから！」

小泉に聞こえないよう、小声で叱ってくる。え、何これデートだったの？俺の初デートは妹同伴なの？

小泉は何故かプルプル震えている。小町の言うとおりに、定食屋はダメだったのか。しかし、そこまで怒らなくても……………

「ですよね!!!」

「は？」

突然の小泉の大声に俺と小町は顔を見合わせる。

「やっぱり疲れた時は白米に限りませよね!!日本人に生まれた喜びを感じます!!」

「……」

あー、そういえばこの前、電話でアイドルと同列に語ってたな。最後は熱く語りすぎた小泉が我に返って、何度も謝ってきた。まあ、気にしてないけど。

「じゃあ、小泉のおすすめの場所に行くか」

「そ、そうだね」

ポカンとしていた小町も慌てて頷く。

「じゃあ、私について来てくださいー!」

小泉はおそらく滅多に見せないであろう、ドヤ顔をしながら、俺達を手招きしていた。

「これ、意外と相性いいかも……」

小町は考え込むような顔で、何かブツブツと呟いていた。

「はあく、幸せ♪」

お茶碗にこんもりと盛られた御飯をパクつきながら、小泉は幸せそうに頬を緩める。

「A—RISEのライブも素敵でしたし♪」

初めてスクールアイドルのライブを観た小町も上機嫌のようだ。

「小町ちゃんにも気に入ってもらえてよかった！」

賑やかに話す2人に対して、何となく思った事を言ってみる。

「2人もスクールアイドルできると思うけどな」

「え？」

案の定2人して固まる。やっぱり言わなけりやよかったのか……………。

「お兄ちゃん、さすがにシスコンすぎるよ……」

小町は顔を赤らめ、目を逸らす。一方、小泉は……

「わ、わ、私にアイドルなんて無理です！無理です！」

顔を真っ赤にしてわたわたと体を震わせている。

「いや、明らかに無理な奴なら言わねーよ。ただ、その、2人共、見た目ならまあ、その辺のアイドルには負けてないっつーか……」

「うわ、出た捻デレ」

それはこっちの台詞だ。何なんだよその造語。オリジナリテイありすぎて、少し感心してしまうじゃねーか。

小泉の方を見ると、こっちは対称的なリアクションだった。

「あ、ありがとうございます……」

そう言つて、小泉は小さい体をさらに縮こまらせた。

君が思い出になる前に

頬を染めた小泉に対して少し気まずい思いをしながらも、何とか会計を済ませて店を出た。ああ、キモいと思われてたらどうすれば……。

「あの、ごちそうさまです。すいません、私の分まで……」

「気にすんな。チケットのお礼だ」

「そうだよ、花陽ちゃん。どうせお兄ちゃんに小町か花陽ちゃん以外、奢る女の子なんていないんだから。あ、もしかして小町以外の女の子に初めて食事を奢ったんじゃない？ お兄ちゃん！」

何故、食後に傷つけられなきやいかんのだ。

「ほっとけ。俺だって女子との食事の1回や2回……」

「あるの？」

「あるんですか？」

小町が悪戯っぽく、小泉が心配そうに聞いてくる。

「ない……」

正直に白状する。

「やっぱり」

「……………そ、そうなんですなっ」

「さ、行くか」

何事もなかったように颯爽と歩き出す。いらぬ質問のせいで、いらぬダメージをうけてしまった。

それなりに楽しい時間が過ぎて、気がつけば帰る時間になっていた。

「じゃあ、明日から高校生だな。おめでとう」

「制服姿の写真送ってくださいね♪」

「うん！2人もまた会おうね」

小町がこっそり脇腹を小突いてくる。何か言えということか。

「まあ、その、なんだ、今度は千葉に来てみたらどうだ？小町も待つてることだし」

小町がジロリと見てくる。もう一声か。

「千葉なら、詳しく、案内、できる」

搾り出した言葉を途切れ途切れに発する。噛まなかったただけかもしれません。

「は、はい！よろしくお願ひします！」

「おう……………じゃあな」

「あ、あの！」

背を向けたところで、声をかけられる。

「？」

「あの、その」

「どした？」

「お兄さんじゃなくて………は………先輩って呼んでいいですか？」

確かに俺と小泉は兄妹ではないので、それが当たり前だろう。しかし、聞く必要はあまりないような……。

「ああ、惜しい……」

小町が何か小声で呟いている。最近独り言多いな。大丈夫か。悩みがあるのか。

しかし、すぐに何か思いついたような顔をして蘇る。

「それじゃあ、お兄ちゃんも呼び方変えてみたら？ Y O U 呼び方変えちゃいなよ！」

キャラ変わってんぞ。

しかし、呼び方が……。まあ、先輩と呼ばれるなら……

「こ、後輩って呼んでいいか？」

場の空気が凍りつく。

「そ、それはちよつと……」

小泉は悲しそうな顔をする。

「このバカ、ボケナス、八幡！何でそうなるの!？」

「いや、八幡は悪口じゃねえだろ……」

おかしい。妹からの扱いがどんどん酷くなっていく。

「あの、先輩!」

割と真剣な顔をした小泉が、一步だけこちらに踏み込んでくる。だが、すぐに俯いた。

「わ、私の事は……は、花陽でいいです……」

最後の方はかなり聞き取り辛かったが、ここで『何かいったか?』なんていえるほど、馬鹿じゃない。

心の準備の為、1回深呼吸をする。

そして、花陽の目を見て言った。

「は、はにやよ……」

「……………」

「……………」

囁んじやつた。

下手に雰囲気作らなきゃよかった。うわあ、このまま消えてしまいたい。

「……………ふふっ」

寒い沈黙を破るように小泉……じゃなくて花陽が笑いだす。ほら、囁まなかった。心の

中では。

つられて小町も俺も吹き出した。

陽もだいぶ傾いた空の下。秋葉原駅の前で美少女2人（片方は妹だが）と楽しく笑い合う。

これってリア充じゃね？と思いながら、春休み最後の日は少しだけ賑やかに過ぎていった。

けもの道

新学期が始まり、早くもクラス内の人間関係は出来上がっていた。まあ2年にもなれば、学校内での己の立ち位置なんて、誰もがそれなりに理解している。後は、同じ雰囲気を持ち、同じ匂いのする奴らとつるめばいいだけだ。そして他のグループとは極力関わらなければいい。

孤高のぼっちたる俺は、読書で時間を潰していた。去年と何ら変化のない日常が流れていく。だがそれでいい。それがいい。急激な変化などストレスでしかない。ただでさえ来月には五月病が控えている。悩みの種を自ら増やしに行くのはバカのやることだ。

そんな事を考えている俺の最近の変化といえば……。

スマホを操作して、写真を見る。

そこには、校門のままで穏やかに微笑む花陽が写っていた。入学式の日撮ったものを小町だけではなく、俺にも送ってきたのだ。ちなみに『似合ってますか?』という言葉も添えられていた。それに対して『悪くない』と返したら、小町から怒られた。おかしい。花陽からは『ありがとうございます!』と言われたのに。

そんなやりとりを思いだしているうちにはつととなる。

そういうえば、昨夜自宅にて、この写真を見ていたら、小町から『お兄ちゃん、さすがにそのニヤニヤ顔は気持ち悪いよ』などと罵倒された。花陽とは割とメールをしているが、学校でそのメールを読み返すこともある。てことは……………。

俺は今、ニヤニヤしてるのか。

周りから見られていないか確認しようとしてやめる。もしかしたら、確認する事によつて、トラウマが増えるかもしれない。かくなる上は……………。

俺は誰かとメールしているふりをして、クールに教室を出た。

入学式を終え、早くも2週間、新しい制服の着心地には慣れましたが、まだ落ち着きません。その理由が……………

「かよちーん！もう部活は決めたかにや？」

幼稚園の頃からの幼馴染みで親友の凜ちゃん私の悩みを知ってか知らずか、その種を突いてきます。

「はやく決めないとでおくれちゃうよ？」

凜ちゃんの言うとおりです。確かに今週には決めてしまわないと……………。このままじゃ、私を急かしながらも、自分も決めずに待つてくれている凜ちゃんに申し訳ないし

……。

とりあえず、凜ちゃんの好きそうな陸上部を見学するために、カバンを持って教室を出た。

先輩は何部なのかな……。

千葉にいる目つきの悪い、でもどこか寂しげな、それでいて優しい先輩を思い出す。そういえば先輩の学校生活の事は、まだ何も聞いていない。というか、いつも私がアイドルの話ばかりしている気がする。質問しようとしても上手くはぐらかされてる……。き、嫌われてないよね……。

先輩の事は小町ちゃんから聞くことが多い。

とても甘いコーヒーが好き。

読書が好き。

国語が得意。

数学が苦手。

運動はそこそこ。

と、年下の女の子の相手が得意。

「かよちゃん……」

「びゃあ!!」

気がつけば凜ちゃんの顔が目の前にあった。

「何、ボーツとして顔紅くしてるの!? ほら行くよ!!」

凜ちゃんは私の腕を引っ張ってどンドン進んで行く。それにつられて私も急がざるをえなくなる。

「ダ、ダレカタスケテエー!!」

いつものように叫ぶ私の目にある文字が飛び込んだ。

『スクールアイドル、メンバー募集!!』

それと同時に先輩の言葉も頭の中に蘇ってきた。

海とピンク

なんて1日だ……。

鬱な気分になりながら、腐った眼をさらに腐らせて歩く。いや、さすがに自虐が過ぎるか。

ただ気分が晴れないのも事実。俺は今日、素晴らしい作文を書いたのだが、担任の平塚先生にご理解を得られず、奉仕部という謎の部活に入れられ、雪ノ下雪乃という美少女に罵倒の限りを尽くされ、HPは底をついている。

ライトノベルならラブコメ展開だが、俺の手にかかればこのような惨劇になってしまう。あの雪ノ下という奴はぼっち同士、シンパシーを感じてしまいそうになったが、甘い空気など皆無。ぼっち+ぼっち=気の合う仲間ではない。ただ同じ教室にぼっちが、2人いるだけだ。

大して意味のないことを考えているとメールが来た。

花陽からだ。

いつものように平常心でメールを開く。べ、別に喜んでなんかいないんだからねっ!!

『先輩はどんな部活に入っていますか?』

何だかなー。色々タイムリーすぎだろ、この質問。まあ、いいけど。

『中学時代から高1は帰宅部。今日から奉仕部』

『今日から入ったんですね(笑)ちなみに奉仕部ってなんですか?』

『俺もよく分かん。強制的に入れられただけなんだな。部員も2人しかない』

『先輩、何かしたんですか?』

『何も。今日、作文を書いたんだが理解を得られなかったぐらい』

『一応、内容を聞いてもいいですか?』

俺は公園のベンチに座り、今日の高校生活に関する作文を、1行1句漏らさずに書いて送る。

3分くらいたって、電話がかかってきた。

『どうした?』

『せ、先輩!あの、何か悩みでもあるんですか!?!』

『は?』

『も、もし、ご両親や小町ちゃんにも言えない悩みでしたら、わ、わ、私に話してください』

『!!』

『どうしてそうなるんだ?』

『だ、だって!あんな暗い病んだ文章を書くなんて……』

平塚先生もそこまで言わなかったような……。しかし、花陽が本気で心配しているのが、電話越しに伝わってくるので、そこまで悪い気分じゃない。

『別に暗いのはいつもの事だし、病んではいない。青春は素晴らしい、美しいというくだらない価値観に一石投じてみただけだ』

『あはは、深いような、それでもないような……。』

いかん。ドン引きしているようだ。

『そういうや、何か話があるんじゃないのか？』

華麗に話題を逸らす。

『あ、そうでした。すみません。実は何部に入ろうか悩んでて……。』

『へえ、どの部活で悩んでるんだ？』

『……最初は友達と一緒に陸上部に入ろうと思ったんですけど、今日、たまたまスクールアイドルのメンバー募集の広告を見かけて……。』

『やりたいのはスクールアイドルの方だと聞こえるけどな』

『た、多分そうなんですけど、自信がなくて』

至ってシンプルな悩みだった。要はスクールアイドルをやりたいけど自信がないからどうしよう、とところだ。

『いつそ友達も誘えばいい』

『え?でも……』

『陸上部は止めとけ。スクールアイドルやりたいけど自信がないから陸上部に来ましたじゃ失礼過ぎる』

『あ………』

『それに前も言っただろ?その……』

『あわわ……』

「この前の事を思い出したようだ。こちらも恥ずかしくなる。

『じゃあ頑張れ。応援してる。じゃあな』

『あつ……』

何か言いかけた気配がしたが、さっさと電話を切る。

穴に入りたいたい気分、というものを久しぶりに味わった気がする。

帰宅時、小町に何かあったのかと聞かれたが、適当にごまかしておいた。

あれから2日たったが、花陽からは連絡は来ていない。自分からは何もできずに日々を過ごしている。さんざん孤高のぼっちとか言っておきながら、この約1ヶ月の安らぎを失うのが恐くなっていた。花陽に言った言葉は紛れもない本音でしかないが、傷つけたかもしれない、という不安はなくなる。失う事は慣れてるはずなのに。

自室のベッドで寝そべりながら物思いに耽っていると、スマホが振動し始めた。

画面を見ると、花陽だった。

『おう』

恐る恐る出たが、上手く言葉が出てこない。

『私、スクールアイドルになります!!相談に乗っていただき、ありがとうございます!!』

『え?』

普段と違うハキハキした声とスクールアイドルになるという宣言に驚く。

『私、やってみます!』

『お、おう……』

気圧される。覇気でも使えるのだろうか。このままじゃ気絶してしまいそうだ。いや、しないけど。

『なあ……』

『はい?』

『俺の事嫌いにならなかったのか?』

『え?』

少しの間、沈黙が流れる。そして……

『そ、そんなわけないじゃないですか!』

大きな声に自然と体を起こしてしまう。

『言い方はきつかったかもしれないですけど、でも、先輩の言葉のおかげで前に進めました。だから……』

『?』

『……こんな私ですけど、また相談してもいいですか?』

その言葉に頬が熱くなるのを確かに感じた。

スピカ

μ, sに加入して、早くも2週間が過ぎようとしています。最初は自信のなかったダンスも少しだけ踊れるようになってきました。それに、私と一緒に凜ちゃんも入ってくれたし、同じクラスの西木野さんも私達と同時にμ, sの一員になったので、とても心強いです！

それに、な、な、何と……今週、矢澤先輩のアイドル研究部に私達が入り、矢澤先輩がμ, sに加入した事により、部室が出来て、正式にスクールアイドルとして活動する事ができるようになりました!! さ、さらに生徒会長の絢瀬先輩と副会長の東條先輩も加入してμ, sはその名前の通り9人になり、現在PVの撮影中なのです!!

まだ廃校を止められるかわからないけど、この事を励みに頑張ろう！

あ、帰ったら小町ちゃん……先輩にも報告しなくちゃ！

考えている内に自宅の前にはいた。いつマンションの中に入ったかもわからないくらいだった。

「ただいま〜」

ドアを開け、晩御飯の仕度をしているお母さんに声をかける。

「おかえりく、花陽」

今日の晩御飯は何かな。

「お、おう花陽、おかえり。もう少しでできるみたいだから着替えてこいよ」

「はい、わかりました」

お皿を並べている先輩の横を通り過ぎて、自分の部屋に入る。

ブレザーを脱ぎ、ハンガーにかけながら、先輩がPVを見たときのリアクションを想像してみる。いつものように捻くれたようなリアクションしか思い浮かばないけど

……

「あら、比企谷君。ありがとう」

「いえ、このぐらいなら……」

「花陽ちゃんに男の子のお客さんなんて初めてだわく、ちなみに付き合ってるの?」

「い、いえ、そんなんじや……」

リビングの方から、お母さんと先輩の話し声が聞こえる。お母さん、先輩に何聞いてるんだろ……。先輩を困らせてないといいけど……。

あれ?

先輩?

ドアの向こうに耳を澄ませる。

「秋葉原でたまたま出会って……」

先輩の声だ。

え？嘘？何で？

慌ててリビングに行く。

「ど、どした？」

そこには確かに先輩がいた。

「え、ええええええええええ!!」

数時間前。

「お兄ちゃん、これ花陽ちゃんのところに届けてきて♪」

「は？」

どこかへ出かけてきたらしい小町は、可愛らしく包装されたは小さな箱を渡してくる。

「お兄ちゃん、これ花陽ちゃんのところへ届けてきて♪」

「小町ちゃん、説明不足にも程がありますよ」

「ほら、花陽ちゃんがいるユーズってグループが本格的に活動始めたから、そのお祝い

！」

「ミューズな、ミューズ」

「そうそう、それ！花陽ちゃんがスクールアイドルを始めるからには、小町も陰ながら応援したいんだよ！」

名前間違ってたけどな。

「それでこのプレゼントをお兄ちゃんのお小遣いを前借りして買ったんだよ！」

「おい、今とんでもない事言わなかつたか？」

このガキ……。てか何故普通に前借りできるんだよ。おかしいだろ。

「というわけで、お兄ちゃんは今からこのプレゼントを花陽ちゃんに届けてきてくださいー！」

『というわけで』の使い方を学んでこい、受験生。ぼっちのような絶滅危惧種に対して、学校だけでなく家族も厳しいとは……。そろそろ動物愛護団体が動いてもいいレベル。

だが舐めるな。

「あ、財布の中、すつからかんだわ。無理。おやすみ」

「あ、大丈夫！お父さんのお小遣い前借りしてきたから」

親父さまあ—————！！

小町の天使のような悪魔の笑顔を見ながら、2人の罪のない男達が、傷ついていく。どんなミッドナイトシャツフルだよ。

「仕方ねえ。行くぞ」

「小町は行かないよ。だってもう遅いじゃん。それに交通費は1人分しかもらってないし」

「それなら、お前が行った方が喜ぶだろ……」

「ゴ・ミ・い・ちゃ・ん」

何かもう、色々とアレだ。反論する気もおきない。

小町に教えてもらった住所を頼りに、花陽の住んでるマンションに着く頃には、陽がけっこう傾いていた。

とりあえずロックを解除してもらおうと、部屋の番号を確かめながら押していると

……

「あなた、もしかして比企谷君？」

「ひゃい！」

突然声をかけられて驚いた。振り向くと、知らない人だ。だがこの容貌、声、立ち振る舞い、それで予想はつく。

「あの、もしかして花……小泉の……」

何故か名字に言い直す。

「母の花枝です。よろしくね。いつも花陽からあなたの事は聞いてるわ〜」

ナイスタイミング！ここでプレゼント渡せばミッションコンプリートじゃん。小町には『会えなかった！てへっ☆』とでも言っておこう。

「あの、これ、花陽さんに……」

「あら、ありがとう〜」

「じゃあ俺はこれで」

回れ右！

「そろそろ花陽が帰ってくるから、一緒に待ちましょう♪」

できなかつた！何気に腕をホールドされている。そして、花枝さんの胸があ、あ、当たってるけど気にしない！

そうして半ば強制的に食事をしていく事になり、今に至る。俺の料理レベルは小学生程度なので、下手に手伝わずに、皿を並べたり、花枝さんの話し相手をしていた。旦那さんは出張のようだ。そして…

「あ、あ……」

この前と違い、眼鏡をかけていない花陽は、未だに固まっていた。やれやれだ。

やらやら

「お母さん、おかわりー！」

「はーい」

「……………」

フードファイターの如く白米を食していく（もう4杯目）花陽を横目に、俺は自己暗示をかけていた。

落ち着け俺。女の子の家で食事をするという一大イベントが発生したが、よくよく考えてみれば、ただ飯食ってるだけだ。そこに特別な感情など存在しない。

ここで普通のラブコメだったら……

『○○○ったら、最近家では○○○君の事ばかり……』

『もう、お母さん止めてよー！』

なんて会話が発生して、お互い顔を赤らめながらも、少し距離が縮まるものだが、孤高のぼっちたる俺の手にかかればそんなイベントは……

「花陽ったら、最近家ではμ，sや比企谷君の事ばかり」

「もう、お母さん止めてよ〜！」

おおう……………。

危うく変な声出そうになった。自分の顔が熱くなるのを感じながら、花陽の方を見てみる。すると、花陽はこつちを見ていたのか、ぼつちり目が合う。

「〜〜！」

そして音がしそうなぐらい、さつと目を逸らした。きめ細かでも柔らかかそうな頬は穏やかな赤に染まっていた。

やばいよやばいよ！何か嫌われそう！

動揺を必死に隠そうとしていると、花陽が口を開いた。

「せ、先輩って……………おもしろいから……………」

少し言い訳するような口調で告げると、花陽はさつきよりハイペースで白米を平らげた。

「これを……………私に？」

「ああ、正式にスクールアイドルになったお祝いだ。小町と俺から」

「あ、ありがとうございます！」

ふう、色々ありすぎて忘れるところだった。

それにしても、俺の小遣い前借りで買ったのに、小町と連名で渡す。これって八幡的にポイント高い！

「あの、開けていいですか？」

「ああ」

中身は俺も知らないんだけどね。

花陽は丁寧に包装を剥がしていく。

「これは……」

「リストバンドか」

特に柄のないシンプルなリストバンドが入っていたのだが……

「2つありますね」

色違いでピンクと黒がある。花陽ってあまり黒のイメージない気がするが。

「あ！じゃあ、先輩……」

「よかったな、2つ入ってて」

「あ、えーと、はい……」

「じゃ、俺そろそろ帰るわ」

「そうですね……、電車なくなっちゃうし……」

花陽の声のトーンがほんの少し暗めになったのに、気づかないふりをしながら、花枝

さんにつげる。挨拶してお暇した。

「先輩！」

エレベーターを待っていると、花陽が走ってきた。

「あ、あの、あのあの……」

「お、おう……」

「今日はありがとうございましたー！これ、大事にしますー！」

その手首には、先程渡したピンクのリストバンドがある。

「ああ、いいんじゃないか」

降りてくるエレベーターの階数表示をカウントダウンのように感じながら、精一杯の言葉を吐き出す。

「ありがとうございます」

花陽は柔らかく微笑んだ。手を伸ばしたい衝動をピリピリと指先に感じながら、そいつを押さえつけ、俺はエレベーターに乗り込んだ。

「じゃあな」

「はい、帰り気をつけて」

エレベーターの扉がゆつくりと閉まる。だが、目を逸らそうとしない花陽を見ていると、先程の衝動がまた暴れだし、何故かボタンを押して、扉を開けていた。

見えなくなりそうだった花陽と再び対面する。

「先輩？」

花陽は首を傾げる。まあ、これはあれだ。旅の恥はかき捨てるな？花陽には滅多に会わないから、まあ……その……

「は、花陽」

「は、はい……」

「眼鏡はずした方が……何かいいな」

「え……」

俺はすぐにドアを閉め、1階のボタンを連打した。

先輩が乗り込んだエレベーターが1階まで降りても、私はエレベーターの扉を見ていた。

先程の言葉を思い出し、頬が熱くなる。家に帰ってきてから、何回目だろう。嬉しかった。

口元が自然と緩む。凜ちゃんがいたら、からかわれたかも。

それと同時にリストバンドの事を思い出す。あれを買ってきたのは小町ちゃん、黒の方はきつと先輩のだろう。察しが悪すぎるのかわざとなのか……。

「先輩のばか……………」

そう呟きながらも、口元は緩んだままだった。

リストバンドを2つ共、花陽に渡したと報告したら、小町にもものすごく怒られた。
b
y比企谷八幡。

「やっぱり昨日花陽ちゃんとかあったの？」

「いや、何も」

小町にまで知られたら生きていけない！

話しているうちにメールの着信音が鳴る。

俺は小町をやり過ぎし、スマホの画面を見る。

花陽からだ。

うじうじしても仕方ないので、さっさとメールを開く。

『昨日はありがとうございました。本当に嬉しかったです！』

「おおう……」

くっ、何だこの可愛い生き物！もしかしたら、戸塚と張り合えるレベル。この子が書いた小説なら、材木座レベルでも読んじゃう！材木座って誰か知らないけど！

いや、浮かれるな八幡。非モテ三原則を忠実に守り続けた俺がこの程度で……。

「お、お兄ちゃん……」

「どした？」

いつの間にか仕度を終えていた小町がさつきとは違い、冷たい目をして告げた。

「学校では絶対その不気味な笑顔は止めてね……」

「はい」

「それと……」

「？」

小町は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「花陽ちゃんって眼鏡はずした方が可愛いね♪」

そういつて自分のスマホの画面を見せてくる。

そこには、制服姿の花陽が写っていた。だが、今回は眼鏡をしていない。入学したての頃のオドオドした感じがなくなりつつある。

「なっ、おま………」

「大丈夫！後で送ってあげるから♪」

このガキ………」

「小町を学校まで送ってくれたらね♪」

「……へいへい」

「つたく、仕方ねえな。」

この日、小町から送られてきた写真を見ていた俺は、何故か危険人物と認定された。由比ヶ浜の口撃がキモいから怖いに変わっていたのは割とシヨックだったし、雪ノ下が罵倒を通り越して優しくかった時もダメージを受けた。おかしい。頬が緩むのを堪えてたのに。

小町ちゃんから送られてきた先輩の写真を眺める。

読書中のようで、いつもの捻くれた印象が緩和されていた。

先輩こんな表情も見せるんですね……。

この写真を見ながら、この前の帰り際の言葉を思い出すと、頬が緩みそうになる。学校では気をつけよう。

「かつよちーん！」

凜ちゃんが後ろから抱きついてくる。いきなりの事にスマホが手から離れた。

「おっと」

凜ちゃんがすぐに反応して、キャッチしてくれる。

「ん？」

「あー！」

「そういえばまだ写真を……」

「これ……誰にや？」

「あ、うう」

きよとんとしている凜ちゃんに私は顔を真っ赤にして俯いてしまいました……。

8823

「か、かよちゃんが……………かよちゃんが熱愛発覚にやあ……………」
「!!!」
「ち、違うよ!違うよ凜ちゃん!」

慌てて凜ちゃんの口を塞ぐ。せ、先輩と熱愛なんて……………嫌じゃないけど……………嫌じゃないけど、私はスクールアイドルになったばかりだし……………

「んー!んー……………」
気がつくくと、凜ちゃんの体から力が抜け始めていた。思った以上の力が出ていたみたい……………

「ご、ごめんね、凜ちゃん……………」

凜ちゃんはゼエゼエと息をしながら、すぐに立ち直る。

「かよちゃん!この眼の腐……………濁った男の人は誰にや!」

あれ?今一瞬だけ腐ったと言おうとしてたのかな?小町ちゃんがよく言ってるけど、そこまてかなあ?

ひとまず凜ちゃんの質問に答える。

「…………え、えと、お友達…………かな?」

「凜に聞かれてもわからないにや……………」

「そう…………だよね」

うーん、今まで考えたことがなかったけど、私と先輩の関係って何だろう?

「か、かよちゃんは…………この人の事、す、好きなの?」

「……………うーん」

先輩は同じ事聞かれたら、何て答えるだろう?

「え!?好きなの!」

でもいきなりそんな事聞けないし……………。

「そ、そうなんだ…………。凜はまだ恋愛の事はよくわからないけど、かよちゃんが本気なら応援するよ…………」

凜ちゃんが何か小声で呟いている。どうしたのかな?

「じゃあ、そうと決まれば教室で作戦会議にや……………!!!」

凜ちゃんが私の手を引いて、いつもの通学路を走り出す。

「ど、どうしたの?凜ちゃん!ダ、ダレカタスケテエ…………!」

少し暖かくなった空の下に私の叫び声が響いた。

……………作戦会議って何だろう?

あれから少し時間が経ってゴールデンウィーク………の終わり頃。イベント？ぼつちにそんなのねえよ。一流の社畜たるウチの両親は、当たり前のように仕事をしているし、一流のハイブリッドぼつちたる小町はりア充もぼつちも満喫している。そして一流のぼつちたる俺はぼつちしている。適材適所だ。何か違う気がするけど。

ちなみに花陽はスクールアイドルの仲間と合宿だ。ネットを通して着々と人気もついてきているらしい。聞くところによると、メンバーで作詞をしたり、衣装のデザインをしたり、ピアノを弾いて作曲をしたり、ダンスの指導をしたりしているらしい。何そのチート集団。

そういやこの前、雪ノ下のパソコンを借りて、こっそりμ,sの動画を見ていたら、二度と見えなくなつたな。何でも犯罪者になるのを未然に防ぐ為とか。まったくやれやれだ。

そんな事を考えながらゲームをしていると、呼び鈴が鳴る。

仕方ない。未来の専業主夫の仕事くらいしておくか。

インターフォンのカメラの映像を確認する。

「おお……」

気持ち悪い声が漏れてしまう。

そこに映っているのは、キヨロキヨロと挙動不審な花陽とその背中を押しているμ、
Sのメンバー、星空凜だった。

冷たい頬

「星空凜です！よろしくにゃ！」

「あ、ああ比企谷八幡でしゅ……。よ、よろしく……」

もうじき職人芸の域に達するであろう、カミカミの自己紹介を披露して、もう一度現状を確認する。

「えっと、小町に会いに来たのか？」

星空の後ろに隠れている花陽に話しかけると、人間に怯える小動物みたいに、恐る恐る出てきた。

「いえ……。あの……。実は内緒で来ました」

マジか。誰もいなかったらどうするつもりだったのか。

「小町ちゃんが、ゴールデンウィークは先輩が常に家にいるからって言うてましたので……」

小町ちゃん……。兄を勝手に暇人扱いしないでね。俺だつてデートの1つや2つ……。べ、別にデートしたいなんて思つてないんだからね！

「うーん……」

気がつくくと、星空が俺の顔を覗き込みながら首を傾げていた。

「うおっ！」

思わず後ずさる。

だが星空は機敏な動きですぐさま俺との距離を縮める。

「う〜ん……」

近距離で目が合う。

ぱつちりとした大きな目、すらつとした鼻、少し細めで形のいい唇、花陽とは対照的なタイプの美少女だ。

「これがかよちゃんの好みかによ〜……」

何かぼそぼそと呟いているが、こちらは緊張感MAXどころか振り切っているので、上手く聞き取れない。

「……………むう」

星空の背後に目をやると、花陽が柔らかかそうな頬を少しだけ膨らませて怒っているように見えた。何それ可愛い。あ、そうか。いつまでも玄関で話してないで、茶の1つでも出せという事か。

「と、とりあえず上がれよ……」

「は、はい！ほら凜ちゃん！失礼だよ！」

「か、かよちん痛い痛い！」

花陽は星空の頭を両手で挟みこむようにして俺から引き剥がす。そこまでしなくても……。

「わあ……」

「凄い数の本だにや〜」

花陽と星空は親父の本棚を見て驚いている。俺の友達はどうもかなりアクションだったわけ。あ、友達いないんだった。てへっ！

「ほれ」

2人に千葉県民のウエルカムドリンク・MAXコーヒーを渡す。

「あ、ありがとうございます」

「いったただつきまーす！」

2人はプシュツといい音を立てて缶を開け、そして口をつける。

「甘っ!?!これ何が入ってるにや!?!」

「そりゃ、練乳だよ」

「当たり前のように言ってるにや!?!」

どうやら星空の口には合わなかったようだ。花陽を見てみる。

「……………」

震えている。やばいこれは……

「おいしい……」

「そ、そうか」

目をキラキラさせている。こやつ、千葉県民の才能があるとみた。

「そういや今日は何か用でもあるのか？」

俺の言葉に2人は顔を見合わせ黙る。

「あの何となく先輩の家に来てみたくて……」先輩！

花陽の言葉を打ち消すように星空が強めに呼びかけてくる！花陽はきよんととして、俺は何故か目を逸らして窓の外の景色に目をやった。

「あの、先輩はかよち……」

「あわわ……」

花陽が星空に抱きついて黙らせる。いきなり百合百合しいなこの2人。まるで雪ノ下と由比ヶ浜のようだ。微笑ましいが、何とも言えない空気。混ざろつか。無理か。無理ですね。

「たっだいま、お兄ちゃん誰か来てるの〜？」

玄関のドアを勢いよく開け、小町が帰ってきた。

「あ、花陽ちゃん!!それに、sの星空凛ちゃんだ！」

目を輝かせる小町。こりや騒がしくなりそうだ。

5月の穏やかな青空を見ながら、これから来る嵐に対する心の準備をした。

フェイクファー

数日前……

「本人に聞いてみればいいにや!!」

「り、凜ちゃん! 声が大きいよ!」

目をキラキラさせて、ストレートすぎる提案をする凜ちゃんを宥める。まだ自分でもこの気持ちかわからないのに……。だけど凜ちゃんの表情を見ると、真剣に私の事を考えてくれているようで、無碍にはできません……。

「じゃあμ、sの先輩達に相談してみるにや」

声のボリユームを落として、耳元で呟いてくる。

「む、無理だよお……」

「でも人生の先輩だからきつといいアドバイスが……」

穂乃果『恋愛!? よくわからないや! うーん、今日もパンが美味しい!』

海未『恋愛!? ハレンチです!!』

ことり『ちゅんちゅん』

にこ『恋愛経験があるかって!? あ、当たり前でしょ? (嘘)』

希『そんな時はスピリチュアルの力やね』

絵里『れ、恋愛!? アイドルが恋愛なんて認められないわ!』

「……やっぱり無理そうにや」

「う、うん……」

何かすごく失礼な気がする。

「」「」「くしゅんっ!」「」「」

「それに私……そんなのじゃ……」

「あなた達、さっきから何騒いでるの?」

真姫ちゃんがいつの間にか私達の近くにあった。話に夢中になりすぎて気づかなかつたみたい……。

私達の、というか凜ちゃんの声が思いの外大きく、クラスの何人かがこちらを見ていた。

「あ、そうだ! 真姫ちゃんの恋愛の話教えてほしいにや!」

「ヴェエ!」

凜ちゃんの唐突すぎる質問に真姫ちゃんの顔が赤くなる。ごめん、真姫ちゃん……。

「ないの?」

「そ、そんなわけないでしょ！私を誰だと思ってるのよ！」

「じゃ、教えてほしいにゃ！」

「う、うう……」

「何々？コイバナ？」

「私も西木野さんのコイバナ聞きたい！」

「絶対モテたでしょ？」

あわわ、クラスの皆が集まりでした。凜ちゃんを始めとしたクラスメイト達の視線に晒され、真姫ちゃんがしどろもどろになる。入学直後ならあり得ない光景だなあ。

「イ、イミワカンナイ!!」

何かが限界に達した真姫ちゃんは教室を早足で出て行ってしまった。

もうすぐ朝のホームルーム始まるのに……。

そして、この件は2人だけの秘密となり、凜ちゃんの猛プッシュで、小町ちゃんに住所を聞いて、先輩の家に遊びに来て、今に至ります……。

先輩、少し凜ちゃんにデレデレしていたような……。

「お兄ちゃん、どういう事!？」

小町にキツチンまで引つ張られ、小声で問い詰められる。

「俺もわからん。てつきりお前に用があるのかと……」

「住所は教えただけど小町の作戦じゃないよ！」

「今お前作戦って……」

小町ちゃん、何考えてるの？

「それよか何でMAXコーヒーなんて出してるの!?小町的にポイント低い！」

「いや、千葉のソウルを教え込もうと思つて……それに花陽は気に入つたし……」

「嘘っ!?こりゃ本当に……」

一人で考え込んでいるようだ。すると星空がこちらにやつてきた。

「どうかしたにや？」

「いや、何でも……」

「じゃあ、比企谷さん！」

星空がまた顔を近づけ、小声で囁く。何、お前。俺の事好きなの？

「かよちんの事、好きなの!？」

「ひ、ひゃい!？」

な、何言つてんの!?囁んだじゃん！

「凜ちゃん!？」

星空の言葉に何故か目を輝かせた小町が、星空を廊下へと引つ張つていく。

花陽に目をやると、俺の方をジト目で見ている。またご機嫌斜めのような。仕方ねえ

な。

「MAXコーヒーのおかわりいるか？」

「いい、いりません！」

ぷいっと窓の外を向いてしまう。機嫌を損ねた小動物そのものだ。

「お兄ちゃん!!」

小町が戻ってきた。星空も後ろでニヤニヤしている。

「私達出かけてくるから、ちよつと留守番してて！」

「それなら俺と花陽も……」

「お昼ご飯の材料買ってくるだけだから！皆のお出かけはその後！」

「荷物持ちは……」

「平気平気！」

俺の返事も聞かずさっさと出て行く2人。

花陽はこちらを不安そうに見ていた。いや、何もしないからね。

り、凜ちゃん……！

親友の突然の行動に私は何が何だかわからなかった。

空も飛べるはず

「……………」

「……………」

気まずい沈黙。

小町と星空が意気投合して出かけたが、こちらは何とも言えない空気になった。花陽はチラチラとこつちを窺っている。

これは一般男子ならまず間違いなく恋しちやうレベル。俺も中学時代なら告白して振られただろう。振られちやうのか。そうなのか。

だが、今の俺は非モテ三原則に忠実に生きている。まず間違いは起きない。

1. (希望を) 持たない。

まずは自ら希望を絶っておこう。

「あー、悪いな。せっかく小町に会いに来たのに……」

そう、ここで俺自身はおまけだという事を認識してしまえばいい。そうすれば勘違いも……

「いえ、その……先輩に会えたから嬉しいです……」

くっ！

2. (心の隙を) 作らない。

そうだ。心を強く保ち、何者も入ってこれなくすれば……

「先輩？」

気がつけば、花陽が俺の顔を下から覗き込むように見ていた。

「もしかして具合でも悪いんですか？」

いつものくりくりした目に不安の色をのせて聞いてくる。しかも角度の問題で、白い胸元が見えている。半分は服のせいだ。大事な事なのもう一度言おう。半分は服のせいだ。

雪ノ下とは比べるまでもない。由比ヶ浜ぐらいか……。平塚先生ほどではないな。………バカ！ハチマンの変態！

花陽はそんな俺のグスイ思考回路など気にもせず心配そうにしている。それにしてもほっぺた柔らかかそうだなー。赤ちゃんみたいなぷっくりした感じではないが、何かよく伸びそうだ。………違う違う違う違う!! 「だ、大丈夫だ」

「そうですか……」

隣に座り直す花陽からは甘い香りが絶え間なく漂っている。

おのれ……

3. (甘い雰囲気) 持ち込ませない。

まあ色々あった(？)が、要はそういう空気にならなければいいだけだ。そしてその方法はいくらでもある。例えば笑いだ。バラエティ番組でも見て、2人して大笑いすればいい。

「テレビでも見るか」

「は、はい……」

2人して姿勢を直し、画面を注視する。

『俺、やっぱりお前の事が……』

『私も……』

男女が抱き合っている。……ソファアールで。

その安っぽいドラマのワンシーンに固まってしまふ。

「……………」

花陽は頬が少し赤く、視線は画面にロックオンされている。

「あれ、(こ)じやないな……」

適当な事を呟いて、チャンネルを変える。ここはニュース番組でお堅い雰囲気を……

『さあ、ここで明るい話題です。先日、婚約を発表した俳優の○○さんと歌手の○○さん

結婚披露宴が……』

豪華なドレスに身を包んだ女性の話を中心に結婚披露宴の話題が語られる。

「……………」

「……………」

居心地は悪くないが、穏やかとも違う気分だ。花陽もさつきから口数が少ないし……。

「何か飲み物取ってくる」

「このままでは意識してしまう。手後れか。」

「あ、私も手伝います！」

花陽が立ち上がろうとしたが、その声に驚いた俺が、足をもつれさせて、よりよつて花陽の方へ倒れ込んでしまう！

「っー」

「きゃっ！」

花陽を潰さないように、何とか両手をついたが、目の焦点を正面に合わせると、花陽の顔があった。

「しゅ、しゅまん……」

「い、いえ……」

喘んでしまったが、全く気にならなかつた。顔がそれほど近い訳ではないが、床のような姿勢でソファアールで見つめ合っている事実はまだ上手く飲み込めていない。

花陽の瞳が僅かに潤み、胸がその規則正しい呼吸に合わせて上下している。手はその上で組まれていた。

動きたいのに動けない。でもこんなのは……………

「先輩……………」

花陽が目を閉じる。桜色の唇と華奢な肩が震えていた。

俺は……………

ガンツ!

「!」

静寂を破る物音に飛び上がる。花陽も体を起こしていた。

音のした方へ目をやる。

「アハハ……………」

庭で気まずそうに笑っているのは、さつき仲良く外出した小町と星空だった。

ハチミツ

「お、おかえり……」

「た、ただいま……」

「ただいまにや……」

「……………」

何事もなかったように挨拶をする。花陽は燃えそうなくらいに顔を真っ赤にして俯いてしまっているが。

「買い物に行ったんじゃないのか……」

「い、いや、その、サイフを忘れちゃって……急いで戻ってきたんだよ!」

「何故窓から?」

「お、驚かそうと思つたにや!」

「そ、そうか……」

内心、嘘つけと思いつつも、先程の花陽の目を閉じた瞬間が脳裏に焼きついたままなので、2人に気を向ける余裕がない。

「かよちくん」

「……………」

星空が頬をつついて呼びかけても、まだ俯いたままだ。俺もつついてみようかな。いややめておこう。

まずはこのおかしな空気を換気せねば。

俺は深呼吸をして、ぼっち力を総動員し、乱れだフオーマットを書き直す。

「よし、皆で千葉まで行くか」

「何言ってるにや？ここは千葉だにや」

星空が首を傾げる。

「ぼっかお前。千葉県民が千葉に行くつつつたら千葉駅に行く事だよ」

千葉駅周辺に色々と商業施設が集中してるしな。

「花陽も行こうじゃえ」

よしクール！俺超クール！「囁んだね」うっせ小町。まるで何事もなかったかのよう
に「囁んだにや」うっせ星空。これで先程の空気はリセットされた……………はず。

「……………ちよつとまっててください」

花陽は小走りでリビングを出る。

「すうーっ、はあーっ、すうーっ、はあーっ……………よしっ！」

気持ちを切り替えられたのか、子犬のように小走りで戻ってきた。

「い、行きましょうー！」

ようやく戻った笑顔に安堵しながら、俺は支度をする為に、自室へ向かった。

全員の食事代をだすという俺らしからぬ荒技をかまして、しばらくシヨツピングモールの中をうろうろする事にした。まあ、予備校のスカラシップさえ取れば、凄まじい臨時収入が入るからよしとしておこう。

「あれ、小町と星空は？」

「そういえば……」

いつの間にかにやんにやんシスターズ（仮）がいなくなっている。

ポケットのスマホが震えた。

「おい、小町どこ行つたんだよ。迷子か、迷子なのか。お兄ちゃん心配してるよ。あ、今の八幡的にポイント高い！」

花陽が苦笑いしているが気にしない。俺は千葉の兄だからな。

『いや、全然ポイント低いよ……。このシスコン。それよかどうしても凜ちゃんと2人だけで見なくちゃいけないものがあるから、花陽ちゃんの事よろしくであります♪』

こちらの返事も待たずに電話が切れる。マジかよ。あいつら仲良すぎだろ。付き合ってるの？雪ノ下と由比ヶ浜といい、俺の周り百合の花咲きすぎだろ。

「花陽……」

「はい……」

2人でどちらからともなく歩き出した。

惑星のかけら

……………どうしたもんか。

ゴールデンウィークという事もあって、普段より密度の高い人波の中を花陽と並んで歩きながら、移動するルートを考える。

おかしい。シミュレーションは中学の頃に何度もしてきたのに、使う機会に恵まれなかったから、上手く引き出せない。そう、これは使う機会をくれなかった社会が悪い。

つつても、今日連れてるのは花陽。美少女というだけではなく、スクールアイドルだ。スクールカースト最底辺の孤高のぼっちたるこの俺と何かが起こるわけもないだが（しつこい）。最底辺の後に孤高ってなんか矛盾してる気もするが。

さつきまでは色々あったが、今回はガイドになりきればいいだけだ。べ、別に意識なんてしてないんだからね！ハチマン、ウソ、ツカナイ。

すると左手の袖を引かれる。

振り返ると花陽が俺の袖をつまんでいた。

「あの……………はぐれそうなんで……………いいですか？」

ぐはっ！

これが亜麻色のセミロングの髪の毛のサッカー部マネージャーなんかやればあざといと言えるのだが……。何かやけに具体的な例えだがハチマン、シラナイ。

まあ、それはさておき、花陽の子犬のような上目遣いをされると、無碍にできない。これが計算なら俺は2度と女の子を信じないレベル。

「あ、ああ」

変な意識はしないように足を進める。

「あちらが書店になります」

「せ、先輩……さっきからどうしたんですか？」

いかん、つついガイドに徹してしまっていた。

「すまん……とりあえず、花陽が普段読む本でも教えてくれよ」

「あ、はい！」

そうして書店のコーナーへ足を運ぶ。

だが見覚えのある姿が目に入る。

「っ！花陽、こっちだ」

「びゃあっ！」

花陽の手を引いて、書店から少し離れた別のコーナーに入る。

「せ、先輩？」

「落ち着け。俺にまかせろ」

「……………は、はい」

こつそりと書店のまえに目をやる。出てきたのは、雪ノ下雪乃だった。

いつものようにクールな立ち振る舞いで本人の意志とは関係なく周囲の目を引きながら、颯爽と歩いていった。

危ねえ……。

俺が美少女といるところを見つかったら、通報されるか、自首を促されるかの2択だ。要は謂われのない言葉の暴力に晒される。そんなのはごめんだ。

「あの、先輩……………やつぱり私……………」

花陽が真っ赤になって俯いている。

「あの、お客様……………」

「ひ、ひゃいー！」

突然、店員に声をかけられ、声が裏返る。雪ノ下に気を取られて咄嗟に動いたが、今の自分の状況をやつと理解する。

ここは下着売り場だった。

俺は花陽を少しアダルトイな下着の棚に押し付けていた。

店員と他の客（もちろん女性）が俺達に注目していた。

ふー、やれやれだぜ。

「すまん。ごめんなさい。許してください」

ひたすら謝り倒す。ゲームのボスも謝り続ける事では倒せたらいいのになあ。達成感ないだらうけど。

「き、気にしないでください……」

花陽の手にはソフトクリームが握られている。食い物でこまかそうとしてるわけはじゃないよ！

花陽には苦手なやつを見かけたことになっておいた。まあ、あいつの罵詈雑言は苦手だからウソではない。

「何っーか、本当にすまん。せつかく休みの日にわざわざ来てくれたのに……色々ドタバタして……」

普段色んな事を要領よくやり過ごしているつもりでいたが、こういう場面で自分の至らなさが露呈して、自己嫌悪に陥る。

「……………よ」

「？」

花陽が何か呟いたが聞こえない。やがてまっすぐこちらを見つめてきた。

「私……先輩といれて、楽しいですよ」

「俺、何もしてないんだけど」

何ならセクハラを働いたまでである。

「わ、私自身も何故かはわからないんです。男の人とこうして出かけるの初めてですし……」

「花陽……」

「せ、先輩つて、ぶつきらぼうというか、無愛想というか、でも優しいところもあつて……」

「花陽……アイス」

「びゃあつー!」

花陽の手にアイスがダラダラと溶けていた。

やがて帰る時間になり、2人がしれっと合流してきた。

「あの、今日はありがとうございまして!」

「また来るにゃ!」

「うん、凜ちゃんまた来てね!そして花陽ちゃんは今度両親がいるときに、挨拶に来てね!」

「ええ!?!」

あんまからかってやんなよ。

「帰り、気をつけてな」

「はい、先輩も」

「次は男を見せるにゃ！」

星空の言葉の意味は考えないでにおいて、改札の向こうへ消える2人を見送った。

「そーいやお前と星空はどこにいたんだ」

「ヒ・ミ・ツの会議だよ♪」

「……………」

俺は小町の髪をわしやわしやした。抗議の声が聞こえたが、聞こえないふりした。そんなことをしながらも花陽の一つ一つの瞬間が頭の中にちらついていた。

不思議

ベッドの上で天井を見上げながら、今日の出来事について考える。

「……は……八幡先輩……」

口元から自然と零れる名前。本人に対してそう呼べた事はないけれど。

父親以外の男の人とあんなに長い時間一緒にいたのは初めてだった。そもそも家に行つた事なんてなかった。

そのせいか普段より意識してしまつて先輩に失礼がなかったか不安になる。

そういうえば先輩が倒れ込んで来たとき私……。

「~~~~~!」

思わず枕を抱きしめ、ゴロゴロと左右に転がる。せ、先輩はただ倒れただけなのに、わ、私つたら、私つたら!

その後、下着売り場に連れ込まれた時も私は勘違いをしていた。で、でもあれは先輩が悪いんですからね!

それに先輩は何とも思つてなかったかもしれないけれど、手を握つてたし……。

「~~~~~!」

再びゴロゴロと左右に転がる。味わった事のない感情にどう対応すればいいのかわからないでいる。

「は、花陽……何してるの?」

「ぴゃあっ!」

お母さんが心配そうに枕を抱きしめた私を見ていた。普段おっとりして、何事にもあまり動じないお母さんのこんな表情は滅多に見れないだろう。

「な、何でもないよっ!」

「そう、比企谷君ね」

「あうう……」

お母さんは静かにドアを閉めた。

「先輩の………ばか」

自分の失態を先輩のせいにしたところで、電話が鳴った。

小町ちゃんからだ。

「ふう~~~~」

湯船に浸かり今日の疲れをほぐしていく。今日は小町と花陽だけでなく、星空という新メンバーが加わったからいつもより賑やかだったが、非モテぼっちの俺には馴染まな

い空気だったので、気疲れしているようだ。何というかメダカを海水に入れるみたいな。いや、死ぬんじゃない、それ。それにメダカっていつも友達とつるんでるじゃん。チツ！

花陽という時はなんだか非日常の中にいる気がする。まあ、普段はメールのやりとりばかりで、たまに電話するぐらいだから、こうして会うのは非日常と言って差し支えないだろう。だがそれだけじゃない何かがそこにある。雪ノ下の真つ直ぐすぎる純粹さや罵詈雑言、由比ヶ浜の不器用なやさしさやおバカ発言、戸塚の可愛さと可愛さと可愛さ。材木座……はいいや。そういつた普段俺を取り巻く日常とは違う何か。比べるものではないと思いつつ、それでも違うところを探してしまう何か。

俺はそれを探りながら、少し恐れながら、湯船の中でゆっくり目を閉じた。
危うく風呂で爆睡するところだった。

翌朝……………。ゴールデンウィーク最終日。

「……………」

小町が俺を起こしに来た。だがいつものように乱暴ではない。
俺の妹は可愛いが優しいわけがない。

「あの……………起きてください」

声のする方へ目を向けると花陽がいる。何だ夢か。

俺は再び目を閉じた。

正夢

危ねえ危ねえ。朝っぱらからうつかり花陽の夢見ちゃったよ。しかし夢にまで出てくるようになるとは……。次は裸で出てくるんじゃね？別に期待してないけど。本当に期待してないけど！………いいじゃんか、夢ぐらい見たって！俺だって人生という大海原を孤独に旅するぼっち海賊なんだから！

まあいい、寝よう。昼まで寝て残りは読書かゲームだ。

5月の心地よい陽気に優しく包まれて、俺は2度目の眠りについた。

「よしっ！」

ジャスト12時。八幡的にポイント高くね？

スマートフォンが目覚ましで目を覚ましながら、体を起こす。まあ、小町的にはポイント低いか。しかし、あのポイントはどこに貯まっていくのか100点貯まれば小町がお嫁さんになってくれるのか、謎である。いやならんでいいけど。

ふと左側に重みを感じる。カマクラが珍しく俺の布団で寝ているようだ。とうとうデレたか。こいつと雪ノ下だけは俺にデレる事はないと思っていたのに。いやクラスメイトだけでもかなりいそうだった……。

寝ぼけ眼で手を伸ばし撫でてやる。だがそこには違和感がある。

「……………こいつこんなに毛長かったっけ？」

何度か瞬きをして、ようやく今日の景色が目馴染む。

「すう……………すう……………」

そこにはベッドに突っ伏した花陽がいた。

「おわっ！」

普段の気持ち悪い声ではなく、純粹な驚愕の声が漏れる。妄想をリアルブートしてしまっただか。いや、まさか……………

「夢……………か？」

疑問系になってしまう。そのぐらい左手の感触がリアルだった。

もう一度試しによしよしと頭を撫でてみる。サラサラとした滑らかな手触りで、俺のくせつ毛とは大違いだ。

「……………んう」

少し色気を含んだ声が漏れる。突っ伏してはいるが、顔はこちらを向いているので、落ち着かない気持ちになる。

次は柔らかそうなほっぺたをつついてみるか……………つてやるわけねえだろ。さすがにもう夢じゃないとわかる。いや、頭撫でた時は夢と違ってたよ。ハチマン、ウソ、ツ

カナイ。

ここでラブコメ主人公ならうっつき胸何か触っちゃって『バカ、変態、死ね!』なんて顔真つ赤のヒロインから殴られるご褒美まで付いてくるのだが、現実にそんなことはない。いや、この展開もありえない事ではあるけれど。

それよか早く起こそう。……………だって花陽、すごく涎垂らしてんだもん。俺の布団の上に。

「花陽、花陽!」

軽く肩を揺すってやる。

「……………ううん……………お母さん……………ごはん」

「お母さんじゃねえし、ごはんもできてねえよ、もう昼だぞだから起きろ」

自分の事を棚の上に放り投げ、花陽の前で手を叩く。

「……………ん……………はち……………まん……………先輩……………?」

俺の名前を呼んだ気がしたが、気のせいだろう。花陽は俺を認識したようだ。そして涎の垂れた口元をぼかんと開けながら、何かのメーターのように首から赤く染まっついてく。

その後の悲鳴は近所で問題になったとか、ならなかったとか。

猫になりたい

昨晚……………。

『もつしもくし！花陽ちゃん♪』

『あ、小町ちゃん。今日はありがとう！』

『いえいえこちらこそ楽しませてもらいました♪』

『そ、そう？よくわからないけど……………』

何故か小町ちゃんが悪い笑顔になつてゐる気配が……………

『いや、最近お兄ちゃんの周りに女の人の気配が多いから、妹としては嬉しい限りであります！』

『え、そ、そうなの？』

『うーん、まだ見たわけじゃないから証拠はないけど、妹のカンつてやつ？』

『そ、そうなんだ……………』

小町ちゃんは私よりはそういう事に対して気が回る方だと思う。それに先輩の入っている奉仕部という部活は先輩以外には女の子2人しかいないらしい。この前電話で

は先輩に対して厳しいと言っていたけど、同じ時間を過ごしていれば、仲良くなっても不思議じゃないし……。

『あわわ……』

慌てて思考を振り払う。わ、私……何を考えているんだろう。これじゃまるで……

『だ、大丈夫？』

『ぴゃあっ！』

小町ちゃんの心配そうな声にビクツと跳ね上がる。で、電話中なの忘れてた……。

『あ、そういえば明日はゴールデンウィーク最終日だった』

『そうだね〜』

明日まで練習は休みだ。凜ちゃんは家族でどこかに行くらしい。他の皆も予定があるみたいだし、どうしようかなあ……。

『小町は友達と予定があるし、両親は仕事だけど……あ、そういえばお兄ちゃんは相も変わらず暇だった！』

『う、うん……』

何だろう……。誘導されているような気が……。

『家には朝からお兄ちゃん以外誰もいないからなあ……』

『そ、そうなんだ……』

『でもお兄ちゃんの部活って、いきなり用事が入るかもしれないからなあ……先着順かあ……』

『こ、小町ちゃん……?』

『あ、お風呂入らなくちゃ。じゃあね、花陽ちゃん!おやすみ♪』

『え、ええ?』

ツー、ツーと寂しい電子音がこだましている。

『……………』

先着順……。

そして今に至ります。

『……………』

『……………』

恒例の沈黙。花陽から断片的に事情を聞いたものの、俺に一体どうしろと。何だか花陽に申し訳ない。

「悪い。交通費もかかるだろうに」

「あ、大丈夫ですよ。ここ最近練習しかしてなくて全然お小遣い使ってなかったの」

しみじみと言った言葉の響きからして、こちらに気を使って嘘をついているようでは

ない。μ, sのPVは俺もチェックしているが、ダンス初心者の花陽が約1ヶ月であれだけおどれるようになったのは凄まじい練習の積み重ねがあったからだろう。俺には無理だ。そもそも部活動という集団行動の時点で不可能である。奉仕部？ スタンドプレーの塊だよ。

「あー、じゃあ飯でも食うか」

俺の小学生レベルの料理を、花陽に食わせるのは酷なので、外にでるか。

「あの一私、お弁当作って来ました」

「お、おお……」

マジか。とうとう女子の手作り弁当を食べられる日が訪れるのか……。由比ヶ浜？ いや、クッキーだったし、黒かったし、ダークマターだったし。いや待て……

「花陽」

「はい?」

「俺は黒こげの物に対してはトラウマが……」

「安心してください!!」

花陽はカバンの中を漁り、大きな何かを得意げに取り出す。

「先輩の大好きな白米です!!」

馬鹿じゃないの!?!と叫びたくなるくらい

馬鹿でかいおにぎりが現れた！きちんと竹の皮に包まれたそれは、申し訳程度にたくあんが2つ添えられていて、いいから黙って食え！とばかりにその存在感を主張している。

……………俺、そんなに白米好きアピールしたかな。

醒めない

限界を超えた。

俺の人生で数少ない経験だ。まあ、女子に告白した翌日にクラス中にその事が知れ渡り、やがて学年全体に、噂が尾鰭をつけて蔓延していった時は色々と精神的に超えたな。そして今、俺の肉体が限界を超えた。

「ご、ごちそうさま」

巨大おにぎり完食。

「はい！お粗末さまですー！」

俺より20分くらい先に食べ終えた花陽が満足そうにいい笑顔を見せる。アイドル兼フードファイターか。残念ながらもうその席は埋まっているぞ、花陽。てか、よく米だけをそんなにパクつけるな。正直、棚にあったインスタントの味噌汁が無ければ、完食できたか怪しい。「ど、どうでしたか？」

花陽が目をキラキラさせながら聞いてくる。

「あ、ああ美味かったよ……」

別に無言の圧力で言わされているわけじゃない。心の底からの感想だ。ハチマン、ウ

ソ、ツカナイ。

実際に普段食べている米より美味しく感じられた。

「ですよね!？」

「おい、今の地の文だから」

「どんだけ白米好きなんだよ。危うくキャラ崩壊しそうになってるじゃんか。」

「ふう……………」

花陽は軽く伸びをして、俺の隣に座る。無意識に腰を下ろしたのか、さつきより距離が近くなっている。その幸せそうな横顔をぼんやり眺めながら、花陽と過ごす時間に安らぎを感じている自分を改めて俯瞰していた。

すると目が合った。

「……………」

「……………ふふっ」

花陽が吹き出す。

「御飯粒ついでますよ」

「!」

自分で取ろうとするより先に花陽の手が伸びる。

一瞬、花陽の指のひんやりとした感触がして、すぐに御飯粒と一緒に離れる。

そしてそのまま自分の口に含んだ。

徐々に顔が熱くなっていくのを感じる。

「どうかしましたか？」

「いや、お前意外とそういうの気にしないんだな……」

「え？」

花陽は気づいていないようだ。由比ヶ浜並みの天然か。胸大きいし。そうやって思春期男子を死地へと送り込んで行くのか。

「……………」

花陽はやつと思いが当たつたらしく、顔が赤くなる。花陽といい、戸塚といい、何で顔赤くなるだけで可愛さ3倍なんだよ。俺も顔赤くすれば平塚先生や雪ノ下も優しくしてくれるかもしれない。……………やるだけ無駄か。

「とりあえず、出かけるか」

気を取り直して、外出を提案する。このまま家にいたら昨日の二の舞だ。非モテ三原則は固く守らねばならない。

「あ、はい！わかりました」

花陽はてきぱきとしたくを始め。見ろよ、この一步引いてついてきてくれる健気さ。絶対いいお嫁さんになるよ。俺もこのぐらいできれば夢の専業主夫に一步近づけ

そうだ。

はい秋葉原。

千葉をうろついていると、いつ知り合いに会うかわからないので、秋葉原へやってきた。

少し強引だったが、花陽の分まで切符を買えば、少しは借りを返せる。この辺りが八幡的にポイント高い。超クール。

しかし、秋葉原に来て思った事。

………花陽の知り合いに会ったらどうすんだよ。

バカ、ボケナス、八幡。

流れ星

「なあ、花陽」

沢山の人々が行き交う秋葉原の街をキョロキョロと見回して、妙に機嫌が良さそうな花陽に疑問をぶつける。

「自分から来といて何だが、俺と一緒にいるのは不味くないか？」

普通に考えれば、移動して浅草でもスカイツリーでも行けばいいのだが、何分財政難の我が財布の中には、余分な交通費を捻出する余裕などない。かといって……

「なんつーか、その……スクールアイドルとして顔出ししてるお前が俺みたいなのと……」

途中ではつとして言葉が止まる。

花陽はこれまで見せた事のない寂しげな表情をしていた。長い睫毛が少し震えているように見え、俺の言葉の先を予期しているのか、少しずつ伏し目がちになっていく。

こんな表情を向けられるのが初めてなので、何も言えなくなる。

「そんな事……」

花陽が次の言葉を静かに紡ごうとする。

「……すまん、行くか」

慣れない空気を変えたくて、先導するように歩き出した。

「……………はいー」

花陽の明るい返事に空気が変わるのを感じながら、柄にもなく出来るだけの事をやろう、などと考えていた。

小町から得た知識を総動員するか……………。

ミスドに行くぐらいいしか思いつかないや。

そもそも秋葉原は俺のフィールドではない。

小町が俺に口を酸っぱくして仕込んだデザートプラン20選はきつと千葉でしか役に立たないようになっているのだろう。もし違うとしても、俺が悪いんじゃない。社会が悪い。

自分で自分に言い訳しながら、2人分のドーナツと飲み物を買って、席に向かう。お、何かデザートっぽい。小町が見たら感動で泣くんじゃね？

「おほ」

感動に目を潤ませながら、花陽にドーナツを差し出すと、顔が綻んだ。

「あ、ありがとうございますー！」

「お、おう……………」

満面の笑みに対して、照れるあたりがもうね……………。

ココアを啜り、気持ちを落ち着ける。

「あの……………明日からまた学校始まりますね」

「そうだな」

「先輩はとも……………テストとかはどうですか？」

え、何？今の話題転換。いや確かに友達いないけどさ。せいぜい戸塚というマイエンジェルがいるくらいだ。

「テストは数学はアレだが、まあ問題ない」

「そうですか……………」

「ああ、そっちは新曲は……………」

「えーと、そろそろやる予定にしているんですけど、作詞待ちですね……………」

「そうか……………」

「……………」

「……………」

あれ？デジャヴ？

会話のタネを探していると、誰かこちらに向かって来ている。

見たところ、少なくともμ、sのメンバーではない。

花陽も俺の視線の先が気になったのか、背後を見て……………固まった。

どっかで見た事あるんだよなあ……。脳内の人物フォルダを漁っていると、その人物は花陽に笑いかけた。

「あなた……………μ，sの小泉花陽さん？」

髪をふあさつと軽くかきあげる仕草が様になりすぎて、ちつとも嫌味な感じがない。背は小柄だが、オーラみたいなのが出ていて緊張してしまう。これは覇気か。ワンピースの世界なら、俺は泡を吹いて気絶していた事だろう。

「あわわ……………」

花陽が震えている。え？まさか本気で覇気にやられたの？

「き、き、綺羅ツバサちゃんですよね!？」

花陽の大声に店内がざわめき出す。

思い出した。

A—R—I—S—Eのメンバーだ。

花陽と同じスクールアイドルだが、こちらの人気は全国区。芸能人みたいなものだ。店内に色めき立った雰囲気が充満する。

花陽も大声で名前を呼んだのをまずいと思ったのか。両手で口を塞いでいる。

だが、当の本人はそんな空気など、どこ吹く風とばかりに「失礼するわね」と声をか

け、座ってきた。

……俺の隣に。

花陽がぼかんとした顔でこちらを見る。いや、俺何もしてない。さらにすごくいい香りが鼻腔をくすぐる。

「へえー」

綺羅ツバサは俺の顔をまじまじと見つめる。近い近い近い！ つり目がちの勝ち気な瞳に捕らえられ、こちらも目が離せなくなる。

「むう……」

花陽が柔らかそうなほっぺたを膨らませている。

「あら、ごめんなさい」

花陽のかわいい……こわい視線を感じたのか、綺羅ツバサは花陽に向き直る。

「初めまして、私はすぐそこのUTX学園でスクールアイドルをやってる綺羅ツバサです。A-R-I-S-Eってグループは……」

「も、ももちろん知ってます！ だ、大ファンです！」

「あら、ありがとう」

先程の不機嫌はどこへやら、花陽が食い気味に答える。まあ、憧れのアイドルだし仕方ない。俺だつて戸塚を見ていると、たまに発狂しそうになる。それと一緒だよな。違

うのか。違うか。

「実は私もあなた達のファンなの。小泉さんの歌唱力は素晴らしいと思ってるわ」

「そ、こそ、そんな……」

ほう………中々見る目がある。いや、俺何目線だよ。だが小町も花陽の歌声が大好きだと言っていた。部室でμ, sの映像を見ていた時、花陽のソロパートで雪ノ下も由比ヶ浜も聴き入っていたし。

「一度会ってみたいと思っていたのよ。まさか彼氏とデート中に会おうとは思わなかったけど」

「か、か、か、彼氏い!?!」

可愛らしく慌てる。俺が。

俺の気持ち悪い声に優しく苦笑いした綺羅ツバサは立ち上がった。

「ね、場所変えましょ?」

雪ノ下ばりに一々動作が格好いい。面倒な事に巻き込まれる気がしないでもないが、花陽の好きなアイドルだし、とりあえずついていく事にする。

「花陽、行くぞ」

花陽に目を向けると、顔を真っ赤にして固まっていた。

「か……か……か……彼氏……私……先輩……」

あれ？そんなに嫌だった？

いらんダメージを受けてしまう。

綺羅ツバサは俺達2人の様子を見て、また苦笑いを浮かべていた。

漣

謎の呪文を唱え続ける花陽をつれて、綺羅ツバサと並んで歩く。美少女2人と歩くな
んて正にリア充そのもののイベントだが、特に深い意味はないだろう。普段ぼっちとし
て誰にも迷惑をかけず、誰にも嫌な思いをさせないという社会貢献を果たしている俺に
対しての神様からのプレゼントだろう。ぼっち万歳。ありがとうぼっちの神様。いる
かわからんけど。

ぼっちの素晴らしさを再認識している内に、目的地へと到着する。

UTX学園。

女子校じゃねーか。

「着いたわ。まだ連休中だから生徒も先生もほとんどいないと思うけど、はぐれないで
ね?」

「うわあ……」

花陽は校舎とは思えないくらいにお洒落なビルを見上げ、感嘆の声を漏らす。ちなみ
に俺は女子校に入る心の準備で手一杯だった。

「……が私達の部室よ」

「……………」

カードキーを使ったり、快適なエレベーターだったり、ここに来るまで驚く事は色々あったが、この部室に対する驚きは格別だ。

座り心地の良さそうなソファ。俺の家のものより大きなテレビ。奥に見えるレッスルルーム。窓からは人の流れが賑やかな秋葉原の街並み。奉仕部が対抗できるのは、部屋の広さと、雪ノ下の持ち込んだティーセットくらいだ。

花陽も自分のところの部室と比べて思うところがあるのか、隅々まで部屋の中を眺めている。

「どうぞ、座って。紅茶淹れるから」

俺と花陽は言われるがままにソファに座る。いかにも高そうなソファなので、かなり丁寧な動作になった。

「ど、どうしましょう……………私達……………何をされるんでしょう……………」

「お、落ち着け……………」

どちらもビクビクしている。だがそんな戸塚みたいな目で見られたら、柄にもなく虚勢を張るしかない。

「お待たせ。小泉さん、それと……………」

「ひ、比企谷でしゅ……………」

嘸んだ。

仕方ないだろ！さつきはいきなりの登場にあっけにとられていたが、改めて見ると、圧倒的に美人なんだもん！

「ふふっ。あなた面白いわね」

「はは……」

俺と花陽に紅茶を差し出しながら、綺羅ツバサは再び俺の顔を覗き込む。だから近い近い近い近い！

「……………むう」

また花陽が頬を膨らませる。これはもしかしてつついてくれアピールなのかもしれない。しかも、さり気なく足を踏んでくる。だが体重をかけてないのか、ちっとも痛くない。平塚先生に見習わせてやりたい。

『抹殺のラストブリットオーー!!!』

ポスッ。

うん、ちょうどいいじゃないか。何ならブリットをブリットに変えるまである。

「小泉さんはボーカルスクールに通ってるの？」

「いえ、そういうのは全然……最近は真姫ちゃ……同じグループの西木野さんにボイス 트레이ニングを……」

いつの間にか俺は蚊帳の外で、女子2人が熱い部活トークをしていた。
……これじゃ奉仕部と変わらねーじゃんか。

恋する凡人

「あなた達って付き合ってるの？」

綺羅ツバサはアイドルの話もそこそこに、いきなりぶっ込んできた。まるでこれまでの話は前置きと言わんばかりの勢いで。恋愛沙汰に興味津々な辺りは女子高生と言ったところか。先程までのオーラは鳴りを潜めていた。

だが事実を告げなければならない。

「いや、そういうんじゃないですけど……」

何事実なのに、こんなに言いづらいのだろう、と思いつつながら、花陽を横目で見る。少しでもその表情に陰りが見えたのは、きつと俺の気のせいだろう。

「まあ、あれですよ。花陽はスクールアイドルな訳だし……」

「あら、スクールアイドルは恋愛禁止ではないわよ」

綺羅ツバサは目を細め、挑発的な声音になる。

花陽は「あう……うう……」と慌てふためいている。そ、そんなリアクションされたら、こっちが対応に困るじゃん……。

かくなる上は……

「綺羅さんは彼氏いるんですか？」

俺の108の特技の一つ話題そらし。だがこの特技はかなり錆び付いているかもしれない。なぜなら、普段話題をそらす必要が出てくるほど人と話さないからな。小町に對しては常に誠実だし。

ここで綺羅ツバサは意外な反応を見せた。

「え？え？わ、私？！ば、ばかねえ!!そ、そんな事……」

先程までの余裕はどこへやら、顔が紅くなり、目は泳ぎ、噛みまくってる。あ、やべ。地雷踏んじやった。平塚先生のわかりやすい地雷と違い、巧妙に地下に隠されている地雷なので、見つからなかったか……。

花陽はそんな綺羅ツバサを見つめながらキョトンとしていた。まあ、PVからは想像もつかん姿を見せられてるからな。

「ほ、ほら、私……ずっと女子だけの学校だったし？まだそういうのいらないし？ていうか興味ないし？」

「……………」

やばい。こりや完全に平塚先生タイプの人間だ。花陽も気まずそうに笑ってるじゃん。

後で教えてあげよう。

教師になるのだけはやめておいた方がいい、と。

「今日は付き合ってくれてありがとう。それと………変なところを見せてごめんなさい」

校門前で綺羅ツバサは俺達を見送りに来ていた。この後、A—R—I—S—Eのミーティングがあるらしい。ちなみにこの人が立ち直るまで1時間くらいかかったのは内緒だ。あ、言っちゃった。だって何の為に連れて行かれたのかよくわからなかったし……。

「小泉さん。ラブライブ、楽しみにしてるわ。お互い全力を尽くしましょう」

綺羅ツバサは一瞬でスクールアイドルの顔に戻った。真っ直ぐな視線は花陽の目を捕らえていた。

「は、はいーわ、私……まだ未熟だけど……ま、負けません！」

花陽も何とか言葉を紡ぐ。憧れのアイドルから正式なライブ宣言を受けたのだ。きつと俺には想像もつかない気持ちになっているだろう。

「比企谷君」

「ひ、ひゃい」

呼ばれる事を想像していなかったので嘔んでしまう。

「頑張ってね」

そう言いながらウインクをしてくる。『何を？』と言う前に、綺羅ツバサは手を振り、

颯爽と校舎へと歩き出した。

「花陽……」

「？」

その背中合わせを見ながら、俺は花陽に疑問をぶつける。

「ラブライブって何だっけ？」

「……………」

この後、花陽からアイドルショップで熱いアイドルトークを聞かされる羽目になった。

いつにも増して時間がはやく経ち、空は茜色が混じり始めている。俺は花陽をマンションまで送っていた。一番星が姿を見せている。

「すいません。送ってもらっちゃって」

「気にすんな。こんな時間に一人で帰したら、小町から何を言われるかわからん」

「先輩、小町ちゃん大好きですもんね」

「千葉の兄妹なんてそんなもんだろ」

「あはは……」

八幡的にポイント高いセリフに花陽が苦笑していると、マンションの前に辿り着いた。

「着いたな」

「着きましたね……」

「……」

「……」

何故か歩くのをやめた花陽に戸惑いながら、気づかないふりをして、俺は駅へと歩き出した。

「じゃあ、俺そろそろ行くわ」

「あ、あのっ！」

右手をひんやりとしたものに包まれる。振り返ると、花陽が両手で俺の右手を包み込んでいた。

「ど、どうした？」

「あの……」

花陽は俯いたまま、話し出す。

「私……何だか、最近、よくわからなくて……」

「あ、ああ……」

「先輩とメールしたり、電話したり、こうやって会って話してる時、すごく楽しいんですけど、少し寂しくて……」

沈黙で続きを促す。

「先輩って、小町ちゃんがいるから、年下の私は妹みたいに思ってるのかなって。それはそれで嬉しいんですけど、何か違うなって……………」

「……………えーと、何かすまん」

訳もわからずに謝る。馴れ馴れしかったという事なのだろうか、と脳が判断する。だがそれは何かから逃げようとしているようだった。

「いえ、先輩が悪いとかじゃないんです……………ただ、私……………」

花陽は俺の手を握る力を強めた。

「妹じゃ、ただの後輩じゃ……………嫌だなって……………だから……………だから……………」

顔を上げた花陽はこれまでにない色をした微笑みを俺に向けた。

「改めて……………よろしくお願いします……………八幡さん」

「あ、ああよろしく」

俺の返事を聞いた花陽は、ゆっくり手を離し、ぺこりと頭を下げ、俺に礼を告げると、マンションへ入っていった。

胸がどくんと高鳴る。

「花陽……………」

頭から離れないその姿の名を口にして、俺は駅へと歩き出した。

右手だけやけに熱かった。

タンポポ

「あわわ……………」

ど、どうしよう！言っちゃった、言っちゃった！

布団の中に潜り込み、ついさっきの出来事を思い返す。

八幡さん……………」

たどたどしくその名を口にしてから、あの人の…………八幡さんの反応を碌に見ることもせず、あの場から去ってしまった。

変な子だと……………思われているだろうなあ。

でも言わずにはいられなかった。

あの瞬間、私の心も体も何かに支配されていた。

その何かの名前を私はわからない。

いつもは見て見ぬふりするのに、知らず知らずの内に手を伸ばしてしまっていた。

「あうう……………」

せめてあと一分でもあの場にいればよかった。八幡さんの反応を見ずにいたから、余

計に気になってしまう。

ああ、私のほか！

いつかのようにベッドの上を転がりまわる。

「八幡さん……………私……………どうすれば……………」

「八幡君に聞けばいいんじゃない？」

「ぴゃあっ！」

気がつけば、いつかのようにお母さんがドアを開けてこちらを見ていた。

しかもさり気なく、何でもない事のように、呼び方が比企谷君から八幡君に変わって
いた。

私は物凄く緊張したんだけどなあ……………。

目が覚める。

とはいっても、さっきまで目を閉じてただけで、眠りが訪れる事はなかった。

昨日、家に帰ってからも、ずっとこんな感じだ。小町の呼びかけにも「おう」とか「ああ」しか返せていない。お陰で貯まっていたポイントがヘソクリ分まで差し引かれたくらいだ。

『八幡さん』

まだ確かな響きがこだまする。

両親の声以外でそう呼ぶのは戸塚くらいだったので、違和感がある。え？材木座？
……………チツ！

右手を見してみる。昨日のひんやりとした花陽の手の感触が残っている。あの互いの温度が溶け合う瞬間をもう一度……………なんて、つい想像してしまう。

「お兄ちゃん」

気がつけば、小町がドアを開けてこちらを見ていた。

「お兄ちゃん……………さつきから何で『八幡さん』って自分の名前連呼してんの？さすがにそのナルシストっぷりは気持ち悪い通り越して……………怖いよ」

「……………」

朝から可愛い妹に、謂われのない罵倒をされる辺り、日常の方は通常運行のようだ。

だが、しばらくの間、俺と花陽はメールや電話のやりとりをするだけだった。花陽はラブライブの予選に向けて、仲間と猛練習に励んでいたし、俺は俺で、奉仕部の活動があった。川何とかさんの予備校の学費問題や、由比ヶ浜との1件等がある。材木座の件はまあいいや。

とりあえず、時間が経つにつれ、花陽から八幡さんと呼ばれるのも慣れていったし、μ, sは知名度を上げ、何度かクラスの誰かがその名を口にするのを聞いた。

そして7月になり、俺達は夏を迎える。

テクテク

「暑い」

小町が夏の陽射しに顔を顰める。

太陽はまだ7月の上旬だというのに、容赦ない熱線を降らしていた。7月でこれなら12月はどんだけ暑いんだよ。んな訳あるか！などという1人ボケツツコミを頭の中で成立させながら、人ごみを2人してはぐれないように歩く。

7月7日、七夕。普段、別居生活をしている織姫と彦星が1年に1回だけの逢瀬を交わすあの日だ。まあ、マンネリ防止にはそのぐらいがいいのかもしれない。

いや、それは置いといて、そんなロマンチックな日に俺と小町は秋葉原に来ていた。理由は花陽と凜に会うためだ。ここ最近、あと2週間後に控えたラブライブの為に猛練習していたμ'sだが、今日はお祭りがあるという事で、久々の休みとなったようだ。

孤高のぼっちたるこの俺は、人ごみが苦手なので、迷惑をかけると思い、その誘いを断ろうとしたが、マイシスター小町が悪鬼羅刹のオーラを放ち、俺を脅迫……もとい、説得してきて今に至る。

「お兄ちゃん、花陽ちゃんに久しぶりに会うんだから粗相のないようにね」

「いや別に何もしねえよ。てかほぼ毎日連絡取ってんだから、久しぶりって感じがしない」

何故か向こうから来るのである。大事な事なので、もう一度言おう。向こうから来るのである。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「……………ぐす」

「どした？」

小町が目には涙を浮かべている。

「あのお兄ちゃんが……………毎日のように女の子と連絡を取り合うなんて……………小町嬉し
いよ」

……………妹が喜んでいるのに釈然としない。

「あ、来たにゃー！」

前方から声が聞こえたが、特徴のある語尾で見なくても誰だかわかる。

「あ、凜ちやーん！花陽ちやーん！」

小町が2人の元へ駆け出す。俺は小町に注意を払いながら、その背中を追う。

3人はこの炎天下だだというのに抱き合い、再会を喜び合う。あれ、何かいい匂いがし
そう。俺も飛び込んで……………いいわけないか。

「うす」

「あ、比企谷さんだ！」

おい、おまけ扱いか。

「ささっ、花陽ちゃん！」

「え？何？こ、小町ちゃん」

「かよちゃん！何照れてるにゃ！」

「え？え？びやあつ！」

そして、星空の隣にいた花陽が2人によって押し出される。

花陽は勢い余って、こちらの胸にぼすつと飛び込んできた。

その優しい衝撃のせいか普段接する誰よりも甘めの香りが弾けた。べ、別に匂いフェ

チじゃないんだからねっ！

「ご、ごごご、ごめんなさい！は、八幡さん……」

花陽はこちらにもたれかかったまま、上目遣いで俺の目を覗き込む。

「……………」

「……………」

お互いに距離を意識してしまい、すぐに離れる。

「あの…………元気でしたか？」

「あ、ああ……そつちも元気そうで何より……それとμ、sの新曲良かった……」
「あ、ありがとうございます……八幡さん」

やっぱり直接八幡さんと言われるのは何とも言えないむずがゆさがある。

「あの……八幡さん」

「……どうした？」

「やつと会えましたね」

花陽の微笑みは前とは何かが違う。だがそこにあるのは違和感ではなく、もつと人を安心させる何かだ。

「そうだにや」

でも俺は嘸んでしまった。星空の真似をしているみたいだ。

そして2人して吹き出す。だがそれはすぐに掻き消された。

「あのー、凜達もいるにや」

「そうだよ、は・ち・ま・ん・さん」

……いかん。この暑さにあてられたようだ。

夏の魔物

『じゃあ、凜ちゃんと色々見てきまーす♪お兄ちゃん、花陽ちゃんをしつかりエスコートするんだよ!!』

「またか……」

「あはは……」

メールを見ながら溜息をつく。小町と星空は再びドロロンした。しかも、俺達の気づかない内に。おい、ステルス奪うんじやねえよ。スポーツできるイケメンが読書してるの見た時くらいにの敗北感に襲われるじやねえか。

まあ、ここで悩んでも仕方ない。

「……じゃあ、行くか」

「は、はい!」

とりあえず、この暑さから逃れよう。

今からお祭りの会場に移動しても、花火の場所取りに巻き込まれて無駄な体力を使うだけなので、日頃からエゴを心掛ける俺は、花陽を連れて、そのまま駅ビルへと入った。

まあ、花陽の方が詳しいんだけど。

心地よい冷風に汗がすーっと引いていく。花陽も気持ち良さそうに吐息を漏らす。何かエロいと思っただのは、一生胸に閉まっておこう。そして、自分の部屋だけで取り出そう。

「あの……」

「どした？」

「八幡さんって……誕生日はいつなんですか？」

「……………」

「ど、どうかしましたか？も、もしかして聞いちゃいけない事でしたか？」

「いや、生まれて初めて聞かれたんでな」

「そうなんですか……………」

あれ？何か引かれたような気がする。だがこれは今まで聞いてこなかったクラスメイトが悪い。

「8月8日だ。夏休み中だから、教えても誰も祝いようがない日かな。ま、聞かれなくて正解だ。これは友達いないとか、嫌われてるとか、興味持たれてないとは別の次元の話だ」

「……………夏休み、誰とも会わないんですか？」

「……………」

盛大に自爆している気がする。次元が違うとか戦闘中な格好いい表現なのに、日常で使おうと案外ださい事がわかってしまった。

「誕生日って……………やっぱり、家族でどこかに行くんですか？」

「いや、一万円渡されて終わりだ。ちなみにケーキ代もそこに含まれる」

「……………」

花陽がほっとしたような表情になる。そりやさすがに家族まで俺の誕生日を忘れてら泣くぞ。

考えていると、今度は真剣な表情で聞いてくる。

「あの……………よかったら、その日、千葉にいくので……………」

花陽の声が止まる。俺の背後を見ているので、振り返ると、そこには小さな子供がいた。

声を上げてはいないが、涙をポロポロ零しながら、キョロキョロと周りを見回している。

一応、周りを見てみたが、この子の親らしき大人は誰もいない。花陽に目配せしようとする、花陽は既に子供の前でしゃがんでいた。

「ボクどうしたの？お父さん、お母さんとはぐれたの？」

子供に目線を合わせ、笑顔で優しく話しかける。俺なら第一段階でアウトだ。子供って残酷だぜ。目を合わせただけで泣くときがあるんだもん。

「八幡さん、やつぱり迷子みたいですよ……」

花陽が切なそうな顔になっている。

「じゃ、店員に言うしかないな」

「ですよね……」

ひとまず花陽が手を引いて、サービスカウンターまで連れて行く。俺が手を引こうとして首を振られたのは、軽いショックだった。

「じゃあ、お願いします」

2人でサービスカウンターのお姉さんに頭を下げ、立ち去ろうとする。すると、後ろから……

「バイバイ……ママ………。パパ………」

いや、誤解受けそうな事言うなよ。一瞬、お姉さんが顔顰めたぞ。てか俺嫌われてるんじゃないかったのかよ。

少しだけ早足になりながら溜息をつき、花陽に目を向ける。

「ママ……。パパ……。夫婦………」

顔を赤くして何やらブツブツ呟いていた。

メモリーズ・カスタム

「子供の扱い、慣れてるんだな」

「はい？」

やっと謎の赤面が治まったのか、こちらのいう事に反応して、可愛らしく小首を傾げる。それだけでマイナスイオンたっぷりの一陣の風が吹き抜け、暑さが吹っ飛んだ。ちなみにこの技を使えるのは3人しかいない。言うまでも無いが、戸塚・花陽・小町の天使3姉妹だ。属性はそれぞれ……

「す、すいません……ぼーっとしちやって……」

説明はまた今度しよう。

「いや、子供の扱いが慣れてると思っただけだ」

「ああ、たまに近所の子供の遊び相手になってますから」

「子供好きそうだな」

「は、はい！実は将来……保育士になりたくて……」

あつさり想像できる。ジャージにエプロン姿の花陽を思い浮かべると頬が緩んできた。

「どうかしましたか？」

気づかれないうちに口元を隠し、話題を変える。

「花陽はいい母親になりそうだと思うただけだ」

「ぴやつ！」

花陽がびくつとして、また顔が赤くなる。振り出しに戻るマスを踏んだようだ。

「そ、そんな、わわわ、私なんてまだまだ……」

「いやいや、今なる必要ないから！」

「で、でもこ、こ、子供が、欲しいって！」

「そ、そ、そんなこと言つてないによ！」

どんな難聴系キャラだよ！話に尾ひれが付くどころの間違いじゃねえぞ！ただ俺が囁んでいるせいで俺が悪いみたいだ。

「あ、あの、私、八幡さんの事は、き、き、嫌いじゃないですし、むしろ、何というか、あ、あれなんですけど！」

そうかい、あれなのか。いや、何なんだ。嫌われてないから良しとしとけつて事か。そうなのか。そうだよな。

そしてはつと気づく。

思つたより注目を浴びていた。

まあ、不思議ではない。人ごみの中で大きな声がするので見てみたら、美少女と目の腐ったぼつちが子供があだこうだいつてるのだ。いや、俺に疚しい事は何も無いけど。

「まだ高校生くらいじゃない？」

「何であんなぼつちがあんな美少女と……!」

「ゴミいちゃんのヘタレ、鈍感、ハチマン!」

「男なら覚悟決めるにやー!!」

ヒソヒソ話が聞こえてくる。おい2番目の奴、何で俺がぼつちだって知ってんだよ。それにどっかから聞き覚えのある声が………

「いるわけないか」

とりあえずここを離れよう。ぼつちは注目を浴び慣れていないから、そろそろ体が拒否反応を起こす。トラウマの復活と共に………

わたわたとしている花陽を促し、人ごみを抜け出した。

2人が去った後………

「中々進展しないにや〜」

「落ち着いて、凜ちゃん。あれでもゴミいちゃんにしてはよくやってるから!」

「ねえ、今の花陽ちゃんじゃなかった？」

「そうでしたか？よく見えなかったので……………」

「むう、今のは我が永遠のライバル、八幡……………ではないな。八幡が女を連れて歩くなど……………」

案外、世の中狭いものである。

胸に咲いた黄色い花

「す、すごい人が多いです……」

「だな。よし今日はあきらめるか」

「だ、駄目です〜！」

「ぐえっ〜！」

後ろから襟を掴まれ、首が絞まる。

赤面状態が落ち着いた花陽と共に、祭りの会場まで来たはいいが、人が秋葉原の3倍ぐらいいるので、俺のような静寂を好むぼっちは死んでしまいうさだ。ほら、そうこうしている内にこうやって目が死んで……これはデフォでした。てへっ。

「凜ちゃんと小町ちゃん……大丈夫なんですか？」

花陽が心配そうに周囲を見回す。『無理に合流しないでいいよ』と言っていたが、やはり女子2人だけというのも心配になってくる。星空はスクールアイドルだし、小町は世界一可愛い。だが今は……

「花陽……暑くないか？」

「あ、だ、大丈夫です〜！」

花陽は苦笑いしながら言う。今、俺達はかなり密着した状態で歩いている。うっかりはぐれてしまわないように、花陽が俺の服の裾を掴んでいるのだが、さつきから左腕の辺りに柔らかな感触がして、落ち着かない。

「きゃっ!」

花陽が何かに躓き、俺の腕にしがみつく。

「ぴゃっ!」

俺が花陽みたいな声を上げてしまった。文字だけなのが幸いなくらいの気持ち悪さである。

「ご、ごめんなさい……」

「だ、大丈夫だよ」

万乳引力のせいで噛んでしまった。さすが乳トン先生だぜ。てか何だよこれ。平塚先生や雪ノ下姉のような弾力ないが、触れたものを優しく癒やすような柔らかさ。薄々感づいていたのが、花陽は着やせする方なのかもしれない。

「八幡さん、そろそろ着きますよ」

「ひ、ひゃい!」

慌てて思考を振り払う。七夕の夜までゲスいぼっちとか……。小町的にポイント低いどころではない。クールに行こう。偶然も運命も宿命も俺は信じない……

「さあ、行きましょう！」

花陽が俺の腕から離れ、先導するように駆け出す。

……………べ、別に名残惜しくなんかないんだからね！

やっと着いたその場所には、短冊を結ぶ為の竹があり、既に沢山の人達の願いで溢れそうだった。つっても叶うのはごく一部だけだな。織姫も彦星もいちやつくのに精一杯で他人の願いなど聞き入れている時間はない。

「えへへ、私毎年ここで願い事をしていくんですよ」

花陽は嬉しそうに短冊を係員から受け取り、戻ってくる。

「はいっ！八幡さん！」

いや、そんな満面の笑みで差し出されても…………。

「いや、俺そういうのは…………」

「だ、駄目…………ですか？」

「あ、そういうや今年は色々お願い事が…………」

「はいっ！どうぞ！」

上目遣いつて何であんなにずるいんだろう。まあいい、日常の些細な改善でも祈ろう。奉仕部の面々が俺に優しくなりますように、戸塚が女の子になりますように、平塚先生が早く結婚できますように、リア充が内輪ノリではなく内輪もめを見せてくれます

ように、せめて小町と同じくらい小遣いがもらえますように……何だ、結構あるじゃん願ひ事。織姫も彦星もこんなささやかでピュアな願ひ事なら、明日には叶えてくれるだろう。

「八幡さん！お、終わりましたか？」

もう短冊を結んできたのか、花陽が小走りで竹の後から駆けてくる。どうやら花陽は無欲な子のようなのだ。

「待ってくれ、あと3つくらい」

「えっ？」

俺の短冊を覗き込んでくる。

「八幡さん……」

ジト目で見られる。初めて見せる表情にたじろいでしまった。

「もう、駄目です！もっと高校生らしい清らかなものにしてください！やり直しです！」
「いや、高校生らしいし清らかじゃん。他人の幸せもねがってるし……」

平塚先生の結婚とか戸塚の女体化とか……。

「た、確かにそうですね……じゃ、じゃあ裏に八幡さんの将来の夢を……」

「専業主夫」

「むっ」

お気に召さないようだ。しかし、非モテ三原則の一つに希望を持たないと明記されているし……。

「じゃあ、花陽は何かないか？」

「え？でも私さつき……」

「花陽は普段真面目にやっつてんだから、別にここで欲張ったってバチは当たんねーよ」

花陽に短冊を差し出す。どうしようか迷っているようだったが、やがて受け取った。

「す、すいません！後ろ向いててくださいい！」

「へいへい」

大人しく従いながら、それなりに打ち解けてきた事に気づき、照れくさくなってきた。

このまま月日を重ねていけば、この感覚にすら慣れていくのか……。いまいち現実味がない。

「お、終わりました。ありがとうございます！」

花陽はどう思っているのか。

「きれい……」

花火に見とれる横顔を見て、すぐに空を見上げる。やつと合流した小町達はすぐ手前にいる。あつけらかなとした態度がいつも通りすぎて、むしろホツとするレベルだ。今の八幡的にポイント高い。

夜空に何の痕跡も残さずに消えていく花火は、俺のような人間にも心震えるものがあつた。何の痕跡も残さない辺りにシンパシーを感じるのか。

すると、左肩に重みを感じた。

「すいません。見えづらくて……」

「お、おう……」

花陽は俺の左肩を支えにして背伸びをしているようだ。左を向こうとしたら、予想以上に顔が近かつたので、すぐに花火に目をやる。思考が働かないのには見て見ぬふりをした。

そして最後なのか、特大の花が破裂音と共に空に咲いた時……

「……」

「！」

左頬になにかが触れた。

その湿った温もりは一瞬で離れていく。

慌てて左を向くと、花陽は何事もないように花火に見とれていた。

心臓が高鳴り、息が詰まりそうになる。

今のは………。

「きれいだったね」

「すごかったにや〜」

「そうだねー」

体から火照りがとれないまま、3人の後ろを歩く。

左頬に手をやると、まだそこに何か残っているように思えたが、やはり花火のように何の痕跡もなかった。

花陽と目が合っても普段通りすぎて、こつちが夢を見ているようだ。

「花陽ちゃんは何をお願いしたの?」

「えっ、わ、私?」

「かよちんのお願い聞きたいにや〜!」

「ひ、秘密だよ……………でも……………」

言いよどみながらこちらをちらりと見ると、顔が真っ赤になった。

だがそれを感じさせない柔らかな微笑みを浮かべた。

「もう……………半分くらい、叶っちゃった」

人気がなくなったお祭りの会場で、短冊が夜風に吹かれていた。

『μ, sの皆や小町ちゃんや八幡さんとこれからも一緒に いれますように』

『もつと八幡さんの傍に行けますように』

二つの願いも頼りなく揺られていた。

青い車

「かよちゃん、どうしたの？」

「え、な、何でもないにや……………」

「凜の喋り方が移ったにや!？」

頭がぼーつとしていて、凜ちゃんの言葉が上手く入ってこない。2人を見送るまでは頑張っても通りに振る舞ってたけど、もう限界のようです…………。

指先で唇に触れる。そこには八幡さんの頬の感触があった。

決して七夕の夜のロマンチックな空気に当てられただけじゃない。そんなに器用な性格じゃない事は、自分がよく知っている。

私は八幡さんが好き。

いつからだろう……………。最初は哀しそうな目をしてるけど、どこか優しい人と思っていたような……………。いつから私の気持ちが変わったんだろう。

「かよちゃんー！」

「ぴゃあつー！」

凜ちゃんが私の頬を左右からつまんでくる。

「比企谷先輩と何かあったの？」

「ふあ、ふあんふえふおふあふいふお」

「ええ!?!せ、先輩に変な事されたにや!?!」

何故か先輩が悪者になってしまいました……。

「ど、どうしよう……。でも小町ちゃんが言ってたように、作戦どおりにや?」

「ふあ、ふあふえふおふおふい?」

な、何だろう、作戦って?

「帰ったら、小町ちゃんに電話しなきゃ!!き、かよちゃんいくにや!!」

凜ちゃんは私の手を握ると、猛スピードで走り出した。

「え?り、凜ちゃん……。ダ、ダレカタスケテエ〜!」

私は叫びながらも凜ちゃんの明るさに感謝していた。

だってこの気持ちと真正面から向き合うには、私はまだ臆病すぎたから。

翌日の学校。

「は、八幡……。大丈夫?」

クラス、いや学年、いや学校一の美少女……。もとい天使の戸塚彩加が心配そうな顔で、俺の顔を覗き込んでくる。天使とはこのように近距離で目を合わせるのを躊躇わない。ピッチと違い、目が合っただけで嫌悪感を露わにしたりしない。

「大丈夫って、何がだ？」

最大限に優しい声音で聞き返す。下手すりや俺も天使になれるくらいだ。無理か。

「だって今日ずっとぼーっとしててるよ？」

「そ、そうか？」

「そうだよ。しかもさっきの平塚先生の授業だって、机に何も出してなくて、怒られてた

し……」

「うっ……」

確かにあれは、今学期最大の恐怖だろう……。

『そうか比企谷……。私の授業など受ける必要もないか。そういう事か』

『い、いえ、これはですね……』

『だが安心しろ比企谷。私は生徒の反抗期には徹底的に向き合ってる』

『いや、だから……。暴力反対！』

思い出したらブルツと震えた。あの人その内、瞬獄殺でもマスターしそうだ。

「だ、大丈夫？」

「ああ、何とか……」

放課後呼び出されたけどな。

「それで、何かあったの？」

「……………」

「ど、どうしたの？顔赤くなってるよ？」

「……………」

「は、八幡つてば〜！」

まずい。非常にまずい。あれから花陽の事しか考えていない。小町からも今朝尋問されたが、言葉が出てこない。今ならペッパー君に口喧嘩で負けるレベル。

現実より幻に近くて、幻より生々しい。時間が経つてからの方が、より鮮明に色々と蘇る。主に左半身に……………。

「ぐああああ……………」

「は、八幡!?どうしたの？何で左頬と左腕を押さえてるの？痛いのか？」

痛い痛いのが別の意味で痛々しい奴に見えるだろう。

「ヒッキー……………」

由比ヶ浜が俺を見ていたが、それに気づく余裕もなかった。

夜を駆ける

あの花火大会の出来事から時間が数日経って、夏休みが近くなってきた頃、ついに花陽、というかμ、sは大会本番を迎えた。

本来なら応援にでも行つてやりたいところだが、俺は数学の補習を受けるため、日曜日のなかに学校に来ていた。こうして人は休日出勤を覚え、ブラック企業との付き合い方を覚えていくのだろう。え？補習はお前が悪い？違うな。数学が出来ないという個性を認めない社会が悪い。

まあ、応援には小町が行つてるから大丈夫だろう。ネットに上げたPVの閲覧数も今では関東でもかなり上位に食い込んでいるらしい。綺羅ツバサ……………やはり見る目があるな。

考えている内に花陽の顔を思い出す。さすがに火照りは完全に治まった。電話での会話も至って普通。だがそこに物足りなさを感じてしまう自分がいる。自分勝手な願望を押しつけてしまいたいそうになる。こんなのは過去の繰り返しになるだけなのに……………。

いや、今は考えるのはよそう。あの夜のあの幸福な瞬間を思い出しながらこの補習を

.....

「ひ、比企谷君！一人でニヤニヤしてないではやく問題を解きなさい！」

「はい」

「ふーっ」

補習から解放され、やっと自宅に辿り着いた。それと同時に声がかかる。

「お兄ちゃん！」

小町はいつになく真面目な顔だ。

「あれ？お前応援に行ったんじゃないのかよ」

「それが.....大変な事になっちゃって.....」

小町の目が悲しげに伏せられる。胸がざわめくより速く、靴を脱ぎ、小町に駆け寄る。

「どした？」

「μ、sの穂乃果ちゃんが倒れちゃって.....ラブライブの予選を辞退したんだよ」

穂乃果とは間違いなく、ほとんどの曲でセンターを務める高坂穂乃果の事だろう。花陽が言うには元気の塊みたいな奴らしい。

「雨の日も外走ったりしてて.....ちよつと頑張り過ぎてたみたい」

小町は高坂穂乃果の疲労の原因を話そうとしていたが、俺はまず聞くべき事があつ

た。

「あの……花陽は？」

小町は何を思ったのか、キョトンとした目になったが、それもすぐに優しい微笑みになる。

「メールには大丈夫って書いてあったよ。会場では会えなかったんだよ。小町は部外者だから……」

身内や学校関係者以外、控室までは通してもらえなかったようだ。それで花陽に声をかけられなかった事も落ち込んでいる原因の一つだろう。

「後でお兄ちゃんからも連絡してあげて……」

小町が言い終わる前に俺は家を飛び出していった。

「はあ……はあ……」

家を出て、自転車で駅まで行き、電車に乗り、秋葉原の街を走り抜け、花陽の住んでいるマンションの前に辿り着く。花陽に会いたいという焦りや慣れない事をしている高揚感が、幾分か疲労を忘れさせたが、やはり普段から運動をしていないツケは払わされる。

「はあ……はあ……ふう」

手頃な場所に座り、空を見上げる。この前より少し暗い色だ。こんな時間に走るなん

て俺らしくもない。

だが余計な思考は極力振り払い、花陽に電話をかける。
すると、近くで音が鳴り出した。

「八幡さん……………」

そこには花陽が驚いた顔をして立っていた。

ロビンソン

「ほ、本当に八幡さんですか？」

「うす」

軽く手を上げ、花陽に返事をする。まだ現状が飲み込めていないような顔をしている。ちなみにそれは俺も同じだ。何でここまで来たか、正確に説明できる自信はない。

「ラブライブの事、聞いた」

この程度しか絞り出せない。

「そう……ですか」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。不思議と気まずさは含まなかつた。

花陽は俯いた顔を上げ、ようやく悲しげな口元を笑みに変える。

「あの……………場所を変えませんか？」

道路を挟んで向かいの公園へ移動する。そして自販機でなるべく甘そうなコーヒーを選び、先にベンチに座った花陽に渡した。

「あ、ありがとうございます」

遠慮がちに受け取るの見て、自分も程よい距離をとりながら座る。

あとはコーヒーを飲みながら、花陽が話し出すのを待った。

そして、それはすぐにやってきた。

「小町ちゃんから聞いたんですか？」

「ああ、メンバーが倒れたって……それで、予選を……辞退したとか……」

「はい。穂乃果ちゃん……あんなに頑張ってたのに……」

「……………」

「皆も……あんなに練習したのに……」

「……………」

「私……何も……できなくて」

花陽の震える肩を見ながら、こんな時にかける言葉を持たない事の虚しさを感じる。

すると、花陽が距離を詰めてきた。

「ごめんなさい……少しか……」

そのまま俺の左肩にもたれかかる。それと同時に俺は花陽の頭を撫でた。自分が考

えるより自然に……。

花陽は俺と目を合わせた後、すぐに目を閉じ、再びもたれかかった。

しばらくの間、世界は2人だけだった。

完全に日が沈み、星が夜を飾り始める頃、少しウトウトしかけていた花陽は立ち上がって、俺に頭を下げる。

「す、すすすいません！」

「……………気にすんな」

こつちも立ち上がり伸びをする。実は俺も眠くなり始めていた。

「あの、今日はありがとうございました！」

「だから、気にすんな。俺は何もしてねーよ」

「でも……………来てくれました」

「……………もう、帰った方がいいんじゃないのか」

「ふふっ。そうですね」

どちらからともなく並んで歩きだすと、花枝さんがマンションの入り口に立っていた。

「2人共、おかえり〜」

「あ、お母さん、ただいま」

「……………くんばんは」

当たり前のようにおかえりと言われたので、うつかりただいまと言いつうになつた。

「ごめん、遅くなっちゃって……」

「大丈夫よく。ベランダから2人が見えてたから」

「え!？」

花陽の驚きに答えるように花枝さんは公園を指さす。……………まじか。

「じゃ、俺帰るわ」

ここはクールに去ろうとした時、花枝さんに肩を掴まれる。

「比企谷君も上がって♪」

何故か圧を感じる。てかこの人ぼわぼわしてるけど、力強え。動けないんだもん。

「いや、俺ははやく帰らないと、可愛い妹が待ってますので……」

「小町ちゃんからは許可をもらってるわ♪」

何の許可でしょうか。それにいつの間に2人は知り合っただけでしょうか。え、何? 実は裏で皆が何か仕組んでんの? トウルーマンショー的な。だったら俺がぼつちなのも昔フラれたのも親父が俺を敵視するのも納得。

俺は花枝さんに手を引かれ、花陽に背中を押されながら、マンシヨンの中へ入った。

花陽……………お前もか。

恋のはじまり

「八幡君、最近花陽とは進展したの？」

場が凍りつく。食後の穏やかなひとときに花枝さんは爆弾を投下した。俺はお茶を吹き出し、ご飯を5杯も食べて幸せそうな顔をしていた花陽は一瞬で赤面した。

「ゴホツ、ゴホツ！な、何の話ですか？」

「あらあら、とぼけちゃって」

花枝さんはほんわかした笑顔のまま2発目を投下する。

「てつきりキスクらいすませてるかと思つたわ」

ダ、ダレカタスケテエ！！

この人はほんわかオーラを戸塚や花陽以上に放出しているので、天然なのか狙っているのか判断がつかない。

それにキスって……………。

左頬を意識してしまう。

花陽と目があつたが、お互いにすぐ逸らしてしまう。

「お、お母さん！な、なな何言ってるの!？」

花陽は手をわたわたさせながら抗議するが、花枝さんはそれすらも受け流す。

「この前よりいい雰囲気になってたから〜」

やばい。このままでは何かがやばい。自分の中の何かが決定的に変わってしまう予感がした。

「あ、じゃあ俺はそろそろ……」

できる限りクールを装い、2度目の脱出を試みる。花陽が子犬のようにこちらを見上げたが、気づかないふりをした。

「あら、でも外は大雨よ」

「え?」

窓の外を見てみると、いつの間にか雨がざあざあど降り注いでいた。ベランダに叩きつけられる雨粒を見ただけで、その勢いの凄さがわかる。だが、しかし!!

「すいません。傘借りていいですか?」

「ごめんねえ、今傘がなくて」

んな訳あるか!!………という言葉をこらえ、腹をくくる。

「じゃあ、仕方ない。走るか」

「でも、この雨じゃ電車止まるかもねえ」

「……………」

「明日は日曜日だし、泊まっていきなさい♪」

「いえ、しかしですね……………年頃の男女が同じ屋根の下というのは清廉潔白な俺としてはいかがなものかと……………」

「何かする気なの？」

「いえ……………しかし花陽が……………」

「花陽ちゃんはOKだそうよ」

目を向けると、花陽は真っ赤な顔をして俯いているだけだ。沈黙はYESになるとか……………。

「着替えは……………」

「もちろんウチの人のを貸してあげるわ〜」

「でも……………」

「ウチの人も大歓迎だって♪花陽が男の子を連れてくるなんて初めてだから」

マジかよ。ウチの親父なんて、小町が男を連れてきたら、マジギレだけどな。俺に至っては、SEEDに目覚めるまである。まあ、ガチで連れてきたらマジ泣きかもしれないが。悲しくて悲しくて震えるんだろうな。

「八幡さん、あの……………じゃあ、わ、私の部屋でμ、sのライブ映像を見ませんか？9

人で撮り直したものがああるんです！」

「あ、ああ」

斯くして、俺の人生初の女子の家にお泊まりイベントが発生した。あ、友達いないから男子の家にも泊まった事なかった……………。

「じゃあ、お風呂沸いたら呼ぶから。それまでごゆっくり」

「は、はい」

女性2人のパワーに抗えない辺りは、自宅や奉仕部と似ているが、何処か違うのは……………。

「八幡さん、こっちです！」

俺の袖を躊躇いがちに引く、この女の子に対して……………多分、特別な気持ちを抱いているんだろう。

花陽の小さな背中を見ながら、俺は以前から見て見ぬふりしてた何かを自覚してしまった。

裸のまままで

「ど、どうぞ……………」

「お、おう……………」

恐る恐る、しかし、嘔み締めるように部屋に足を踏み入れる。だって女子の部屋だぜ。総武高に俺以外、女子の部屋に入った事ある男いるのかよ。いるだろうな。何なら入った事ないのが俺と木材山と童貞風見鶏だけかもしれん。あれ、木材山？名前が違うような……………むしろ誰だったっけ？

本来ならここで鼻で深呼吸をすることで場所だが、ここは小町の部屋じゃない。いや、小町の部屋でもしたことないよ？ほ、本当だよ？ハチマン、ウソ、ツカナイ。

花陽の部屋の中は何というか、割と普通だった。こう、もつとファンシーでピンクな部屋をイメージしていたが……………ピンクは別にエロい意味じゃありません！

まあ、いい意味で普通って事だ。変わったところといええば、部屋の至る所にあるアイドルグッズや変なお米のキャラクターのぬいぐるみくらいだ。

「あ、あの……………あんまり見られると、やっぱり恥ずかしいです」

「わ、悪い……」

「八幡さんの部屋はどんな感じ何ですか？」

「あー、この部屋のアイドルグッズがなくなったら俺の部屋みたいになる」

「シンプルなんですわね」

「そ、そうか」

「……………」

「……………」

対して意味を成さないやり取りは、却って場の緊張を高める。

「そ、それよりPV見ていいか？」

「は、はいわかりました！」

ここはクールに非モテ3原則を心で唱えよう。

「この歌詞が凄く素敵なんですよ!!」

「お、おう……」

今更だが花陽はアイドルが大好きだ。夢中になっている。そう、夢の中と書いて夢中である。なので、アイドルのPVを見ている間は、現実の俺の事など全く意識していない。

要するに……………近い。

「この凜ちゃん表情が最高に可愛いんですよ！」

ぐいっと顔が近づく。つーか花陽の頭部で画面の三分の一くらい見えない。目悪くするぞ。

「(っ)ですよー(っ)……」

花陽がこちらを向くと、案の定、至近距離で目が合う。

「……………」

「……………」

「わ、私、飲み物取ってきますー！」

とてつー！と部屋の外へ小走りで行く。顔を伏せていたので、表情まではわからなかった。

「ふう……………」

溜息について、こちらもこの妙な空気に飲まれないようにする。

流れっぱなしのPVをぼんやり見ていると、ある発見をした。

こ、これは……………」

PVを巻き戻す。

画面に映っているのは、確か最上級生の絢瀬絵里さんと東條希さんだ。その2人の顔を確認して、俺はもう一度巻き戻した。

「おお……」

確かに……揺れてる。軽く跳ねる振り付けの所で、万乳引力の法則が発動しているのだ。俺はドアが閉じていることを確認して、あと一回だけと心に誓い、巻き戻す。

「すごい……」

乳トン先生、アンタは偉大だよ。……誰だよ。さてまだ誰も来る気配が……

「八幡さん……」

嵐の前の静けさを思わせる声音にビクウツと体が跳ね上がる。

俺は丁寧な所作を心がけ、振り返り、正座をした。

「何を見ていたんですか？」

そこには優しすぎて恐い笑顔の花陽がいた。

おっばい

「大変申し訳ございませんでした」

「し、知りません！」

全力の土下座をするが、花陽は聞き入れてくれない。というかこっちを見ていない。部屋の端っこで壁を向いて正座をしている。その後ろで俺が土下座をしているので、変わった儀式みたいだ。まあ、実際許しを乞う儀式ではあるし、これに失敗すれば、社会的に死ぬ。もう死んでるかもしれないが。

とにかく対話を試みるしかない。

さあ、理解し合おうではないか！

「魔が差しただけなんだ」

「……………」

違う。これじゃ万引き犯みたいだ。

「まあ、その、あれですよ、あれ。男というのは好奇心が強くて……探究心が抑えられないといえますか……」

「……………」

「そうーこれは知らないものを知ろうとする努力なんですー」

何故か敬語で言いきった。

最後に『私、気になります！』とつけておけばよかったかもしれない。

「……………」

花陽は未だに無反応だ。それどころかオーラが強くなっている。

「大変申し訳ございませんでした!!」

振り出しに戻り、土下座をする。

「……………」

ちらりとこちらを見たが、目が合うとまたつーんと向こうを向いた。まだ心に響かな

いのか……………」

仕方ない。奥の手を使おう。

「実は千葉駅の近くにおいしいご飯にこだわった定食屋ができたんだ」

「……………」

心なしか少しこちらへ傾いた。

「この前一人で行って見たんだかな、そりゃあいい白米を使ってたよ」

「……………」

お、こつちを見ている。

「だから……今度……よかつたら……一緒に行くか」
「……はい」

花陽はこちらを向いてくれる。

「そういう事なら……許してあげます」

ようやく笑顔を見せてくれた。

だがすぐにジト目になる。

「でも、もうこんなのはダメですからね！」

「はい」

「頑張ってるアイドルの胸をい、いやらしい目で見るなんて！」

「はい」

花陽は軽く俯いた。

「私のを……見ればいいのに」

その眩きはよく聞こえなかった。

「じゃあ、夏休みに……いいか？」

「は、はい！」

普段の調子に戻ってきた。

「ご飯特盛りおごってやるよ」

「た、楽しみです！」

「小町と星空の分も俺が出すか……………」

「……………」

花陽は壁に手をつけて、はぁーっと溜息をついた。あれ、選択肢間違えた？

「ど、どうした？」

「何でもありません……………八幡さんのほか」

「そ、そうか」

何でもありませんといって何でもない事があつた試しがないが、藪蛇にならないように黙っておく。口は災いの元である。俺の場合、手遅れだが。

「じゃあ、1年生だけで撮影したPVがあるので見てもらえませんか？」

「わかった」

立ち上がるが、先程の正座で足が痺れて上手く歩けない。

花陽も『あうう…………』と動きにくそうにしているので、同じように足が痺れているのだろう。

我慢できなかったのか、花陽が俺の方に飛び込んでくるが、俺も足が痺れているので、支えきれない。

「きゃっ！」

「っ！」

2人してベッドに飛び込んだ。

「ご、ごめんなさい」

「こっちはいいいい……。そっちは大丈夫か？」

「あ、はい……………あ」

花陽は完全に俺に乗った姿勢だった。

顔が胸元にあるので、こちらが顔を少し起こせば、至近距離で目が合う。

腹の辺りに柔らかい温もりが潰れて、とくんととくと心音を伝えてきているようだ。さっきまで他の女子の胸に見とれていたのが、バカみたいに思えてくる。

「八幡さん……………」

足の痺れが治まりきらぬ内に、花陽は身を振り、顔を俺の顔の真上に移動させる。身を振る度に擦れる体温がやけに熱かった。

花陽の潤んだ目を見つめながら俺は動けずにいた。これから何が起こるのかも考えなかった。

時計の音だけが規則的にカチカチとリズムを刻む。

今更ながら、心臓が爆発しそうだ。道理で動けない訳だ。

花陽の心地良いくらいに冷たい両手が、俺の頭部を左右から包む。

閉じられた瞼は振るえていた。

熱い吐息にくすぐられ、こちらの唇も震え出す。

「お風呂あいたわよ〜♪」

「~~~~~!!!」

突然の出来事に2人して声にならない声を上げながら、一瞬にしてベッドの両端へ転がる。

「おいおい、今、俺、何しようとしてた!？」

「ぴゃああ……………」

花陽は半泣きのような声でベッドに潜り込んだ。そして、さすがに気まずそうな花枝

さんは……………」

「え〜と……………てへぺろ♪」

何それ可愛い。

初恋クレイジー

「おい、これ……」

「あうう……」

場の空気を変えるために花陽、俺の順で風呂に入った後、残りのPVを観るために花陽の部屋に戻ると、おかしな事になっていた。

ベッドのすぐ傍に布団が敷かれている。

「花陽、寝るときはベッドじゃなくて布団派なのか」

「いえ、ち、違います……」

「じゃあ、これは……」

まさかな、と思うが………。

「お布団敷いといたわよ」

そのまさかでした。ニコニコ笑顔の花枝さんは悪びれる様子もなく、というか、それが当たり前でも言いたげな口調だ。ああ、可愛い可愛い。

「はうう……」

「いや、さすがにここで寝るのはまずいでしょう」

花陽の方は見ずに、未成年の真面目なぼつちとして当たり前の抗議をする。さすがにまだ花陽の顔を見る勇氣はない。間近であんなに見つめ合つて、その秘められた色気を認識してしまったのだ。もう意識しないのは無理がある。

「あら、私の部屋の方がよかつた？」

思わずずっこける。いちいち言動が斜め上すぎる。花陽との共通点は顔と胸だけじゃねえのか。………ちなみに花枝さんは平塚先生より大きいと思います！

考えている内に、どこからともなくドス黒いオーラを察知して震えたので、慌てていらない考えを振り払う。

「俺はリビングで寝ますよ」

「あら、花陽と一緒にの部屋は嫌？」

「お、お母さん！」

「そ、そんなことないろ！」

「やっぱり花陽と一緒にの部屋がいいのね！」

「そ、それも違いますしゆ！」

「お母さん！八幡さんが困ってるよ！」

「じゃあ、リビングで私と寝る？」

「はい！」

「八幡さん……」

「……………」

皆さん、そんな目で見ないで。これは誘導尋問だ。叙述トリックだ。言わされただけで決して本音ではない！ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「八幡さん……………もしかして、お母さんの事が……………」

花陽の盛大な勘違いが聞こえるが、今は気にしている余裕はない。この花陽に輪をかけて天然ぼわぼわの花枝さんのペースに飲まれたら終わりだ。何なら花枝さんルートに突入するまでである。だってどっかの青春男だって、うっかり女々さんルート入りかけてたし……………。

「あのですね、花枝さん。若い男女が二人きりで同じ部屋で寝泊まりして何か間違いが……………」

「ま、間違い……………あわわ……………」

花陽が間違いという言葉に反応して、混乱している。

「大丈夫よ、だって八幡君はそんなことしないもの」

「そ、そうですか」

過度な信頼は困る。そもそもぼつちとは、信頼しない・されないを信条とする孤高の生き物なのだ。それにぼつち以前に……………男だしな。さつきも場の空気に流されか

けた。いや、それ場の空気だけじゃなく、特別な感情も確かにあったけど。

「あ、あの、八幡さん！」

花陽の方を向くと、もうその瞳にはさっきの艶っぽさはなく、いつもの柔らかさがあつた。

「わ、わ、私……大丈夫です！」

……………何が？

結局、花陽部屋で寝る事になった。そういう方向で話が落ち着いたところで、もう夜も遅いので、すぐ寝ることにした。俺がやるべき事は二つ、花陽の方を見ない事。1秒でも早く寝る事。

「八幡さん、すいません。うちのお母さんが……………」

「ああ、大丈夫です」

小町が一人、小町が二人、小町が三人。

「ちよつと天然だけど優しいお母さんなんですよ」

「そ、そうですね」

小町が四人、小町が五人……………。

「ど、どうして敬語なんですか？」

『小町……………お兄ちゃんなら……………いいよ』

「おおう」

「ぴゃあつ！」

いかん。気持ち悪い声が漏れて、花陽を驚かせてしまったら。つーか俺は何て妄想を………。小町的にポイント低いどころではない。くつ、天使を数えてはやく眠ろうとしたのだが、逆効果だったようだ。

「す、すまん。ウトウトしかけたところどうなされて」

「あ、眠りかけてたんですね。ごめんなさい」

「いや、大丈夫だ………」

いいか、無心になれ。……そうだ！俺には戸塚という天使がいるじゃないか！

俺は脳内で愛できるように数える。

戸塚が一人、戸塚が二人、戸塚が三人……

『八幡………来て』

「うぐうつ」

「ぴゃあつ！は、八幡さん、どうかしたんですか!？」

「いや、寝る前はいつもこうなんだ」

「そ、そうなんですな」

考え得る限り最悪の言い訳をしながら、もう何も考えないようにする。いかん、天使

2人を汚してしまった。頭の中がどうかしている。色んな事が自分には早過ぎて、少し脳を休めないで、パンクして自分が自分じゃなくなりそうだ。

そうこうしている内に、眠りが優しく包み込んできた。

「八幡さん……………今日はありがとうございました」

最後に柔らかい声に囁かれ、俺の意識は途切れた。

しばらくすると、二つの寝息がじゃれるように部屋の中に響いていた。

サンシヤイン

うつすらと目を開けると、見慣れない天井が目に入る。のろのろとした動作で、枕元に置いたスマホで時間を確かめると、六時半になろうとしていた。普段なら二度寝コースだが、ここは自宅ではないし、花陽も午前中から部活に行かなければならない。あまり物音をたてないように、そして、すやすやと寝息をたてる花陽の方を見ないように起き上がり、部屋を出た。

「おはよう、早いわね。よく眠れた？」

キッチンにいる花枝さんから声がかかる。

「まあ、何とか……」

天使二人を汚したが……。

「八幡君は今日で帰るの？」

「はい、そうっすね……」

きっと小町も寂しがっている事だろう。

「そう、残念ね……」

花枝さんは悲しそうに目を伏せる。その伏せられた目も、長い睫毛も、しなやかな指

も人妻の色気を惜しみなく放っていた。何これ。危うく好きになりそうなんだけど。

「そろそろ夏休みだし、またいらっしやい」

頭を撫でられる。くっ、平塚先生にこの女神のような優しさとおしとやかさがあれば結婚できるのに……！てか本気になるから止めて！

「じゃあ、花陽を起ここしてきてもらえる？」

「……わかりました」

朝から無駄に心拍数の上がるイベントばかりである。そうなると普段ぼっちの俺は、極めて健康的という事だ。

いつもならここで、ぼっちの素晴らしさを認識して悦に浸るところだが、何故か深呼吸で思考を振り払い、花陽を起ここしに向かった。

さつきは見なかつた寝顔を確認する。

「すうー、すうー」

天使だ。天使がここにもいる！穏やかな寝息をたて、見る者を癒すその寝顔は、純真無垢という言葉がとても似合う。だが首から下に目をやると、顔が熱くなるのを感じた。

昨日は色々あつて、そこまで意識がいかなかったが、Tシャツ一枚だけなので、花陽の胸は自然と強調されている。わずかにはだけた部分から見えるお腹は、昨日食べたお

米がどこに消えたのか不思議なくらいほっそりとしていた。下は七分丈なので、脛から下しか露出していないが、陶器のような滑らかさが見ただけで伝わってくる。しかもスウェット素材なので、下半身の扇情的な丸みがわかりやすく、目が離せない。

……………いや、どんだけ見てんだよ。バカ、ヘンタイ、ハチマン。そう思いながら寝顔を見ると、今度は淡く赤い唇に目を奪われ、昨日の事を思い出してしまふ。

これ以上はやばいので、頭を振り、花陽に背を向け、大きめの声で呼びかけた。

朝食をとり、準備を済ませ、花枝さんに礼を言うと、花陽も既に身支度を整えていた。見送りはいいと言ったが、そこはやんわりと譲らなかつた。

夏の空の下、いつものように人が溢れる秋葉原駅まで2人で話しながら、歩いていった。

「あの、本当にありがとうございました！」

「俺は何もしてねーよ。つーか練習あるのに見送りなんてしていいのか？」

「大丈夫ですよ。少し早めに出ましたから」

「そうか。じゃあ、電車来るからもう行くわ」

「はい、じゃあ帰り気をつけてくださいいね！」

「あ、ああ、そっちも……気を付けて」

花陽の大きめの声に少し気恥ずかしさが生まれる。

そして、俺の表情からそれを察したのか、照れくさそうにはにかむ。

その姿に背を向け、改札へと向かったが、何か言い足りない気がして振り返った。花陽は手を振るのを止め、首を傾げている。俺はその姿に駆け寄りたいたい気もしたが、言葉が見つからず、手を振り、改札をくぐった。

もう振り返らなかつた。

「はい、じゃあお昼にしましよ」

絵里ちゃんの言葉で、その場の緊張感がほぐれていく。普段なら私が一番はしゃぐのだけれど、今日はそんな気分になれなかつた。穂乃果ちゃんが倒れたというのもあるし、八幡さんとの事も気になっていた。

昨日、未遂に終わったけど、私……………八幡さんに……………キ、キ……………

「……………」

「か、かよちん?」

「は、花陽」

同じ1年生組の2人に声をかけられる。何で引き気味なんだろう?

「ど、どうしたの?」

「どうしたってあなた、さつきから一人で顔真っ赤になったり、絵里と希の方ばかり見てるわよ?」

「しかも……………胸の辺りばかり」

「え、ええっ!？」

うう……………忘れたつもりだったけど、やっぱりあの2人を見ると、昨日の事を思い出してしまふ。八幡さん……………あのぐらいがいいのかな？

「花陽、どうかした？」

「今日、元気なさそうやね？」

絵里ちゃんと希ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。だけど私の頭の中はそれどころじゃなかった。

絵里ちゃんはこう……………ばいーんとハリがある感じ。私よりも弾力がありそう。

希ちゃんはこう……………たゆんと柔らかそう。ふかふかというか。

八幡さんはこのぐらいが……………

「きやつ!？」

2人の胸に手を伸ばし、確かめる。

こんな感じが好きなのかな？

「は、花陽!？」

「い、いきなりどないしたん?」

「花陽!花陽ってば!」

「かよちゃんが……かよちゃんが壊れたにやー!!」

「花陽! ハレンチですよ! 止めなさい!」

「花陽ちゃんがこわいよう……」

そういえば、お母さんの胸もいやらしい目で見ていたような………八幡さんのばか。

しばらくして我に返った私は2人にひたすら謝り続けました。
数日後、μ, sに大きな事件が起こるなんて気づきもせずに………。

夕暮れ

夏休み初日。

「ふう……」

お風呂上がりでの火照った体をベッドに沈める。

あんな事になるなんて……………。

今思えば、私もどこかで異変に気づいていたのかもしれない。でも、私は……………自分の事ばかりで……………。

2年生の仲違いで、 μ , s は活動停止になりかけていた。

ことりちゃんの話の話を聞いて、穂乃果ちゃんが辞めると言い出したとき、私は目の前が真っ暗になった。そこからは、各々が怒り、悲しみをぶつけ、その場は解散になった。凜ちゃんのおんな悲しそうな顔は初めて見た。

私は自分でも何を言ったか覚えていない。もしかしたら何も言えなかったかもしれない。

μ , s がなくなっちゃったら、私はどうすればいいんだろう。

思考を振り払う。駄目だ、私。また、自分の事ばかり……………。

こんな時、あの人ならどうするだろう？

スマートフォンに手を伸ばす。

具体的な解決策を求めるわけじゃない。

優しい慰めが欲しいんじゃない。

ただ声が聴きたかった。

「お兄ちゃん、花陽ちゃんとはいっデートするの？」

「何の事だ？」

「ゴミいちゃん、花陽ちゃんとはいっデートするの？」

「小町ちゃん……………乱暴よ」

「だってこの前、いきなり家を飛び出してお泊りなんてしたから、てっきり恋人同士になったのかと思ったよ」

確かに……………第三者視点から見れば、そういう風に思われても仕方はないかもしれない。俺が帰ってきた時の小町と母親の顔といったらもう……………。ちなみに親父は舌打ちをして、自室へと引き上げていった。ぜってー、また睡眠妨害してやる。

「はあくあ、これだからゴミいちゃんは……………。キスクらいしてくればよかったのに……………」

小町の言葉を引き金に、また脳内であの瞬間が流れ出す。正直に言えば、思い出しす

ぎて、スローモーションもストップモーションも余裕なレベル。よくわからんな。

おかげで授業に身が入らず、平塚先生の愛のムチを腹部に食らった。あの威力から察するに、夏休み明けには、ソニックブームくらいは使いこなしているだろう。

「絶対何かあるよ……………顔赤くなってるし」

小町が一人でブツブツ言い出したので、そろそろ自分の部屋に引き上げようと思い、ソファから立ち上がると、電話が鳴り出す。

花陽だ。

俺の表情で全てを悟った小町は、ニツコリと笑みを浮かべる。……………何かムカつくな。

「……………はい」

『は、八幡さん、こんばんわ……………』

「あ、ああ……………元気か？」

『はい……………元気です……………』

明らかな嘘だ。思わずウソつけと返したくなるくらい。だが花陽の話をまだ何も聞いていないので、一旦飲みこんだ。横では小町が『伸ばして、伸ばして』とジェスチャーを送ってくる。誘拐犯と話してるんじゃないやねえんだぞ。

『あの……………何というか』

「ああ」

『そっちはどうですか?』

「夏休み初日を家で満喫してたよ」

『そうですか……』

「……」

『……』

恒例の沈黙だが、これはいつものとは種類が明らかに違う。どこが違うかは具体的に
は言えないが……。

「花陽………何かあったか?」

『え!? あ、あ、あの、その………何でもない………ですけど』

………これでは埒があかないし、これ以上尋ねるのは逆効果だ。ちやうど小町もいるこ
とだし………

「花陽………よかったら、明日、遊びに行かないか?」

プール

千葉最大のプール、アクアガーデン。千葉にありながら人生初のご来場を果たした俺は……………照りつける太陽と人ごみにガリガリ体力を削られていた。

「あまりのんびりできそうもないな。どうする、帰る?」

「出たよ、ゴミいちゃん…………」

「先輩、何いつてるにやー!!」

「あはは…………」

後続く3人がそれぞれのリアクションを返す。まあ、今のは皆を試しただけだ。

ちなみに何故プールかというと、親父が仕事の関係で、無料券を4枚持っていたからだ。それを小町に全て奪われた時の親父の切なそうな顔は、さすがの俺も同情しかけた。……………親父、ざまあ。

それに花陽と、後から誘った星空の気分転換を考えたら、こつちに来てもらった方がいいと思った。何か理由を話すなら黙って聞くし、話さなくても少しぐらい気が楽になればいいだろう。リア充共が裸に近い格好でいちやつくのを見せられるのは癪だが、タダなんだし、楽しもう。……………タダで花陽の水着姿が拝めるんだし。

「お兄ちゃん、おっ待たせー!!」

「わく、たくさんプールがあるにや〜!遊ぶにや〜!」

小町と星空が満面に笑みを浮かべたハイテンションで、やってきた。小町がフリルのついた緑の水着で、星空はオレンジのスポーティな短パンタイプの水着だ。

小柄でスレンダーな2人の美少女の出現に、見とれる男も少なくない。2人は全然気にしていないけど。

「ほらほら、久々の妹の水着だよ♪何か言いたいことは?」

「ああ世界一可愛い、星空も」

「うわ、てきとー」

「凜はついでみたいにや!?!」

「そーいや、花陽は?」

まだ来ていないようだ。

「まー、まー、慌てなさんなって」

「女の子には準備が色々あるにや」

「そうそう、心の準備が」

「こいつら会う頻度はそんなに高くないのに、無駄に気が合うよな。」

「あ、あの……お待たせしました」

聞き慣れた柔らかな声に振り向いた。

「……………」

言葉が出てこなかった。

正直言えば予想外だ。花陽は性格的に、露出をなるべく抑えた水着にするかと思つたが、そのピンクのビキニは、白く滑らかな肌を惜しげもなく晒していた。

その豊かなボリリュームのある胸に、男共の目も吸い寄せられている。えーと、レーザーポインタは確かバッグに……………」

「お兄ちゃん、そんな殺人鬼みたいな目をしてないで、何かいうことあるでしょ?」

小町の声に我に返り、いつの間にか近くです、もじもじと恥ずかしそうにしている花陽に何とか声をかける。

「まあ……………その……………何だ……………すく……………いい」

「あ、ありがとうございます!」

笑顔になり、こちらを見上げてくる。

くりくりとした目は、今日も捕らえた者を離さない魔性に満ちている気がした。

時間が止まった2人の間を、真夏の生温い風が吹き抜ける。

「何か……………まで雰囲気出されると……………」

「……………ちが照れるにや……………」

小町と星空の言葉に慌てて目を逸らした。

「何だよあいつ……あんな美少女達と……」

「ちくしょう……ぼっちのくせに……」

「神様……奴に天罰を……」

何やら物騒な声が聞こえる。おい2番目の奴。だから何で俺がぼっちなの知ってんだよ。

「……行くか」

溜息をつき、3人とプールへ歩き出した。

「あれ……八幡？」

波のり

「まじか……」

「こ、恐いです……」

このプールで一番人気の、日本最長のウォータースライダーを見て、俺と花陽は軽く血の気が引いた。何これ。もはや娯楽ではなく、修行ではなかるうか。

2人して頷いて、さり気なく離脱を試みた。

「じゃあ、飲み物買ってくるか」

「そ、そうですね。熱中症には気をつけないと……」

回れ右をしたところで、小町に肩を掴まれる。花陽も星空にがちりとホールドされ、
「ぴゃあ……」と悲しそうな目をしていた。

「はいはい、まだ来たばかりだから。そういうのいいから」

「逃がさないにゃ〜！」

「お、おい！ぼつちにこういうリア充系アトラクション無理だつて！いや、ぼつち関係ないけどー！」

「ダ、ダレカタステェ〜！」

長い行列は割とスムーズに進んでいき、心の準備をしている内に、やがて順番が回ってきた。

「どうやら二人一組で滑るらしい。」

二人一組という言葉に戦慄が走り、挙動不審に陥りかけたが、気にする事はない。今日は4人で来ているからな。小町と組めば何の問題もない。むしろ得した気分。悪いな、親父。

「凜ちゃん！こつちこつち！」

「うん！楽しみにや〜!!」

「……あれー？どうなってるの？」

小町と凜は楽しそうに身を寄せあい、係員の指示に従い、スムーズに滑っていった。

「……………」

「……………」

その様子をぼかんと眺めていると、係員のお姉さんから呼ばれた。

「そちらのカップルのお客様どうぞ〜！」

「!?!」

カップルという言葉に反応してしまう。

「カ、カップル……………そう見えるのかな」

花陽は何か眩きながら、割と軽快な足取りで、2人乗りの大きな浮き輪の前に座った。「はい、じゃあ彼氏さんは、彼女さんをしっかりと支えてあげてくださいね〜!」

やけにノリノリな係員のペースに飲まれ、花陽との距離を詰められる。ちよ、タンマ!今どちらも8割裸だからね?あんまりこうみだりに接近するのはよくないと思うんですよ。

現在の状況を説明すると、俺が花陽の肩に手を乗せ、花陽の小さな体は俺の足と足の間に浅く挟まれている。素肌と素肌が触れ合う緊張と熱で、じつとりとかいた汗が、ドーン引きされてるんじゃないかと気になって仕方ない。

花陽の表情は窺えないが、少し恐がっているようだ。

うわー、落ち着かねー。

もちろん、こちらの混乱など係員のお姉さんが気づくわけもなく、スムーズに俺達は滑り出した。

「うおおおおお!!」

「ぴゃあああ……………あははははははははははははははは!!」

あれ?

花陽さん、テンション上がりすぎですよ。

「八幡さん八幡さん!これ楽しい!!」

「そ、そうか」

わかったから、ぐいぐい体押しつけないで！ああ、怖い柔らかい怖い柔らかい柔らかい！

何がなにやらわからぬまま、フィニッシュを迎えた。

「はあ……はあ……いきなりハードだった」

「お兄ちゃん、お疲れー！」

「先輩フアイトにやー！」

何でお前ら、そんなに元気なの？と言おうとしたら、右腕をホールドされた。

「八幡さん、もう一回行きましょう♪」

「……はい？」

助けを求め、小町と星空を見る。

「お兄ちゃん、頑張つて！」

「かよちゃんは意外とこういうトコあるにや！でも凜はこのかよちゃんも好きにや」

「じゃあ、小町か星空が……」

「いつてらっしや〜い！」

「いっくら……」

「さ、八幡さん！行きましよう!!」

「ダ、ダレカタステエ〜！」
この後、2回乗りました。」

君は太陽

「ふう……」

地獄のウォータースライダーを終え、現在、波の出る大きなプールに漂っていた。心地良い揺れが体を癒してくれているようだ。ああ、こうしているだけで、金貰える仕事ねえかなあ……………。

「あの……八幡さん」

隣で同じように漂っている花陽が、おずおずとこちらを窺う。

「どした？」

「今日は……ありがとうございます。私と凜ちゃんに気を使ってくれて」

「……チケットの事なら小町に言ってくれ。俺は何もしてねーよ」

実際、まだ花陽の悩みもわかっていない。

「それでも、八幡さんがこうやって誘ってくれただけでも嬉しいんです」

隣を見ると、花陽の優しい笑顔が近くににあった。普段はあまり見せない鎖骨も、濡れて首筋に貼りつく髪も、初めて見る艶やかさがある。

そして、こちらを見る二つの瞳は、無条件に信頼を寄せてくれているような気がする。

今なら踏み込んでもいいのかもしれない。

「花陽……………何か、あつたのか？」

俺の質問に、その長い睫毛が少し震え、目が伏せられた。

だが、それも数秒の事で、二つの瞳はこちらを捉え、何やら決意めいた声音で話し出した。

「実はμ、sのことで話が……………」

話は途中で遮られた。

思ったより強い波が来て、俺も花陽も人波に飲まれた。

「ぴゃあっー！」

テンパった花陽を庇うようにこちらへ寄せると、しがみつく感触がしたが、鼻に水が入り、それどころではなかった。

客のはしやく声と共に、やがて波も緩やかになる。

「ゲホツ、ゲホツ！あー、焦った。まさかこんな波が来るなんてな……。花陽、だいじよ……………う……………ぶ……………か」

「うう……………」

花陽はものすごい力で俺にしがみついていた。だがそれだけではない違和感がある。何かおかしい。感触というか、感触というか。

「は、八幡さん……」

花陽が泣きそうな目でこちらを見上げる。かなりの至近距離だが、今は気にならないらしい。

先程とは打って変わった、子犬のような可愛らしい瞳に、落ち着かなくなる。

そして、次の言葉で止めをさされた。

「……………水着が…………とれちゃいました……………」

「ひゃい!?!」

噛み噛みの返事をしながら辺りを見る。だがそれらしいものは何も無い。

「ど、どうしましょう……………」

花陽の顔が赤く染まってきている。

それと同時に俺に抱きつく力が強くなる。

お腹の辺りで柔らかな温もりが潰れているのは、俺の意識を強く刺激していた。

花陽は水着を着けていない。簡単な事だ。今、俺が受け止めている感触は……………。

いかん、頭がクラクラしてきた…………。

だが今は水着を探して、この状況を何とかしないとイケない。動きづらいが動くしか

…………

「お兄ちゃん…………て、ええ?！」

「かよちーん！……にやあ!？」

来た！救いの女神！

「おい、2人とも、逃げるな！」

「い、いやだつて……」

「邪魔しちゃ悪いにや……」

盛大な勘違いをしている2人に事情を説明する。

「わかつた！花陽ちゃん待つててね！すぐ探してくるから！」

「凜はあつちを探してくる！」

「だからお兄ちゃんは……」

小町が俺の腕を移動させる。自然と顔の位置も近くなる。

「……これは意味があるによか？」

また嘸んでしまった。だが小町は気にしていない。

「もつちろん！この姿勢を保てば、どの角度からも安全安心！……それとも何？お兄ちゃんは花陽ちゃんの胸が、他の男の人に見られてもいいの？」

「……………」

それには答えなかったが、自然と腕に力が入る。

「……………」

花陽の息が耳元で漏れ、我に返り、少し力を緩める。

小町はいつの間にか、いなくなっていた。

俺と花陽は何とか端っこへ移動していった。

「八幡さん……」

「ど、どした」

かなり耳元がくすぐつたい。腕に感じる花陽の背中感触も、両手に感じる肩の滑らかさも大変危険です。はい。

「わ、私の、む、胸が他の男の人に見られるのは、い、嫌なんですか？」

言葉の内容もくすぐつたいものだった。

「……………あ、ああ」

なるべくさりげない調子で答える。

すると、花陽はさらに強く抱きついてきた。

「わ、私も、八幡さん以外にみ、見られたくないです」

甘ったるい囁きと同時に小町と星空が戻ってきた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！あつたよ！」

「あつたにゃ！」

「お、おう……。よく見つけたな」

「小町ちゃん凜ちゃんありがとう……」

「いや実は……ある方の元に流れ着いてまして……」

「ある方?」と思いながら、小町の後ろを見ると、意外すぎる人物、いや天使がそこにいた。

「や、やあ、八幡」

そこには、な、な、何と、戸塚彩加がいた。

群青

「まさか、八幡と会えるなんて思わなかったよ——!」

普段よりはしゃいでいる戸塚は、その白い肌が太陽の光を反射して、さながら天使から女神へとランクアップしたようだ。ただ、大きめのパーカーを着ていて、露出しているのが、顔と手足だけというのが惜しい。非常に惜しい。いや、パーカーを着ていなかったら、俺のような俗物は見ただけで消滅してしまうのかもしれない。

「戸塚は一人で来たのか?」

「うん。親からチケットを貰ったんだけど、皆用事があつて……」

「ここにヒマなぼつちがいますよー!!」

「八幡はプールはリア充の巣窟だから嫌いって言ってたし……」

「その時の俺くたばれ!爆発しろ!!」

「でも驚いたよ!八幡がμ, sのメンバーと、その………付き合ってるなんて………」

「ひ、ひゃい!?!」

「え？ち、違うの？」

「な、何でそうなるんだよ……」

「だ、だって、抱き合ってたし……」

できるだけ思い出さないようにしようとしていたが、戸塚の言葉で、先程の熱が蘇る。不可抗力とはいえ、上半身裸の女子と抱き合っていたのだ。つまり、俺の胸元にあった感触は……はい、しつかり残ってます。

『私も、八幡さん以外に見られたくないです……』
甘くとろけるような囁きも確かな響きを持つていた。

「は、八幡？どうしたの？顔が赤いよ？」

「♪○△□#*※」

「何言ってるかわからないよ〜！」

そうこうしている内に、3人が戻ってきた。

「おい、見ろよ。美少女が増えてやがる」

「だから何であんなぼっちが……」

「神様、何が何でも奴に天罰を！」

また物騒な声が聞こえる。おい2番目の奴。次は屋上な。

「初めまして、戸塚彩加です。わあ、やっぱり実物はさらに可愛いね〜！」

「は、初めまして……小泉花陽です」

「初めまして！星空凛です！わくすく可愛いにや〜！」

おっと、危うく美少女達の出会いの瞬間を見逃すところだった。何かこだけ涼しいよ。え？戸塚は男？もう戸塚は戸塚でよくね？まあ、戸塚が褒められるのは誇らしい。

「当たり前だ。千葉の天使の一人だからな」

「何でお兄ちゃんが威張ってんの……」

「は、はずかしいよ……八幡」

「むう……」

あれ？別の涼しさ……いや、寒気が……。

「花陽ちゃん、安心して！戸塚さんは男の子だから」

「「え？」」

衝撃的な事実には2人はフリーズした。まあ、俺も実はまだ疑っている。

もちろん2人が信じるまで、丁寧の説明しました。

戸塚も加わり、昼食をとった後、全てのプールを遊び尽くしてから、5人で休憩エリアでくつろぐ事にした。提案したのは俺で、理由は無論、話を聞かためだ。初対面の戸塚もいるが、俺と違い、真面目に部活に取り組んでいる者同士、もしかしたら、俺や小町よりいいアドバイスができるかもしれない。

休憩エリアはそこそこ人がいたが、寝ている人が結構いたので、気にならなかった。花陽の方を見ると、顔を赤くして目を逸らされた。正直に言えば、まだ俺もさっきの事が気になって仕方ないが、ここは持てる理性と自制心とぼっち力で抑え込み、話を切り出した。

不死身のビーナス

花陽の話は10分程度で終わった。

だがその短い間で、花陽と星空の顔が沈んだものになり、先程までの明るさが取り繕ったものであるように思われた。

もちろん2人だけではない。2人とすっかり友人関係が出来上がっている小町も、実はμ、s発足当初からのファンだという戸塚も、同様に悲しそうな表情をしている。

俺も言葉が上手く出てこない。表情がどうなっているかはわからないが、先程までの心の明るさに陰りを感じた。

「私……………何もできなくて……………」

「凜も……………」

泣きそうな顔の2人を見ながら、話の内容を反芻する。正直、解散にまで事態が発展しているのは、予想外だった。だが、μ、sの発起人である2年生メンバーがバラバラになってしまつては、それも仕方ないのかもしれない。そもそもμ、s結成の目的が、音ノ木坂学院のスクールアイドルとして有名になり、注目を浴び、入学者を増やし、廃校を防ぐというものだった。目的自体は達成している。

「なあ、2人共。もし、仮にこのままμ、sが解散したら、どうするんだ？」
「お、お兄ちゃん！」

小町が止めようとするが、μ、sの事に関しては、部外者の俺ではどうにもならない。仮に俺がμ、sのメンバーを集めて、薄っぺらい言葉を並べても大した意味などない。下手すりや黒歴史のワースト更新、ゴーストタイプのポケモンにだいはくはつを使うくらいは無駄死にである。

なので、2人の気持ちを聞いておきたい。

「……………私は……………」

「……………よくわからないにや……………」

きつと花陽も星空もμ、sをととても大事に思っている。俺なんかが思うより遙かに。でも、それと同時に、μ、sをなくしてしまつたら、自分は何をすればいいのか、自分のこれからの学校生活にどう価値を見出すのかが、わからなくなっているのはだろう。……………特に花陽は。彼女の全ての過去を知っているわけじゃない。だが、μ、s加入前の発言を思い返せば、それは明らかだ。μ、sがなくなれば、自分は何もないと『勘違い』するんだろう。

……………そんな事はないのに。

「あの……………」

花陽がおずおずと口を開く。

「八幡さんならこんな時、どうしますか？」

「何もしない」

「そ、即答だね」

戸塚が可愛らしく苦笑する。

「で、でも……………」

「まあ、聞け。俺は2人以外に会った事はないから、完全に第三者視点だが、南さんに聞
しては、既に向こうに行く準備まで出来ている。てことは本人の意思が覆らない限りど
うしようもない。高坂さんの方は、続けようと思えば続けられるが、これももちろん本
人次第だ。ついでに言えば、当初の目的は達成しているから止める理由もない」

「そ、そんなこと！」

星空が何か言いかけたが、花陽が手を握って制した。

「気分を悪くしたならすまん。まあ、あれだ。俺が言いたいのは……………」

2人としつかり目を合わせた後、ゆっくり告げる。

「俺は……………2人を……………応援してる」

言い淀んだのは、全く俺らしくもない言葉だったから。

あまりに無責任な言葉だったから。

それでも伝えたかった。

花陽の方を見ると……………微笑んでいた。

その微笑みに心が溶かされたように、言葉が溢れ出す。

「花陽は、自分は何もないみたいに言ってたが、そんな事はない。現に、俺みたいな奴でも、お前らを

見てたら、まあ、元気にはなる。だから……………何もないとか言うな」

今、自分の顔が、羞恥で赤く染まっている事を感じながら俯く。自分の言葉が事態の解決にはならない事をしりながら。

「……………ありがとうございます」

花陽がぼつりと漏らす。顔を上げると、花陽と星空は目に涙を溜め、小町と戸塚はこちらを見て頷いた。

「私……………ずっと、自分に自信なくて……………でも、μ, sに入って、やっと自分が輝ける場所が見つかったと思っただけ……………」

「かよちゃん……………」

もしかしたら、俺は初めて、本当の小泉花陽を見ているのかもしれない。普段は大人しく恥ずかしがり屋で……………でも本当は自分を変えたくて、輝きたい一人の少女を……………。

「私……何もなくはないんですね……………」

「ああ、それだけは保証してやる」

「小町も、何があっても花陽ちゃんと凜ちゃんを応援するよ!」

「僕も、星空さんのダンスや小泉さんの歌声が好きだから、応援するから、頑張つて!」
涙が頬を伝い始めた2人は、見つめ、頷き合い、抱き合った。

たまに何事かと見ている人もいたが、気にならなかった。

季節外れの青臭い春の真っ只中に、俺達はいた。

「ふーっ、すつきりしました!」

「まさか、最後にもう一回乗りたいなんて言い出すなんて……………」

夕方になり、俺達は帰路についていた。トドメのウォータースライダーは俺のHPをすっからかんにした。

5人いるから、見学にまわろうとしたが、俺と花陽だけ乗って、あと3人が見学していた。しかも、写真に撮ってたような……………。

「八幡さん」

「どした?」

「あの、これからも、私の事……見ててくださいね!」

「む、胸の事?」

「ち、違います！八幡さんのほか！」

あぶねー。めっちゃ期待したわー。

後ろの方……

「ねえ、あの2人、本当に付き合っていないの？」

「はい、兄がヘタレなもんで……」

「本当にじれったいにやー！」

さらさら後ろの方……

「え？……ヒツキー？」

「結衣ー、行くよー？」

「あ、うん！……まさかね」

涙がキラリ☆

8月8日。

皆さんご存知(？)比企谷八幡の誕生日である。

ぼっちとして生を受け、ぼっちとして生きる孤高の男がこの世に生まれついた日である。

まあ、あれだ。誕生日なんてのは17回目ともなると、新鮮味がないのは勿論、何なら自分自身も忘れていくくらいだ。平塚先生ぐらいになると、嫌悪感すら覚えるのだから恐ろしい。

とにかく、誕生日だからといって何か特別な事をする必要などない。当たり前前の日常を当たり前前のように享受できる喜びさえあればいい。気持ち次第で毎日が記念日。……なんか素晴らしい名言が出てきた気がする。

気持ちのいい目覚めを迎え、ベッドからのろのろと起き上がる。机の上に誕生日の特別手当ての一万円が置かれているので、回収する。ちなみにこれにはケーキ代も含まれる。

朝9時か。もう少し寝ててもよかったかもしれん。

水を飲んで、もう一眠りしようかと、リビングのドアを開ける。

「お兄ちゃん、おはよう!」

「は、八幡さん、おはようございます!朝早くからお邪魔してます!」

「先輩、遅いじゃ〜!」

「ああ、おはよう。俺もう一眠りするわ」

手早く水を飲み、リビングを出て、自分の部屋へ戻る。つたく、朝から元気いいな。小

町も星空も……花陽も。……あれ?

駆け足でリビングまで戻る。

「……お前ら、どうしたの?」

「「お誕生日おめでどう!!!」」

大声に頭が一気に覚醒する。

お、おお……。

「お、お兄ちゃん?」

「な、泣いてるじゃ……」

「は、八幡さん……どうかしました?」

「ね、寝汗だ……」

あれ？おかしいな……。眼球から汗が出るとか。さすがセブンティーン。体が不思議なアツプグレードされてる。

「……ありがとな。じゃあ、おやすみ」

「いや、おかしいから。何で今日の主役が真っ先にフェードアウトしようとしてんの？バカなの？死ぬの？」

「小町ちゃん………乱暴よ………」

朝からエツジの効いた暴言ありがとな。本当に目覚めたわ。

「先輩！寝てたらかもつたいないにゃ！」

「ほ、ほら！いい天気ですよ！」

「お前らはのび太君の名言を知らんのか」

寝るのが楽しいとか、ぼっちの才能ありすぎだろ。

花陽は苦笑いしている。

「戸塚さんも来るから元気出して！」

「俺は何をすればいい飾り付けか料理か買い出しか」

「いや、変わり身早すぎ」

「……………むう」

あれ？何か涼しいな。クーラー効きすぎじゃね。

「え？と、戸塚先輩も来るにや？」

……………え×3

「と・に・か・く！準備は小町と凜ちゃんに任せて！お兄ちゃんは花陽ちゃんとどっか行つてて！」

「ああ……………え？」

「小町ちゃん？」

「いや、皆で協力すれば……………」

「ゴミいちゃんのバカ、ボケナス、ハチマン！はやく行くの！」

ここうして、炎天下に花陽と共に放り出されてしまった。

スパイダー

8月上旬。夏真っ盛りの太陽は、容赦なく光を降らせてくるので、少し歩いただけで、汗が滲み出していた。

そんな中、花陽は日傘もさささず快活に、でもどこか涼しげに、おっとりした表情でテクテク歩いている。

「あー、なんつーか、すまん。小町がいきなり……」

「あ、大丈夫ですよ。練習でよく外にいますから慣れてます！むしろ、た、楽しいです！」
「そ、そうか」

日光浴びるだけで楽しいとか……意外とぼつちの才能あるんじゃないかな。花陽って割とメンタル強めだし。

「八幡さん……」

「どした？」

「あの……さつきから距離が不自然に空いてますけど……」

「……」

「目も合わせてくれないですし……」

「これは……やむにやまれぬじじょうといえますか……わたくしごとできようしゆくですすが……」

いつか教室で耳にしたセリフを拝借する。

「？」

「いや、やっぱり、この前……」

「！」

花陽が一瞬で赤くなる。

実際仕方がないのだ。

花陽は性格的にも、おそらく趣味的にも、あまり露出を好まないのはわかっている。だが夏服は夏服だ。やはり自然と肌は見えるし、体のラインは出てくる。そうなれば、連鎖反応でこの前の感触とか柔らかさとかが蘇る。そう、俺が悪いんじゃない。夏が悪い。太陽が悪い。結局夏だね、悪いのは。

「あわわ………は、八幡さん、いやらしいです！」

「……悪い」

「い、いえ、その……」

言い淀みながら、一歩二歩と花陽は距離を詰めてくる。

そして、ぼっちのパーソナルスペースという固有結界をあつさり破ってきた。

「……………」

ある程度詰めると、黙り込んだ。手が触れそうなくらいの距離と言っているが、あえて意識しない事にした。

「そういや、μ，sの件はよかったな。また活動できて」

「あ、はい！本当に……本当によかったです！」

アイドルオタクのテンションに切り替わった花陽は、喜びに軽く目を潤ませる。プールに遊びに行った翌日、花陽と星空は、矢澤にこさんに誘われ、アイドルユニットを結成しようとしたのだが、南さんが、飛行機に乗るギリギリで、高坂さんの説得により、留学を辞めたらしい。そして、2年生組の仲違いも終わり、μ，s復活！となったらしい。嘘みたいな本当の話。事實は小説より奇なり。それを聞いた俺も小町も戸塚も大いに喜んだ。ちなみに俺の喜びように2人が一歩引いていたのは、地味に傷ついた。

突然、花陽が俺の正面に立ち、向かい合った。その表情には、年相応の健気さと悪戯っぽさが見てとれる。

「八幡さん……今度……ライブ見に来てくださいね！」

「まあ……………そのうちな」

賑やかなのも、たまには……………悪くない。

バスでショッピングモールに行くと、相変わらずの盛況ぶりだ。「どこか見たい場所あるか？」

はい。突然の外出なので、無論ノープランです。

「そうですね……………映画とかどうですか？」

「おお、久しぶりに行ってみるか」

確かに歩き回るよりは楽だし、涼しいし。

映画館のフロアまでのんびりと歩いて行った。

「八幡さん、どれにしましょうか？」

「えーと……………」

「ただいま公開中の映画。」

邦画

・進撃のぼっち

・ぼっちdiary

・ぼっち協奏曲

洋画

・ボッチウオーズ エピソード7 ボッチの覚醒

・キャプテン・ボッチ

・ジユラシツク・ボツチ

アニメーション

・ボツチ・アート・オンライン

・ぼっちの名は

・ラブライブ！ドキュメンタリー

あれー？

何度も目をこすり確認する。ぼっちはマイノリティじゃないのかよ。何故に劇場独占してんだよ。

花陽の方はというと、ラブライブ！ドキュメンタリーに興味津々のようだ。

「よし、それにしようぜ」

「え!? いいんですか!?!」

そのキラキラした目を見れば、他に選択肢はない事がわかる。あと他の映画は見てはいけない気がする。色々と失くしそうだ。俺も最低限のラインがある。

すると、向こうのソファアーに見慣れた人を見つけた。

「くっ！キャプテン・ボツチ……。渋い。渋すぎる。そこで、ボツチになる道を選んでしまっなんて……」

平塚先生だ。何見てんだよ。何泣いてんだよ。てか誰かもらってやれよ、本当に。

担任の痴態を花陽にみられないように、さっさとチケットを2枚購入し、シアターに入った。

「凄いです！これがラブライブ！の本選なんですね！」

「まあ、よかつたな」

内容は普通のドキュメンタリー作品だった。インタビュ、ステージ裏、ライブ映像等のありきたりな内容だったが、ファンにはたまらない、といった感じの。……………べ、別に甘い雰囲気になって、手を繋いだりとか、期待してないんだからね！

「八幡さん！八幡さん！」

花陽はぐいぐいと寄ってくる。近い近い可愛い近い可愛い！

「私もあんなライブを八幡さんに見せたいです！」

「あ、ああ……楽しみ……してる」

俺の返事に満足したのか、柔らかく微笑み、左手首を握ってくる。不思議と動揺はしなかった。

「花陽？」

どこからか花陽を呼ぶ声が聞こえる。よく通る、ハキハキした声音だ。

「え？ま、真姫ちゃん？」

掴まれた左手首越しに、花陽の動揺が伝わってくる。その目の向く方へ、視線を辿ると……

「その人は……誰？」

何とμ、sのメンバー、西木野真姫がいた。

テイタム・オニール

まさかの遭遇。

そんな使い古されたフレーズがびつたりの場合だった。現に3人共、上手く現実が飲み込めていないようにも思える。ていうか、この子さつきから睨んできてるようにでっかい。

「ま、真姫ちゃん！偶然だね〜！」

意外な事に、花陽が最初に口を開く。

「まさか千葉で出会えるなんて！さすがμ，s！やつぱりμ，sは最高だね！」

おい、キャラ変わってんぞ。花陽の落ち着かない様子に、西木野真姫は逆に落ち着きを取り戻し、ジト目になる。

その目が射抜いているのは俺の左手首と、それを掴む花陽の小さな白い手だ。

「ヨキニハカラエ〜」

何やら訳のわからない捨て台詞をはいた花陽は、俺の手を引き、この場から離脱しようとする。……おい、色々と無理あんぞ。だが、ここは俺も花陽に便乗しよう。ヨキニハカラエ〜。

もちろん、そうは問屋が卸さない。

「待ちなさい」

案の定肩を掴まれ、「びゃあ!」と叫び声をあげる。てか何で俺も掴まれてんの? 一緒に叫んじゃったじゃん!

西木野真姫は、俺の叫び声に顔を顰めながら、花陽に向き直る。

「ちよつとお茶していかない?」

「あうう……」

貼りついた笑顔はどっかの誰かを思い出させた。

「なるほどね。付き合っているわけではない、と」

「はい……」

美少女2人は何かと目を引くので（実際通り過ぎる男達は、まず2人をチラ見してテシジョンを上げ、次に俺を見て舌打ちをした）、近くの喫茶店に入った。客もまばらで、居心地は良さそうだった。しかし、西木野真姫から発せられる謎の怒りオーラで、緊張感がハンパない。MAXコーヒーが欲しいところだ。

いやまあ、恐れる事は何もない。疚しいことは………

・ほっぺにキスされる

・ファーストキスしかけた

・上半身裸で抱き合う

・他のメンバーの胸をエロい目で見ると

……うん、大丈夫……なはず。

花陽は不安そうな目で西木野真姫を窺っている。その様子を眺めているうちに、一瞬だけ目が合う。何か言わなければならない気がした。

俺のそんな気配を察したのか、偶然か、西木野真姫に改めて向き合うと、彼女は先に言葉を発した。

「まあ、別に彼氏だったとしても、いいと思うけど」

想像していない事を言われ、ぼかんとしている花陽を置いて、西木野真姫はこちらを向く。

「初めまして、花陽と同じμ, sのメンバーの西木野真姫です。μ, sでは作曲も担当してるわ」

「比企谷八幡だ。この近辺の高校に通っている」

「あ、もしかして総武高校？」

「あ、ああ……」

「じゃあ、結構頭いいんですね」

「理系は捨ててるがな……」

「雪ノ下さんって同じ学年にいますよね」

口に含まんだコーヒーを盛大に吹き出す。

「は、八幡さん！大丈夫ですか！」

花陽がハンカチで口元を拭こうとするが、やんわりと断り、おしぼりで乱暴に拭う。

「雪ノ下の知り合いか？」

「あ、いえ、小さい頃に何度か会っただけで……親同士は割と仲が良くて……私は今日、ついて来ただけなんです……」

自分から話題を振った西木野は、明らかに何かありそうな口ぶりだったので、話を変え、学校での花陽を余す事なく聞く事にした。

「そういうや雪ノ下の奴、μ, sの曲を割と聴いてたな……」

ちなみにこの後、花陽が早弁している事や、朝御飯に時間をかけすぎて遅刻した事など、レアな話を沢山聞けました。

「じゃあ、私はそろそろ行くわ。お邪魔して悪かったわね」

喫茶店を出ると、西木野は颯爽とどこかへ行こうとする……が、しかし、花陽が引き止めた。

「あの、真姫ちゃん！いい、今から比企谷さんのお宅で誕生日パーティーやるんだけど、こ、来ない!? 凜ちゃんもいるよ！」

「え? でも……」

西木野の視線が俺を向く。花陽の子犬のような、縋る視線を視界の端に感じた。「別に構わんで。そつちが良けりゃ」

俺の言葉に西木野は僅かに逡巡して、笑顔を向けた。

「じゃあ、お二人が羽目を外しすぎないように、見張っておこうかしら」

野生のボルガ

西木野が親に電話している間、俺も小町に電話しておく事にした。

「え〜っ!? 本当に!? 西木野真姫ちゃんがウチに来るの!? ウソじゃないよね!」

「俺がお前に嘘ついた事があるか?」

「は? 今さら? 何なら花陽ちゃんに話すよ」

「ごめんなさいすいません俺が悪かったです」

藪蛇とはこの事である。

そっかー、そんなに小町に嘘ついてたかー。小町には常に誠実なはずだったが。いやでも、小町に対しては嘘をつくときも全力である。これは一周回って誠意があるのではなからうか。

「バカな事考えなくていいから。じゃあ、車に気をつけて、2人をちゃんとウチまで連れて来るんだよ。もう戸塚さん達も来てるからね」

「戸塚か戸塚がいるのか。戸塚がいるんだよな。そうか早く帰る」

「……はあ、はいはい気をつけてね。色々」

ブツツと通話が途切れる。

「……むう」

「な、何か？」

「八幡さん……戸塚先輩の事になると、なんかいやらしいです」

俺は雷が落ちたような衝撃を全身に受けた。バ、バカな……お、俺が戸塚をい、いやらしい目で見ているだと？

思わず膝を着いてしまった。

「す、すいません！私……つい気になって！八幡さん、戸塚先輩が好きなんじゃないかって……」

花陽が顔を赤らめながら言う。だが戸塚は男だ。……残念ながら。

その頭をぼんぼんと撫でるように叩く。

「そういうんじゃないよ。あいつはあれだ。小町と同じようなポジションだ」

「ど、どういう意味ですか？」

「天使」

「……………」

花陽が優しく足を踏んでくる。もちろん全然痛くない。だがおかしい。事実を告げただけなのに。

「ねえ、お二人さん。いつまでいちやつく気？」

電話を終えたらしい西木野が、呆れ顔ですぐ後ろにいた。

「ま、真姫ちゃん！その……い、いちやつくなんて……そ、そ、そんな……」

「ふふつ、まあいいわ。花陽の新しい一面が見れた事だし。次の曲の参考にさせてもらうわね」

「あうう……」

手をわたわたさせる花陽に、西木野は優しく微笑む。ああ、そうか。こういう動作が様になってるところが、我が奉仕部部长に似てるな。………毒舌まで似なくてよかつた。

「比企谷先輩、どうかしました？」

「いや、何でもない。行こうぜ」

テンパっている花陽を落ち着かせ、少し傾いた夏の陽射しを浴びながら、天使達の待つ我が家へと向かった。

花陽について語り合いながら歩いていると、あつという間に我が家に辿り着いた。玄関のドアを開けると、小町がとととと出迎えにやって来る。

「皆さん、おつかえり〜！」

「おう、ただいま」

「た、ただいま、小町ちゃん！」

「そんな遠慮しながら言わなくてもいいですよ！いずれは花陽ちゃんもこの家に……」

「こ、小町ちゃん！」

あんまりからかかってやるなよ……。俺にまで飛び火するんだから。……………比企谷………はな………ケプコンケプコン。

「お邪魔します。初めまして、西木野真姫です」

「初めまして！比企谷小町です！わく、本物の西木野真姫ちゃんだ♪実物は映像よりさらにキレイですね！」

「あ、ありがとうございます……」

小町の褒め言葉に西木野は俯く。割と照れ屋のようだ。

「これケーキ。西木野から」

道中に買ってくれたケーキを差し出す。ありがたやありがたや。これでケーキ代浮いたぜ。なんかゲスいな。

「ありがとうございます！さ、上がってください」

リビングには、料理を並べている戸塚と星空がいた。

「あ、八幡！お邪魔してます！」

「3人共、おかえりにや！」

「待ちくたびれたぞ八幡！」

「おお、ありがとな2人共。飲み物買ってきたぞ。あと西木野がケーキ買ってくれたから」

「ありがとう！わあ、西木野真姫さんだ！初めまして、戸塚彩加です！」

「……………材木座義輝と申す」

「初めまして、西木野真姫です。今日はよろしく」

戸塚と西木野が自己紹介し合うのを横目に、飲み物の準備を始めた。さすがに全部やってもらおうと申し訳なさすぎて居心地が悪い。

「えーと、俺、小町、花陽、戸塚、星空、西木野で6人か」

「お兄ちゃん……………現実を見よう？」

「ふう……………」

何故……………貴様がここにいます。材木座ア————！！

りありてい

日もだいぶ傾き、空は朱く染まり始めていた。街も少しずつ彩りを失い、暗く統一されていく。

そんな中、我が家のリビングは日頃見かける事のない華やかな彩りに染まっていた。「まさか、6人なんて大人数で俺の誕生日パーティーをやる日が来るとは……」

うん、照れくさい。まあ、こう、あれだ。意外と嬉しいものだ。テーブルに並べられたフライドチキンやおにぎりやピザなどのパーティー料理の匂いがいい感じに空腹を刺激してくる。花陽……おにぎり見すぎ。現在、テーブルを俺、花陽、小町、星空、西木野、戸塚の順に、時計回りに囲んでいた。

「いや待て八幡。お前さつき俺に気づいてたじゃん。何で話数変わったらリセットされてんの」

材……何とか君が素に戻って何か言ってる。

「はあ……お前いつからいたんだよ。何でいるんだよ。つーか誰だよ」

俺の質問に対し、材木座とやらは「バーツハツハツハー」と高笑いをする。うぜえ。小町と花陽と戸塚は苦笑して、星空と西木野は珍しいものを見る目を向けている。動物が

動物を捕食するグロテスクなシーンを見るような感じだろうか。

「駅で戸塚氏と偶然出会ってな。聞けば貴様がこの世に生を「ああ、もういいぞ。わかったから」

「八幡、ごめんね。連絡しようとしたんだけど、材木座君がサプライズも大事だって言うから……」

材木座はドヤ顔をしている。ああ、サプライズサプライズ。色んな意味で。嬉しいものばかりじゃねーもんな。

俺と材木座を静めるように、小町が手を叩く。

「お兄ちゃん！ロウソクに火をつけたよ〜！」

「お、おう……」

小町の言葉を合図に、戸塚が部屋の明かりを消してくるた。まだ日が沈みきっていないので、真っ暗にはならないが、これはこれで、少しノスタルジックない雰囲気を作られている。

「じゃあお兄ちゃんに「フーツ!!」

ロウソクの火が一瞬にして消え、部屋はさらに暗くなり、誰の表情も見えなくなる。

俺は感慨深い気持ちで、部屋の明かりをつけた。

「……どうした？お前ら」

皆が一様に呆れたような苦笑を浮かべている。こう……空気読めよ的な。

「はあ、ゴミいちゃんはこれだから……」

「あはは……」

「先輩何やってるにやー！」

「八幡……」

「さすがの我も引くぞ……」

「意外と空気読めないのね」

はい、総スカン頂きましたー!!いや、恥ずかしいじゃんか!慣れてなさ過ぎて!

「いや、すまん。なんか照れくさくてな……」

「まあ、そんな捻デレもお兄ちゃんらしいから許してあげる!あ、今の小町的にポイント

高い〜♪」

「あ、ああ」

「八幡さん」

花陽がいつもより、確かな輪郭を持った声音で言う。

「お誕生日おめでとうございませす!」

それを合図に皆が騒がしく、俺におめでとうを言ってくる。タイミングの合っていない合唱のような騒々しさはあるが、決して不協和音ではなかった。

「……ありがとな」

自分が思うより、小さなポリウムに絞られた声だが、それでも全員がその音をひろい、小さく笑ってくれた。

桃

「それではお待ちかね、プレゼントタ〜〜イム!! どんどんぱふぱふ〜」

小町のあざと可愛い号令に、星空が指笛を鳴らす。仲良すぎて、何なら星空をこのまま妹として迎えていいレベル。別に疚しい気持ちなどカケラもない。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「じゃ、小町からね! はい!」

プレゼント用に包装された箱を丁寧に開ける。

「……目覚まし時計?」

もう持つてるはずだが……スマートフォンという名の暇つぶし機能付き目覚まし時計を。いや、今年度は割と連絡手段として活動しているが。

「お兄ちゃん、携帯のアラームじゃ中々起きないからね。このままじゃ遅刻だけで留年しちゃうでしょ」

「ぐっ……」

何も言い返せない。

「はあく、誰かモーニングコールしてくれる優しい女の子はい・な・い・か・な!」

戸塚か。戸塚だろ。戸塚だよな。

「は、八幡……」

声に出ていたのか、戸塚が恥ずかしそうに俯いている。

「むう……」

「はあ……これだからゴミいちちゃんは……」

花陽と小町から軽蔑の眼差しを向けられていた。

「いやほら、小町は置いとして、花陽はモーニングコール向きじゃないだろ？」

「確かに……」

μ, sのメンバー2人が同意する。

「かよちゃんは割とねぼすけにや」

「あうう……」

「しかも朝御飯が時間かかりすぎて遅刻した事もあるし……」

「ぴゃあ……」

花陽が体を丸め、小さくなっていく。小町や戸塚もクスクス笑っていた。確かに微笑ましい。俺が遅刻しても、クラスの奴らは気づかないし、平塚先生の鉄拳は喰らうしで散々だが。ステルスヒッキーをもっと徹底せねば。

「まあ、あれだ。花陽の声は子守歌向きだし……」

誰に言うでもなく、ぼそつと呟いた。保育士になった花陽が、子供達に子守歌を歌っているところを想像すると、何だかほっこりする。

「……………」

花陽がこちらを見ている気がしたが、あえてスルーした。

「じゃあ、次は凜にゃー!」

凜は押しつけるように、紙袋を渡してきた。その紙袋にはスポーツ用具のメーカーのロゴが印刷されている。

「これは……………ジャージ……………」

「先輩は見るからに運動不足だから、これで着て、しつかり走るにゃー!!」

うん、パジャマ代わりに使えそうだ。こんな暑い時期に外走ったら、脱水症状の危険があるしな。

「ありがとな。大事に使う」

「うわ、運動する気なさそう……………」

「大事に使うにゃ」

「語尾を変えてもダメにゃー!!」

小町と星空をあしらっていると、戸塚がポンポンと肩を叩いてくる。

「八幡。僕からはこれ」

「こ、これは……」

テニスのラケットだ。

「部活に入っただけとは言わないけど……休みの日に八幡とテニスがしたいな、と思って……」

「あ、ああ……」

「星空さんからジャージももらったし、ちょうどいいよね」

「にや!？」

突然名前を出されて星空はあたふたする。まあ、戸塚は忘れがちになるが、一部の女子から王子様と言われているしな。こりや俺の天使と俺の義妹が……。

「お兄ちゃん、ニヤニヤしないで。涎拭いて」

「八幡さん……」

「さすがに気持ち悪いわね……」

「八幡よ。自重せよ」

ドン引かれていた。西木野から初気持ち悪いを頂くくらいに……ただ材木座、お前には言われたくねえ。

「つーか、何か悪いな。それと西木野も、改めてケーキありがとな」

「……どういたしまして」

西木野は照れながら呟く。初対面の俺の誕生日に、わざわざケーキを買ってくれるコイツは、かなりいい奴なんだろう。

「八幡よ！安心せよ！われも貴様にこれをやろう!!」

「材木座……」

俺はこの男を誤解していたようだ。面白くない小説読ませるし、迷惑かけるし、イタいいし、イタいいし、イタいいし、まあ、とにかくウザいだけの奴だと思つてた。だが今日、その認識を改める必要があるようだ。

ほら見ろよ。この紙袋。ずっしり重いぜ。入つてんのかな。ワクワク。

「我の新作小説だ!」

「……………」

うん、知つてた。もうムカつきもしない。

ほら見ろよ。この場の空気、ずっしり重いぜ。

「八幡よ！礼などいらん」

言わねえよ。

「へえ、材木座さんって小説書くのね」

意外と西木野が食いついた。

「左様！我は中学なから一途にライトノベル作家を目指しておる!」

この前、ゲームのシナリオライターに鞍替えするトコだったじゃねえか。

「自分の夢を追いかけるって、やっぱいいいわね」

西木野がどこか寂しげな顔を見せながら言う。だがそれも一瞬の事で、すぐにクールな雰囲気に戻ってきた。

「……………可憐だ」

俺の隣で材木座が呟く。いや、いらねえからいらねえからいらねえから！お前のそのフラグ今いらねえから！

何かを察したのか、小町と戸塚も苦笑している。くそっ！誰かイマジンプレイカー持つてこい。幻想をぶっ壊してやる！

「じゃ、最後は花陽ちゃんね！」

「ほら、かよちゃん！」

2人に促され、花陽が前に出てくる。そしてそのままこちらへ飛び込んできた。タツクルである。

淡い香りが弾けると同時にダメージを受けた。

「ぴゃあっ！す、すいません！」

「だ、大丈夫だ。落ち着け」

「は、はい！すーっ、はーっ、すーっ、はーっ」

深呼吸を数回繰り返し、「よしっ」と気合いをいれた花陽は、俺の目の前に紙切れを差し出した。

「デステイニールランドのチケットか」

日本最大級のテーマパークのチケットである。さらに花陽は顔を最大限に紅潮させ、意を決したように、俺に衝撃的な事を言った。

「こ、こ、今度、あ、あなたと、デ、デートしてあげても、い、いいんだからね！」

ハニーハニー

静まり返る室内。誰もが声を発さない、音を立てない部屋に、耳が疼くほどの沈黙が訪れた。

だが一人それを破る勇者がいた。

「ほ、ほら、な、な、何か言ってみなさいよ。この私が……うう……デートしてあげるって、言ってるん……だから……」

沈黙を破ったのは、それを作った花陽自身だった。

体をふるふると震わせ、目は潤み、紅潮した顔は本人の羞恥の程を表している。明らかに無理してツンデレ口調を使っているのだが、その理由はともかく、花陽以外の全員の心は一つだ。

『可愛い!!』

星空をはじめとした女性陣はほっこりとした笑顔で、花陽の初ツンデレを見守っていた。確かに可愛い。あ、いけね。材木座に目潰ししとかないと。「ぐああー！」
いやもう可愛い。そして可愛い。だがいつもと違う事に変わりはない。

「……花陽、悩みがあるなら言ってくれていい」

「かよちん、凜は何があってもかよちんの親友だからね!!」
「もちろん私もですよ!」

「わ、私だつて……! ほら、何かあったならばやく言いなさいよ!」

「無理にとは言わないけど……誰かに話すだけでも気が楽になることもあるよ」

「ぐああ……目が、目があ!!」

花陽は皆の態度に戸惑いながら、何かに思い当たり、わたわた手を振り、弁解をする。
「ち、違います違います! そういう事ではなく」

少し落ち着いてから、花陽は鞆から一冊の本を取り出す。

「こ、これは……」

その本に注がれた全員の視線が胡散臭いものを見る目になっていく。

『ツンデレ塾　〜これであの人もあなたの虜〜』

頭悪そうなタイトルの下に、材木座が好きそうな萌キャラが書かれている。いや、俺もこういうイラスト嫌いじゃないけど。むしろ好きだけど。

そのキャラクター達の共通点は……つり目くらいか。あとは全員黒髪ロングだったり、ポニーテールだったり、ツインテールだったり。

うわ……。

こんなもんどこで売ってるんだよ。本屋か。秋葉原の。

「あ、あの、実はこれ、私が買ったんじゃないで、希ちゃんが……」

「希が？」

「何でにや？」

「昨日ね……」

『かよちくん』ワシツ!!

『ぴやあつ!!』

『おお、かよちん最近また……』

『や、やめて〜!言わないで〜!』

『こりや、ウチやえりちが抜かれる日も近いやろな』

『あうう……』

『それに夏休みに入ってから妙に色気が……』

『そ、そうかな……』

『これは……恋やな!』

『え、あ、う……』

『否定はしないんやな』

『……』

『可愛いなあ〜♪そんなかよちんにはこれを上げよう!』

『こ、これは……』

『これを使えば、かよちんの好きな目が濁った男の子もきつと振り向いてくれるはずや』

♪

『え？今、何て』

『さ、練習練習！』

『の、希ちゃ〜ん！待って〜！』

『全く……希つたら……』

『何考えてるかわかんないにや〜』

西木野も星空も呆れていた。そうか、東條さんか……何で俺を知ってる？いやそれよりあの胸の大きな……しかも花陽が東條さんや綾瀬さんを超えるだど？まあ、アリと思います！

『それより花陽……あなた、そこまで説明したら』

『バレバレにや……』

『え？………あ！』

花陽は部屋の奥へダツシユして、正座して何やらブツブツ呟いている。

……正直、色々と察してしまう。ここで花陽の好きな人って誰？なんて聞く程、鈍感でもない。むしろ敏感になってしまっている。人の悪意を探ろうとしすぎて……。だ

からこそ、溶け合うように流れ込んでくる花陽の優しさが居心地いいのかもしれない。出会ってからまだ5ヶ月くらいだが、俺が思うよりずっと、花陽との些細な時間の共有が、非日常から日常へと変化してきている。

「花陽」

部屋の隅に呼びかける。今は他の誰も気にならない。

「今、夏休み中で暑いし……混んでるから……」

ビクツとした花陽の顔がこちらに向く。

「……………もう少し、涼しくなったら……一緒に行くか。このチケット、今年まで有効だし」

俺の言い方が悪かったのか、しばらく言葉の意味が飲み込めていないような表情だったが、次第に綻んでいった。

「……………はいー!」

立ち上がった花陽は、主人が家に帰って来たときの子犬みたいに、たたたと駆け寄ってきた。その目の輝きは、夏休みが終わってから、この騒がしくも温かな日々が続くのを予感させた。

「はっ……………じゃ、じゃあ、付き合っただけで感謝しなさいよね!」

「いや、それはもういいから」

「花陽ちゃん……やつぱり可愛い！」

「でも、このテンションは真姫ちゃんにこちゃんで十分にや」

「ちよ、ちよつと！私あんなんじゃないわよ！しかもにこちゃんと一緒なんて……」

ちよんちよんと肩をつつかれる。戸塚が耳元に囁いてきた。

「八幡、頑張つてね」

「……ああ。材木座、一人でケーキ食べてんじゃねえよ」

「わふっ」

何それ。可愛くねえ。

自分の歩いている場所を確認しながら、自分の進む道を恐る恐る踏み出しながら、これまででの人生でもっとも賑やかな誕生日は過ぎ、また一つ思い出を重ねた。

夏が終わる

夏休み最終日。

明日からの学校生活を思い浮かべ、暗澹たる気持ちになりながらも、儂い現実逃避の為に読書をしていると、電話が鳴り出した。

誰からか確認し、すぐに通話ボタンを押す。

「花陽か、どーした？」

「あ、夜分遅くにすいません。その……夏休み最終日に八幡さんは、何をしてるのかな、と思つて……」

「あー、何だか明日が学校だなんて信じられなくてな。本の世界に逃げていたところだ」

「あはは……らしいですね」

「そっちは何してたんだ？」

「あ、こっちはですね、午前中から練習してたんですけど、途中から皆、ラブライブの結果発表が気になりました……」

「すごいや今日だったな。で、どこが優勝したんだ？」

「もちろん、A—R—I—S—E—です！」

「ああ、そっか」

「はい！他のアイドル達も本当にすばらしかったんですけど、A—R—I—S—Eは頭一つ抜きん出てました！」

「……まあ、俺みたいな素人にでもなんか違うって思わせるくらいだしな。そういや、あのセンターの人元気かな？」

「綺羅ツバサさんですよ！忘れちゃったんですか？」

「わ、忘れるわけないだろ………忘れたっていう方が忘れてるんだよ！」

「それは絶対に違うと思います………」

「まあ、あれだ。少し気になっただけだ」

「………そうですか」

「へ、変な意味ではなく」

「そうですか！」

「ああ」

「でも、何となくですけど、八幡さんって年上の人から好かれそうですよね。こう背が高くて、格好良くて、頭が良くて、白衣の似合いそうな……」

「やめて本当にやめて頼むからやめてあり得ないあり得ない」

「は、はい………どうかしたんですか？」

「いや、何でもない。星空や西木野は元気か？」

「はい、相変わらずですよ」

「じゃ、じゃあ、綾瀬さんや東條さんは……」

「八幡さん？」

「あ、UFO」

「八幡さん！ごまかし方が雑すぎます！」

「い、いや、その……花陽のチームメイトなんだから、体調を気にするのは当然だろ？花陽にとつて大事な人は俺にとつても大事な人だ。疚しい気持ちなど微塵もない。な
いったらない」

「一瞬いい話に聞こえましたけど、八幡さんが気にしているのは体調ではなくカラダだ
と思つたので、やっぱいい話にするのは無理です。ごめんなさい」

「な、なんか違うキャラになつてないか……」

「き、気のせいです！でも八幡さんつて絵里ちゃんや希ちゃんは気にするのに、同じ3年
生のにこちゃんの事はあまり聞いてこないですよね？」

「まあ、それは、あれだ。俺から言わせんな」

「むう……」

「2年生組は元気か？」

「ついでに聞いてる気しありません……」

「まあ、それはさておき、ウチから割と近い場所に新しい定食屋ができていてな……」

「ご、ごまかそうとしてみませんか？でも、そのお店には行きたいです！」

「新曲のPV撮り終えたら……まあ奢らない事もない……」

「は、はいっ、じゃあ明日からも頑張ります！」

「おう」

「じゃあ、もう寝ますね。おやすみなさい」

「おやすみ」

……俺も寝るか。

あ、もう9月になってる。

俺は部屋の明かりを消し、目を閉じ、夏休みの出来事を一から思い返した。少しでも夏休みを引き伸ばすためのささやかな抵抗だが、案外悪くなかった。

コメント

まだまだ暑い日が続きそうだが、朝や夜にふと感じる涼しさが、秋の訪れを感じさせる9月。俺は新学期早々鬱な気分になっていた。

文化祭実行委員。

今の俺にはそんなふざけた肩書きが与えられている。ぶっちゃけやりたくない。いや、これについてはもう流れに身を任せるしかない。はあ……。

「八幡」

天使のような柔らかい声音が、鬱で固まった思考回路をほぐしていく。声の主は言うまでもなく戸塚だ。

「本当によく寝てたね。夜眠れなかったの?」

「ん? ああ、そういうんじゃないかな……」

「もしかして小泉さんと遅くまで電話してたとか?」

耳元で可愛らしく囁いてくる。そして、その言葉にも必要以上にドキリとしてしまう。

「い、いや違ってな。ほら、花陽もラブライブ決まって忙しくなったし……」

「ああ、そうだ！僕のところにも星空さんからメールがきたよ。すごく嬉しそうだっ
！」

「わ、我のところには何も……」

「いきなり出てくん。つーか、お前いつからいたんだよ。さつさと自分のクラスに帰
れ」

この前の誕生日パーティーの時、ちやつかり西木野と連絡先を交換していたのが解せ
ない。このまま材木座と西木野の青春ラブコメが始まってしまふのだろうか。いや、考
えるのはよそう。人間知らない方が幸せな事がある。沢山ある。

ひとまず材木座をスルーし、話を続ける。

「まあ、お前も知ってるかもしれないが、高坂さんが最初は渋ったそうだが、最終的には一
致団結してラブライブを目指す事にしたそうだ」

ちなみに今日眠いのは、その話を花陽から延々と聞かされていたからだ。話はどんど
ん発展していき、アイドル論からお米論に話が変わったところで、お互いに話が変わっ
てることに気づいた。斜め上に巧みな会話である。

「でも、また活動始まってよかったね。あつ、あと4 sの新曲の衣装可愛いよね！」

「ああ」

スマホのフォルダを開き、確認する。今は歌う場所を探しているらしいが、このメン

バー、この衣装ならどこで歌おうが、客は集まりそうだ。

「ふむ……可憐だ」

文字列だけ見れば、武士道精神のある硬派な男の発言に思える。だが材木座だ。

「ヒツキー、またスクールアイドルの写真見てる……」

「おわー！」

気がつけば、由比ヶ浜が背後にいた。いつからここは忍者学校になったつてばよ！

「どんだけ好きなの？ 部屋でもたまに見てるし……」

「俺は頑張ってる人間を応援するのが好きなんだよ」

「うわ………21世紀最大の嘘聞いちやった」

言いながら由比ヶ浜はげんなりとした顔をしている。言い過ぎだろ。俺は頑張ってる人間は賞賛するし、敬意も払う。ただそれを他人に押しつけてくる奴が嫌いなのだ。

「でも、穂乃果ちゃん可愛いよね〜」

「まあ、お前と似てるかもな」

「え？ そ、そうかな……えへへ」

花陽の話を聞く限り、人の話を聞かないらしいし、成績悪いらしいし。これで高坂さんが料理出来なかつたら由比ヶ浜の素質がある。どんな素質だよ。

「あ、そういえばね、ヒツキー……夏休みにプール行った？」
「そんな昔の事覚えてねーよ」

決まった。今なら『君の瞳に乾杯』を言えるくらい、ハンフリー・ボガートでできる。
ハードボイルドすぎる。

そして、由比ヶ浜、戸塚、材木座のドン引き笑いに晒されている内にチャイムが鳴り、皆それぞれの席へ戻っていった。

「ふあ、ふあ、ふあーくしよん!!!」

「だ、大丈夫？穂乃果ちゃん」

「うん大丈夫！花陽ちゃん、はやく行こう！」

「あ、うん！」

ハイファイ・ローファイ

2学期が始まり、ラブライブを目指す私達は、まだまだ暑さが残る空の下、今日もしつかりと練習に励んでいる。

5分の休憩時間に入り、水分補給をしていると、絵里ちゃんが優しい笑みと共に、こつちにやってきた。

「花陽、最近またダンスが上手くなったわね」

「そ、そうかな。えへへ」

絵里ちゃんから褒められて、頬が熱くなるのを感じる。家でもじっくりストレッチしたり、凜ちゃんと一緒にランニングをしたり、何度も映像を見直して練習した効果が出てきたのかな。

「そうやなあ、凜ちゃんのようなキレと違って、何かこう……女の色気というか」

「そ、そんなハレンチな！」

「花陽ちゃん！セクシャルハラスメントだよ！」

「セクシーダイナマイトじゃないかな……あはは」

ど、どうしよう……ちよつと話が変わってきている気がします。

「アンタ達、何言ってるのよ。セクシーなら3年生がいるじゃないの」
「絵里ちゃんと希ちゃんにゃ！」

「何で私だけ外されてんのよ！」

「い、痛い！痛いにゃ〜！」

凜ちやんがにこちゃんにほっぺをつねられている。ああ、痛そう……。

「何やってんだか……」

私の肩に手を置きながら、真姫ちゃんが溜息をつく。

今の心情を察してくれているかのような気遣いが伝わってきた。

八幡さんは今頃文化祭の準備かな。

面倒そうにしていたけれど、根は真面目なあの人は、何だかんだ言いながらもやるんだらうな、と思う。

「でも、確かにそうですね。内面から出てくる艶やかさというか……」

知らない内に皆の視線が私に集中していた。

「ま、まさか……花陽、か、か、彼氏でもできた？」

絵里ちゃんが自分から言い出して照れてる。可愛い。でも、迫ってくるのは怖い……。

「な、何言ってるのよ！私達はアイドルよ!?か、彼氏なんて……」

「花陽……ハレンチです！」

「花陽ちゃん、本当なの!？」

「教えて欲しいなあ」

「え? え? えつと……その……」

「ずずずいつとみんなが迫ってくる。」

「ダ、ダ、ダレカタスケテエ〜!」

「もう、皆ひどいじゃ〜!」

「そうよ、花陽が逃げちゃったじゃない」

「ご、ごめん……」

「私とした事が……」

「もうつ、かよちゃんと比企谷先輩はまだ付き合っていないじゃ!」

「え? 凜……今、何て?」

「はっ! いや、かよちゃんをいじめるなんて、にこちゃんはヒキガエルみたいな先輩にや〜!」

「なあんですつて〜!!」

「い、痛い、痛いじゃ〜!」

「ふう……何やってんのよ、凜」

「そうやなあ〜」

「……希、あなた、もしかして何か知ってるの？」

「そりや、あんなに堂々とアキバでデートしてたらバレるよ」

「あの二人……」

「まあ、悪い事やないんやし、かよちん自身の口からいい報告が聞けたら一番なんやけど……」

「あの二人はまだ付き合いそうもないわよ。お互いに好きなくせに、どうしようもないくらい奥手なもの」

「ふふつ、確かにどちらもぎこちなさが可愛かったよ♪あ〜、ウチも会ってみたいなく。かよちんの愛しの彼氏に♪」

「まあ、程々にね。私もこの前初めて知ったんだけど、あの子、割とヤキモチ妬きだから」
その後、花陽はアルパカ小屋でアルパカと話していると皆に見つかりました。

ハネモノ

今、私達は秋葉原に来ています。学校内で、P Vを撮ろうと思ったけれど、めぼしい場所は全て使ってしまったので、目新しさを出すために学校の外へ出てみました。ただ、秋葉原は……

「A—R—I—S—Eのお膝元なんやねえ……」

希ちゃんの事実確認に、皆一様に溜息をつく。さすがにここでやるのは色々とプレッシャーがある。でも、ここでライブを成功させたら、インパクトありそうだなあ。

夕暮れの秋葉原の人波を眺めながら、そんな事を考えといると、残暑を吹き飛ばすような爽やかな風が通り過ぎた。

「穂乃果ちゃん!?!」

「あれ、ツバサじゃない?!」

穂乃果ちゃんが誰かに手を引かれている。その手の先には、春に出会ったあの人がいる。た。

綺羅ツバサだ。その凜としたオーラを惜しみなく振りまきながら駆けていく彼女は、確かにこちらを見た。

八幡さんを知らない5人のメンバーが固まっていた。

再び部室に私達はいた。というか私が皆に連れて行かれた形になります。

「花陽ちゃん、本当なの？」

「いえ、彼氏ではなく……」

穂乃果ちゃんの質問に俯く。あの後、その場の空気を察したツバサちゃんが、その話題を断ち切り、次の撮影にUTX学園の屋上ステージ使用を提案してくれた。割と焦っていたのは内緒です。もちろん穂乃果ちゃんは快諾して、私達の歌う場所が無事に決まりました。

「それより、凜も真姫も……希も知ってたのね？」

「あはは……」

「まあ……私が知ったのは最近だけど」

「黙ってて、ごめんな。でも、花陽ちゃんが自分から言うのが一番やから」

「わ、私達はアイドルなのよ！れ、恋愛なんて……」

「だ、だから………彼氏じゃ………」

は、八幡さんは、か、彼氏じゃないですよ？………まだ。いや、でも………八幡さんがどう考えているのかは、まだわからないし………それでも私は………。

「花陽ちゃん、照れてる」

「そうよ！何？そのぼくつとした表情」

「あ、いやこれは……」

「花陽、あなた、本当に……」

「え？いや、だから、その……」

「だから、花陽と比企谷さんはまだ付き合っていないわよ」

真姫ちゃんが割って入ってくれる。

「そうにや、比企谷先輩が中々、男を見せないにや！この前なんてプールで抱き合っ

……」

「り、凜ちゃん!!」

慌てて口を塞ぐ。さ、さすがにその出来事は今でも恥ずかしいです。

「ひ、人前で抱き合うなど……ハ、ハレンチすぎます!」

「ウ、ウチもそれは知らんやった」

「私も………何でくっついてないのかしら」

「ア、ア、アンタ……そ、そんな事まで……」

「ハラショー……花陽って、意外と大胆なのね」

皆が頬を染めながら（一番真つ赤なのは私ですが）、それぞれにリアクションをとって

いると、突然穂乃果ちゃんが意を決したように立ち上がった。

「皆、大事なことを忘れてるよ!!」

皆の視線を集めながら、穂乃果ちゃんが私に手を差し伸べながら告げる。

「どんな人なの!?!写真ある!?!」

穂乃果ちゃんの発言後、八幡さんを知らないメンバーの視線は、当たり前前だけど、恋愛事に興味津津々な、普通の女子高生らしいものだった。

「確かに。花陽の想い人ともなれば、さぞかし立派な方なんでしょう。是非見てみたいですね」

「私も興味あるなあ〜♪お願い♪」

「アイドル研究部部长としてチェックしなければいけないわね!」

「わ、わ、私も興味あるわね。生徒会長として」

「どっちも関係ないやん。まあ、ウチも遠目に見ただけやからな。もっとはつきり見たいなあ♪」

ど、どうしよう。八幡さん……。

「花陽、見せてあげたら? 皆なら大丈夫よ」

「比企谷先輩も写真見せたくらいで怒らないにや〜」

「……………うん」

私はスマートフォンを操作して、八幡さんの写真を表示した。

みなと

私はこの前の誕生日パーティーの時に、撮らせてもらった写真を皆に見せた。写真は苦手らしく、笑顔は見せてくれなかったが、いい表情だと思う。

「……………」

1年生を除く皆が、画面に表示された八幡さんをじつと凝視している。何だろう、何と言っているのかわからない複雑な気分です……。

「……目に澱みを感じます」

「ぱつと見は、まあまあみただけで目が腐ってるわね」

「ふ、2人共、失礼だよ！」

「そうだよ！人間見た目じゃないよ！目が汚れてるくらいじゃ、性格は判断できないよ！」

ストレートな海未ちゃん、にこちゃんに、ことりちゃん、穂乃果ちゃんが反論する。でも穂乃果ちゃん、あんまりフォローになってないよ……。

「まあ、目は濁ってるけど、優しそうではあったよ。かよちゃんと歩いてた時は」

「いえ、私が気になったのは、一体どれだけの修羅場をくぐり抜けたら、このような目に

なるのかと……」

そういうえば、私も初めて八幡さんと出会った時は、ずっと目を見てたなあ。あの哀し
そうで、どこか優しい目を……。

「花陽、彼は何か部活はやっているのですか？」

「はい、奉仕部に……」

「奉仕部？」

私は八幡さんから聞いた奉仕部の内容と、入る経緯を説明した。

「中々穿った物の見方をするんやね」

「ただ単に捻くれてるだけじゃん。納得できないわけじゃないけど」

「あはは……」

「結構変わり者なんだね」

「あなたも人の事は言えないでしょう」

ああ、どうしよう。先輩が捻くれた変わり者みたいになってる………事実な気も
しませんが。

いえ、例え流れでこうなったとはいえ、八幡さんを紹介するなら、いいところを紹介
しないと。

「比企谷先輩は多分家庭的にや!」

私が口を開く前に、凜ちゃんが手を挙げて発言する。

でも、八幡さんは家事は小学生6年生レベルって言ってたような……。

「将来の夢は専業主夫って言ってたにや!!」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

私を含め、皆が沈黙する。

凜ちゃん……。

八幡さんの写真が哀愁漂って見える。

「あれ?」

「アンタ、それヒモになる予定って事!?!」

「花陽……その方を連れてきなさい。私が根性を叩き直してあげます」

「ウチがスピリチュアルの力で何とかしてあげるよ」

「は、花陽ちゃん!大変かもしれないけど、ファイトだよ!」

「あはは……そんな駄目な人には見えないけど……」

むう……どうしよう。

「皆、落ち着きなさいよ。さつきから、花陽が喋れてないでしょ?」

真姫ちゃんが視線で私を促す。そうだ。私があるのままを話せばいいんだ。八幡さ

んのいいところを誰よりも沢山知っている私が。

私は深呼吸をして、八幡さんと出会ってからの事を、ゆっくりと噛みしめるように、自分の気持ちを確認するように話した……キスしようとしたところ以外。

「2人共素敵……」

ことりちゃんがうつとりしたように言う。脚色は全くしていない。ただ、ありのまま話しすぎて、少し恥ずかしいです……。

「何か聞いている方が照れちやうね……」

「あの穂乃果ちゃんが!?嘘にや!」

「穂乃果だつて興味くらいあるよ!」

「ほっこりするなあ〜」

「ま、まあ、私ほどじゃないわね!」

「何見栄はつてんのよ」

よかった。悪い印象はなくなったのかな?

「……………」

「海未ちゃん?ど、どうしたの!?何で気絶してるの!」

「海未ちゃん!」

「そーいや、エリチどうしたん？さつきからずっと黙ってるけど」

あれ？絵里ちゃん顔がほんのり赤い。どうしたのかな？

「えっと……まあ、その……格好いいじゃない……」

「「「「「え？」」」」」」

「つくしゆっ!!」

「あら、比企谷君。誰に悪口を言われてるのかしら？」

「何で悪口前提なんだよ」

「悪口以外アテはあるの？」

「……言い返せねえ」

「あなたの好きなμ，sから悪口かしら」

「止めろ。泣くぞ。それよかお前、μ，sの……」

「……何？」

「いや、いい」

ウサギのバイク

日に日に残暑が底をつき、秋が深まっていく頃、総武高校は文化祭を迎えた……うん、帰って寝たい。専業主夫を目指すこの俺が、こんな社畜じみた真似をする羽目になろうとは……。

トラブルもあつたが、何とか開会式を乗り切り、俺は文化祭の様子を写真に収めていた。時折不審人物に向けられるような目を向けられているのは、気のせいだと信じた。信じる者は救われるのだ。

「おっにいちゃん！」

突然誰かに抱きつかれ、爽やかないい香りが弾ける。この匂いは小町か。うん、これはさすがにシスコン拗らせてますね。

「小町、どした？……おう」

振り返ると、小町と星空と……柔らかなく微笑む花陽がそこにいた。

「……来てたのか」

「サプライズです♪」

「にゃー！先輩の通つてる学校大きいにゃー！」

「いや、こつちも悪い。せつかく来てくれたのに悪いな」

「仕方ないか。でもお兄ちゃんが仕事だなんて……小町は嬉しいよ！」

「比企谷先輩フアイトにやー！」

ええい、騒ぐな。お兄ちゃん恥ずかしいだろ。

「じゃあ、八幡さん。これを……………」

花陽がカバンからそこそこ大きな黒い包みを取り出す。

「これは……………」

「お、お弁当です……………」

「……………ありがとな」

「ど、どういたしました……………えつと……………」

「……………」

「……………」

やばい。本気で照れくさい。ある程度のシチュエーションは経験してきたから、もうちよつとやそつとの事では動じないと思っていたが、そうでもないらしい。しかも、ここは学校だ。いつもより人目が……ああ、知らない奴らばかりでした。てへっ！

それでも、美少女3人は目立つので、やはり注目は集まる。さすがに人だかりはできないが、チラ見する奴は多い。

「おい、見ろよ。アイツ……」

「だから何であのぼっちばかり……」

「誰か警察を……」

「隼八こそ至高……」

ヒソヒソ話も聞こえてくる。

おい、2番目の奴。お前、総武高の生徒か。だから俺がぼっちだと知ってたんですか。そうですか。

おい、警察呼ぶな。あと変なカップリング布教すんな。

「まあ、ゆつくり楽しんでくれ。うちのクラスは戸塚が演劇の主役するから見ていけばいい」

「にや!?!と、戸塚先輩にや!?!」

「ああ、聞いてなかったのか?」

おそらく、戸塚が恥ずかしがって黙っていたのだろう。なんて可愛い!……海老名さんの布教活動だけ警戒しておこう。

「凜ちゃん、楽しみだね!」

「終わったら、声かけようよ!」

「にや、にやあ……」

花陽と小町が星空に発破をかけている。程々にしといてやれよ。星空が猫可愛くなってるぞ。

「じゃ、俺は仕事に戻るわ。花陽、弁当ありがとな」

「あ、はい！頑張ってください！」

花陽がぱあつと笑顔になる。思えば、花陽と総武高校で会う機会なんて、これが最初で最後だろう。そう考えると、一緒に回れないのはすごく惜しい気が……………何を柄にもない事を……………。

俺は3人と別れ、仕事に戻った。

「ヒツキー、やつはろー」

教室前に設けられた受付コーナーの席に座っていると、由比ヶ浜が隣に座ってきた。何やらウキウキしている。いや、いつもの事か。

「ヒツキー、お昼食べた？」

「いや、そういやそんな時間か」

もう12時になろうとしている。花陽達は、1番最初の時間帯で見たのか、あれからはまだ1回も遭遇していない。

「何か持ってきたん？」

「ああ」

先程、花陽から受け取った黒い大きめの包みを受け取る。

もらった時はそこまで考えなかったが………人生初の女子からの弁当である。大事な事なので、もう一度言っておく。人生初の女子からの弁当である。男子からはあるのかとか言うな。あるわけねーし、欲しくもねーよ。

「ヒツキー、お弁当なんて珍しいね。自分で作ったとか？」

「いや、まあ、ぼちぼち」

「全く答えになってないし！」

由比ヶ浜の声をスルーし、黒い包みから弁当を取り出すと………ばかでないおにぎりが現れた!!

「ヒツキー、何、そのすごい大きなおにぎり………」

「……俺はMAXコーヒーと同じくらいお米が好きなんだよ」

「初めて聞いたよ！これ、小町ちゃんが作ったの？」

「いや、まあ、ぼちぼち」

「だから答えになってないし！」

こうして片やばかでないおにぎり、片や味の染みていないらしいハニートーストを食べながら、文化祭は折り返し地点を通過していった。

どんどどん

気がつけばもう文化祭の終わりが近づいていた。

「残念だったね。戸塚先輩に声かけられなくて……」

おそらく戸塚先輩に恋をしている幼馴染みの肩に手を置く。劇が終われば少しくらい会えると思ったけど、やはり忙しいのか、その姿を見せる事はなかった。

「まあ仕方ない、かな。演劇楽しかったからよかったにや」

声のトーンはいつもより落ち着いているものの、凜ちゃんは笑顔を見せてくれた。

『星の王子さま』の劇は本当によかった。久しぶりに本を読み直そうかなあ。そういえば近くで誰か鼻血が出てたけど、どうしたんだろう。お友達が外に連れ出してたみたいだけど大丈夫かな？

次はどこへ行くのかなと考えていると、小町ちゃんがパンフレットを読みながら口を開いた。

「お二人さん、体育館でバンド演奏あるから見に行きましょうよー」

「うん、見たいにや——！」

「じゃあ、行こっか」

小町ちゃんが明らかに音ノ木坂の物より大きな体育館を指さす。やっぱり大きな学校だなあ。人も多いし。音ノ木坂学院もこのくらい人が増えればいいなあ。あつ、でもライブの時、緊張しちゃうかも。

「かよちーん、行くよー!」

「あ、うん」

考えている内に、距離が空いた2人の元へ行こうとすると、校舎に向かって走る人がいた。

すぐに誰だかわかった。八幡さんだ。

八幡さんは校舎の中へと入っていった。

「ごめーん、二人共、先に行つててー!」

少しくらいなら話せるかな。せっかくだし。

二人の視線を背中に感じながら、私は校舎内へ駆けだした。

「はあ……やっぱり広いなあ。八幡さん、どこに行つたんだろう」

最上階まで来てしまったが、全然見つからない。あれほど賑わっていた廊下も、もう人がまばらになっているのに。

さすがに教室内まで探すのは気が引ける。もうあきらめて凜ちゃん達の元へ戻ろう

かな。

ゆつくり引き返そうとした時、ガタンと少し大きめの音が聞こえた。音のした方へ目を向けると、バリケードで封鎖されている階段があった。多分、屋上に出る階段だと思ふ。よく見ると、人一人分ぐらい通れそうな隙間があった。

「……………」

私は一人で頷き、その隙間をこつそり通り抜け始めた。

埃っぽい階段を上り、扉に手をかけようとすると、話し声が聞こえてきた。

片方はすぐに八幡さんとわかる。もう片方は女の子のようだ。立ち聞きは悪い事だとはわかっていても、自然と聞き耳を立ててしまう。

「……………」

うつすらと聞こえてくる会話は、明らかに険悪な雰囲気か漂っていた。八幡さんも女の子の方も、お互いに言葉の棘を隠そうともしない。

話の内容は、文化祭に関してだけど、何かあったのだろうか、女の子の方は実行委員の仕事に戻りたくないらしい。

会話が止まった頃に、後ろからドタバタと足音が聞こえた。

私は慌てて物陰に隠れる。

男の人が一人と女の子二人が通り過ぎていった。男の人は、さつき演劇で主演をしていた人だ。三人はドアを開け、屋上に出た。

「……………」

男の人の言葉に、さつきまでピリピリしていた女の子の態度が柔らかくなる。でもそれに合わせ、私は嫌な気持ちになった。何だか、八幡さんの頑張りが踏みにじられている気がした。

女の子はまだ動く気配がない。このまま時間が過ぎてしまいそうだった。でもその時……

「はーあ……」

盛大な溜息。八幡さんのものだ。そこから先の声音と言葉は、信じられないくらいの冷たさを持っていた。

最初は言い返していた女の子も、次第に言葉が出てこなくなる。それでも八幡さんは、手を緩めなかった。

だけど、唐突に遮られる。

衝撃が扉の付近に走る。扉を開けたい衝動に駆られたが、足が竦んで動けない。

「比企谷……少し、黙れよ」

男の人の怒気を孕んだ声。女の子二人が泣いている女の子を気遣う声が出た。

私が動けないでいると、ゆっくり扉が開き、八幡さん以外は、おそらく皆出てきた。女の子三人は、八幡さんの悪口を言いながら、こちらを見ることもなく、階段を降りていった。

男の人は八幡さんに、「君は……どうしてそんなやり方しかできないんだ」とだけ告げていた。そして、私と目が合ったが、特に何も言わずに降りていった。

気持ちが悪くなり、扉の前に立つと、八幡さんの声が聞こえてくる。

「簡単だろ？……誰も傷つけない世界の完成だ」

自嘲気味に呟かれた言葉。

それはどこか空しい響きを伴っていた。

誰も、傷つかない世界？本当に？

……そんな……八幡さんは……八幡さんは……！！

たまらなくなつた私は、感情に任せて勢いよく扉を開けた。

砂漠の花

どこか皮肉めいた独り言を呟き、あと5分くらいぼーつとしていようかと思った瞬間、勢いよく屋上のドアが開いた。

「は、花陽?」

本来ならいるはずのないその姿に、驚きを隠せなかった……それと先程のやりとりが聞かれていたかどうか気がなくなってしまった。

真つ直ぐに俺を見る花陽は唇をきゅつと強めに結んでいた。そして、微かに身体を震わせながらも、普段は穏やかな瞳に強い決意を滲ませていた。

「……………ます」

やがて、微かに動く唇からぼつぼつと声が漏れ聞こえる。

「花陽……………」

「八幡さんが傷ついてるじゃないですか!」

「!」

突然の大声に身体が竦む。花陽の怒鳴り声を聞くのは初めてだった。

いきなり過ぎて、上手い言い訳が出てこない。

「いや、俺は……別に……」

「じゃあ、何で……そんな悲しそうな声をしてるんですか？」

「……………」

「何で……そんな哀しそうな目をしてるんですか？」

「……………」

「誰も傷つかない世界なんて、完成してないじゃないですか……………」

「……………いや、俺はあいつらの輪の中にいない。いつも……一人だから……………」

「……………」

悲しそうに目を伏せた花陽は、静かな足取りで俺の隣へ来て、そつと腰を下ろした。

いつもの甘い香りに、少しずつ心が落ち着いていくのを感じると、花陽は再びこちらを見つめてきた。

「八幡さん」

左手にひんやりとした花陽の小さな手が重なる。指がじんわりと絡んでいった。

「八幡さんは……一人じゃありません」

優しく柔らかい、いつもの微笑みがそこにはあった。そして、その温かさは心の中の凝り固まった何かを、ほぐして溶かしていく。

「私は……八幡さんが悲しそうにしてると、悲しいです」

「……………」

「もちろん、小町ちゃんも、凜ちゃんも、戸塚先輩も、真姫ちゃんも、材木座先輩も……………」

「……………」

「八幡さんのご両親も、私のお母さんだって……………悲しくなるはずです」

「……………」

「だから……………！」

「……………」

「もう、絶対に……………一人ぼっちだなんて言わないでください」

「……………」

「すぐには変わらないかもしれませんが。また、今日みたいな事があるかもしれません」

「……………」

「でも、私、八幡さんの隣にいます」

「……………」

「ちっちゃいし、強くないですけど……………絶対隣にいます」

「……………」

「私じゃ……………だめですか？」

言葉が出てこない。唇が動かない。

何故か視界が滲まないようにするだけで精一杯だった。

だから俺は、返事の代わりに、小さな手を固く握りしめた。

「……ありがとう」

聞こえるか聞こえないかぐらいの眩き。花陽に届いたかはわからないが、彼女はこちらにもたれかかっていた。それに倣い、俺も花陽にもたれかかる。

甘い香りに包まれながら、先日の文化祭スローガン決めを思い出す。今まさに人となりが支え合っている。俺は花陽に支えてもらっている。だが、寄りかかるだけの存在になりたくない。この温もりの分だけ、この優しい女の子に、いつか何かを返せるのだろうか。

体育館では、雪ノ下や由比ヶ浜がステージで称賛を浴びている。俺はそこには立てないし、観衆に入り混じり騒ぐ事もできない。今にも消え入りそうなちっぽけな存在だ。

でも、一人じゃない。それを花陽が教えてくれた。

絡まった手が、重なる温もりが、俺をこの冷たく乾いた世界へと繋ぎ止めていた。

僕のギター

あれから5分くらいで、俺達はその場を離れた。全て投げ出したい気持ちがないわけではなかったが、花陽から「いつてらっしやい……じゃなくて、お、応援してます」と送り出されては、さぼるのは夢見が悪くなりそうだ。

あつという間に閉会式が終わり、片づけに勤しんでいると、好奇や嫌悪が入り混じった視線が突き刺さる。だが自分でも、不思議を通り越して不気味なくらい、心を乱されなかった。いや、正しく言えば、別の事で心が満たされていた。

『私じゃ……だめですか?』

真つ直ぐすぎる問いかけ。

思い出すだけで、顔が熱くなる。

俺は……あの優しさに見合う奴になれるのだろうか。

気がつけば、作業は終わり、体育館は俺一人だけになっていた。俺の思考を中断しないように、あえて声をかけない皆の気遣いマジパネえわ。

「どうかしたの?」

部室へ行き、書類仕事を終わらせていると、雪ノ下が声をかけてくる。こいつが気遣うような声音になるのは珍しい。というか俺に対しては初めてじゃないか。あらやだ、何その記念日。

「何でもねーよ」

「顔赤いわよ」

「夕陽のせいだろ」

「……そう」

それきり会話は途絶える。あえて追及しない優しさに感謝しながら、書類仕事を終わらせる。これで文実の仕事も終わりかと思うと、やっぱり寂しい……わけねーだろ。バーカ。しばらく情眠を貪り尽くしてやる。

そんな考えに耽っていると、またあの言葉が響いてくる。

『私じゃ……だめですか?』

あれは、つまり、その、そういう意味なんだろうか。また、昔みたいに自惚れてはないだろうか、花陽の優しさに甘えているだけではないだろうか。

日を追うごとに表面化していく感情は、そのうち弾けてどうにかなってしまいそうだった。

ガラリと開いたドアが思考を終わらせる。

由比ヶ浜だ。

「やつはろー！2人共、後夜祭行こーよ！」

「行かない」

今、学校内で誰かと関わるのは遠慮したい。しばらくは悪役のレッテルを貼られるだろう。それに誰かを付き合わせる事はない。

「えー、行こーうよー！」

「わり、用事があるんだよ」

書類を提出して、足早に校舎を出た。

校門を通過すると、腰に衝撃が走る。

「おっにいちゃーん！」

我が最愛の妹がしがみついていた。

「つと、小町、まだいたのか」

「ふふん、どうせなら皆で駅まで行こうと思って、近くで時間潰して待ってたんだよ！うん、今の小町的にポイントたっかいー♪」

「先輩行くにゃー！」

星空が適当な方向を指さす。そっちは九十九里浜の方だぞ。

「八幡さん」

タイミングを計ったように、今一番聴きたい声が耳に届く。

「おかえりなさい」

その言葉を聞いた瞬間、さっきまでの緊張感や責任感やらが、体から抜けて、どこかへと霧散していった。

この優しい笑顔が見れたなら、文化祭のきつい準備も報われたと思えた。

「……ああ」

照れくさい気持ちになりながら、短く返事して、ゆっくりと歩き出した。

「かよちゃん！凜達もここに負けないくらい楽しい文化祭にしようね！」

「うん、頑張ろう！」

「絶対遊びに行くからね！」

「八幡さんも来てく дайさいね」

突然話を振られる。

「ああ、行けたらな」

「大丈夫だよ！小町が縄で捕まえてでも引つ張って行くから！」

小町ちゃん、乱暴はいけません……まあ、行くけどさ。

「μ、sの皆も会いたがってるにやー！」

「……………え、まじ?」

ど、どうしよう、東條さんや絢瀬さんがお、俺に……………もしかして、目の前で踊ってくれるのかな♪

「八幡さん?」

「いや、な、何も変な事は考えてないによ」

何なの、その黒いオーラ?怖い。怖い。あと怖い。

「先輩が専業主夫になりたいって話をしたら、海未ちゃんが根性叩き直すって言ったにや」

「おい」

何てことしてくれてんだ。絶対プラス評価してる奴いないだろ。

「あ、でも絵里ちゃんが……………か、かよちん、なんか怖いにやー！」

ニコニコ笑う花陽のオーラがやばい。そろそろ枯れ葉が弾けてしまいそうだ。

「二人共、気をつけて帰ってねー！」

「またにやー！」

「気をつけて帰れよ」

「はい、送っていただいてありがとうございます」

さて、帰りますかね。

「あー!!」

いきなり小町が叫ぶ。

「はやく帰ってご飯つくらなきや! お兄ちゃん、小町先に帰るから!」

俺の返事など待たずに、さっさと走り去る。

「あー!!」

今度は星空が叫ぶ。

「こ、今度はどうした?」

「凜は駅の中探検してくるから! かよちゃん、少し時間潰してて!」

またもや返事など待たずに走り去る。探検ってなんだよ……。

「……………」

「……………」

それぞれの走り去った方を見て、苦笑する。あからさまなお膳立てだったが、その心遣いに素直に感謝する。今俺は花陽と話したかった。

「花陽、屋上での事なんだが……」

「あ、はい……」

屋上という言葉スイッチに、お互いの顔が徐々に赤くなる。未だにこういう空気は慣れなかった。

「俺も……その……」

「……」

口の中は特に乾いていないのに、さつきみたいに言葉が出てこない。

ほんの少し自分の足が震えている気がした。俺は何を恐れているのか。

本当に伝えたい想いがあるはずなのに……。

「八幡さん」

左手が花陽の両手に包まれる。雑多な人波もけたたましい騒音もフェードアウトし

ていき、世界は二人だけになっていく。

「……すぐに変わる必要なんてないです」

「……」

「私、待つてますから」

「……ありがとう」

違う。俺が本当に言いたいのは……

「！」

花陽は左手を繋いだまま、右手を俺の肩に置き、胸にこつんと小さな額を当ててくる。

「待ってますから……」

友達以上、恋人未満という曖昧な人間関係が世の中にはあるらしい。友達すらいない俺には想像できなかった世界だ。

今日、俺と花陽はそんな曖昧だが、どこかで固く結びついた関係になった。

それと同時に、柄にもなく、変わりたいという衝動が、胸の中に燻っていた。

花の写真

秋がこの街を訪れ、時間帯によっては寒さを覚える頃。朝焼けがぼんやり照らす道を、俺は心地よいリズムで走っていた。

「はっ……はっ……」

最近になって気づいたのだが、ジョギングって案外、ぼっち向きの運動だと思う。団体競技と違い、ミスをしたからといって、舌打ちしてくるチームメイト（笑）もいないし、慣れてくると、思索に耽りながら運動できるといふ一石二鳥。まあ、ジャージさえあれば道具がいらなから、始めやすいってのもあるが。

そんな風にボツチの素晴らしさについて、あれこれ考えている内に今日もいつの間にか家に帰りついた。

「あつ、お兄ちゃんおかえりー♪」
「おう、ただいま」

朝食の準備をしている小町が台所から声をかけてきた。最愛の妹の天使なエプロン姿を、通りすがりにがつつり見てから、シャワーを浴びに浴室へ向かう。

花陽との関係に確かな変化が起こった翌日から、唐突に俺はジョギングを始めた。思

い立つたが吉日という奴だ。ちなみに初日は、散々だった。眠いし、足はしんどいし、通りすがりの人は気味悪そうな目を向けるし、警官に職質されるし、家に帰ったら小町が「ひつ、不審者！」とか言うし、遅刻するし、おかげでさらにクラスで悪目立ちするし、授業中に寝て平塚先生から目覚めの一発を食らうし……あれ、これはただの汗だよな。涙じゃないよな。まあ、何とか2週間続いている。最初はあんまり期待していなかった小町も、今は応援してくれているのも続いている理由の一つだろう。

そして、俺は熱いシャワーん……これ冷水じゃねえか。

部屋で制服に着替え終わると、ふとあの言葉が、脳内にこだまする。

『私、待ってますから』

それと同時に、机の中にある、花陽からもらったチケットの存在を意識した。

「……今年、までだよな」

チケットの期限が切れる今年までには……。

結局のところ、俺は怖いのだ。

花陽のような魅力的な女の子の隣に自分のような奴が立つことが。何もない自分が。

……でも、せいぜい悪足掻きくらいはしてみたい。できることはやっておきたい。

そう思いながら、部屋を出た。

「あなた……最近、趣味が変わったのね」

放課後の部室で、相変わらず静かに読書をしていると、雪ノ下が声をかけてくる。

「ん、そうか？」

「ええ、前までは娯楽小説が多かったけど、最近は古典的な名作が多いわね」

「ま、あれだ。そういう気分なんだよ」

「あ、でも最近のヒツキー、数学の授業以外寝てないよね。昼休みもすぐどっか行っちゃうし！」

ポツチが気難しい顔で教室にいて空気を悪くするだけなので、図書館で読書してるだけだ。俺の気遣いマジエンジェル！

「ま、あれだ。心境の変化ってやつだ」

「……………」

雪ノ下と由比ヶ浜が探るような目つきで俺を見ている。

「何だよ……………」

本の事といい、教室での事といい、俺見られすぎだろ。人気者かよ。葉山かよ。

二人は顔を見合せ、口を開いた。

「いえ、何というか……………」

「ヒツキー、ちよつと変わった」

「変わり者扱いされるのは昔からだよ」

「いや、そうじゃなくて」

ポケットに入れたスマホが震える。

画面を確認すると、星空からのメールだった。しかも画像付き。

『かよちん可愛いにゃ』

何だ? と思い、画像を開くと……

「ぶふおっ!!!」

「ー!」

「うわっ、ヒツキーきたなっ!」

紅茶を吹き出してしまった。文句を言われたが、それどころではない。

花陽のウエディングドレス姿だ!!!

星空からの情報によると、次のステージ衣装らしい。さらに……千葉の式場だと? お

いおいマジか。つーかこれ……可愛すぎる。

『八幡さん、幸せにしてくださいね』

『おかえりなさい。あなた♪』

『私……そろそろ、子供が欲しいなあ』

……いかにいかに。妄想が暴走しおった。

「ヒ、ヒツキーどうしたの?」

「いや、何でもない。材木座が新しいビキニを買ったらしくて、それを着用した写真を送ってきただけだ。見るか?」

「み、見ないし!」

「見せたら、消すわよ。あなたを」

お前ら、材木座に悪いと思わんのか!俺は思わん!

さて、星空にはいつか、ラーメンを奢ってやろう。いや、その前にブーケを持ったバー
ジョンを……

考えているとまたメールがきた。今度は花陽からだ。

『すいません、今電話大丈夫ですか?』

「わりい。急用できたから帰るわ」

俺は返事を待たずに、電光石火の如く部室を飛び出した。

モニヤモニヤ

疾き事、風の如し。

最近のジヨギングが少しは効果があつたのか、それとも花陽と話せるからといって、柄にもなく、ナチュラルハイになっているのか、全速力で校舎を出て、自転車を漕ぎ、公園まで来たが、疲れを感じなかった。

夕暮れが赤く照らすベンチに腰掛け、電話をかけると、すぐに花陽の声が聞こえた。

『もしもし、八幡さん、こんにちは』

「おう、なんかあつたのか？」

『あの……実は凜ちゃんの事で相談が……』

「星空の？さつきメールが来たぞ」

『え？そんなんですか？』

「ああ、その……お前の……ドレス姿が……」

『ドレス姿？……あ』

花陽は何の事か思い至つたようだ。電話越しに、真っ赤に染まる頬が見えた気がした。

『ぴゃあ……………！み、み、見たんですか？』

「あ、ああ、す、少しだけ……………」

がつつり見ました。

『ええ、あ、あの……………どうでしたか？』

「い、いいんじゃないか？サイズもピッタリみたいだし……………」

『……………むう。なんかあまり嬉しくない褒め方です』

受話器越しに、花陽が頬を膨らませているのがわかる。

「……………す、すげー、可愛かったよ、それよか星空がどうしたんだ？」

『ぴやつ！あ、あわわ、り、りり凜ちゃんです、はい！』

花陽は深呼吸を二回して、ようやく本題について語り始めた。

「可愛い服が似合わない……………ね」

『はい、そんな事ないのに……………』

星空は意外なトラウマを抱えていた。

はつきりいって、星空は美少女である。それは、μ、sのファンなら誰もが認めるところだろう。もちろん、性格も人懐っこく、妹っぽい。そして妹っぽい。

だが、それでも本人は自分に自信がないらしい。

『小学校の頃に言われた事をまだ気にしてるみたいで……』

「まあ、気持ちはわからなくてもない。俺も女子から手を繋ぐの嫌がられて、未だにフォークダンスがトラウマだ」

とりあえず星空をからかった男子は、デスノートに名前を書くぐらいで許してやろう。

『……八幡さん、そ、そんな事が……』

「やめろ。そこまで悲しい声出すな。本当に泣けてくる」

『あ、はい……八幡さんの手、温かいのに……』

「そ、そうか……」

だから素でそういう事言われると、本気で照れるから控え目でお願ひします！

「まあ、要はドレス云々より、星空に自信を持つて欲しいのか」

『あ、でも……今回のドレスは凛ちゃんに着て欲しいんです！きつとすつごく似合うと思いますから！』

「なるほど……じゃあ、ドレスを着る以外の選択肢を無くしてやればいいんじゃないか？」

『え？ど、どうすればいいんですか？』

「……いい方法がある」

話している内に思いついた単純な方法を話していると、次第に花陽のテンションが上がっていくのがわかる。

『わ、わかりました！じゃあ、当日はよろしくお願いします！』

「ああ、そっちはμ、sのメンバーに話しておいてくれ。あと主催者側にも」

花陽と作戦の打ち合わせを済ませ、すぐに、この作戦の要となるあいつに電話をかけた。

『もしもし、どうしたの八幡？』

「……ちよつといいか」

幻のドラゴン

「……か……」

普段なら心ゆくまで惰眠を貪る秋の日曜日。しかし今日は花陽、というかμ、sがイベントに出演するイベント会場に小町と連れだって来ていた。先日連絡したアイツは、先に会場に到着して、星空以外のメンバーと合流する事になっている。

「そういや俺……花陽がステージに立つとこ見るの初めてだわ」

「そういえばそうだね！小町はこの前見れたけど」

俺は数学の補習をしてたんだよな。やっぱり数学をもつと……いや、やめておこう。何もかも変わる必要などない。それより今日、花陽がここで歌って踊るのか……。

「やべ、緊張してきた」

「お兄ちゃんが緊張してどうすんの……ほら行くよ」

小町に手を引かれ、宥められ、会場に連れて行かれた。俺としては通常運転だが情けなさすぎる。

「あ、八幡さん！小町ちゃん！こっちです！」

多目的ホールの華やかな装飾をあしらったドアを開けると、学校の制服姿の花陽がたたたと小走りで駆け寄ってくる。

「花陽ちゃん！今日は小町も誘ってくれてありがとう！」

小町は手を大きくぶんぶん振って合図した。花陽はそれに対して、いつものやわらかな微笑みで応える。

「こちらこそ。来てくれてありがとう！楽しんでいってね」

「うす」

「八幡さん……私、今日は精一杯がんばりますから！」

「ああ、応援してる」

「はい♪」

花陽はやけにニコニコ笑顔だ。ステージで歌って踊るのがよほど好きなのだろう。

だがとりあえず本題に入らないといけない。

「そーいや準備の方はどうなってる？……戸塚の」

「あ、はい、もう着替えてもらってます」

「そっか、じゃあ後は星空だな」

「はい！あ、二人共、私達の控室に案内します！」

忙しく動く人達を横目に、スタッフ専用の簡素で事務的な廊下を歩きながら、いつも

より快活に動く花陽の後をついていった。こうして新たな一面が見れたのなら、日曜日
に外に出た甲斐があるというものだ。

花陽に続き、小町、俺の順で中へ入ると、そこには既に着替えを済ませたμ、sのメン
バーがいる。ただ、修学旅行先に台風が直撃した為、帰れなくなった2年生はいない。
よかつた。園田さんにポコポコにされなくてすむ。

どう声をかけようか迷っていると、花陽が率先して話し始める。

「皆、紹介するね。比企谷八幡さんと、その妹の小町ちゃんだよ」

「どーもー♪比企谷小町でーす！前回のライブは見てたんですけど、こうしてお会いす
るのは、初めてだから、少し緊張しますね！」

「……どーも、こんにちは」

言葉とは裏腹に、全く緊張していない小町と、自己紹介の下手さと第一印象の悪さな
ら定評のある俺の紹介が終わると、西木野から声をかけられた。

「2人共、久しぶりね。今日はありがとう。凜の為に動いてくれて」

「俺が何かするわけじゃねーよ」

「出たっ！お兄ちゃんの捻デレ！」

捻デレ言うな。

「二人共、今日はよろしくなく♪」

関西弁と共に、東條さんがずっと顔を寄せてくる。近い近い、近いって。

さらに今日の衣装は、ドレスを着るメンバー以外は、タキシードをアレンジしたような衣装なのだ。それ故に、タイトな着心地なのか、胸の辺りがきつそうな気がする。心配だ。いやー心配だ。し、心配してるだけよ？本当だよ？ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「どー見とるん♪」

「ひゃ、ひゃい！」

思わず囁んでしまった。東條さんは悪戯っぽい表情を浮かべながら、胸の下で腕を組む。俺は視線をそらし、口笛を吹き、ごまかし……

「むう……」

ごまかしきれませんでした。花陽さん、その黒いオーラやめてください。そろそろ霸氣的な何かで、泡吹いて倒れそう。

「はあ、これだからゴミいちゃんは……」

「まったく、これだから男は……」

小町と西木野から、ゴミを見るような目を向けられつつ、気持ちを落ち着ける。よし何か心で唱えよう、宇宙天地輿我力量……。

「あははっ！花陽ちゃんの彼氏、おもしろいなく！ウチは東條希。よろしく」

「ど、どーも」

東條さんはからからと笑う。花陽に渡した本といい、行動が読めない人だ。

「ちよつと！スクールアイドルがこんなところで彼氏とか口にするんじゃないわよ！」

怒り声で矢澤さんがずかずかと乱入してくる。

彼女はジト目で俺を見た。

「アンタが花陽の彼氏？」

「に、にこちゃん！」

花陽が慌てているが、特に意に介する風もなく、矢澤さんは俺と小町の前に来て、不敵に笑う。

「にっこにっこに♪あなたのハートに矢澤にこに「き、今日は来てくれてありがとう！」ち、ちよつと最後までやらせなさいよ！」

矢澤さんの自己紹介（？）の途中で、突然割って入った人物が、俺の手を握ってくる。ぴゃあつ！

「あの、私は絢瀬絵里！比企谷八幡君と妹の小町さんね。凜の件、本当に感謝してるわ！」

「あ、は、はい……」

絢瀬さんは、イメージと違う早口でまくしたてる。また近い近い。つか、手握った

ままなんです。うん、柔らかい。しかも、いい香りが……。

「わあ……」

小町が何やら驚いている。いや、何とかしてくれよ。

「絵里……あなた何やってんのよ。ていうか、キヤラ変わってない？」

「エリチ、かよちゃんから怒られるよ」

「え？や、やだ、私ったら！ご、ごめんね比企谷君！」

「い、いえ、別に……」

またもやサツと視線をそらす。だってまた胸に目がいきそうなんだもん！

「ハチマンサン？」

穏やかだが圧力のある声に、室内の空気が凍りつく。

「花陽、準備しなくていいのか？」

この事態を上手く切り抜けようと、なるべくクールに切り返す。

「まだ凜ちゃんが来てないから大丈夫です」

「はい」

「こんなかよちゃん……初めて見た」

「だから言ったでしょ？意外とやきもち焼きだった」

しばらく花陽からのお説教を受けた後、機嫌を直すのに必死になりました。

「こちら、アンタ達！無視するんじゃないわよ！」

ハヤテ

「おっはようによ〜♪」

星空がいつも通りに見えるハイテンションで入ってきた。

「凜ちゃん、おっはよ〜♪」

「うす」

「あ、小町ちゃん、先輩もきてくれたんだ！」

小町とハイタッチを交わしながら、荷物を置く。その際表情の翳りを俺は見逃さなかった。

……やっぱり着てみたいんじゃないか。

あとは作戦が上手くいけばいいんだが。

花陽に目で合図をして、作戦の開始を告げる……まあ、作戦つて程のものでもないが。
「凜ちゃん、私達も衣装に着替えよう」

「あ、うん、そうだね！」

花陽が例の衣装がある場所まで星空を誘導する。

その際、こちらをチラ見したので、頷いておいた。

「はい、凜ちゃんの衣装はこつちだよ！」

「うん！……………え、嘘……………」

カーテンを開けると、星空の目が驚きに見開かれた。

その目の前にある衣装は、先日花陽が来ていたドレスだったからだ。

「そんな……………このドレスはかよちゃんが……………」

「違うよ。このドレスは一番似合う凜ちゃんが着るんだよ」

星空は綻んだような、躊躇うような何ともいえない表情になった。よく見ると、唇が微かに震えている。

花陽はそんな親友を包むような優しい眼差しで見つめていた。

「で、でも、凜が着るくらいなら、皆同じ衣装の方が……………」

「悪い、星空。もう別の奴が余りの衣装を着てる。入って来てくれ」

ガチャツとドアを開け、タキシード風の衣装を着た戸塚が入ってくる。

「え!?と、戸塚先輩……………」

「星空さん、久しぶり。実は八幡に頼まれて」

「主催者の人に戸塚君の写真を見せたら、ぜひモデルにとってスカウトされたのよ」

絢瀬さんが補足する。ちなみに一瞬だけでも戸塚のウエディングドレス姿が見たいと思ったのは内緒だ。何なら今でも見たいけど。

「でも、凜なんて可愛くないし……………」

「そんなことない!!」

滅多に出さないであろう大声で、花陽が全力で星空の言葉を遮り、きつぱり 否定する。

目に涙を溜めた親友を前に、星空の目も潤んでいた。

「凜ちゃんは可愛いよ! 私が抱きしめたいって思うくらいに!」

「かよちゃん……………」

「凜、あなたは本当に魅力的な女の子よ」

「褒められて照れてる時とか、ウチも抱きしめたくなるよ」

「アンタの一番可愛い姿を見せてやりなさいよ」

「凜、もっと可愛いあなたを見せてちょうだい」

西木野が目でこちらを促してくる。

「凜ちゃんは可愛いよ! 私、凜ちゃんみたいな女の子になりたいな」

「まあ、なんつーか、その……………可愛いと思う。正直自分の妹みたいに思ってる」

「……………」

俺の発言に、「うわあ……………」みたいな意味合いの視線が突き刺さる。

あれ? 何? この沈黙。妹って千葉では女性に対する最高の称号なんだが。

「はあ、ゴミいちゃんならこんなもんか。でも、この捻デレが可愛いって言ってるんだから可愛いのは間違いないよ！ね、戸塚さん♪」

戸塚は星空の正面に立ち、はつきりと告げる。

「星空さんは可愛いよ！だって僕……………μ、sのPVで踊ってる星空さんを見て、本当にこんな可愛い女の子がいるんだって思ったから！」

戸塚や皆の言葉に星空は涙を流していた。頬を静かに伝うその雫は、不思議と悲しい色合いは見せなかった。

「みんな……………ありがとう！」

花陽から衣装を受け取ると、星空はいつものように気合いを入れた。

「よし……………それじゃあ、いっくにゃー!!」

普段の明るい光景が戻り、ほっとする。どうやら目的は達成したようだ。まあ、俺は特に何もしてないけど。

「八幡さん……………ありがとうございます」

それでも、花陽のやわらかな笑顔には黙って頷いておいた。

着替えの為、追い出された俺と戸塚は、並んでベンチに腰掛けた。

「さっきの……………なんか男らしかったな」

「ありがとう。僕も……八幡みたいに変わらなきやつて思ったんだ……」

戸塚は微笑みながらこちらを見る。少し頼もしくなった天使が今日も変わらず輝いている。

その顔を見て、俺は溜め息を吐いた。はあ……戸塚のドレス姿見たかったなあ……。

心の底から

しばらくして、ファッションショウが開演した。客は9割以上女性なので、待ち時間には居心地の悪さを感じたが、煌びやかなライトと華やかな衣装に身を包んだモデルが出てくると、たちまち歓声でホール内が満たされ、ステージ以外のものが大して気にならなくなる。隣にいる小町もかなりハイテンションになっていた。

計算された足取り、仕草、表情で観客を魅了していくモデルを眺めている内に、割と早く時間は過ぎ、着々とプログラムを消化していることに気づく。やはりこういう場で見ると、現実離れた別の生き物に見える。べ、別に足に見とれてなんかいないんだからね！

そして、一旦照明が落ち、別の色をした明かりがステージを彩る。

それに導かれるように出てきたのは、戸塚と星空だ。

見た目はシンプルながらも、着ている者を鮮やかに彩るデザインは、星空の美少女っぷりも相まって、凄まじい相乗効果をもたらしていた。

そんな星空を、戸塚は丁寧に、堂々とエスコートしている。

観客からは黄色い声援が爆発した。

「凜ちゃんーんー戸塚さーんー」

小町が2人に手をメガホンにして、音量MAXで2人に呼びかける。俺は声を出さない分、できるだけ大きめの拍手をした。

二人はそのままステージの先端まで歩き、立ち止まると、ゆっくり向かい合う。

戸塚は片膝をステージに着け、星空の手をとると、その手に口づけた。

「おおー—————」

小町が色めき立った声をあげる。

周りの女子もキャーキャー歓声を上げる。

仕方ねえな。次は俺がタキシードを着て、ドレス姿の戸塚の手に……え、お呼びじゃない？

星空は普段見せることはないだろう、優雅な微笑みを見せて、再び戸塚のエスコートでステージ中央へと戻っていく。

戸塚が下手の方へはけていくと、μ、sのメンバーが上手から出てきた。花陽も他のメンバーと同じ衣装に着替えている。

それぞれのポジションにつき、会場がしんとする。

数秒後、大音量の音楽が流れ、パフォーマンスが始まった。

一瞬だけ、花陽が弾けるような笑顔を向ける。

俺はただただ、普段見ることでできないスクールアイドルとしての花陽に見とれていた。

あつという間にステージが終わり、俺は机と椅子だけの空き部屋で、一人待たされていた。小町は持ち前のコミュ力を発揮して、μ'sのメンバー達と控室で談笑しているところだ。

ここで待つように言ったのは戸塚と星空だが、要件はなんだろうか。

先程の熱が、まだ体を火照らせている事を確かめながら、ぼんやりと天井を見つめていた。

そこでコンコンというノック音が静寂を破る。

「……………どうぞ」

返事をする、無言のまま、ゆっくりとドアが開かれた。

「あの、八幡さん……………」

「は、花陽？」

入ってきたのは花陽だが、その姿は俺を驚かせた。

「その恰好……………」

「えーと、り、凜ちゃんが八幡さんに見せたらって…………ど、どうですか？」

花陽はさつきまで凜が着ていたドレスを身に着けていた。その手にはブーケがある。

「な、なんか変な感じですよ。高校生で着る機会があるなんて思わなかったから……」
照れくさそうな上目遣いは、何か言葉を催促しているようだ。

「……すごく、いいと、思う」

「そ、そうですか……ありがとうございます……ぴやあつ！」

気がつけば、体が勝手に動いていた。

俺は、花陽を………思いきり抱きしめていた。

「は、はは、八幡さん？」

胸の辺りを花陽の吐息がくすぐる。

このすつぽりと収まるような小ささも、つぶれるようなやわらかさも、甘くとろけるような香りも、全てこの腕の中にあった。

「花陽……」

いつそのまま一つになってしまえたら……

「は、八幡さん……く、苦しいです……」

花陽の言葉に我に返る。慌てて離れた。

「……わ、悪い」

「い、いえ……決して嫌じゃなくて……ただ……」

花陽が優しく胸に飛び込んできた。その白く細い腕がこっちの背中に回される。くりくりとした可愛い目が、至近距離で潤みながら俺の目を見つめていた。

「八幡さんだけなのはずるいです。私だって……」

最後の方ももごもごして聞こえなかったが、花陽が徐々に力強く抱きしめてきたので、気にならなくなった。

こっちも、今度は優しく抱きしめる。

二つの鼓動が並んで、不揃いな微笑ましいリズムを鳴らしている。その心地よさにつまでも身を委ねていたかった。

今なら言える気がする。

「花陽……………その……………俺は……………」

「はい……………」

コンコンとノック音が聞こえた。

「入るわよ……………あなた達、何でストレッチなんかしてるの？」

絢瀬さんが怪訝そうな目を向けてくる。

「いや、これは、その、あれですよ、クールダウンを……………」

「そ、そそ、そうだよ、絵里ちゃん！運動したあとは、ちゃんと体をほぐさない！」

二人して素晴らしい高速反応。インパルス！

「そ、そう……ドレス汚さないようにね」

「それより、その恰好どうしたんですか？」

絢瀬さんは何故かウエディングドレスに身を包んでいた。かなり似合っている。

「あ、これはさつき主催者の人にモデルを頼まれて……どう？」

絢瀬さんが顔を赤くして、もじもじしながら聞いてくる。危うく見とれそうになる美人っぷりに、俺は目を逸らしながら答えた。

「え、ええ……その、に、似合ってると思います」

「本当に!? ありがとうございます!!」

こつちにびよんと跳ねてきて上目遣いになる。い、い、今、着地した時……胸……揺れた。しかも、そんな胸元開いたドレスで前かがみになったら、こつちが前かがみになっちゃう!

「……ハチマンサン」

……うん、何かやばい気がする。

恐る恐る振り返った。

花陽はにつこり笑っている。につこにつこにー。

「ハチマンサン……ウレシソウデスネ」

ば、ばかな……スカウターが壊れんばかりの戦闘力だと……?

「い、いや……そんなことは……」

180度変わった空気に打つ手なし！

これまでご愛読ありがとうございます！

「……あのー」

死を覚悟した瞬間、開いた扉の陰から帽子を被った女の人がひよっこり顔を出している。

「絢瀬さん、そろそろ……」

「あ、はい」

「そちらの方は……」

「その小泉さんの……お友達です」

「……よかったらその2人にも協力していただけませんか？中々お似合いなので……」

「わかりました。頼んでみます」

何やら話し合っているようだが、早くしてほしい。こっちは命の綱渡りをしているのである。なんか色々タイミングが悪い。やはり俺の青春ラブコメはまちがっている！

「ねえ、あなた達」

絢瀬さんがこちらに顔を向ける。

「式場のパンフレットのモデルをやってくれない？」
突然の申し出に、俺と花陽は顔を見合わせた。

ほのほ

「はい、じゃあ撮りまーす！」

カメラマンの合図の後、フラッシュがこちらの瞬間を捉える。はつきり言ってキンチョール。失礼、噛みました。緊張する。

隣にいる花陽はいつものように柔らかく微笑んでいた。さすがスクールアイドル。このままさっきの怒りが消える事を祈ります。

ちなみに俺は今、タキシードを着せられ、髪もプロの人からしつかりセットされている。目は腐ったままだ。

結婚式場のパンフレットに載せる写真を撮りたいとの事だが、全力で拒否しようとしたら……花陽には逆らえなかった。

「お兄ちゃん！もつとくつついて——！」

「何なら抱きつくにゃ——！」

「はちまーん！笑顔笑顔——！」

他人事だと思って離してやがって、と思いながらも、マイエンジェル戸塚の頼みを聞くべく、にっこりと笑顔をつくる。

「「「「うわぁ……」」」」

おい。今、誰とは言わないが、けっこうな人数がドン引きしてたぞ。

「ク、クールな感じでお願ひします」

結婚式場のパンフ用の撮影なのに、何故に幸せいっぱいな笑顔じゃ駄目なのか。

「いい笑顔だと思っただけ……」

花陽が誰に言うでもなく呟く。ここまでストレートに褒められると、それはそれで照れくさい。これぞ捻^レデレ全開である。自分言うことでもないが。

「花陽ったら、本当に幸せそうね」

「フンツ！何で私がモデルじゃないのよー」

「まあ、にこっちやから仕方ないよ」

「なんですってー!?!」

「うらやましいな……」

「エリチ……」

何やら話し声が聞こえるが、何故だろう……絢瀬さんの言葉はあまり気にしない方がいいと、俺の108の特技の一つ、危機察知で感じてしまう。なので気にしない。

「腕を組んでもらえますか？」

「はい」

こちらの緊張をもともしてない花陽は、カメラマンに返事をして、するりと俺の腕に、自分の細い腕を絡める。あわわ……。

「は、八幡さん。い、いつか……私に……」

「あ、ああ……」

次の言葉を勝手に想像して、緊張してしまう。

「い、いえ……まだ……大丈夫です」

「……そうか」

俺はカチンコチンで碌に動けなかったが、落ち着きを取り戻した花陽のリードで、テンポよく撮影は終了した。

夕焼けに染まる街並み。俺達はやっと帰路に着いた。

「いやー、楽しかったねー♪」

「俺は疲れたぞ……」

体の節々に、非日常の疲れが溜まっている。まあ、こんな経験はもうないだろう。しかし、写真撮ってもらっただけでこれとか、プロのモデルとかどんだけ疲れんだよ。プラモデル作るの楽しいのに。やはり俺は専業主夫になるべくして生まれた人間なのかもしれない。ナチュラルボーン専業主婦。

「そんな事言わないの！ゴミいちゃんが花陽ちゃんみたいなの可愛い女の子とカップルと

して写真撮れるなんて、奇跡なんだからね！」

「そうだな」

「やけに素直じゃん」

「バツカお前。俺ほど素直に生きてる人間はいねえだろ」

自分に嘘をつかないといけないような集団には属さず、日々自分の為に自分の時間を使う。これ以上に素直な事があるか。

「花陽ちゃんからもなんか言っちゃってよ」

「え？わ、私？」

花陽と目が合う。

「……………」

「……………」

数秒間見つめ合って、逸らす。さすがに今日は色々ありすぎた。お互いに照れやら何やらのキャパオーバーを起こしている。でも顔の不自然な温かさだけは共有できている気がした。

「ア、アンタ達！何、変な雰囲気になってんのよ！」

「まだまだかかりそうね」

「はあく、これだからゴミいちちゃんは……………」

「まあまあ、ええ雰囲気やん」

「先輩、ヘタレにや〜!」

「ま、まあ八幡は八幡のいいところがあるから……」

「いいなあ……」

そういう話は俺に聞こえないようにしてくださいね。俺からしたら、戸塚と星空の距離の方が気になる。なんか近いし。

それにしても絢瀬さんは、花陽が着ていたドレスをそんなに着たかったのだろうか。ハチマン、ワカンナイ。

まあ、このキャパオーバーしている温かい何か、幸せという奴なら、少しずつ啄むように味わうのも悪くないと思う。俺のようなボツチは、それでもしないと、消化不良を起こしてしまう。それに………出来ることなら長く味わっていたい。

隣にいる花陽とまた目が合う。今度は、小さく微笑んでくれた。

そのままさりげなく、距離を詰めてくるのに気づかないふりをしながら、俺は歩く速度を緩めた。

コスモス

とある祝日。

乾いた風が緩やかに街を吹き抜け、空も穏やかに見える1年で1番過ごしやすい季節。そして、ふとした寒い目覚めに間近な冬と、1年の終わりを感ずる季節。

俺と花陽は千葉市の街をのんびり歩いていた。

「……また、いなくなつたな」

「あはは……そうですね」

今日は、小町と戸塚と星空も含めた5人で、行列のできるラーメン屋に行く予定だったのだが、合流して約10分で撒かれてしまった。だからどういう事だよ。お前らボツチでもないのに、ステルス使つてんじゃねーよ。今さらになつて、ステルスヒツキーの特許を取つておかなかつた事が悔やまれる。別にいらんけど。

「まあいい、じゃあ行くか」

「はい、そうですね」

前より少しだけ自然に、俺達は並んで歩き出した。

「そういえば八幡さん、最近料理はじめたんですか？」

「……小町か」

「はい♪小町ちゃん言ってみましたよ。最近小町離れしようとしていて寂しいって」

「あいつは母ちゃんかよ……」

別に何の事はない。少しでも何かを変えてみたいだけだ。

「私も食べてみたいなあ。八幡さんの手料理」

「まあ、そのうち………必ず」

期待に綻ぶ顔をちらりと見て、とりあえずの約束をしておく。まあ、こういう目的がある方がモチベーションも上がるだろうし。

「ふふ……その時は私も何か作っていきますね」

「え？花陽って、おにぎり以外何か作れんの？」

「つ、作れますよ！……卵焼きくらいは」

花陽は頬を膨らましながらも、目をそらした。あまりレパートリーは多くなさそう
だ。

この前のステージを見て、花陽の新しい魅力を目の当たりにしてから、喜びと同時に、不安も覚えた。俺が……俺なんかが、このどこまでも輝いていける女の子の隣に……本
当の意味で隣に立ってる日が来るのだろうか、なんて考えてしまう。

「……どうかしましたか?」

「いや、何でも……」

やわらかく微笑みながら聞いてくるのを適当にはぐらかしていると、前方に何か、見
つ、けた……?

あ、あ、あれは……ダークマターだ。

「わあ、結婚式だ♪花嫁さん綺麗ですね!」

どうやら花陽には見えていないようだ。心の綺麗な人間には見えないとか、さすがは
ダークマター。てか、あれ、絶対知ってる人じゃんか。とりあえず、逃げよう。

花陽の手を掴み、逃げる準備に入る。

「は、八幡さん?え?ど、どうしたんですか?」

「こっちから行くぞ」

「は、はい!」

何やら弾んだような花陽の声を合図に、駆け出そうとする。

「……あああ、ひ、き、が、や」

うわあ、目合っちゃった。遅かったか。

ダークマターが霧散していき、中からドレスを着たアラサー女教師が現れる。無駄に
エロいキャッチコピーだ。

黒い翼

「すまない……取り乱してしまった」

ラーメン屋の店内に向けて並ぶ2、30人の行列。その真ん中ぐらいで、一人だけ場に不釣り合いなドレスを着た平塚先生が、申し訳なきように俯いていた。何故か自然な流れでついてきているのは、ツツコンではいけない。

「まあ……気にせんでください」

「そ、そうですよ……周りの男性が平塚先生の魅力に気づいていないだけですよ」

「あ、あ、ありがとうございます!!」

平塚先生は花陽に抱きついて、その豊かな膨らみにぼふつと顔をうずめる。う、う、うらやましいなんて思っていないだからね! つーか、これじゃあどっちが教師かわからんぞ。

花陽は照れ笑いしながら、優しく平塚先生の頭を撫でていた。そこまで優しくしないでいいって。

しばらくして、先生は顔を上げる。

「そういえば比企谷。この子は総武高校の生徒かね」

「違いますよ」

「ほう……では、海浜高校かな」

「あ、申し遅れました。音ノ木坂一年の小泉花陽です！」

自己紹介が遅れた事を謝りながら、頭を下げる花陽。いや、気にしなくていいぞ。自己紹介遅れたのその人のせいだから。

「いや、こちらこそすまない。私は平塚静。総武高校で教師をやっている。こいつの担任だ」

そう言いながら、俺の頭をぼんぼんと叩く。だがどんなに格好つけても、もう色々とり繕えない。

「は、八幡さんの担任の先生……」

何故か驚いている。そりゃあ、担任もないほど、干されてはいない。

「それで……えーと……き、君達は、つ、つ、付き合っているのかね？」

顔を赤らめながら、普段とは全然違う声のトーンで聞いてくる平塚先生。一生徒としてはかなり恥ずかしいので、是非やめていただきたい。

「……………」

「……………」

俺と花陽は黙り込む。今一番取り扱い注意な話題だ。

何と表現したらいいか迷っていると、意外にも、真つ先に花陽が口を開いた。

「秘密です」

たったの一言。そして、柔らかくその場を和ませるいつもの微笑みは、今日も効果は抜群のようだ。平塚先生はふつと小さく微笑む。

「そうか……なら、仕方ないな」

次に、俺を見る。

「しかし、比企谷も最近どこか変わったと思つたら、そういう事か！」

バシバシ背中を叩かれる。痛い痛い！

話している内に、あつという間に時間と共に行列は進み、食欲を誘う香りが充満する店内へと案内される。

「デザートを邪魔したお詫びだ。私が奢るよ」

「え？でも……」

「気にするな……君から見た比企谷の話も聞いてみたいしな。もちろん、学校での比企谷の話も聞かせよう」

「え?!いいんですか?聞きたいです!」

いや、よくねーよ。しかし、もちろんこれまで通り、俺に拒否権などない。結局、このあと二人は、延々と俺の話で盛り上がっていた。ちなみに、花陽がμ'sのメンバー

ということ、伏せておいた。矢澤さんからこの前、別に付き合ってもいいが、節度ある交際を心掛ける事と、自分から言いふらしたりするな、と厳命されていたからだ。まあ、言いふらす相手もないし、わざわざ自分から変な注目は浴びたくない。しかもう、平塚先生には、どうせ言わなくても、この先の動向次第で、勝手にバレるんだが……まあ、先生なら心配ないか。

隣で二人の会話を聞きながら、俺は運ばれてきたラーメンのスープを啜った。

君だけを

ラーメンを食べ、平塚先生と別れた後、俺と花陽は広い公園に来ていた。ジョギングしている人、犬の散歩をしているお年寄り、ベンチに座って話し込む女の子、シートを広げてお弁当を食べている家族連れ、様々な人々が思い思いの時間を過ごす場所に、何となく混ざつてのんびりしていた。

空いているベンチに腰掛け、そこそこ大きな池を見ながら、花陽が口を開く。

「平塚先生って格好いいですね。私もあんな風になりたいなあ……」

「い、いや、大丈夫。大丈夫だから。ならなくていいから」

突然の爆弾発言に体の芯から震えてしまった。これは全力で阻止しなければならぬ。
い。

「八幡さん、学校でも面白いんですね」

「いや、別に面白くなんかねーよ。本当に面白かったら今頃人気者だったの」

「ふふつ、そうですね」

ぼんやりと穏やかな景色を眺め、肩と肩が触れ合うか触れ合わないかの距離を意識しながら、取り留めのない会話をする。こんな時間がお互いにとって馴染みのあるものに

なっている事が、妙にくすぐったくて、嬉しかった。

「まだ……半年なんですよね」

雑音の隙間を狙ったようなぼつりとした眩きに、辺りが静まった気がした。だがそれも一瞬で終わり、すぐにはしゃぐ子供の声が聞こえてくる。

沈黙で続きを促した。

「八幡さんと出会ってから……μ、sに入ってから色々とおったけど……まだ、半年ぐらいいしか経ってないんだなって思って……」

花陽の視線は、静かに揺れる湖に注がれていた。だが、見ているものが水面なのか何なのかはわからない。

確かに、この半年は自分のこれまでの人生の中でも、かなり濃い時間を過ごした。俺の場合、それまでが空っぽだったから、特にそう感じてしまう。

「何だか、楽しすぎて……幸せで……」

ふわつと左肩に重みを感じる。そして、その重みからはいい香りがして、いつかのようになり気持ちを和ませる。

「それでも……まだ欲張りで……」

その言葉にはつとさせられた。

改めて、自分が花陽の優しさに甘えて、彼女を待たせているのだと知った。

だが俺は……

「す、す、すいません！わ、私っいたらいきなり！」

急に花陽がわたたと慌てです。自分の言葉を悔いってしまったようだが違う。そんな必要はない。

本当に謝るべきは俺だ。

自分が成長したら、などと理由をつけて先延ばしにした愚図な俺だ。

俺は花陽のことが……

その衝動は不意に訪れた。

「花陽」

「は、はい？」

「ら、来月……遊園地行かないか？」

「え……」

「ついでに……修学旅行先で買ったお土産も渡したいし……」

「は……はい」

「………伝えたい事がある」

「………」

「聞いてほしい事が……あるから」

「……………はい！」

最高のタイミングとは思わない……半ば強引に、勢いに任せて言った。だが後悔とかそういうのはない。

「……………私、待ってます」

隣にいる少女は確かに笑っていたから。

広い公園の中は、今日もそれぞれの時間が流れていた。

秋の京都は修学旅行の学生だけではなく、普通の旅行者や外国人観光客で溢れていた。まあ、日本最高峰の観光都市・京都なので、年中こんなものかもしれない。要するに……人混みは嫌い！ってだけだ。

「八幡」

「どした？」

戸塚がちよんちよんと指で優しく背中をつついてくる。今日も絶好調の天使ぶりだ。守りたい、この笑顔。

「顔暗いよ。どうかしたの？」

「デフォだよ。生まれた時からこんなもんだ」

「そう？てつきり、小泉さんがいなくて寂しいのかと思ったけど……」
「……………」

案外当たっているから困る。さつきから、どんな名所を見ても、どんな道を歩いても、花陽と来た時の勝手なシミュレーションをしてしまう。うっかりニヤニヤしていたら、由比ヶ浜からドン引きされたくらいだ。

それともう一つ、この修学旅行をほーつとやり過ごせないのは、奉仕部への依頼があるからだ。第一の依頼は戸部の海老名さんへの告白の手伝い、そして、雪ノ下も由比ヶ浜も気づいてない第二の依頼は、その告白の阻止。相反する依頼の解決の糸口はまだ掴めてはいない。関係を変えたい戸部、変えたくない海老名さん……どうしたものか。

「八幡？」

「いや、全く当たってないわけじゃないからな。でもお前も星空がいなくて寂しいんじゃないのか？」

「え、あ、う、うん……」

戸塚が顔を赤らめている。はあ………何て可愛い。

「八幡さん、こんばんは」

「おう、どうかしたか？」

夜の自由時間。部屋の隅でインテリアの一部になっていたら、メールで『電話大丈夫ですか？』なんて送られてきたので、すぐに部屋を出た。誰からも何も聞かれなかった。で、こういう時にぼっちの動きやすさがありがたくなる。

「あの………京都はどうですか？」

「まあ、悪くない」

「あはは……八幡さんらしいです」

「そっちはどうだ？」

「はい、ラブライブの予選も近くなってきたので、絵里ちゃんのダンスレッスンがいつもより厳しかったです！」

厳しいと言ってる割には嬉しそうだ。充実している事が窺える。

「……絢瀬さんか。元気にしてるのか？」

「八幡さん……今変なこと考えてませんか？」

「な、何でだよ。特に意味はねーよ」

話が飛躍しすぎている。ワープ進化もびっくりだ。

「この前も絵里ちゃんの胸を変な目で見てたし……」

「み、見てないろー！」

はい、本当は東條さんの胸も見てました。ハチマン、ウソ、ツカナイ！

「あれ？花陽最近少し痩せたか？」

「そんなんじゃないよまかされませんよ！」

「ま、あれだ。今度ハロウィンイベント出るんだろ？頑張ったら、おいしい白米奢ってやる」

「むう……ありがとうございます」

電話先で頬を膨らましながら、白米を思い浮かべる花陽の、微笑ましい姿が見えた気がした。

「じゃあ、そろそろ風呂の時間だから」

「あ、はい。じゃあ、気をつけて楽しんできてください！帰ったら沢山お話聞かせてくださいね」

「おう、ぼっちの修学旅行のやり過ごし方を教えてやる」

「そ、それはいいです。それでは、お休みなさい」

「おう、お休み」

ほっこりしたところで、部屋に戻ろうとすると、雪ノ下に遭遇した。

「あら、奇遇ね」

「おう」

「……あなたにも電話をかける相手くらいいるのね」

「聞いてたのか」

「いえ、声が少し聞こえただけよ」

「そうか」

すれ違いざまに、一応確認しておく。

「なあ、雪ノ下……今回の依頼、どう思う？」

彼女は口元に手をやり、首を傾げながら答えた。

「正直、難しいわね。戸部君がどうこうではなくて、海老名さんのタイプではなさそう。ただ奉仕部の理念から考えると、仕事はあくまで告白の舞台を整える事だから、私なりに場所を探してみるわ」

「わかった」

確認を終え、部屋に戻る。さて、戸塚と風呂に入つて何か考えよう。やっとメイインイベントか。

ちなみに雪ノ下はこのあと、平塚先生とラーメンを食べに行つたらしい。

ビー玉

時間はいつもの通りに流れ、止まることも急ぐこともしなかった。その間、俺の頭の中は何かでごちやごちやになつていた。

そして、気がつけば告白当日……

「ね、ヒツキー。いよいよだね」

期待に胸を膨らませた表情の由比ヶ浜が、ひよこつと隣に現れる。

「……何がだ？」

「もうっ、依頼の事だよ！」

「ああ。まあ、ぼちぼちな」

「うわっ、テキトー……」

「押しで駄目なら諦めろって名言知らねーのかよ」

「言ってるのヒツキーだけだし……てゆうか、ヒツキー、修学旅行中ずつとぼーつとしてるし……」

「そうか？」

「そうだよ、恋煩いじゃあるまいし」

「……………」

「え？どうしたの？まさか……………」

「お前……………よく恋煩いなんて言葉を知ってたな」

「なっ!?バ、バカにすんなし！これでも女子高生だかんね！」

この件は、由比ヶ浜に知られてはいけない。だからこそ海老名さんは、あんな遠回しな言い方をした。嘘について、取り繕える程器用じゃないから。

今、頭の中にはある一つの方法が浮かんでいるが、一旦置いておく事にした。

「君には……………頼みたくはなかった」

「お互い様だよ……………馬鹿野郎」

夕焼けが焦がす京都の街並みを眺めながら、悔しそうな顔をした葉山に背を向ける。この土壇場で舞い込んできた3つ目の依頼。葉山もまた藻掻いていた。己を変えられない弱さを憎んでいた。

正直、葉山グループの事は興味ない。だが奴には、林間学校と文化祭の件で借りがある。リア充に借りを作るなど、ぼっちの沽券に関わる。

……………やはり、先程から頭にちらついている方法を使うしかないようだ。決してこれがベストとは思わない。だが、俺にできるたった一つの冴えたやり方である事は間違いな

い。

ふと花陽の顔が自然と脳内に浮かんでくる。いつものやわらかな笑顔を向けてくる。ここ最近はいつだつてそうだ。だが今だけは、その安らぎから目をそらさなければならぬ。俺が今からやることは……。

夕食後、奉仕部は二人の待ち合わせの30分前に集合する事になっていたので、緊張している戸部を横目に部屋を出る。

「あ、八幡。もう行くの?」

「ああ」

同じ部屋の戸塚も、もちろん戸部の話は知っている。

そして、俺が起こす行動は知らない。

「……大丈夫? ずっと顔暗いけど。具合悪いの?」

「いや……いつも通りだよ」

「そっか。じゃあ、いつてらっしやい」

「ああ」

戸塚の気遣わしげな視線を背に受けながら、待ち合わせ場所へと急いだ。

竹林の道。京都でも特に有名な観光スポットの一つ。夜はライトアップされて、儂く幻想的な光景に変わっている。そんな場所でこれから起こるイベントに、一つの結果が出ようとしている。

雪ノ下と由比ヶ浜は俺に任せると言った。

葉山も自分のグループの事後処理はするだろう。

海老名さんはおそらく俺の意図に気づくはずだ。

戸部の本気も確認した。

あとは……

深呼吸をして、気持ちを落ち着ける。

思い浮かべるな。思い浮かべるな。

これはただの演技だ。

一分もかからないくらいに小さな出来事だ。

「あ、来た！」

由比ヶ浜の声ではっと気づいて前を向くと、戸部と海老名さんが向かい合っている。

ここまで来たら、もう迷っている時間はない。俺は隠れていた茂みを飛び出し、戸部に並ぶ。

突然の乱入に驚く戸部と、何の感情もない瞳で俺を見る海老名さん。さあ、あとは自

分の頭の中の台本を読み上げるだけだ。

「ずっと……」

何故かつつかえる。落ち着け。相模の時を思い出せ。

「前……から……」

おかしい。美少女と話す時にはよく囁んでいたが、こういう場面では、淡々と言葉を並べていたのに。

「す……」

さあ言え。終わらせろ。

「き……」

『八幡さん』

「!」

手足が震える。口の中がカラカラする。

だが必死でこらえた。

「すき………でした………」

何とか言葉を紡ぎ、海老名さんを目が合うと、はつとした表情になり、頭を下げてきた。た。

「ご、ごめんなさい。今は、誰とも付き合う気は無いから」

らしくない口調で言い、らしくない速度でその場を離れていった。

「……いやー、ヒキタ二君、ないわ……ヒキタ二君？」

戸部には何も言わず、ゆっくりと歩き出す。

「比企谷……？」

葉山の隣も通り過ぎる。

道の先に雪ノ下と由比ヶ浜がいる。雪ノ下は俺を睨んでいるが、俺が見返すと、どこか驚いたような表情になった。由比ヶ浜は俯いている。

俺は二人の間を黙って歩いた。

由比ヶ浜が袖を掴んできたが、静かに振りほどき、ただ歩く。

背中にいくつかの視線を感じながら、誰もいない場所を探した。

竹林の道を抜け、ひっそりとした夜空の下で頬を拭う。

泣いてはいないようだ。

だが泣きそうなくらいに表情が歪んでいる事だけ理解した。

「花陽」

この場にはいない大事な人の名を呟く。

さっきの告白に気持ちはない。

でも俺は……裏切ってしまったのだろうか。
ガンツと鈍い音がする。

気がつけば、コンクリートの壁を殴っていた。ここはどこだろう、なんて疑問もない。そしてそのまま、自分を殴るように壁を一定のリズムで殴っていた。

……今はただ、痛みが欲しかった。

ホタル

「まったく……君という奴は何を考えているんだか……」

「……………」

あれからどうやって宿に帰ってきたのか、全然記憶にない。そもそも現実があやふやで、今、俺がいるのが宿なのかすら疑わしく思えてきそうだ。そのくらいに何もかも輪郭がぼやけている。

ただ、とりあえずの現実を認識してみると、どうやらここは平塚先生の部屋らしい。帰ってきた俺を見た平塚先生が、慌てて自分の部屋へ連れて行き、宿から包帯やらをもらい、手当てをしてくれた……気がする。

「まあ、骨折などの心配はない。ただ少しの間、痛みはするがね」

「……………」

「何があつたかはあえて聞かないよ。ただ自分の事はもう少し大事にしたまえ」

言いながら、先生は俺の頭をくしゃつと撫でた。

「君の事を大事に思ってる人間は、君が思うより多いよ」

「……………」

言葉は返さず、頭を下げと部屋に戻った。

部屋に戻ると、わかりきったことだが、葉山達は既に帰ってきていた。

俺の右手の包帯を見て、ぎよつとしていたが、お互いに言葉を交わす事はせず、あとは昨日と変わらぬ時間が流れた……なんて事はなく。

「八幡！その右手、どうしたの!？」

驚いた表情の戸塚が可愛らしく駆け寄ってきた。

「いや、転んだだけだよ」

俺は、不安そうな戸塚に苦笑いしながら、定位置の隅っこで、言い訳し続けていた。

そして、皆が寝静まってから、スマートフォン画面を開く。

花陽からの着信はなかった。

修学旅行最終日。

もう、帰るだけの日。適当なお土産を選び、購入したら、帰りの新幹線の時間を待つだけだ。

先程、海老名さんとすれ違った際に声をかけられたが、言葉が出てこないようだったので、俺の方からその場を離れた。

由比ヶ浜も俺の手を見て、すぐに俯いて離れていった。

俺は……ただ一人の事だけを考えていた。

右手の痛みの方だけ、強く、強く。

家に着く頃には、すっかり空も暗くなっていた。

「お帰り………って何その手!？」

「転んだんだよ」

左手で小町の頭をぼんぼんとしてから、自分の部屋へ行く。少し眠りたかった。

荷物を置き、ベッドに体を投げ出すと、習慣的な動作で携帯の画面を開く。

花陽からメールが来ていた。

一呼吸置いて開く。

『こんばんは。今日帰って来るんですよね?お疲れさまです。もしよかったですら、明日電
話していいですか?』

「……………」

真つ暗な部屋に、ほんのりとした明かりを放ちながら、その文章は心を締めつけた。

ごめん、ごめん、ごめん……………。

嘘つきな臆病者は、大事な人はもちろん、自分すら傷つけるのが怖かった。

ほうき星

最近の日課となっているジョギングを済ませ、シャワーを浴び、朝食の席に着く。小町は既に食べ始めていた。

不思議な事に、あれから小町は何も聞いてこない。ただ、話すときは普段通りなのだ。時折心配そうな目でこちらを盗み見る姿に胸が痛む。俺は、気を遣わせていることをひどく申し訳なく思いながら、今はその気遣いに甘えるしかなかった。

学校生活はいつも通りの時間が流れている。葉山グループは相も変わらず和気藹々と談笑していて、俺は右手の痛みのせいで授業中は難儀だったが、それでもなんとか切り抜けた。

この痛みですら、今は自分を癒している気がした。

「ヒツキー」

短い休み時間に微睡んでいると、心配そうな顔をした由比ヶ浜が話しかけてきた。視線は俺の右手で固定されている。

「どした？」

「あの……右手、大丈夫？」

「……ああ、痛みはほとんどねえよ。とりあえず包帯巻いてたら体育の授業さぼれそうだからな」

「そっか……」

「ああ」

チャイムと共に由比ヶ浜は席に戻っていった。

放課後の部室はいつもと違った。

やはり雪ノ下も由比ヶ浜もどこか余所余所しい。由比ヶ浜は教室内でのやりとりで既にいつもと違ったが、雪ノ下は予想外だった。腫れ物に触るように、といった表現がしつくりくるこの雰囲気。あまりいい気分ではない。

「わり、帰るわ」

二人を見ることはせず、なるたけ反応を気にすることもせず、颯爽と教室を出た。

家に帰り、ベッドに寝転ぶ。

つまらない。つまらなすぎる。

俺は普段からこんなつまらない日常を過ごしていたのか。

いや、違う。

最近は……本当に楽しすぎたから……。

そこで、思考を遮るようにスマホが震える。

「！」

画面を確認すると、花陽からの着信だった。

応答を反射的に押そうとするが、何かが指を押しとどめる。

ものすごく声が聴きたい。

何でもない普通の会話がしたい。

できれば笑ってほしい。

一方的すぎる願望に自分自身で嫌悪感を覚えていた。

形だけとはいえ、裏切ったのに……。

気づけばスマホは停止して、ただの部屋はさつきより一層静まり返った。

「八幡さん……忙しいのかな」

はやく……声が聴きたいな。

ぼんやりとしている内に、数日が過ぎていた。俺は花陽の電話をやり過ごして、当たり障りのないメールを送るだけにしておいた。僅かな繋がりだけでも保とうとする自

分の甘えに呆れながら、今日もとりあえず奉仕部へ向かうことにする。

最近、一色いろはという1年の生徒会長就任を防ぐ依頼が舞い込んだので、それで少しは気が紛れてくれればいい。

この先どうするかなどの答えが出ないまま、中身のない日々をボツチ生活を送るのも前と同じことだと……別に大したことじゃないと自分で自分に言い聞かせた。

「八幡……」

戸塚の声が聞こえた気がしたが、気のせいだと思い、俺は教室をいつものように、誰にも気づかれずに出た。

「かよちくん、どうしたの?」

「わわっ!びつくりしたあ〜!凧ちゃん、びつくりしたよ……」

「なんか顔暗いにな」

「あはは、何でもないよ……」

凧ちゃんと一緒に練習に戻る。

木枯らしが校内を吹き抜ける。

すつかり深まった秋はやがて冬に変わろうとしていた。

そんな中、私は確かな違和感、不安を感じていた。

八幡さん……。

ここ最近メールのやりとりしかしていかないけれど、そこには普段とは違う、違和感を持った空白がある気がした。

私の知らないところで何かが起こっているという直感を無視することはできなかつた。

ニノウデの世界

『悪い。奉仕部の活動が忙しかつた。しばらくは忙しい日が続きそうだ』

スマートフォン画面に表示された文章を見ながら溜息をつく。もちろん文字が変わったりはしない。

何がこんなに不安にさせるんだろう。

ただ私が声を聴きたいだけなのかもしれない。

もしそうだとしたら、八幡さんに迷惑だと思われないかな？

再び溜息を吐いたところでコール音が鳴り、その不意打ちに体が小さく跳ねた。

「誰だろう？……小町ちゃんだ！」

自分から小町ちゃんに電話して事情を聞くのは、さすがに図々しいと思い、気が引けていたのだけれど、この際だから、もう彼女に聞いてみよう。

「あ、花陽ちゃん。今、大丈夫？」

「もしもし、小町ちゃん？うん、大丈夫だよ」

「実はね……聞きたい事があるんだけど」

「うん、何かな？」

「お兄ちゃんと最近、何かあった？」

「え……………」

「花陽ちゃん？…………大丈夫？」

「あ、うん、ごめん…………でも、どうしかしたの？」

「いやー、最近お兄ちゃんがなんかおかしいというか、元気ないからさ。またバカやって、花陽ちゃんとケンカでもしたのかと思って」

小町ちゃんの言葉を聞いている内に、どうやら自分の直感が当たっていると確信した。

彼女は少し声のトーンを落とし、ぽつりと呟いた。

「それで、何かあったなら…………小町に何かできればなって思って…………」

八幡さんと小町ちゃんの繋がりやの強さを改めて感じた私は、少しだけ安心して、ゆっくりと胸の内を明かす。

「実は、私も小町ちゃんに聞こうと思ってたんだ。私は小町ちゃんみたいに見たわけじゃないけど、少し…………不安で…………」

「どうしたの？お兄ちゃんなら花陽ちゃんにぞつこんのベタ惚れだから心配しないでいいよ」

「あうう…………べ、ベタ惚れって…………」

そう……なのかなあ？

いきなりからかわれて顔が熱くなり始めたけど、高鳴る感情を振りきって話しを続ける。

「あの……連絡は返してはくれるんだけど、よそよそしいというか、避けられてるというか」

「……はあ、全くあのゴミいちゃんは……花陽ちゃんにまで心配かけて……」

「いや、それは全然いいんだよ。でも……何も言ってくれないのは……寂しいな」

「花陽ちゃん……ごめんね。それと、ありがとう。お兄ちゃんの心配してくれて」

自分の兄を心の底から気遣う小町ちゃんの声には、じんわりと胸に染みる温かさがあつた。

「でも……私達が知らないって事は……」

また、文化祭の時みたいに学校で何かあつたのかな？

「うくん……」

小町ちゃんも同じ考えのようだ。お互いに、会話の空白を思考で埋めながら、一つの考えに辿り着く。

「戸塚先輩」さん

材木座先輩は違うクラスだから、戸塚先輩に聞くのが無難だろう。小町ちゃんとの通

話を終え、急いで戸塚先輩の電話番号へと指を走らせた。一秒でも早く知りたかった。八幡さん……何があつたんですか？

はやる気持ちを抑えながら、コール音を黙って聞いていた。

ワタリ

「八幡」

昼休み。いつものベストプレイスにて、パンを囓っていると、戸塚が声をかけてきた。その手には、MAXコーヒーが2本握られている。

「はい」

「おお、サンキュ」

笑顔で俺にコーヒーを渡しながら、そのまま隣に座る。それと同時に、ほのかない香り……落ち着け、戸塚は男だ。

「今から昼の練習か？」

「違うよ。今日は八幡と話がしたくてさ。教室だと色々気を遣って長話してくれないし」

「いや、気を遣つてるとかじゃ……」

戸塚は俺の鈍い反応には、穏やかな笑みで返し、話を始める。その声音には、こちらを気遣うような響きがあった。

「まだ……気にしてる？」

「……何の事だ？」

わかつていながらも、何故が聞き返してみる。

いつもの風が学校の敷地を吹き抜け、木の葉がかさかさとして地面を踊っていた。その行方を目で追いながら、戸塚の言葉を待つ。

「修学旅行のことだよ」

「別に……葉山達もいつも通りに不干渉だし、特に気にする事はねーよ」

「そうかな……僕は……そうは思えないや」

戸塚は缶を両手で弄びながら、淋しそうな声音で呟く。戸塚のこんな声は初めて聞いた。

「八幡は気づいていないかもしれないけど、葉山君も、戸部君も、海老名さんも、たまに八幡の方を気にしてるよ。そして三浦さんはその事に気づいてる。どこか違うんだ

……」

「……………」

「川崎さんも……由比ヶ浜さんも……あ、せ、責めるとかじゃないからね！」

戸塚はわたわたと手を振る。その小動物な仕草は、見ていて微笑ましい。

「大丈夫だ。それより、お前……結構、色々見てんだな」

正直、由比ヶ浜が遠慮がちに声をかけてくる以外の違和感は、全く知らなかった。つまり、最近は奴らに視線を向けていないということだ。つまり、俺はいつも通りじゃなかったということか。

「それは仕方ないよ。八幡はそれどころじゃないんだから？」

「小泉さんの事……考えてるんでしょ？」

「……………」

「嘘告白の事を気にしてるの？」

「……………全く気にしてないといえば、嘘になる」

「そっか……………やっぱり……………」

俺はようやく缶を開け、ひたすら甘いコーヒーを飲み下し、一息つく。

「今さらだけど……………八幡って、小泉さんの事が好きなんだよね」

予想外の言葉に、コーヒーを思いきり吹き出す。

「え、どうしたの!?!ち、違わないよね!?!」

「……………ああ」

ここまでストレートに聞かれたのは初めてだった。そもそも第三者に聞かれるのは初めてだ。小学校でのトラウマがあり、誰かに好きな女子を言うのを避けていたから。

だが、今なら……戸塚になら本音を言える。

「……好きだ」

「それを素直に小泉さんに言えばいいんじゃないかな」

「……………」

俺自身、何を悩んでいるのだろう、と思う。いや、こんなのは悩んでいるふりなのかもしれない。多分俺は憎んでいる。あの日、嘘告白をした自分より、花陽なら許してくれる、花陽なら踏み込んでくれると期待している自分を。依然の寄りかかるだけの自分から変わっていない事を……。

「……八幡」

「あ、ああ、悪い」

戸塚はMAXコーヒーを一息で飲み、立ち上がった。

「八幡、これだけは言っておくね」

その瞬間、ざわめきが静まった気がした。

戸塚は俺の前に立ち、いつもの穏やかなものとは違う真剣な表情を見せた。

「八幡は絶対に悪くない」

真つ直ぐな言葉を置いて、すたすたと校舎へ歩いていく。

俺はその背中を見えなくなるまで眺めていた。

その日の夜。

「もしもし、小泉さん。どうしたの？」

白い炎

「そんな事が……」

「うん……」

戸塚先輩から修学旅行での八幡さんの話を聞いてしまった。

何というか……八幡さんらしいな、と思う。

高校の修学旅行という人生に一度の貴重なイベントの時間を、自分のためじゃなく、誰かのために使ってしまう。そんな優しさや不器用さ。それを文句を言いながらも、惜しみなく出してしまいう八幡さんに対して、嬉しさや尊敬と同時に、切なさも感じてしま

う。

嘘告白については驚いたし、やつぱり複雑だけど、文化祭の時のように、八幡さんが
できるだけの事をやっただけだと思う。

「八幡って、誰にも相談とかしないし、弱音とかもそういう時には吐かないからさ」

「はい……わかります」

そこはちよつと怒ってるかも。

私は……全部受け止めるのに。

戸塚先輩は話を続けた。

「今回も……八幡、気にしてるんだと思う。嘘告白しちゃった事を……」

「……………」

「八幡つて、本当に小泉さんの事が……」

「……戸塚先輩？」

「いや、これは八幡から直接聴いた方がいいと思うから」

「……はい」

「小泉さん。僕ね、二人が一緒にいるところを初めて見たときに……お似合いだなあつて思ったんだよ」

「え？ど、どうしたんですか？急に……」

「……八幡の事……助けてあげて。八幡と一緒にいてあげて」

「……はい」

通話を終えてからも、しばらく私は立ちすくんでいた。

「かよちーん！パフエ食べに行くにや〜！」

「ごめんね、凜ちゃん。私……行くところが、行かないといけないところがあるから」

「悪い、帰るわ」

「ヒッキー……」

「……………」

険悪な空気のカフェを出る。葉山は気を遣ってくれたのだろうが、今はそれをありがたいと思える程の余裕もなかった。何より今は花陽の事以外考えていられなかった。

「比企谷……」

由比ヶ浜以外に折本の声も聞こえてきたが、振り返らずに、いつもより大きめの歩幅で歩いた。

外はすっかり暗くなり、気温はすっかり冬が近い事を知らせていた。

先日、戸塚に言われた事を反芻する。あんな戸塚は初めて見た。

『八幡は悪くない』

だが今の俺では、やはり花陽を失望させてしまうのではないだろうか。花陽を傷つけてしまうんじゃないだろうか。そう考えるだけで、気持ちが沈んでしまう。

同じ事を考えている内に、気がつけば駐輪場に辿り着く。かなり歩いたはずだが、全然疲れていない。最近のジョギングは無駄にはなっていないようだ。

倒れていた自転車を乱暴に起こして、押しながらゆつくりと歩く。もう少し外にいたい気分だった。見上げた空には、月も星も見えない。確か今夜から雨のはずだ。

のろのろと校門を出ると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「はあ……はあ……八幡さん……」

「……花陽？」

そこには、少し汗ばみ、息をきらせた花陽が立っていた。

日なたの窓に憧れて

「花陽……」

もう一度、その名前を呟く。

この前会ったばかりなのに……普段から連絡を取り合っているのに……何故か遠く感じてしまっていた。

その存在が今、目の前にいる。

いつか胸の奥をかき乱した衝動が込み上げ、今にも暴れ出しそうな気がした。

彼女は俺の目をじつと見て、ほっとしたように微笑んだ。

「やつと会えた……」

そして、そのまま隣に並んだ。

少し汗をかいた横顔は、古ぼけた街灯の頼りない明かりにぼんやりと照らされ、仄かに輝く雫が言いようのない美しいさを讃えていた。

「……走って来たのか？」

「はい」

「これ使え、風邪ひくぞ」

鞆の中から、念の為持ってきていたマフラーを出す。

「あ、そんな、大丈夫ですよ！」

「いいから」

有無を言わずに首筋にそつと巻きつけてやる。

人に巻いてやるのは初めてなので、少し不格好になつてしまつたが、花陽はそのまま歩いていた。

夜の帳を下ろした空を見上げ、何を言おうかと言葉を探す。

「ちよつとお話しませんか？」

先に口を開いた花陽の視線の先には、小さな公園があつた。

並んで無人の公園に足を踏み入れ、ベンチの近くで立つたまま向かい合う。

花陽は俯きがちになりながら、それでも真つ直ぐに告げた。

「戸塚さんから聞きました」

「そうか……」

また沈黙が流れる。耳を澄ませても、何も聞こえない。花陽の微笑みは、寂しげなものに変わつていた。

「ごめん」

「いえ、謝らないでください。八幡さんは、そうするしかなかつたんじゃないですか？」

「まあ、そりゃあ……そうなんだが……」

自然と溢れる言葉をそのまま伝える。

「嫌われたくなかった……」

「……………」

「嘘とはいえ、他の女子に告白してしまったから……」

「……………」

「それに、心の何処かで、花陽ならわかってくれるんじゃないか、許してくれるんじゃないか、なんて甘えてる自分が許せない……」

「……………」

「っー」

花陽の手が俺の手に重ねられていた。

その小さな手は、そのままこちらの手をぎゅっと握り締めてくる。僅かに爪が食い込んで、少し痛いくらいだ。

そして、しっかりと目を合わせてくる。

「八幡さん」

花陽の声は輪郭が見えそうなくらい、はつきりとしていた。

「私は……八幡さんが好きです」

「……………」

「……大好きです」

頬を紅く染める花陽の真っ直ぐな瞳に捕らえられ、こちらは動けなかった。生まれて初めての告白なのに、実感が全然沸かなかった。

花陽の寂しげな表情だけが気がかりだった。

「だから……胸が苦しくなります」

「……………」

「八幡さんが一人で悩んでいると……」

「……………」

「私……言ったじゃないですか！八幡さんは一人ぼっちじゃないって！」

「……………悪かった」

花陽に俺の言葉は届いていないようだった。

どんよりとした夜空から少しずつ雨粒が落ちてきていた。

「私は……私は、八幡さんを……絶対、一人ぼっちになんかしません」

花陽の目からは涙が零れ落ちている。

その涙を見ただけで、ずきんと胸が痛んだ。初めての痛みだった。

せめてもの気持ちで、その雫を拭おうと空いた手を伸ばす。

しかし、その手は届かなかつた。

「……………」

「……………！」

花陽の顔は目の前にあり、二つの唇が重なっていた。

ビギナー

それは何の演出も前振りもない、ただの衝撃だった。湿った温もり同士がぶつかり合うだけの接触だった。

「……………んっ」

花陽は精一杯背伸びして、さらにその温もりを強く押しつけてくる。いつの間にか、その両手は俺の頭を両側から挟み込むように掴んでいた。それは、いつかの続きをしているようだった。

やがて息が続かなくなり、名残を惜しむように離れる。

「……………はあ」

「……………はあ」

お互いに夜の公園の乾いた空気を吸い込む。そこには、初めて味わう甘さが漂っていた。そこでようやく、花陽と唇を重ねていたのだと気づく。

体が妙な熱を持って、さつきより増えた雨粒も不思議と心地いい。今、確かに世界は俺と花陽の二人きりだった。

彼女は恥ずかしそうに、顔を真っ赤にして俯いていた。その火照り具合も、初めて見

せた情熱も、心から愛しいと思えた。

「花陽」

その名を呼んで、思いきり抱きしめる。

「……………好きだ」

花陽のはつとする声が漏れ聞こえた。

「……………やつと、言ってくれた……………八幡さんのほか……………」

「……………ああ、どうしようもない馬鹿だな」

「でも、大好きですよ」

「……………俺も……………好きだ」

互いに熱い言葉で耳朶をくすぐりあいながら、至近距離で目を合わせる。優しい温もりで濡れた瞳を見つめ合っていると、また唇が重なった。

「……………っ」

「……………ん」

不器用に唇を重ねながら、確かな温もりを分け合う。

やがて雨は激しく降り注いでいたが、それすらも気にならず、名残を惜しむように離れる。

「もつと……………もつと……………」

「……………」

彼女がうわごとのように呟く。

本能が何度でも花陽を欲しがっている。

向こうも同じ気持ちなのが、何故かわかってしまう。

「…………くしゅんっ」

「お兄ちゃん！雨強いけど大丈夫だった？それと花陽ちゃんから電話が……つて花陽ちゃん!?どうしたの!？」

玄関のドアを開けると、すぐにタオル片手にぱたぱたと駆け寄って来た小町は、ずぶ濡れの俺と花陽を交互に見て、その後に固く結ばれた手を見た。

「え、え、も、もしかして!？」

「まあ……その、そういう事だから。心配かけて悪かった」

「えっと……改めて、よろしくね。小町ちゃん」

涙ぐんだ小町は肩を震わせ、自分が濡れるのも構わずに、俺と花陽に抱きついてきた。

「よかった!よかった!よかったよおぉー!!」

「おい、泣くなつての。あと濡れるぞ」

小町は俺の言うことはスルーして、花陽の方に向き直った。

「花陽ちゃん。ふつつかな兄ですが、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ、ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

恭しく頭を下げ合う二人に、何だか気恥ずかしくなる。

「それよか早くシャワー浴びた方がいいぞ」

「あ、でも八幡さんが……」

「いや、俺はいいから」

「でも……」

「二人で一緒に浴びれば？」

「……」

「……」

「わ、わ、私は、八幡さんさえよければ」なんて事はなく……

「ぴゃああ……」

「と、とにかく、花陽から先に……」

「は、はい……」

「……」

「……」

二人共、固まったまま動けずにいた。

理由は手を握ったままだから。

そして、それをお互いに離したくなかったから。

「もしもし、お二人さーん。早くしないと風邪ひきますよー?」

からかうような小町の言葉に我に返り、浴室へ向かう二人を見送って、俺は自室へと向かった。

ラズベリー

「ふう……」

小町からもらったタオルでぎっと全身を拭き、ひと息つく。気持ち落ち着けたことで、少しずつ色んな出来事がはつきりと思いつき、体に馴染んでくる。

そして、湧き上がる体の震えに従い、俺はベッドにダイブした。全然落ち着いてねえじゃん。

「うおおおおおおおおお!!」

枕を抱きしめ、ゴロゴロとベッドの上を転がる。

今考える事は一つ。

花陽の唇めっちゃ柔らかい!!!

え、マジで!?

何、あの柔らかさ! マシユマロ!? いや、花陽は白米好きだからお餅!?

唇に花陽の熱が残っている事を感じながら、恋人になったという事実を確認する。それは、言葉だけの関係ではなく、心と心の不思議なつながりで、目には見えないのに、確

かなものだ」と自信が持てた。

『八幡さんが大好きです』

その甘い声を心に響かせながら、このまま幸せな眠りにおちていけそうだ。

……いかにいかに。脱いだ服を洗濯機に入れとかなないと、小町に怒られちまう。落ち着けハチマン。

ウキウキな足取りで階段を降り、脱いだ服を片手に、ガラツと脱衣所のドアを開けた。

「え……？」

「……………」

時間が止まった……気がした。

落ち着いて、冷静に状況を判断する。

……あ、花陽だ。

うん、テンション上がりすぎて自分の世界に浸ってたわー、っべーわー。

花陽はきよんとんとしている。まだ、現実が飲み込めていないようだ。ドアを開けたのが二人同時だったのか、まだ浴室と脱衣所の境目にいる。雨に濡れた髪が少し頬に貼りついているのが色つぽく、さらに細い首も滑らかな鎖骨も、まだ水滴が伝っていて、その行き先はあどけない顔立ちには不釣り合いな豊かな膨らみや、アイドルとして健康的に鍛え上げられたくびれや……これ以上は未知すぎて、言葉にできない。うん、花

ちなみに小町は呆れた顔で食事の準備をしている。

「今度、最高級の白米おごるから」

「し、知りません！」

こんな時でも、大好きな白米には反応するんだな。可愛い。だが、今はとにかく謝り続ける事に集中しよう。

「本当に悪かった」

「……………」

ちらりとこちらを窺っている。よく見ると、希望的観測かもしれないが、そんなに怒っていないようにも思える。

しかし、しっかりと謝るべきなのは事実である。

「本当にすまなかった。何でも一つだけ言うこと聞くから……………」

「……………」

花陽は無言のままこちらを向き、正座を崩して女の子座りになった。

「……………何でもって言いましたね」

「まあ、俺にできる事なら……………」

「じゃ、じゃあ、責任……………とってください」

「……………せ、責任？」

俺が問い返そうとすると、花陽が耳元に顔を近づけてくる。シャワーを浴びたばかりだからか、シャンプーの香りが鼻腔をいつもより、幾分強く深く刺激してくる。

「私を……お嫁さんに、してくださいね？」

「……あ、ああ」

耳元から離れた花陽と、至近距離で見つめあい、しつかりとそのパーツの一つ一つを焼きつける。そして、今度は正面から近づいていくのを感じた。

「二人共、小町がいること忘れてない？リアクションに困るんだけど」

「……………」

「……………」

何ともいえない表情で、頬を真っ赤にした小町のジト目に、二人して謝りながら、食卓についた。

S J

小町のお叱りを受け、照れ隠しに頬を掻きながら椅子に座る。いつものカレーの匂いが空腹を心地良く刺激してきた。

「あ、ごめんね。私も手伝うよ」

花陽が申し訳なさそうに、小町の元へ駆け寄る。

「いいの、いいの。お義姉ちゃんは座ってて。お客様なんだから」

「お、お、おね、お義姉ちゃん!」

「っ!」

初めての呼び方に、花陽が素つ頓狂な声を上げ、俺は盛大に水を吹き出した。

「え、どしたの? てか、お兄ちゃん、汚いよ」

「いや、お前……いきなり、どうした?」

台拭きでテーブルを拭きながら、さも当たり前のようにしている小町に尋ねる。

「だって、お兄ちゃんと花陽ちゃんが結婚したら、花陽ちゃんはお義姉ちゃんだよね?」
キョトンとした顔の小町はあっけらかんと言い放つ。いや、確かにそうなんだけどさ。変な想像しちゃうからやめてね……。

「そして、二人に子供が生まれたら小町は叔母さんに……うん、可愛い姪っ子からは、小町ちゃんって呼んでもらおうつと♪」

「(ハ、ハ、ハ)ど、子ども……!」

花陽は顔が真っ赤になり、わたわたとその場で右往左往する。

「お、おい、小町……その辺にしてやってくれ。花陽がエンストしそうだから」

ついでに俺は、幸福のメーターがカンストを起こしている。それにさつき、甘々な言葉を囁かれたもんだから、なおさら小町の言葉に対して、押しとどめていた変な妄想……想像が膨らんでしまう。

「ふふん、初々しいですなーさ、食べよ食べよー」

ウキウキはしやぎながら食卓につく小町は、かつてないくらいに上機嫌で、これまでにないくらいに幸せそうに見えた。

食事の片づけを終え、忘れていたシャワーを浴び、ようやく自室でくつろげる。花陽は花枝さんに電話をかけていた。今日は色々あつて夜遅くなつてしまったので、泊まつていくらしい……小町のゴリ押しで。言うまでもなく、俺に「泊まっていけよ」なんて言う勇気などない。

花陽はさすがに渋るかと思つたが、すぐに納得した。

まあ、そんなこんなで、いつもより濃い一日が終わろうとしている。窓の外は、さつきより穏やかな雨音が、シトシトと絶え間なく響いていた。明日は土曜日なので、学校は休みだが、花陽は練習があるので、朝早くに帰らなければならない。そのことを少し寂しく思いながらも、明日が晴れることを祈っていた。

そんなあれこれを考えている内に、コンコンと控えめにドアがノックされる。すぐに誰だかわかった。

「どうぞで」

「し、失礼します……」

花陽はひよこつと顔を出し、俺が頷くと、ゆっくりと部屋に入ってきた。

「電話はすんだのか？」

「はい、凜ちゃんに言うてくれてたみたいで……」

「そっか……」

幼馴染みにはお見通しだったらしい。星空にはいつかラーメンを奢ってやろう。

「……………」

「……………」

お互いに妙にかしこまって、見つめ合う。だが口元は確かに微笑んでいて、そこには気まずさなど微塵もない。

「とりあえず……座るか？」

「あ、はい」

花陽が俺の隣に、ベッドに腰かけてくる。

「……………」

「……………」

無言の時間がゆったりと流れる。もしかしたら、色々ありすぎて、何から話すべきか整理しているのかもしれない。

俺は考えて、一番最初に言うべき事を言う。

「その……花陽……………」

「はい？」

立ち上がり、花陽に向き直る。声のトーンから真剣なものを感じとったのか、花陽も立ち上がった。

「あー、その、あれだ……俺の彼女になってください」

「……………え？」

キョトンとしている。そりゃあ仕方ない。好きだと言い、キスをして、あまつさえ嫁にする約束までした。今さらかもしれない。ただ俺には大事なことだ。

「その……さつきから全部、花陽からしてもらってばかりだから。せめてこれぐらいは

……」

ちっぽけな男のプライドである。馬鹿みたいだけど……というか馬鹿なんだが。本当に情けない。

ただ、それでも彼女は微笑んでくれた。

「……はい。よろしくお願いします」

花陽は丁寧に頭を下げ、ゆっくり上げると同時に抱きついてきた。ふわりと温かく甘い香りが弾け、部屋を満たした気がした。

数秒後、こちらを見上げ、目を閉じる。

まだ慣れないが、自分でも意外なくらい自然な動作で、花陽の頭と腰に手を添え、唇を重ねる。

「……………」

「……………んっ」

浅めのキスを何度も重ねる。手足の感覚がとろけて曖昧になってきた。そうしてじゃれ合っている内に、お互いにベッドへ体を投げ出す。自然と笑みが零れた。

「そーいや、修学旅行のお土産渡さなきゃな」

「私も……渡したい物が……」

恋人になったばかりの二人の夜は、まだしばらく終わりそうもなく、この日を絶対に

忘れないとばかりに、深く深く心に刻みつけた。

エンドロールには早すぎる

カーテンの隙間から、うつすらと朝陽が漏れてくる。秋の目覚めは少しずつ、寒くなり始めていた。

それでも、晴れた事に安堵を覚えながら、微睡みの中で、布団の温もりを感じる。すると、ノック音が聞こえてきた。

あえて無視する。

10秒ぐらい経って、こっさり誰かが入ってくる気配を感じた。はて、誰だろうか(棒読み)。忍び足で近寄ってくる気配に全神経を集中させ、その動きに期待……もとい、その動きを警戒する。

やがて、その気配はベッド脇で動きを止め、こちらを窺っているように感じられた。

「ふふっ、可愛い」

その謎の気配……というか花陽は、ものすごく機嫌よさそうに、こちらの頬をついでくる。ええい、やめんか。

しばらく頬をつついてから、今度は優しく頭を撫でてくる。

「よーしよーし」

はつきり言おう。恥ずかしい。だが気持ちいい。何ならこのままもう一眠りしてしまいたい。

「はっ！私ったら……小町ちゃんに八幡さんを起こしてって頼まれたのに……」

急に一人で慌て出す。安定の花陽クオリティだった。

「は、八幡さん。起きてくださ〜い」

「……………」

優しくゆすられる。ああ、人から起こされるってこんなに気持ちよかつたっけ？

「朝ご飯できてますよ〜。白米ですよ〜」

それが通じるのは小泉家だけのよう……。……。

まあ、花陽は早く帰らないといけないので、もう起きる事にするか。

寝返りをうち、ゆつくりと体を起こす。

「……………おは……………」

声が出せなかった。

こちらが向き合った瞬間、花陽の顔がほぼゼロ距離にあり、唇が重なっていた……思考がまだ上手く働かない。夢の中にいるのだろうか。

「……………んん」

「……………っ」

やがて花陽の方から離れていく。

「……………お、おはようございませす」

「あ、ああ、おはよう」

花陽は照れ笑いを浮かべながら、口元に手をやる。その仕草がやけに色つぼくて、とくんと胸が高鳴るのを感じた。

「い、いきなり、ごめんなさい。その……………八幡さんを見てたら……………つい……………」

「いや、俺でよけりや……………」

頭をがしがしとかきながら、照れ隠しをする。

すると彼女は頬を膨らませた。

「八幡さんじゃなきや……………だめなんですよ？」

上目遣いで責められてしまった。こう言われては、何だか照れ隠しが馬鹿らしくなってきた。

じゃあ遠慮なくと言わんばかりに、無言で花陽の頭を撫でる。気持ちよさそうに目を細める姿が、少しカマクラに似ている気がした。まあ、あいつは花陽ほど素直じゃないけど。

そのまま腕を引き寄せ、花陽の艶やかな唇を見つめる。その柔らかさをまだまだ焼き付けたかった。

お互いに気持ちを察して、目を閉じる。もう一度重ねた後、笑顔を交わした。

「……………」

「……………おはようございます」

「ああ、おはよう。さつきも言ったけど」

「えっと……………朝御飯ですよ」

「わかった」

綻んだ笑顔に、今日も世界が色づいていくのを感じた。

朝食をとり、支度を終え、花陽と駅まで歩く事にした。玄関先で、小町が「お兄ちゃん、お義姉ちゃん、いつてらっしやーい！」とお見送りしてくれたのは、何ともいえない気持ちにさせたが、花陽のほうは昨日と違い、満面に笑みが溢れている。

「元気だな。昨日は眠れたか？」

「はい、小町ちゃんと話してたらいつの間にか……………」

昨日、花陽は小町の部屋で寝た。高校生らしい節度を持ったお付き合いを目指す俺としては、当たり前前の選択だ。そう、当たり前前の……………選択だ。な、泣いてなんかねーよ！ふと気づけば、どちらからともなく手が繋がっていた。

取り留めのない話を重ねている内に、駅に着いてしまった。

名残を惜しむように、するりと指がほどけ、手のひらには空白ができる。その空白を握りしめ、寂しい表情は打ち消した。

「帰り……気をつけてな」

「はい。八幡さんも、はやくケガ治してくださいね」

「ああ、そんでハロウィンイベント見に行く」

「……はい！絶対に来てくださいいね！そ、それじゃあ、行つてきます！」

「……おう」

彼女は寂しさを振り払うような笑顔を見せ、改札へ向かう。俺はその小さな背中を黙って見つめていた。

そうしていると、いきなり花陽は俯いたまま振り返り、こちらへ駆けてきた。

「花陽？……っ」

「……ん」

初めての時みたいに押しつけるような感情任せのキス。

すぐに離れていったが、しっかりとその甘やかな感触は焼き付けられた。

朝なので、皆自分の行き先で頭がいっぱいなのか、あまり見られてはいないが、それ

でも何人かは驚いた顔でこちらを見ていた。その視線に俺がしどろもどろしている間に、花陽はやわらかな微笑みを残し、改札を颯爽と通り抜けていった。その背中は昨日までのものとどこか違っていた。

「すげえな。あいつ……」

甘い熱が冷めやらぬ内に帰路につこうと踵を返すと、見知った顔が少し離れた場所からこちらを見ていた。

そいつはかなり驚いた顔で、こちらにおそるおそる手を振る。

「ち、ちいーす、ヒキタニ君……」

「……戸部」

戸部は何故か顔を赤らめていた……別に可愛くない。

未来コオロギ

どうしてこうなった……。

俺はさつきまで甘々なひとときを過ごし、これからその余韻に浸りながら家に帰ろうと思っていたのに……。

「……………」

「……………」

何故か俺は戸部と喫茶店に来ていた。しかもこいつ、自分から誘っておいて、さつきから一言も話さない。さらに、まだ顔を赤らめている。何なの？こいつ俺の事好きなの？ほら、さつきから向こうの席の、海老名さんの同胞らしき女子二人組がチラチラとこつち見てるじゃんか。

「……………それで、俺に何か用があるんじゃないかねーの？」

このままでは埒があかないので戸部を促す。

すると、奴は顔をゆつくり上げ、気まずそうな愛想笑いを浮かべた。

「いや……………なんつーか……………さつきの子つてき、ヒキタニくんのカノジョ？」

「ああ……………てか、見たんなら……………わかるだろ」

「い、いやー、駅前でキスとかー、っべーわ。い、いつから付き合ってるの？」
「ああ……昨日から」

「へえー、そうなの？昨日からとかフレッシュすぎてマジやべーわ」

間違はなく本当の用件とは関係のない話題だろうが、会話したことで徐々に舌が回りだしてきたようだ。戸部は運ばれてきたコーヒを飲み、肩の力を抜き、さつきよりリラックスした姿勢になった。

「ね、どこの学校の子？うちの学校じゃねえべ？なんっーか、アイドルみたいに可愛かったけど」

「東京の方だよ。っーかお前……気にしてないのか？」

「んっー」

「修学旅行中の事だよ」

「あ、あー、あれかー……」

いつもの軽薄なノリに戻ったと思ったら、俺の言葉でまたシリアスに戻る。なんか申し訳ない。だが、この辺りの出来事が、戸部がわざわざ俺を喫茶店に誘った理由なのだろう。

「ごめんっー！」

いきなり立ち上がり、頭を下げられる。ガタツという音が割と大きく響いたが、店内

に客が少ないのが幸いだった。

「……何だよ、いきなり」

俺は告白の妨害はしたが、謝られるような事はされてない。予想外すぎる行動に戸惑っていると、戸部は座り、静かに語り出した。

「あれ……嘘だったんだろ？」

「……………ああ」

さすがにさっきのを見られては言い訳できない。

窓の外に目をやると、人並みはさっきと同じように、どこか規則的に行き交う無機質な流れに見えた。ベルトコンベアに運ばれているみたいだ。

戸部はゆっくりと話を続ける。

「なんつーか、ヒキタニくんは色々知ってたんだろ？」

「……………」

沈黙で肯定しておく。知らなきゃいい事などいくらでもあるのだから、知る必要もないだろうに。しかし、こいつは自分で気づいてしまった。

「それでさ、わざわざ俺らの為に……」

「勘違いすんな」

そこだけは全力で否定しておく。

「俺はクラスの間人間関係とかどうでもいい。今回は奉仕部として効率のいいやり方で事を収めたただけだ。同情される筋合いはねーよ」

「……………」

戸部はポカンと俺を見ている。

「…………俺はスクールカースト最底辺だが、本音を言い合える奴等がいる。今はやりたい事もやるべき事も山積みだ。勝手な憐れみ押しつけられても迷惑だっつの」

半年前なら鼻で笑ったような言葉を、心からの本音として吐き出しながら立ち上がる。

「あ、ヒキタニくん！」

背を向けると戸部から呼び止められたので、一応顔だけ向ける。その表情からは、修学旅行の時のような、何かを求めるひたむきさが見て取れた。

そして、彼は口を開く。

「俺の…………友達になつてくんねーかな！」

……………は？

ラクガキ王国

「…………どうしたの？お前…………」

とりあえずもう一度席に着き、戸部に向き直る。予想外すぎる展開しか訪れなくて、割と困惑気味である。

「いや、あのさ…………ヒキタニくんって、誰に対しても真面目っっか…………真剣に向き合うじゃん？ほら…………林間学校の時も…………」

「…………まあ、お前らにやな役押しつけたけどな」

「でも、最後は自分が泥かぶるつもりだったじゃんか。それに相模さんの件も…………多分、ヒキタニくんがああするしかなかったんじゃね？なんっか、準備の時も、相模さんが文実サボりすぎじゃん？って空気になってたし…………途中からヒキタニくんがスローガン決めでなんかひでー事言っただとか言われてたけど…………」

「……………」

「俺…………あん時、ヒキタニくんの事を悪く言っただけど…………本当はうらやましかっただっっか」

「いや、お前が俺に対して羨ましがる事なんか、何一つねーだろ」

こいつはぼつちに憧れているのだろうか。いや、んなわけねーか。背後で自動ドアが開く音がして、誰かが入ってくるのを感じながら、俯いた戸部を見る。その目はどこかもどかしそうに伏せられ、両手は膝の上に置かれていた。

「あー、何て言うんだっけ、ああもうよくわかんねー！っべーわ」

「……………」

「あの、その時の事も含めてごめんっ！それと俺の友達になってくんねーかな」

「…………お前がそうしたけりやそれでいいんじゃねーの？」

「え…………マジ？じゃあ連絡先交換すっべー！」

はやいはやい。はえーよ。依頼に来た時もそうだが、こいつ変わり身はやい。まあ、良く言えば切り替えが上手いんだろう。

今から友達なら、俺としてはまず言うべき事がある。

「その前に言っとく事がある」

「？」

「俺はヒキタニじゃなくてヒキガヤだ」

「いっちにー、さんしー♪」

「……………」

♪〜」

今日は天気がよくて風が気持ちいいな。八幡さん、何してるかな〜。

「あの……花陽」

「はい♪」

ストレッチをしていると、海未ちゃんが少し引き気味にこちらを見ている。どうかしたのかな？

「何かあったのですか？さつきから……というか、今日ずっと笑顔のままですが……」

「そ、そうですか♪」

「幸せそうだね！」

「なんか良いことあったん？比企谷君と♪」

「え♪そ、そんな♪えへへ♪」

八幡さんと恋人同士になって……そして……。

考えている内に、ことりちゃんと希ちゃんが顔を見合わせる。

「何か……」

「あつたみたいやね……」

二人の言葉に反応した凜ちゃんが大声で宣言する。

「かよちゃんは比企谷先輩と付き合い始めたにゃ〜！」

「「「「え?」」」」

その言葉に皆が一斉に、それぞれ反応をする。

「花陽ちゃん、本当に!?!」

「は、は、花陽! あ、あなた……」

「花陽ちゃん、詳しく聞かせて♪」

「ち、ちよつと花陽、何で言ってくれないのよ!」

「なあなあ、どこまでいったん?」

「バ、バカ! 希! 私達はアイドルなのよ!?!」

「は、は、は、花陽! ほ、ほ、ほ、ほ、本当なの!?! ひ、比企谷君とキ、キスしたの!?!」

「キス……えへへ♪」

まだ唇に残る甘い熱を確かめると、思わずにやけてしまう。数時間前にしてばかりだから、まだしつかり覚えている。とうにか忘れられそうにない。

唯一、絵里ちゃんは顔を伏せていた。

「そう……比企谷君は花陽を選んだのね……」

「いや、エリチはこの前会ったばっかやん」

あれ? 絵里ちゃん、どうしたのかな? 何だか哀しそうだけど……。

「あ、いたいたお姉ちゃん。差し入れ、って何してるの?」

バスケットを手に、雪穂ちゃんと亜里沙ちゃんがやってきた。二人共、最近スクールアイドルの活動に興味を持ってきているから嬉しいなあ。

そこで穂乃果ちゃんが、珍しい生き物を見つけた子供のように二人に声をかけた。

「花陽ちゃんに彼氏が出来たんだよ!」

「ぴゃうっ!」

「か、彼氏?! いいの!?! アイドルなのに!」

穂乃果ちゃんの突然の暴露に慌ててしまう。雪穂ちゃんの反応ももつともだと思う。

そこで真姫ちゃんが口を挟んだ。

「スクールアイドルだから、節度を持った付き合い方をすれば問題ないわ」

「あ、なるほど」

真姫ちゃんのフォローで、雪穂ちゃんもなるほどと納得してくれる。

「へえ、どんな人なんですか?」

興味津々といった感じの亜里沙ちゃんが、可愛らしく小首を傾げた。

「この人だよ」

穂乃果ちゃんが、この前のイベントの後、皆で撮った写真を出し、八幡さんを指し示す。

亜里沙ちゃんと雪穂ちゃんはぐつと顔を近づけた。

「わあ、目は怖いけど優しそうな人ですね〜」

「こら、雪穂！そういう事言わないの！目が腐ってるとか関係ないんだから」

「いや、そこまで言っていないし……どうしたの、亜里沙？」

「ハラ……シヨ……」

「え？」

楓

朝の教室はまだ人もまばらで、耳を澄ませてもぽつりぽつりと会話の切れ端が聞こえてくるだけだ。ジヨギングで頭が冴えているとはいえ、いつもより早く来た事を後悔してしまう。まあ、読書に集中してりゃあいいか。

そこで、誰かが近づいてくる気配がした。

「八幡」

柔らかなエルジェルボイスが耳朶を撫で、心を満たしていく。うん、俺はこの為に早く来たのだ。明日からも早く来よう。

「おう」

戸塚はものすごいニコニコ笑顔だ。スクールアイドルばりに眩しく輝いている。そして、俺の前の席に腰を下ろし、勢いよく告げてくる。

「おめでとう！本当によかった！」

何の事かは言わなくてもわかる。おそらく星空から聞いたのだろう。不思議と照れはなかった。

「あ、その……ありがとな。お前のおかげだ」

「いや、僕のおかげじゃないよ。八幡と小泉さんが……本当に好き合ってたからじゃないかな」

戸塚が顔を赤らめながら言うもんだから、こつちまで顔が熱くなってきた。

「その……俺一人じゃどうにもならなかった」

「あはは、八幡は奥手だからね」

「お前もだろ……」

まさか戸塚とこんな会話をする日がくるとは思わなかった。ああ、可愛い。控えめに言って可愛い。いや、浮気とかじゃないですよ、花陽さん。戸塚はほら、天使だから。

「あ、川崎さん。おはよう」

「おはよ」

川崎がけだるそうに教室に入ってきて、戸塚と挨拶を交わす。

「……おはよ」

「……うす」

珍しく俺にも挨拶をして、そのまま自分の席へと向かった。

いつの間にか、教室の人口密度がだいぶ上がっていて、いつもの賑わいが室内を満たしていた。

「あ、おはよ……」

「おう」

「おはよう、由比ヶ浜さん」

由比ヶ浜が気まずそうな顔で軽く手を上げる。わざわざ挨拶してくる辺りが律儀すぎるというか何というか。

はやくこの状況を打破しないとイケない。

いつものグループに入り、お喋りに興じる由比ヶ浜を少しだけ見て、戸塚に向き直る。「ちいーす、ヒキガヤくん！戸塚くん！」

誰だよ、朝のスイート戸塚タイムを邪魔するのは、と思いながら振り向くと、陽気な笑みを浮かべた戸部がいた。つーか声でけえよ。皆びつくりしてんだろ。俺もびつくりしたよ。

「あ、おはよ。戸部君」

「……おう」

「二人共、元気ないじゃん！月曜からそんなテンションじゃマジやばいっしょ！」

「あはは……」

「お前が元気すぎんだよ」

「あ、あれだべ。かのじ……」

咄嗟に戸部の首をホールドして黙らせる。普段ならあり得ない光景に、クラスメイト

の視線が思ったより集中さしていたが、今は人目より大事なものがある。

「この事は他言無用な」

「わ、わかったって!」

「事情は後で話す」

「ん? じゃあ、昼飯一緒に食おうぜ!」

「あ、僕も!」

「あ、ああ……」

「じゃ、また!」

戸部はそのまま、ポカンとしている葉山グループに交じり、いつものようにお喋りを始めた。

一瞬だけ、意外そうな顔をした由比ヶ浜と視線がぶつかったが、それも一瞬だった。

「つべーわ。スクールアイドルが彼女とか、ヒキガヤくんマジやべーわ」

「やばいかどうかは知らんが、まああれだ。活動の邪魔したくねーから、伏せておきたいんだよ」

「おー、俺めっちゃ口かてーから!」

口調だけ聞くと心配だが、戸部は意外と空気を読む事に長けているので、大丈夫だろ

う。

「いやー、μsのメンバーとかマジやばいわー。園田さんとか最高っしょ?」

「意外な推しメンだな」

「そう?ちなみに大岡は高坂さんで、大和は東條さんだから」

「何故それを発表した?」

大和は……………雪ノ下に鈍いと言われた奴か。まあ、自分がないものを求めたのか。童貞風見鶏は納得。何なら二番目には絢瀬さんを選びそう。

「そういや、話変わるんだけどさ」

戸部が急に真面目くさった顔になる。

「あの…………俺のせいであ、奉仕部が空気最悪じゃん?何か俺に…………」

「別にお前のせいじゃねーよ、それに…………」

俺はこの場にいる人間に、何より自分自身に向かって言った。

「やるべき事はわかってる」

「そっか」

戸塚が安心したように微笑む。材木座も戸塚も黙って頷いた。

あとは放課後を待つだけだった。

「一色」

今回の依頼者である一色に声をかける。

「あれ？どうしたんですか、先輩。今から奉仕部に行くところなんですけど」
「話がある」

簡潔に内容だけを告げた。

「……………どうだ？」

「あの……………私はいいいんですけど……………先輩は大丈夫なんですか？」

全て了承した一色は、どこか不安そうに聞いてくる。

「ああ、もう決めたんだ」

奉仕部の部屋に一色と連れだって入る。

「あ、ヒツキー。いろはちゃんも一緒なんだ！」

「……………来たのね」

「ああ」

「こんにちは」

とりあえず挨拶を終えて席に着くと、さっそく一色の生徒会長阻止の作戦会議に入ろうとする。だがあえて割り込んだ。

「平塚先生呼んでるから、それまで待つてろ」

「……どういふ事かしら?」

「あとで話す」

開いた文庫本から目を離さずに言う。

雪ノ下からは反論はなく、「そう」と静かに応じた。

予想通りに教室内は居心地の悪い沈黙に包まれた。時計の秒針がいつもより大きく聞こえ、グラウンドの喧騒も追従するように不規則な音の波を生んでいたが、どれも沈黙を引き立たせるだけだった。

5分くらい経過して、ドアの近くに人の気配を感じる。

「すまん。遅くなった」

平塚先生が騒がしく入ってきた。

今日は雪ノ下もノックの事は咎めない。

由比ヶ浜はどこか落ち着きがなく、視線をあちこちに彷徨わせている。

一色はこの後の事を話してあるので、こちらを横目で窺ってくるだけだ。

平塚先生は教室にいるメンバーを一人一人確認すると、早速本題に入る。

「それで、比企谷。話があると言っていたな」

「はい」

俺は一色に軽く目配せして告げる。

「一色に生徒会長をやつてもらいます」

室内に動揺が走るのを肌で感じながら、それでも話を続ける。

「さつき一色と交渉しました。条件付きですが」

「……………」

「……………」

「なるほどな。そして条件というのは」

黙ったままの雪ノ下と由比ヶ浜に代わり、平塚先生が先を促す。二人が反論しない事に感謝しながら、締めの話始める。

「俺が生徒会を定期的に手伝う事です。庶務として。それで先生に話があります」

雪ノ下と由比ヶ浜は何かを感じ取った顔をしている。平塚先生も…………おそらくは気づいているだろう。

俺が今から何を言おうとしてるかを。

「本日で奉仕部を辞めます」

水を打ったような静寂と呼ぶにふさわしい部室内。俺はあえて誰の反応も確かめず、平塚先生に頭を下げていた。

「ふむ…………理由を聞こうか」

その言葉は優しく、責めるようなニュアンスは感じなかった。

「なんつーか、その……」

自然と砕けた態度に戻りながら、はつきり言つてやった。

「俺は変わります」

「ヒッキー……」

「……………」

「俺は雪ノ下みたいの世界を変えるなんて言えない。由比ヶ浜みたいな人徳もない。だから……俺は変わります」

昔、雪ノ下に変わる事は現状からの逃げだといった自分を思い出しながら言う。

「たとえそれが俺らしくなくても……」

由比ヶ浜が何か言おうとしたが、結局飲みこみ、目を伏した。

雪ノ下は意外なくらい呆気にとられていた。

一色は初めて見せる真剣な眼差しを向けてきた。

平塚先生はただ優しく微笑んでいた。

四対の視線を受け、俺はただ一言だけ告げる。

「俺は変わってやる」

大事な人を思い浮かべながら言う。

これが今回の解決策だ。

もう花陽を泣かせたくない。

泣かせる可能性は極力排除してやる。

ならず、いつまでもスクールカーズ最下層に甘んじているわけにはいかない。

今から変えてやる。

平塚先生の手が肩に置かれた。

「わかった。退部を認めよう」

「……………」

「……………」

「ありがとうございます」

「じゃあ、退部届は明日にでも渡そう。それじゃあ、私は戻るよ」

「あ、私も行きます」

一色も白衣の後ろ姿を追うように出て行った。

また、部室内が静寂に包まれる。

だが俺はひと仕事終えたので、どこか清々しい気持ちになっていた。

「あのさ、ヒッキーー！」

由比ヶ浜が立ち上がり、声をかけてくる。

「この前の事なら……」

「違う」

俺はかぶりを振って、由比ヶ浜の言葉を止める。

「ただ変わりたくなっただけだ」

何度も繰り返し返したフレーズを呟き、俺も部室をあとにした。

雪ノ下は俯いたまま、どこか空白を見つめていた。表情を見ても、感情は読み取れなかった。

翌日。

廊下に貼り出された掲示板には、一番下に『生徒会庶務・比企谷八幡』と書かれていた。

優しくなりたいな

人の少ない下駄箱で靴を履き替え、いつもの道をなぞるように教室へと向かう。

生徒会庶務に就任してから数日が経ったが、今のところ日常にさしたる変化はない。そりやそうだ。学校内における所属団体が変わったただけだ。たったそれだけで何かは変わらない。今はじっくりとしつかりと足場を固めていけばいい。それを淡々と繰り返し返すだけだ。

「あ、ヒツキー。おはよう」

背後から、てててつと由比ヶ浜が駆けよってくるのが聞こえる。

「おう」

「あの……生徒会の方はどう？」

「……引き継ぎは済んだから、あとは定例会議の日時決めだな」

「そっか」

リュックを背負い直した由比ヶ浜は、やや下に視線を向けたまま、いつもよりボリュームを絞った声で聞いてくる。

「あのさ……何でヒツキーは変わろうと思ったの？」

「……………」

「その……だ、誰か……」

「さあな。それよか、そつちはどうなんだ？」

話題を無理矢理変える。由比ヶ浜は俺の気持ちを察したのか、それ以上は追求せず、こちらの質問に答えてくれた。

「あー、ゆきのんはいつも通り……かな」

「そうか」

「うん。その……色々何か抱えてるんだと思う。でもね……あたし何があっても待つよ。それで……たまに踏み込むの。……これまで、ヒツキーに甘えてばっかだったから」

「いや……俺は何もしてねーよ」

「はいはい」

そこでいつもの調子を取り戻したのか、からかうように返事しつつ、俺の数歩前を歩き出した由比ヶ浜は、どこか清々しかった。その背中がいつもより頼もしく見えたのは気のせいじゃないんだろう。

「そういえば、今度の日曜日にハロウィンイベントがあるんだよね？」

「ああ……そういやそうか」

あれで盛り上がる奴らがハロウインの本当の起源やらを知ってるとは思わんが。

「うむ……我々はそのようなりアイベントなどし、し、知らん！」

おい。我々って……勝手にお前と同じグループに入れるな。

「ハロウインとかマジやべーわ。最近盛り上がりまくりんぐでしょー」

たまにベストプレイスに顔を出す材木座と、日替わりでここと葉山グループに顔を出す戸部も、ハロウインには興味があるようだ。

戸部の言う最近とは、ここ数年の事だろう。いつの間にか、リア充御用達の一大イベントになってる。普段なら鼻で笑うイベントだが、今年は秋葉原でスクールアイドルがハロウインイベントをする事になった。

「俺は行く。コスプレはしないが」

むしろ花陽と戸塚と小町をコスプレさせたい。花陽は白米で手をうってくれるだろう。いや、無理か。

「あ、僕も行くよ」

戸塚はおそらく星空と約束でもしているのだろう。何故知っているかという、小町が電話で大声で話しているからである。

「うむ。我も行ってやろう」

「何で上から視線なんだよ……」

お前は西木野のコスプレ姿が見たいだけだろ。やっぱり興味津々じゃねえか。

「俺も行つていい?」

「俺に決める権限なんてねーよ。でもイベントは人数多い方が盛り上がるだろ」

「そうだね。戸部君盛り上げ上手だし」

「そりゃあ、イベントは楽しまないと損でしょー! ♪ sより目立つかもしれないわー」

「それは止めとけ」

石投げられても文句言えんぞ。

戸部にツツコミを入れてみると、メールが来た。東條さんからだ。何やら添付されている。
いる。

開いてみると、動画のようだ。

そこには見慣れない恰好をした花陽がいた。

『「ここにここに〜! あなたのハートに、ここにここに〜♪笑顔届ける矢澤にここに〜♪
青空も〜、にこ♪」』

……花陽さん、何やってますかー?

いや、可愛いけどさ。うん、可愛い。てか、何でこんなに可愛いのか?

「「……………」」

3人のニヤニヤした顔に苦笑で返し、お宝動画を保存した。東條さん……恩に着るぜ。

たまご

普段から賑わっている秋葉原の街だが、今日はいつもと違う賑わい方を見せていた。

秋晴れの空の下に、思い思いの格好に身を包んだコスプレイヤー達が秋葉原の街を占領している。俺は数少ないただの私服だ。マジかよ。まだぼっち力は健在なのか……長年の習性って怖い。

ちなみに他の3人はというと、材木座は鎧を着て歩く度にガツチャガツチャとうるさく、戸部はサツカー選手のユニフォームで騒がしく、戸塚はいつか着ていた魔法使いのマントが可愛かった。まさか本当にコスプレするとは……べ、別に寂しくなんかないんだからね！

「ヒキガヤ君、私服とかマジうけるわー」

「あはは、まあ……さすが八幡だね」

多分、いや間違いなく褒められてはいない気がする。二人のお言葉を頂戴し、人ごみを上手く躲しながら、俺は苦笑するしかなかった。

「その方、スクールアイドルのライブはいつから始まるのだ？」

「ああ、13時からだ。まだ、もう少し時間がある」

材木座が武将気取りなのはウザいが、まあお祭りだし、極力シカトしておこう。害はない……はず。不快だけど。

「μ sは最後の方だからね」

「あ、いたいた！こつちにやー！」

少し離れた所から、こつちを呼ぶ声がある。人ごみの中でもよく通り、なおかつその特徴的な語尾で、誰のものは明らかだった。

「あ、星空さーん！」

戸塚がいち早く反応する。その反応が嬉しかったのか、星空はこつちに向かって、器用に人ごみをかき分けながら、駆けよってきた。

「ひっさしぶりにやー!!」

「うん、元氣そうだね！」

「もっちろん！そして……」

星空はこちらを見てニヤニヤしている。もちろん予想していた。「比企谷先輩おめでとう！かよちんを泣かせたら許さないにやー！」

「……ああ」

「それと材木座先輩と……」

「ちいーす！俺、戸部翔つす。ヒキガヤ君達のマブダチだから！」

いつの間にか俺達の関係は、マブダチにアップデートされていた。まあ、別にいいけど。

「あはは！なんか面白い人じゃ！μ sの星空凜です！よろしくお願いしますじゃ！」

「うむ、では行こうか！」

「いや、何でお前が仕切ろうとしてんだよ」

場所知らねーだろ。黙ってしんがりを務めてろよ。

「皆を連れて来たにゃー！」

ノックもそこそこに扉を開けた星空に続き、控室に入ると、こちらは想像以上に騒がしく出迎えられる。

「わあー！花陽ちゃんの彼氏だ！やっとなで見たよー！ー！！」

「本当だ〜♪ねえ、花陽ちゃんとの事をじっくり聞かせて♪」

「こら、二人共！まだ挨拶をしていないでしょう！」

すごい勢いで詰めよってきた高坂さんと南さんを、園田さんが制する。ちなみに俺は園田さんに軽くびびっていたので、初対面の空気感とかが余り感じられない。戸部のテーションが上がっているが、異性としてではなく、有名人を見かけた時のような感じに見える。何だかんだ一途ではあるのだろう。

「比企谷君！」

園田さんの制止を振り切るように、いきなり絢瀬さんがずっと詰めよってきた。その勢いに、俺は足が竦んで動けなくなる。

彼女はどこか慌てたように口を開いた。

「は、花陽と付き合ってるの!?!」

「……あ、はい」

「そう……そうなの。付き合ってるの……」

何故かしよんぼりしてしまふ。あれ、あまり歓迎されてない？

「はい、エリチそこまで。落ち着き」

東條さんが間に割って入ってくれる。うん、相変わらずいいおつ……いい人だ。……

だって仕方ねーじゃん！男の子なんだもん！材木座だって戸部だって、今見たもん！

「比企谷君、はやく愛しの彼女に会わんでええの?」

東條さんの言葉に合わせるように、その背後から、ひよこつと花陽が出てくる。

その待ちに待った姿は、1週間前に見たばかりなのに、すごく久しぶりに思えた。

「八幡さん……」

「お、おう……」

自然と手が花陽の髪に触れる。待ち望んだ感觸を味わいながら、見つめ合う。それだ

けで胸が高鳴り、頬が緩んだ。

「……その、何だ。応援してる」

「はい、見ててくださいいね」

そう言つてにつこりと微笑む姿を見ると、引き寄せたくなつてしまふが、ここは堪えなければならぬ。今は見守ることに専念しなければ。

『……………』

周りの色んな感情が入り混じつた生温かい視線に気づくには、しばらく時間がかつた。

聞かせてよ

「ハ、ハレンチです！」

園田さんが顔を真っ赤にして、俺と花陽の間に割って入る。

「そ、そのような事は人前でするものではありません！」

「そ、そ、そうよ！せめて私にも……じゃなくて、本番前なんだから集中しないと！チカア！」

「ごめんなさい……」

二人して謝る。……はい、本番前という事をすっかり忘れていました。しかし、絢瀬さん嘸みすぎだろ。うっかり胸キュンするかと思つたわ。

「ええ、もつと見たかつたのに」

「穂乃果、あなたはリーダーでしよう！」

「見たかつたなあ〜♪」

「ことりも！穂乃果に便乗しないでください！」

園田さんのツッコミキレツキレだなあ、などといらん事を考えていると、いきなり園田さんの顔が目の前に来ていた。整った顔立ちと、控えめながらも甘い香りに、緊張

して胸が高鳴る。

「比企谷君」

「ひゃ、ひゃい……」

「むっ……」

距離をかなり詰めてくる園田さんに花陽がジト目を向ける。

「恋愛は自由です。あなた達の交際は構いません。ですが高校生らしい健全な、節度ある交際を心がけてください。彼女はスクールアイドル・*μ's*のメンバーなのですから」

「あ、ああ……」

近い近い近い近い近い!!だが俺の心情などお構いなしに、園田さんは至近距離で睨みをきかせてくる。ぶっちゃけ平塚先生並みに怖い。あとどうでもいいが、胸は平塚先生の大勝利だ。ヨカッタネ。

「むう……」

花陽さん違うんです!怒らないで!黒い何かが出るから!本当に緊張してるだけなんです!睫毛ながいなあ〜とか、唇の形がきれいだな〜とか思ってるから!ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「ほらほら、本番前なんだから、そろそろ着替えるわよ」

西木野さんが手を叩きながら皆に準備するよう促す。た、助かった……。

「じゃあ、俺らも行くべ！」

戸塚がそう言いながら、一瞬だけ星空とアイコンタクトを交わしたのを、俺は見逃さなかった。星空も少し顔が赤い。うん、ほっこりする。

「皆の者、出陣だ！敵を薙ぎ払えー!!」

いや、敵とかいねーから。薙ぎ払わねーから。ちよつと μ sの皆さんが苦笑してるから。本当にやめて。オタクノリは一般の方にはきついことが多々あるから。

「これマジで楽しみすぎでしょー。俺ら応援してっからー!!」

「じゃあ……楽しみにしてる」

俺は部屋を出る際に、花陽の頭をもう一度ぼんつと撫でながら、その反応をあえて見ずにドアを閉めた。

「甘々やね〜」

「今度、また話聞かせてね♪」

「あうう……」

「いや、いいもん見れたわ」

「うむ。余は満足じゃ」

戸部は満足げに、材木座はややキャラ崩壊を起こしながらしみじみと呟く。

イベントの開始が近くなり、さつきよりもさらに人口密度が高い秋葉原の街は賑やかなって言葉じゃ足りないくらいだ。人ごみはまだ苦手なので、やはり疲れてさそまう。

「あ」

「ん?」

聞き覚えのある声に振り向くと、見知った顔がそこにあつた。

「あれ、海老名さんじゃね!」

戸部もその姿に気づき、声をかける。

「珍しい組み合わせだねー。はっ、これはもしや、とべはちのチャンスー!」

「いや、そんなチャンス一生涯ねーから」

「海老名さんは一人?」

このノリに戸部は慣れてるのか、軽く受け流すように尋ねる。

「友達の付き合ってきたんだけどねー。今は自由行動。二人は? いや四人だ」

「何となく来たんだよ」

「ふーん、そつかあ」

海老名さんは特にそれ以上聞いてこない。だが、少し何か考えこむような仕草を見せ、急に真面目くさった顔になる。それと同時に、周りの喧騒が遠くなつた気がした。

「……二人に用事があるんだけどいいかな」

「すまん、そういう変なのは……」

「いや、真面目な話だよ」

海老名さんは、これまでに見たことのない、言葉通りの真面目な表情をしていた。

インディゴ地平線

俺と戸部は海老名さんに連れられて、駅の近くの喫茶店に入った。正直、何を要求されるのだろうか、という不安と、戸塚が材木座と二人つきりしている内に、何か変な事されるんじゃないか、という不安がない交ぜになっていた。

「あのさ……」

海老名さんが重々しく口を開く。

「二人って最近一緒にいるけど、やっぱり……修学旅行の件があつてからだよね」

「……………」

「……………」

「その……私……」

おそらく、海老名さんから見れば、俺が戸部に彼女や葉山から依頼された事を話して仲良くしているようにも思えるかもしれない。たまに教室内での葉山グループを見てみると、必要以上の愛想笑いが見て取れる。だとしたら、これは俺のミスだ。さて、どうしたものか。どう彼女を言いくるめるか。

「あー、違うって！」

考えていると、戸部がいつもの軽薄なノリで割って入ってきた。

「何っーかさ。俺、変わりたくなったんよ」

「戸部っち……」

普段の戸部らしからぬ言葉に海老名さんは目を丸くする。運ばれてきたコーヒーにも気づいていないようだ。

「いや俺さ。何も自慢できるもんねーじゃん？今まではそれでいつかなーって思ってたけど、ヒキガヤ君見てたら、俺も変わりてーなって……」

「……………」

「だからさ。俺、ちゃんと変わって、海老名さんが心を開いてくれたら、もっかい告白する」

「戸部っち……私……待ってるとは言わないよ？」

「いいんだよ。ただ俺が変わりてーってただだから」

「そっか……」

彼女はこちらに申し訳なさそうな瞳を向ける。

「ヒキタニ君……ヒキガヤ君、ごめんね。奉仕部辞めたのって私のせいでしょ？」

「ちげーよ。生徒会入るから辞めたんだよ」

「……私も、変わるかな」

海老名さんは目を伏せ、カップの中のコーヒーをしばらく眺めてから、しばし瞑目した。そして、数秒間閉じられた目がゆっくりと開き、こちらに向けられる。その目は少し潤んでいるように見えた。

「戸部っち……すぐには無理だけど……私も、少しずつ、変わっていくから」
「おう」

相変わらずの軽いノリだが、だからこそ、そこには戸部なりの気遣いが見て取れた。海老名さんは一息ついてから、何かを取り払ったかのような顔つきで、俺に向き直る。
「ヒキガヤ君、ごめんなさい」

「いや、謝られるような事は何もねえよ。俺が自分で決めた事だ」

「あ、ヒキガヤ君！そろそろ時間だべ！」
戸部がスマホの画面を見せてくる。

「ああ、行くか」

「じゃあ、彼女によろしくね」

唐突かつ衝撃的な発言に足がピタリと止まる。

「は？」

「いや、あんな公衆の面前で……ねえ」

海老名さんは、顔をじんわり赤く染めながら、からかうような笑顔を見せてくる。ま

あ、そりやそうだ。戸部にも見られてるわけだし、他の誰にも見られていない保障などどこにもない。

「まあ、あれだ……黙っててくれたら助かる」

「了解。じゃあ私はここで友達を待つてるから」

「おう。そんじゃ海老名さん、また学校で！」

「うん、またね。戸部っち、ヒキガヤ君」

「行こうぜ！ヒキガヤ君」

「あ、ああ……」

こいつ、案外かっけーじゃんか。軽いけど。

さて、そろそろ戸塚を材木座から救い出して、花陽のアイドル姿を目に焼きつけますか。

店の外に出ると、空の青さがさつきより澄み渡って見えた。

ベビーフェイス

μ, sのステージははつきり言つて、俺の想像を遥かに超える盛り上がりだった。その磨かれたパフォーマンスは明らかに場の空気を変え、観衆の目を釘付けにしていた。天使のコスプレをした花陽に見とれながら、祭りの雰囲気には酔いしれる。そんな最高の時間が過ぎていった。

「お疲れ」

「八幡さん！」

控室前で花陽が駆け寄ってきて、がばつと勢いよく抱きついてきた。

「お、おい……」

「ふふつ、嬉しくてつい……」

「そうか……」

言いながら、そつと抱きしめ返す。花陽の小さな体が、すっぽり腕の中に収まるのを感じながら、甘い香りを吸い込んだ。

「他のメンバーは？」

「学校の友達と話してますよ」

「そっか……花陽はぼっ「違います」はい」

他愛ないやり取りをしながら、花陽から手招きされて、控室の中に入る。

ドアを閉めたら、街の賑わいがさらに遠くなった。

自然と引き寄せられていく。

「……………」

「……………ん」

唇を離し、見つめ合うと、その潤んだ目が本当に可愛くたまらなくなり、また温もりが重なる。

「……………っ……………！」

「……………ん……………っ」

もつと重ねたい。もつと花陽の事が知りたい。

それだけで体が動き出す。

「……………んっ」

舌が触れ合う瞬間、花陽は驚いたようだが、すぐに受け入れ、舌が絡まり出す。ざらついた感触を味わいながら、深く深く、互いの温もりを確かめる。

「……………！」

辺りをなぞるように滑り、今度は丈の短い衣装で露出している太股の辺りに手を伸ばした。

「……………っ！」

花陽がまたびくと跳ねたので、手を引っ込める。だが花陽は、耳元で囁いてきた。

「八幡さん、いいですよ」

「……………？」

「私は……………八幡さんになら……………何だって……………」

こちらが反応する前に、また激しく唇と舌が絡み合い、湿った音が耳朶を撫で、自然と手が動く。

また、花陽の太股に触れ、柔らかさを確かめ……………

「花陽、ここですか？」

全てをリセットするように、ガチャツと誰か入ってくる。

姿を見せたのは園田さんで、彼女はこちらを見て、瞬時に顔を真っ赤にし、テンパリでした。

「は、は、は、花陽、ひ、ひ、比企谷君……………何を……………！」

「……………！」

俺と花陽はその様子を、何をするでもなくポカンと眺めていた。というか動く事がで

きなかった。体が半分、夢の中にいるような気分だった。
「……………きゆうう……………」

そのまま園田さんは気絶してしまった。

ナサケモノ

「はっ、私は……何を……」

やっと園田さんが目覚めて、キョロキョロと周りを見回した。

「海未ちゃん!」

「心配したよ」

高坂さんと南さんがそのぼんやりとした寝ぼけた顔を覗き込み、安堵の声を漏らす。

現在、控室にはμ sと総武高校メンバーが集まっている。皆、気絶した園田さんを心配していた。ちなみに俺と花陽はひたすら気まずい。かといって細かい事情を説明するわけにはいかない。

「まったく、心配かけないでよね」

「海未ちゃん、具合悪いん?」

矢澤さんと東條さんもほっとした表情を見せるが、一瞬だけ、東條さんがこちらを見て、にやっという意味ありげに微笑んだ気がした……まさかな。いくら彼女にスピリチュアルな力があるとしても……。

「海未、大丈夫?病院行く?」

絢瀬さんが穏やかな声音で問う。それを園田さんは首を振って断った。

「いえ。体は何ともないのですが……おかしいですね。何も思いだせません……」

「え、本当!？」

「本当か!？」

「え、ええ……どうしたのですか?二人共……」

「……いや、何でも」

ぐいぐい詰め寄る花陽と俺に園田さんがたじろぐ。今のやりとりで星空と西木野は何かを察したのか、呆れたような笑顔で俺と花陽を見ていた。

そうこうしている内に、やがてイベントは終わり、日も傾きかけているので、もう解散する事にしたのだが、途中まで一緒に歩こうという事になった。

材木座が先頭を歩いているが、鎧や兜が重くて疲れたのか、ガツチャガツチャという音に混じって、ゼエゼエ息が荒くてやかましい。戸塚は星空や西木野と話ながら相変わらずの天使ツぷりだ。そろそろスクールアイドル活動を始めた方がいい。ファンクラブ会長になる準備はできている。

そんな事を考えながら花陽を見ると、彼女もこちらを見ていて、どちらからともなく口を開いた。

「危なかったな」

「危なかったです……」

皆と少し離れた場所で花陽としみじみ呟く。

はい。正直に言えば、葬られるかと思いました。

それと、さつきまでの行為を思い返すと、やはり恥ずかしい。俺ってあんな風になっちゃうのかよ。外では自重しよう。

隣の花陽を見ると、さつきまでの火照りは姿を潜め、いつものおっとりした小さな女の子に戻っていた。

……俺がどうこうより、花陽があんな変貌を遂げるのも、驚きかもしれない。

まだ体中に残る感触を噛み締めながら、秋風に吹かれて、熱を冷ます。

「あ、それ、つけてくれてたんですね」

「ああ」

花陽は俺の手を取り、手首につけた黒のリストバンドを愛おしそうに眺める。この前、泊まった時に渡されたやつだ。

「八幡さん、あの時は気づかないふりしてましたよね♪」

「あ、ああ、まあ……」

リストバンドをつけているのが嬉しいのか、その口調は弾んでいた。

そのことを心地良く思いながら、花陽がμ sに入った頃を思い出す。
気づかないふりか……確かに。

あの時から……いや、もしかしたら出会った時から花陽に夢中になっていたのかもしれない。

「八幡さん」

「どした？」

「また観に来てくださいね」

「……ああ」

「ふふっ、ありがとうございます♪」

花陽はやわらかく微笑むと、一瞬だけ手をきゅつと握って、前を歩く星空達に交じって談笑し始める。その背中を眺めながら、あと何回、花陽のアイドル姿が見れるのだろうと考えてみた。全て脳に焼き付けておかねば。

「ヒキガヤ君」

戸部が話しかけてきて、甘やかな思考が遮られる。

「今日は誘ってくれてありがとう」

「別に、人数多い方がいいと思っただよ」

肩組んでそんな事言っていると、また擬態忘れた海老名さん来ちやうだろうが。

「そういや、こいつも変わるって言ってたな。どんな姿を思い描いているかは知る由もないし、また、知らなくていい。誰かにベラベラ話すものでもない。」

　　それに俺だっただけで変わっている途中なのだから。
　　数秒間吹き抜けた風は、少しずつ近づいてくる冬の足音のように聞こえた。

ルナルナ

「「「「「ラブソング〜!?」」」」」」

希ちゃんの発言に皆が驚く。

ラブライブ全国大会を目指す為、μ s が作るべき曲。

普段は自分からあれこれ言わない希ちゃんが提案したのは、『ラブソング』の制作だった。

確かにμ s にはこれまでラブソングがなかったなあ。アイドルなら既に歌っていてもおかしくないジャンルなのに。

「そういえば何でこれまでなかったんだろっ?」

穂乃果ちゃんも、同じ事を考えていたようだ。

「それは……」

皆が希ちゃんの視線を辿り、ある人物に一斉に目を向ける。

そう、μ s の作詞担当・園田海未ちゃんに。

「……? えっ、私ですか!?!」

『はあ……』

「はい」

何だろう……絵里ちゃんが八幡さんの事になると、どこかいつもと違うような……いや、気のせいだよ。

「でも、私……恋愛マスターなんかじゃ……」

「え？でも比企谷君って、ものすごい奥手そうやから、てつきり花陽ちゃんが猛アタックしたんやと思っただけど……」

「も、猛アタックって……」

思い返してみる。

……うん、私からだ。今考えても、自分の行動力に驚いてしまう。

でも、この前のは……

「あうう……」

「どうやら、凶星みたいやね」

「そ、そうなの!!は、花陽からキスしたの!？」

「ハ、ハ、ハ、ハレンチな!」

「わあ、花陽ちゃん。聞かせて〜♪」

「ダ、ダ、ダレカタスケテエ〜!」

放課後の部室。今日もスクールアイドルは賑やかだ。

「つくしー！」

「先輩、風邪ですか？」

一色が心配そうに聞いてくるが、首の傾げ方とかがいちいちあざとい。他の役員も一色「あざとい」という認識なので、冷めた眼差しを向けていた。加えると、一色の視線からは「移すなよ？」という無言のメッセージが込められている。

「……いや、何か違う気がする。それよか会議始めるんだろ」

「あ、そうですね！それじゃあ、ちやっちやと終わらせて帰りますか！」

「そこはもう少しオブラートに包めよ」

それから、20分ほどでちやっちやと会議を終え、生徒会室を後にした。

「あ、ヒツキー」

「おう」

由比ヶ浜がとことこ駆けよってくる。

「ヒツキー、今帰り？」

「ああ、まあな。そっちは部活休みなのか？」

「うん。今日は何も依頼が来そうにないから。そっちはなんか急いでるね」

「……今からバイトがあんだよ」

「へえー、ってヒツキーがバイト!?ど、ど、どうしたの!?大丈夫!?」

由比ヶ浜の表情が、驚愕どころか恐怖に染まっていた。何でだよ。大丈夫って……。

「いや、失礼……じゃないな。確かに俺らしくはない」

「……本当に変わったね。ゆきのんからも聞いたよ。今、国語学年1位なんですよ?」

「……まぐれだよ。まだ一回だけだからな」

「あたしも何か始めよっかなー」

「まず、料理をまともにしろよ。焦がさないようにするとか」

俺の指摘に、「何をー!」と怒った由比ヶ浜の声を背に、らしくないバイトをしに行くため、急いで校舎を出た。

冬特有の暗くどんよとした空は、そろそろ初雪が零れ落ちてきそうに見えた。

シロクマ

「それで……何故俺はここに呼ばれたのでしょうか」

花陽と並べてテーブルの前に座らされ、*ムッ*の視線を一身に浴びていた。わーい、モテ期到来だー。ほら見ろよ、この園田さんの怪訝そうな表情！割とガチで怖い。何かのきっかけでこの前の事思い出すんじゃないかと……。

「比企谷君に花陽ちゃんとの事を出会いから今に至るまで、じっくり聞かせてもらいたいなあ〜って！」

「はあ……………はっ!？」

突然の頼みに戦慄が走る。その手の自分語りはただただイタいだけな気がする。ソースは俺。奉仕部時代に何度ドン引きされた事か。

逡巡していると、向こうから声がかけられ、襖が開き、見覚えのある二人組が出てきた。

「はい、どうぞぞ」

お茶が丁寧差し出される。湯気を発しているそれは、寒い時期にはありがたい。えっこの子は……確かこの前見た高坂さんの妹だ。

「あ、どうも」

高坂さんの妹は、笑顔のまま俺と花陽を交互に、興味深そうに見てくる。不快ではないが、くすぐったい。

「ど、どうぞー!」

続いて、もう一人の女の子がお茶菓子が置く……確かこの子は絢瀬さんの妹だ。

もう小町とこの二人でアイドルユニットを組ませたい。俺はプロデューサー兼作詞家として不労所得を得る。なんて素晴らしい。

「どうも」

「ハラ……シヨ……あわわ」

「亜里沙……」

絢瀬姉妹がうっとりとした切なそうな表情を浮かべている。しかも何故かこちらに目を向けている。

それと反比例するように何故か周りの目は白けていた……ナニガオコツテイルノデシヨウカ?

「あ、えくと、それでね!」

気を取り直すように南さんが本題の説明を始める。

「はあ……ラブソングね」

「そうなんだよ。それで、花陽ちゃんの視点からはある程度聞いたんだけど、今度は比企谷君からの視点から聞きたいなあ〜って♪」

南さんの目がやけにキラキラしている。何だこのほんわかめぐるんパワーに匹敵するふわふわオーラは……！

「おねがい♪」

ぐっ！やばい！ここにきて一色のようなあざと可愛さを出してくるとは！中学時代なら間違いなく騙されてた！

「ハチマンサン」

「はい」

いや、引つかかったフリしてるだけです。何というか、相手の手札を探る作戦つてやつですよ。まずは敵を知るところから始めなきゃいけないからな。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「比企谷君、お願いできるかしら？今後の為に……曲作りの参考にぜひ聞かせて欲しいの」

「私も……聞きたいな」

絢瀬姉妹からも懇願される。

とりあえず花陽を見てみると、顔をほっと赤くして、逸らされた。

「ねえねえ、凜が聞くのも今さらだけど、かよちゃんを初めて見た時、どう思ったの？」

星空が聞いてくる。お前かよ。お前が真っ先に聞くのかよ。

しかし、*μs*のため、何より花陽のためとあらば……

「……………可愛い」

「あうう……………」

言葉を搾り出したが、何この羞恥プレイ。はやくも帰りたい。

「すまん。やっぱ無理だ」

「そうですよ。比企谷君が困っているではありませんか」

「花陽も顔真つ赤よ」

「それよりアンタ！」

小さな子……もとい矢澤さんから指をさされる。行儀悪いぞ。

「約束は守れてるんでしょうね!!」

「に、にこちゃん……………」

「もちろん」

自分から言いふらしてはいない。イレギュラーな出来事はあったが、矢澤さんが危惧するようなマイナスには働いてはいない。

「知らないかもしれないけど、花陽はそこそこファンもついているスクールアイドルなの

よ。これからも付き合っていけるの？」

「……俺は今の自分が花陽に釣りあっているとはおもいません」

おそらく予想外であろう俺の言葉で、部屋の中にしんと気まずい静寂が訪れる。安心しているのは、テーブルの下で手を握り合っている俺と花陽だけだろう。

気まずい空気を長引かせてもあれなので続ける。

「でも……一緒にいたいから……そのためには、何だつてやります」

昔の自分が聞いたたら、薄っぺらいと笑いそうな、飾り気のない本音を言う。

言葉に合わせてぎゅつと強く握られた手だけで、花陽の表情がわかる気がした。この温もりと安らぎに嘘はつけない。

厳しい表情をしていた矢澤さんは、俺の返事を聞いて、にっと満足そうに笑い、向かいにいる園田さんに告げた。

「聞いたわね、海未。今の参考にしといて」

雪風

「あ、比企谷君。ちよつといいかな」

「……おう」

生徒会副会長の本牧が話しかけてくる。ここ最近は、特に珍しくもない出来事だ。とはいえ、話す内容は生徒会活動がほとんどだが。

本牧はまだ幾分、遠慮の残る口調で話を切り出す。

「次の定例会議なんだけど……」

「ああ」

今は生徒会庶務をやっていて、さらにどこから漏れたのか、国語の成績が学年1位という事もある程度知られているせい、クラス内での何かが変わった気がする。その何かは気のせいではなく、かといって説明もできない。

俺達は必要最低限のやりとりで、会議の日時と内容の簡単な打ち合わせを済ませた。

「それじゃ、よろしく」

「ああ」

本牧は颯爽と階段を降りていった。案外、書記さんとデートかもしれない。あの二

人、隠してゐるようでわかりやすいし。

「ヒツキー」

下駄箱まで歩いていると、今度は由比ヶ浜が声をかけてきた。だがいつもの緩い感じはなく、シリアスさを滲ませた表情をしている。

「どした？」

それには気づかないふりをして、平静を装いながら返事をした。

「ちよつといい？」

その声音の持つ固い空気からして、どうやら断れる空気じゃないようだ。

図書室の人氣のない場所まで行くと、由比ヶ浜は鞆から何かを取り出す。

「あの……これなんだけど」

何やらパンフレットらしき冊子を、開いて見せてきた。そのページを訳も分からぬま
ま覗き込む。

「んっ……………はっ!？」

目の覚めるような気持ちで、開かれたページの片隅を、もう一度確認の為に見返す。
そこには、この前の結婚式場でのイベントの後に撮影された写真が載せられていた。

……そういやすっかり忘れてた。

「うちのお母さんが、知り合いの結婚式に行った時にもらってきたパンフレットなんだけど……あの……これって……ヒッキーだよね？」

髪形もセットされて、普段着ることのない服を着ているので、ただのクラスメイトとかならば分からなかったかっただろう。それに、このパンフレットは利用客にしか渡さないらしいから、知り合いの誰かに見られる可能性は限りなく低いと思つてた。まあ見られても色々と言ひ訳はできるのだが……

「ああ………」

由比ヶ浜は質問の形式をとつてはいるが、何かについての確信があるようだ。なら誤魔化す時間が勿体ない。だからここは肯定して、由比ヶ浜の言葉を待つ。こういう事をいたずらに言いふらす奴ではないので、そこは安心していい。

「もしかして……付き合ってるの？」

「……ああ」

「……そっか」

由比ヶ浜は俺の言葉を確認するように、パンフレットの写真に目を落とす。その目に憂いの影を見た気がした。

「知り合いだったの？」

「2年に上がる前だ」

「……じゃあ、私より早いんだね」

実際には、由比ヶ浜とは入学式で出会っているが、その頃は知り合っていない。だから、その言葉は正しいのだろう。

由比ヶ浜は窓の外に目をやり、ぽつりと呟いた。

「ヒッキーが花陽ちゃんと、か……なんか不思議」

「俺もそう思ってる」

「でも、最近変わったもんね……ヒッキー前よりずっとかっこいいもん」

「……」

ストレートにそう言われると、どう反応していいかわからない。きっと言われ慣れてないからだろう。

「ヒッキーが変わったのって、花陽ちゃんのため……なんだよね」

「……ああ」

由比ヶ浜は顔を伏せ小さく「そっか」と呟き、パンフレットをパタンと閉じる。

そして、すぐに顔を上げ、朗らかな笑顔を見せた。

「ヒッキー、おめでとう」

「……ありがとう」

「あ、別に誰にも言ったりしないから！私、口固いから！」

「……知ってる。それよか部活はいいのか？」

「あ、やば！ゆきのんに怒られる！」

そう言つてバタバタと鞆を持ち、駆けだしていく。

「ヒッキー、じゃあね！また明日！」

「……ああ、じゃあな」

由比ヶ浜は振り返る事なく廊下を走り、角を曲がったので、その背中はずぐに見えなくなつた。

ハチの針

「どう……でしようか？」

海末ちゃんが照れながら開いたページに、皆が視線が集まる。

そこには、昨日完成したばかりの歌詞が書かれていた。

「素敵〜♪」

ことりちゃんが甘い声で、真つ先に感想を口にする。その表情は、この曲の衣装を思い浮かべているのか、うつとりしていた。

「ええ歌詞やね〜。まさか、海末ちゃん……花陽ちゃんに続いて恋人が！」

「なっ……何を言っているのですか！そんな訳ないでしょう！」

「まあまあ、それより海未。お疲れ様」

からかう希ちゃんに、真つ赤になって怒り出す海末ちゃんを絵里ちゃんが宥める。

「よし、じゃあ皆練習始めよう！」

穂乃果ちゃんの掛け声に、みんなが気合いを入れだした。日に日にモチベーションが高まっているのを感じ、今日の練習もいいものになりそうです！

私は深呼吸して、気持ちを整えた。

八幡さん。私、頑張ります！

「千葉でラブライブの関東大会？」

「そうだ。幕張メッセでな」

放課後の生徒会室。2学期の終業式での一色のスピーチを皆で考えていると、平塚先生が思いがけないニュースを持ってきた。

「いや、平塚先生。いつまでも若い気持ちでいたいのはわかりますけど、さすがにアラサーがスクールアイドルとか無理がありますよ……」

「何か言ったか？」

「何でもありません……」

拳が右頬の辺りで空を切る。これ以上何か言えば、猛虎破碎拳が炸裂し、俺は粉々にされてしまうだろう。

「それで、何でわざわざわざわざ報告に来たんですか？」

先の言葉を予想……いや、確信しながら聞いてみる。わかりきった事を聞くなど、愚かではないのだが。

「うむ、そこだ。クリスマスに幕張メッセで開催されるラブライブの関東大会に我が校からボランティアスタッフを出す事になってな」

いち早く一色が反応する。

「それって生徒会は……」

「もちろん強制参加だ」

につこりと有無を言わさぬ迫力で笑う平塚先生の言葉に、一色はガクツと項垂れた。

ちなみに俺は……はい、さつきから何とも言えない感情です。花陽のサポートができる喜びと、クリスマスデートができない哀しみがごちゃ混ぜになっております。……遊園地デートもまだ行けていない。とはいえ、ラブライブに集中させてあげたい気持ちもある。

まあ、ここは切り替えて、仕事に励もう。長い間のぼっち生活で培った、気持ちの切り替えの速さは錆びついていない。これからも油を差して、錆びつかないようにする為に、たまにはぼっちになるべきか。

「何でアイドルのライブで高校生のボランティアを？」

本牧が尋ねる。不満とかではなく、純粹に疑問があるようだ。

「スクールアイドルとはいっても、実際のところ、アイドル部のようなものだ。営利目的の活動はしていない。運営側も極力費用は抑えたいようだ。スタッフも最低限しか雇っていないらしい。まあ、ここまで人気になるとは思ってたよ」

「他の学校は？」

「この辺りの学校もそろそろ募集しているよ。まあ、クリスマスという事で集まりは悪いだろうが」

「最近、本当に人気ですよねー。A—R—I—S—Eとかμ sとか」

「あ、私も好きです。いい曲多いですよね」

一色だけではなく、書記さんまで知っているとは……どうやらμ sの知名度は割とガチで高いらしい。その事が誇らしくもあり、心配でもある。

「まあ、とりあえずだ。私もボランテニアには参加しよう。幸いクリスマスに予定はないからな」

その哀しすぎる言葉に皆が気まずそうに目を逸らす。

本当に……早く、早く誰かもらってあげて!!!

「君達はポスターやプリント等を制作して、ボランテニアを集めてくれたまえ」

ボランテニア……ねえ。この言葉の響きはあまり好きではないが、花陽のためになるのなら、別に構わない気もする。

……まあ、やってみますか。

俺は深呼吸して、さっそく仕事に取りかかった。

へちまの花

数回のコール音の後、待ちわびた声が聞こえてきた。

「もしもし、こんばんは。八幡さん」

「おう、今大丈夫か？」

「はい。私もお話したかったので」

「……やっぱり知ってるのか？」

「もちろんです！驚きました！まさか幕張メッセでライブができるなんて！」

「ああ、すげえな」

「はい、楽しみです！」

「そっか。実はもう一つサプライズがあるんだが……」

今日学校で言われた事を伝える。

「ええっ!?千葉で開催されるだけではなく、八幡さんがスタッフに!?」

「ああ」

「た、大変です！皆に伝えないと！」

「いや、そこまでしなくていいから……」

「あはは……す、すいません。つい嬉しくて……」

「そ、そうか……嬉しいのか」

「当たり前じゃないですか！だって、sの皆だけじゃなく八幡さんとも最高のステージを作るチャンスなんですよ！」

「お、おほ……」

そう言われると何だかやる気が沸いてきた。

小さくガツポーズしながら、もう一つの用件を告げる。

「話変わるけどな、あの……遊園地なんだけど」

「あ、はい」

「大晦日とか……どうだ？」

「……はい!!」

「だ、大丈夫そうか？」

「大丈夫ですよ。ありがとうございます。気を遣ってくれて」

「いや、まあ……応援してる」

「私も応援してますよ」

「え？俺？何の応援？」

「ふふつ、八幡さんの全部です」

「そっか……よくわからんが……助かる。ありがとう」
「ふふっ、どういたしまして」

「……なあ、花陽」

「？」

「……すげえ、会いたい」

「え？いい、いきなり、どうしたんですか？」

「今すぐ会いたい」

「わ、私もですよ？私も八幡さんに会いたいです」

「いや、俺の方が会いたいと思ってる」

「私ですよ。私に決まってるじゃないですか」

「……………」

「……………」

「……いや、すまん。いきなりだったな」

「ふふっ、でも早く会いたいですね」

「ああ」

「また……ぎゅっしてもらいたいな」

「ああ。花陽の太股柔らかいし」

「も、もう！いやらしいです！」

「え？だ、だめなのか……」

「だめじゃないですけど、何だかいやらしいです！何でそんなにショック受けてるんですか！」

「花陽が言い出したんだろ？」

「私が言ったのは、ハ、ハ、ハグの方です」

「……お、おう」

「……………」

「……まあ、その、じゃあ、今度会ったら思いきり……」

「思いきり？」

「あ、流れ星」

「ごまかした……」

「しゃあねえだろ。思春期男子はシャイなんだよ」

「……そういう事にしておきます」

「そういう事にしてくれ。そういや、新曲聞いた……いい曲だな」

「はい、私もそう思います！ライブでやるのが楽しみです……こう思えるのも、八幡さんの応援のお陰ですね」

「いや、俺は何もしてねーよ」

「そんな事ないですよ」

「まあ、あれだ。本番まで体調管理しつかりな」

「あ、はい。ありがとうございます」

「じゃあ、そろそろ寝るわ」

「八幡さん」

「？」

「おやすみなさい」

「ああ、お休み」

窓の外の夜空に目を向け、離れた場所にいる花陽の顔を思い浮かべる。

通話を終えた後も、しばらくやわらかな彼女の声が耳元を甘くくすぐっていた。

子グマ!・子グマ!

「どうだ?そつちは」

「やつぱりダメでした。さすがにもう、バイトだったり、デートだったりで私の交友範囲では無理でした」

朝の通学路。一色がわざわざ俺を見つけて残念な報告をしてくる。溜息を吐き、空を見上げると、今日は冬晴れの気持ちいい空だ。こんな日は家で惰眠を……いや、花陽を見習おう。

「せんぱい。聞いてます?」

頬を膨らませ、あざとさ全開の一色に軽く頷く。

「むう。μsの事ばつか考えてんじゃないですか?」

「それよか、とりあえず俺もあたってみる。今のところ、募集の効果も期待できそうな
いからな」

「先輩友達いるんですか?」

「……いるよ」

「八幡！」

教室に入り、席に着くやいなや、戸塚が駆けよってくる。

「おう」

「僕もやるよ」

何の事は言わなくともわかる。

「いいのか？きつくなる可能性高いぞ」

「だからだよ」

戸塚の微笑みにつられるように、こちらも笑みが零れる。

「……ありがとな」

「ほふん。我もやってやろう」

「おう、面白そうじゃん」

材木座が尊大に、戸部が軽薄に了承してくれる。

「……すまん。いや、ありがとな」

「じゃあ俺、隼人くん達に声かけてみるわー」

「我は……ふう……ふう……」

材木座……無理すんな。悲しくなるから。

「あ、比企谷君」

放課後。告知のポスターを掲示板に貼っていると、城廻先輩がとことこ歩いてきた。今日もほんわかめぐりんパワーが気分をゆったりさせ、疲れを少し吹き飛ばしてくる。

「聞いたよ。いきなりで大変だね」

「まあ、やれるだけやってみますよ」

「私も手伝うよ」

「え?」

城廻先輩は柔らかに微笑んだまま俺に向き合っている。

「いいんですか?」

「一般枠はこれから募集するんだよね? 私も参加するよ。前にも言ったけど、もう推薦で大学は決まってるからね」

「……せっかくのクリスマススイブもクリスマスも重労働で潰れますよ」

「いいよ。私も最後まで学校生活を楽しみたいしね。それに……」

少し距離を詰めた彼女は、こちらの瞳をじつと覗き込んでくる。

「君は文化祭も体育祭も頑張ってくれたでしょ?」

「いや、別に……」

「少しくらいは先輩として、頼りになるところ見せないかね」
「……ありがとうございます」

可愛らしく、ぐつと拳を握る城廻先輩に、俺は感謝の言葉を告げた。

「ねえ、あんた……」

「どした？」

ようやく全てのポスターを貼り終え、帰ろうとすると、今度は川崎が話しかけてきた。
珍しくこんな時間まで学校にいたのだろうか。

「クリスマスイベントのスタンプ……まだ、募集してんの？」

「ん？ああ」

「……………る」

川崎は俯き、何やらブツブツ言っている。

「何だって？」

「私もやるって言ったの！」

顔を赤くした川崎は、叩きつけるように言うと、さつさと靴を履き、あつという間に走り去った。

「……ありがとな」

見えなくなつた背中に小さく声をかけ、下駄箱から靴を出す。

「……………」

誰かが視線を向けている事にも気づかずに。

エスぺランサ

「うんうん、かなり集まりましたね〜♪」

今、会議室には生徒会メンバー以外に、戸塚、材木座、戸部、川崎がいて、さらに城廻先輩を始めとする元生徒会メンバー、そして……

「いや〜、隼人君達が手伝ってくれて助かったわ〜」

「いや、いいんだよ。予定もなくなっちゃしき」

「つーか、あーしらは何すれはいいわけ？」

「確かに」

「だな」

葉山グループも勢ぞろいである。まあ、体力的な面を考えればかなりありがたい援軍ではあるだろう。ガンガン働いてもらいたい。そして、俺を楽させてくれ。

「一色、説明を」

「ですね。はい、では皆さん注目してください〜い」

一色がカンペを読みながら、仕事の内容を説明する。

俺達の仕事は、座席を並べる事、入場の列規制、衣装等の搬入の手伝い、もちろん片

付けも。さらに、もし雪が降れば雪かきも加わる。

一色の説明が終わると、皆領きながら、それぞれ当日に思いを馳せた。

「君は変わったな」

「あん？」

一区切りついてぼーっとしてしていると、葉山が話しかけてきた。

「正直、2年の始めの頃とは別人みたいだ」

「いや、俺は俺だよ」

「何だかんだ言っつて、いろはだつてちゃんと生徒会長をやれてる」

「あれは本人の資質だ。あいつ何気に人使い上手いし。さらに人使い荒いし」

「ははっ。そうかもしれないな」

「それに……」

「？」

「変わったとしても、一人で変わったわけじゃねーよ」

「……君がそんな事を言うとはな」

葉山はどこか寂しそうに笑う。その視線は果たして何に向けられたものなのか。

その思考を断ち切るように、ガラリとドアが開き、見慣れた白衣が目に入る。

「邪魔するぞ」

平塚先生がいつも通りノックもなしに入ってきた。本人は特に気にする様子もなく、教室を見渡す。

「おお、中々集まっているじゃないか。感心感心」

「どうかしたんですか？」

「ああ、入ってきたまえ」

平塚先生に続き入ってきたのは、雪ノ下と由比ヶ浜、そして……落ち着かない様子であちこちに視線を彷徨わせる相模南だった。

「いや、花陽ちゃんもラッキーだねー！」

「本当く、こんな素敵な偶然もあるんだね〜♪」

穂乃果ちゃんのことりちゃんが何やらはしゃいでいる。うう……これはからかわれそう。そこまで嫌じゃないけど、やっぱり恥ずかしい……。

「アンタ達、浮かれてる場合じゃないわよ！うっかり会場で二人の関係がバレたらどうすんのよー！」

「そうよ！もしそれで変な事があって比企谷君が私に「エリチ」皆、関東大会に集中しましょうー！」

「はあ……先が思いやられるわね」

「本当にや〜」

皆の落ち着かない様子に、真姫ちゃんと凜ちゃんは呆れていた。

そこで、希ちゃんの悪戯っぽい笑みが凜ちゃんを捉える。

「そういえば凜ちゃんは戸塚君とはどうなん？」

「にや!!」

予想もなかった希ちゃんの言葉に、凜ちゃんの顔が真っ赤になる。視線がキョロキョロと落ち着かない。

「な、な、何の事にや!!」

「だって……ねえ？」

「とつても仲良しだよね♪」

穂乃果ちゃんもことりちゃんも気づいているらしい。凜ちゃん………戸塚先輩に思いが届くといいな。

「花陽だけではなく、凜まで……」

海未ちゃんがわなわな震えている。

そして、思いの丈を力いっぱい吐き出した。

「ハ、ハ、ハレンチです!!」

その大声は冬晴れの空によく響いて、千葉にも届いてしまいそうだった。

ブチ

「お前ら……」

驚いている俺に、由比ヶ浜は慌てたように口を開く。

「あ、あのね……ゆきのんが、手伝おうって言ってくれたの！」

その言葉にさらに驚き、雪ノ下を見る。

「たまには……自分から動いてみたかっただけよ」

俯いている相模の方を見る。

「彼女は今、奉仕部の部長よ」

「は!?!」

またまた驚き、先生を見ると、うんうんと頷いていた。

「君が辞めてから、人員補充しようかと思っていたところに、彼女から声をかけてきたのだよ」

「そうですか」

相模の方は見ずに頷く。どういう意図があるのかは、俺の知るところではないが、3人を見てみると、まだどこかぎこちない。新生奉仕部はまだ新生生徒会同様、まだしつ

かりした人間関係を構築できてはいないようだ。仕事では問題ないんだが……。

「じゃあ、人員募集はぎりぎりまで受け付けているから、各自できる範囲でいいから声をかけておいてくれ」

それだけ言い残して、平塚先生は出て行った。その背中はどこか嬉しそうに見えたのは、気のせいではないと思う。

その後、雪ノ下達に一連の作業の内容を通達し、その場は解散となった。

靴に履き替え、外へ出ると、同じように下校中の奉仕部の3人がいた。

由比ヶ浜がこちらに気づき、小さく手を振ってくる。

「あ、ヒツキーー！」

「おう」

「意外と生徒会のメンバーとして様になってたわね」

「そ、そうか」

予想外の褒め言葉に気後れしながら、鞆を担ぎ直す。

「あ、あの……」

二人に隠れるようにしていた相模が、おずおずと声をかけてくる。

「……………う」

「？」

「今さらなんだけど……文化祭と、体育祭の時……ありがとう」

「……別に俺は何もしてねーよ」

俺の言葉に相模が顔を上げ、二人が微笑むのを見て、そのまま校門へと向かった。日が落ちるのを見ながら、今夜は花陽とのんびりと電話で話そうと思った。

クリスマススイブ。イベント前日。

幸い雪はまだ降っていないが、天気予報では今夜から雪になっていたので、明日の重労働の覚悟はしておこう。

会場には、他の高校の生徒が結構な数集まっている。

しんどそうにしている者もいれば、スクールアイドルに会えるのを心待ちにしている者もいた。

スタツフ用の服に着替え、これからの作業に思いを馳せていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「あれー、比企谷じゃん！」

「折本………」

「この前の一件以来だ。」

とはいえ、あの後強烈な出来事が色々あつて覚えてないけど。彼女は好奇心たっぷり視線をぶつけてくる。

「へえー、比企谷もボランティア？」

「……生徒会は強制なんだよ」

「え、比企谷つて生徒会？」

「ああ、一応な」

「一応つて何それ！マジウケる！」

「いや、ウケねえから……」

とりあえずツツコミを入れておくと、折本はきつきとは違う、どこか優しげな笑みを浮かべた。

「そっか、本当に変わったんだね」

「どうだかな」

「じゃ、今日は同じスタッフとしてよろしく！」

今のやり取りに、心の奥に詰まっていた何かが取れて、消えていった気がした。そして、またいつもの陽気な笑みに戻った折本は、俺の肩をぽんつと叩き、自分の学校のメンバーの元へと戻っていった。

それとほぼ同時に、平塚先生から声がかかり、俺は早歩きで集合した。

N a . d e . n a . d e ボーイ

作業は滞りなく進んでいった。他の高校からもそこそこの人数が集まっていたので、どの作業にもきつちりと人員を割り振る事ができた。今日の分の作業は早く終わりそうだ。

「はろはろ〜」

聞き覚えのある挨拶が聞こえた。

「比企谷く〜ん」

雪ノ下陽乃さんが笑顔で手を振っている。

軽く頭を下げ、それに応えた。

「聞いたよ、今は生徒会に入ってるんだって？」

「ええ、それよりどうしてここに？」

まさかスタッフじゃなかろう。

「千葉の大きなイベントだからね。先を見越して雪ノ下の家もある程度は出資してるんだよ」

「ああ、なるほど」

「しっかし、なんか雰囲気変わったね〜」

雪ノ下さんは、俺を上から下までじろじろと見回す。やだ何恥ずかしい。

「姉さん。暇なら手伝って」

雪ノ下がその視線に割り込むように、姉を叱りつける。

「ごめんねえ〜、主催者側の人達に挨拶してこなきゃ」

それを躲すように、雪ノ下さんは向こうへすたすたと歩いて行ってしまった。

「はちまーん！ちよつといい？」

「おう」

戸塚に呼ばれ、駆け出すと同時に、何やら入り口が騒がしくなる。

どうやらイベントの主役達がご到着のようだ。

スタッフ一同集合して、スクールアイドルからの挨拶と労いの言葉をかけられ、男子達は色めき立つ。待機時間になると、どの子がタイプかを話し合っている奴等もちらほらいた。

「あ、比企谷君だ！」

高坂さんが声をかけてくる。南さんと園田さんもそれに続く。

「本当だ〜」

「比企谷君も生徒会なのですか？」

「ああ、そんなとこだ」

「え!? え!? 比企谷君も生徒会なの!?!」

鮮やかな金髪のポニーテールが揺らしながら、絢瀬さんが物凄い勢いで近づいてくる。

「せ、生徒会に關してわからない事があつたら、何でも聞いてね!? 力になるから!」

「は、はい……」

近い近い! 仕事熱心すぎるだろ。あと無防備すぎる。

「エリチ」

「はっ……皆さん、今日はよろしくお願いします」

「よろしく〜」

「最近の絵里、色々おかしいでしょ。どうしたのよ」

東條さんと矢澤さんもやってきた。おい、童貞風見鶏。東條さんの胸見すぎ。絶対気づかれてるからな。

しかし、そのようなゲスイ視線には慣れているのか、東條さんは男子連中に柔らかく微笑み、

「あ、戸塚先輩!」

「星空さん、ようやく着いたんだね。明日楽しみだよ」

「応援よろしくにゃ！」

「もちろん」

「材木座さんと戸部さんも久しぶり」

「ふむ」

「おう！」

星空と西木野も既に戸塚達と話していた。

「じゃあ、近くに……」

「八幡さん」

俺が探すより早く、背後から声がかかる。

「花陽」

振り向くと、いつもと同じで、それでいてどこ違う雰囲気を身に纏った彼女がそこにいた。

その優しい微笑みにはどこか力強さがあり、出会った頃の気弱さは欠片も見えなかった。

その姿について頬が緩む。

「よろしくお願ひしますね」

「……ああ。明日、見てるから」

「じゃあ、私も見つけますよ」

お互いに手を握ろうと伸ばした手を止める。

その代わりにじっと見つめ合った。

「……………」

「……………」

『……………』

「……………何だよ」

気がつけば総武高校のメンバーが、こちらを疑わしげな目がつつり見ていた。

花泥棒

「先輩……お知り合いなんですか？」

一色は心底驚いた顔をしていて、視線が俺と花陽を行ったり来たりしていた。

俺達は俺達で視線を交わし、とりあえず俺がその場をやり過ごすべく、なるだけ平静を装いながら頷いた。

「ああ」

「そうだったんですね」

「へー、かなりびつくりだね」

城廻先輩も目をぱちくりさせている。

俺と花陽の関係を知っている由比ヶ浜はぽけーっとした表情でこちらを見ていた。

「あの……ミュ、*μ* sの小泉花陽です！八幡さんにはいつもお世話になってます！」

花陽は少し慌てながら、持ち前の礼儀正しさを発揮して、一色達に自己紹介を済ませる。

だが、また一つ綻びが生じた。

「八幡さん……？」

雪ノ下がこちらを見る。あ、何かに気づいた目だ。だがここで花陽に言い直してもら
うわけにはいかない。一度吐き出した言葉は戻せないのだ。

すると今度は別の方から声が飛んでくる。

「そりやそうだよ！だつて比企谷君と花陽ちゃんは……」

「あ、ダ、ダメ！ヒツキーと花陽ちゃんが付き合っているのは内緒だから！」

『……………』

こうしてアホの子二人のファインプレーにより、秘密は秘密ではなくなりました。俺
はこの先の説明を考えながら、溜息を一つ吐いた。

「まったく、貴方は……」

「ご、ごめえくん……」

「由比ヶ浜さん。次からは気をつけましょうね」

「ごめんなさい……」

「だ、大丈夫だよ」

「なんつーか、俺達も迂闊だった……」

高坂さんが園田さんに、由比ヶ浜が雪ノ下に叱られるのを見ながら、俺と花陽は何と
言っていないのかわからなくなる。

「そっかー。先輩、彼女さんがいたんですね」

「比企谷君……やっぱり花陽と付き合ってたのね」

一色のリアクションはわかるが、絢瀬さんは知ってたでしょうが。

「ま、最近のアンタならなんか納得」

「そうか？」

「アンタ最近、生徒会やら勉強やらバイトやら頑張ってたからね」

「確かに、この前本屋さんに行ったら、比企谷君が棚の整理しててびっくりしたよ」

「そういや、城廻先輩と仕事中に遭遇したな。ラスト1時間でほんわかめぐりんパワー浴びると、体力回復して、効率上がるわー」。

「つーかさ、問題なくない？規則とかあるわけじゃないっしょ？」

「まあ、わざわざ広めたくないって事だろ？大事な大会の時期だからね」

「そ、そうだよね」

三浦、葉山、相模と続き、東條さんがまともに入った。

「とりあえず、今日は皆で比企谷君とかよちんがいちやつきでしたら止めるって事でええかな？」

そう言つてウインクすると、生徒会の男子も大和も童貞風見鶏も目を奪われた。つーか、胸の下で腕を組むのを止めてください！童貞風見鶏が前かがみになってるから。雪

ノ下、さり気なく自分の胸元に手を当てるな。

「あ、あの……」

何かを思い出したように、川崎が急に前に出てきた。皆の視線が集中したのが恥ずかしいのか、少し顔が赤い。

彼女は胸の前に手を当て、一呼吸置いて、μ_g s に向かい合った。

「い、衣装って誰が作ってるの？妹のお遊戯会の参考にしたくて……」

何だろう。ほっこりする。

俺はその視界の端で、雪ノ下と西木野の視線が意味ありげに交錯するのを見た。何か言葉を交わすでもなく、二人の表情が真顔から微笑みに変わるのを見て、ほっとした。

「ほら、そろそろ振り付け確認するわよ！」

部長らしくその場を仕切る矢澤さんの声をきっかけに、俺達はそれぞれの仕事に戻った。

オパビニア

一通り作業が終わり、解散になった。もう、外は既に雪がパラパラと降り始めていて、明日は早朝から雪かきの可能性が高い。

さて、皆はどこに行つた？とりあえず、色々と報告はしておかなくてはならない……いかん、まだ高校生だというのに社畜になつてしまつてゐる。

歩いていると、目立たない部屋からざわつきが聞こえてきたので、覗いてみる。

総武高校の男子生徒達がホワイトボードの前に集まつて、何やらガヤガヤやつてゐる。

「あ、やべつ。ヒキガヤ君来た！」

「何だよ……」

「いや、なんつーか」

そんなに俺には見せられないものなのか。ここに來てのけ者とか……べ、別に寂しくなんかないんだからね！

すると、大岡と大和が照れくさそうに笑う。可愛くない。

「い、いや……あはは」

「その……」

二人につられてホワイトボードを見ると、そこに書かれていたのは……

『魅惑のバストグランプリ』

うわあ……。

そこには、*μ* s V S 総武高校などと大きく書かれてある。

「はあ……」

「い、いや、これは、お近づきの記念というか」

「っ、っい」

大岡と大和が慌てている。仕方ねえ……。

「ふう……手伝ってやるよ」

何故かわあつと歓声があがる。ふむ、悪い気はしない。

もちろん、この後の地獄など知る由もなかった。

「1位は東條さんだ。異論は認めん」

「うんうん」

「それと大和。お前は胸見すぎだ。あの人、異常に鋭いから、間違いない気がつかれてる

ぞ」

「え!？」

「2位は平塚先生だな。年の割に張りがある」

「すげー! 流石比企谷君、俺らが絶対に言えない事を言つてのける!」

「そこに痺れる、憧れるウ!」

「3位は絢瀬さんだ」

「わかるわかる」

「とにかく形は良さそうだ。PVで何度も見た」

「比企谷……彼女に怒られなかったのか?」

「正座させられた。小一時間説教もされた」

「……………」

「4位は……由比ヶ浜だな」

「だな」

「ほふん。中々立派なものを持つておる」

「5位は花陽だ。いや、俺が育てる事を考えれば、まだ先がある」

「……………」

「何だよ」

「6位は川……何とかさんだ」

「八幡、名前くらい覚えようよ」

「7位は城廻先輩だ。多分脱いだらすごい」

「何となくわかる」

「大和。お前食いつきすぎ」

「8位は三浦だ。多分寄せて上げてる」

「隼人くん。そーなん？」

「いや、知らないから」

「あとは大差ない。どんぐりの背比べだ」

「へー、そうですか」

恐ろしく殺気立った低い声に、体がビクンと跳ね上がる。

振り向くとそこには……修羅達がいた。

「比企谷くーん、ウチを1位にしてくれてありがとうー」

「比企谷……年の割に評価されて私は嬉しいよ。年の割にな」

「ひ、比企谷君。その……気持ちは嬉しいの。でも、あなたには花陽が……あ、でも少し

くらいなら……」

「男子サイッター!!まじありえない!!」

「あんた達……」

「比企谷君、やっぱり君って最低だね♪」

「隼人……何で止めなかったの？」

「お、俺？」

「*スメン*バーも

「これだから男は……」

「あはは……」

「てゆうか、何で私が暫定最下位とか書かれてんのよ！」

「やばい。一秒でも早く逃げなくては……花陽にばれる前に。」

すると、モーゼの有名な話のように、集まった女子の群れが割れ、そこをゆらりと歩

いてくる御方がいた。

「ハチマンサン」

「はい……」

足が動かない。やばいやばいやばい。

「ナニヲオオキクスルンデスカ？」

あ、死んだ。

「……ん。八幡さん」

「……花陽？」

気がつけば、休憩所の机に突っ伏していた。

「ええ。皆が呼んでますよ」

「やべっ。俺どのくらい寝てた？」

「10分くらいです」

1時間とかじゃなくてよかった。

「じゃ、行くわ」

「あ、八幡さん」

「どした？」

「何を大きくするんですか？」

「……………」

「大会が終わったらゆっくり話しましょうね？二人きりで」

わあ。めっちゃニコニコしてる。なのに目が笑っていない。

「……………は、はい」

俺は何通りもの言い訳を考えながら仕事に戻った。

ナンプラー日和

ライブイベント関東大会当日。

「うわ〜!」

由比ヶ浜が驚きの声を上げる。

恐らく、その場にいたほとんどの人間が同じ気持ちだっただろう。

幕張メッセ周辺は気持ちいいくらい真っ白に染め上げられていた。早朝のまだ視界があまりよくない状態でも、それだけははっきりわかる。

正直しんどそうだが、やらなくてはいけない事に変わりはない。ならさっさと終わらせてしまおう。

「……やるか」

スコップを使い、指示通りのやり方で通り道を開ける。次第に皆が始めだした。

こういう単純作業は嫌いではない。むしろ好きまである。体が作業に馴染みだしたら、あとは自分のリズムに従い、ザクザクと音を刻みながら作業に没頭していった。

朝陽が完全に顔を出す頃に、近くの宿泊施設に泊まっていたスクールアイドルがやってきた。

雪かきをしているスタッフに「お疲れ様です」と挨拶しながら、いそいそと会場入りしている。

「久しぶり」

顔を上げると、綺羅ツバサがそこにいた。

「……うす」

「今日はよろしくね。比企谷君」

俺の肩をぽんと叩き、手をひらひら振って中へ入っていく。

その背中には自信に溢れていて、小柄な身体からは想像もつかないぐらいの威圧感を放っていた。それに続き、他のA―R―I―S―Eのメンバーが会場入りした。

「おっはよーございまーすー」

そして、間髪を入れずに、sの高坂穂乃果の馬鹿でかい声が響く。それに続きメンバー全員の声が聞こえてくる。

花陽と目が合う。

言葉は交わさずに、微笑みだけ交わした。

その瞬間、3月に初めて出会った時の事がフラッシュバックした。確かな時の流れを季節の変化で感じながら、あの時の自分を思う。

あの日に感謝せずにはいられなかった。

「ふう……」

雪かきを終え、休憩に入る。

「比企谷」

葉山がMAXコーヒーを投げて寄越してきた。

「お、悪いな」

慌ててそれをキャッチすると、心地よい温もりが冷えきった手を癒していく。さつさと身体の中も温めるべく、プルタブを引き、口をつけた。

「まさか、比企谷がスクールアイドルと付き合ってるなんてな」

少しからかうようなニュアンスもあるが、気にはしない。

……そういや、昨日の事は誰も何も言わないけど、やはり夢だったのだろうか？まさかの夢オチ？それ何てワンス・アポン・ア・タイム・イン・チバ？MAXコーヒーが見せた幻なのだろうか？

「たまたまだよ。それに最初からスクールアイドルだったわけじゃねーし」

「……あの子の為に変わったのか？」

「聞かなくてもわかる事をいちいち聞くな」

「ははっ、そうだな」

飲み終えた缶を捨てた葉山はすれ違いざまに、いつもの爽やかな笑顔を見せた。

「俺も……このまま君に負けっぱなしにならないように、頑張るよ」
「……何の話だよ」

俺も飲み終えた缶を捨て、二人で仕事に戻る。

……後ろの方で、どっかの誰かが「奇跡のはやはちがく！」と叫んでいた。

俺のすべて

短いリハーサルを終え、来場者を誘導し、無事に開演する事ができた。あとは、警備の担当者に任せて、ライブを見守るだけだ。片づけまではゆつくりできる。

手首に巻かれた黒いリストバンドを見ながら、心の中で、なるたけ大きな応援を繰り返す。それしかできない。しかし、特にもどかしいとは思わない。μ'sの……花陽の頑張りも、スクールアイドルへの誠実さも俺は知ってる。そして、俺が知ってる以上のものを花陽は持っているだろう。

だから………信じる。

「かよちん！」

凜ちゃんが声をかけてきた。その表情はいつもの数倍明るくて、頬が緩んでしまう。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫！」

八幡さんから修学旅行のお土産としてもらった一位守に願掛けもしたし、大丈夫。

今は財布の中に入れてあるお守りにもう一度心で願掛けして、深呼吸をする。今までにない大舞台なのに、自分でも不思議なくらい落ち着いている。

会場のどこかに、メンバーとは違った意味で特別に大事な人がいるから、かな。

「花陽ちゃんは愛の力があるからね」

「ぴゃうっ！」

何の前触れもなく、背後から希ちゃんに胸を思いきり掴まれる。

「うくん、これは中々やね。さすが比企谷君が……」

「そ、そんな事されてないよ！」

「アンタ達、ほ、ほ、本番前にな、ななな何やってんのよ！ちよつとは落ち着きなさいよよー！」

「にこちゃん、落ち着いて……」

にこちゃんは小刻みに震え、真姫ちゃんはうろろうろしながら髪を指先でくるくると弄っていた。

「二人共、大丈夫」

そつと手を握る。こうしているだけで、温もりを分け合える気がしたから。

「……わかつてるわよ」

「……ありがとう」

自然と寄り添い合う。本当に皆と出会えてよかった。心からそう思う。

「花陽……」

「花陽ちゃんも変わったんだね」

「いえ、そんな……」

「花陽ちゃんは本当に凄いや！」

真つ直ぐな言葉に頬が熱くなる。

「じゃあ、花陽に負けないように、皆の凄いところをひ……観客の皆さんに見せつけてあげましょうか」

「よーし、円陣組もう！」

穂乃果ちゃんの言葉で、しっかりとした絆の輪ができる。世界に一つだけの絆の輪。

「皆、全力を出し切ろう！」

「あつたりまえでしょ！」

「皆に一番可愛い私達を観てもらうにや〜！」

「1！」

「2！」

「3！」

「4！」

「5！」

「6！」

「7！」

「8！」

「9！」

「μ， s！ミュージックスタート!!!」

「それでは次のグループです！ μ， s！」

アナウンスの終了と同時に照明が落ち、数秒後にステージだけが鮮やかに照らされる。

会場内を埋め尽くす観客の熱気ある歓声がステージに向け放たれていき、それに応えるように、曲が始まりを告げた。

示し合わせたように観客席が青白いペンライトに照らされ、それはまるで、雪が敷き詰められたようだった。

魔法のコトバ

「八幡さん！」

花陽が小走りで駆けてくる。その白い息がどこかへ溶けていくのを眺めながら、こちらでも花陽の方へ歩き出す。

「お待たせしました」

「いや、今来たところだ」

言えた！本物の彼女に対して言いたいセリフ・ナンバーワン！そろそろ『ここは俺に任せて先に行け！』も言える日が来そうだ。いや、危ないシチュエーションだから遠慮しておこう。

「どうかしました？」

「いや、何でも」

花陽の小さな頭を撫でる。柔らかな髪感触と、気持ち良さそうに目を細めるその姿に、抱きしめそうになるが、ここはぐつと堪える。また誰かに見つかつて冷やかされるのもあれだ。

手を離すと、花陽はいきなり駆けだした。

「八幡さん、こつちへ来てください！」

花陽が建物の陰へ手招きをしている。何だろう、まさか彼女からカツアゲにあうのだろうか。

「どした？……っ」

柔らかな温もり。

数秒で離れたが、甘く深く刻まれ、前回のものをあつさりと上書きしていく。

「えへへ……行きましょう！」

「あ、ああ」

彼氏としての小さなプライドから、せめて手ぐらいは自分から繋いだ。

大晦日。

言わずもがな、一年の終わりだ。

街はクリスマスとはまた違った静かな賑わいを見せている。行き交う人の穏やかな微笑みは、今年も無事に一年を終えられた安堵からくる者だろうか。

ラブライブ関東大会も終わり、ようやく時間ができたので、俺と花陽は前から約束していたデスティニーランドに来ていた。

正直に言えば、遊園地に行くのが久々すぎてかなり緊張しています。はい。ましてや恋人と初めて行く遊園地……俺は柄にもなく、深呼吸をして、気合いを入れた。

「わあ〜」

「すげえな」

年末のイベントの為か、園内は人がごった返っていて、隣りにいるのが花陽じゃなかったら、回れ右をしてお家に帰るところだ。ハチマン、お家帰る！なんつって。

「は、八幡さん！あれ、乗りましょう！」

あれは……パンさんの……。

パンさん好きだったのか。意外と雪ノ下と相性がいいのかもしれない。

案の定、乗り物が動き出してからも、花陽のテンションはMAXだった。

「は、八幡さん！パンさんですよ！」

「お、おう……」

こちらの腕にしつかりしがみつきながら、普段見れないはしやぎぶりを見せる。

そしてそれに伴い、さつきから肘の辺りに豊かな膨らみが押しつけられる。これは恋人冥利に尽きる。も、もう少しくらい、近くに来ても……いいんですよ？

「八幡さん……目がいやらしいです」

ジト目を向けられる。やばい、調子に乗りすぎたか。気を取り直してアトラクションに集中しよう。

「お、パンさん」

「今、いやらしい事を考えてましたね？」

「なあ、あれパンさんじゃね？」

「パンさんのアトラクシオンだから当たり前です！話を逸らそうとしてますね！」

「い、いや、いやらしい事など考えた事もない」

「この前、俺が育てるって言って言っていましたね。何を育てるんですか？」

「もちろん、愛」

「いい話になってしまいました！」

「だろ？」

「……………どっちも私のだけにしてくださいね」

「……………あ、ああ」

「……………」

花陽は顔を真っ赤にして、アトラクシオン内を飛び交うパンさんに視線を戻す。

恥ずかしいなら言わなきゃいいのに。

……………可愛すぎるだろうが。

きつとまだ今年は終わりそうもない。そんな願いにも似た事をふと考えてしまった。

みそか

「全国大会……勝てるといいな」

「……はい」

帰り道、改めてラブライブの話をつつてみる。

μ'sは関東大会優勝を果たした。

A—RISEに勝ったのだ。

優勝者が発表された瞬間、何故か総武高校のメンバーに背中をバシバシ叩かれた。かなり痛かったぜ。雪ノ下や葉山がはしゃぐ姿なんぞ滅多に見れないから、貴重な瞬間だったかもしれないが。

「八幡さん」

「？」

真面目な声音に、きゅつと気持ち引き締まる。

「寄っていきませんか？」

花陽は公園を指さす。

それは、初めて二人が本当の気持ちをぶつけ合った公園だった。

はらはらと頼りなく雪が舞い降り消えていく中、無人の公園のベンチに二人で腰掛けた。

「30分な」

風邪をひかせるわけにもいかないし、女の子を預かっている責任もある。

「大丈夫です。すぐ終わりますよ」

その言葉と共に、強引にこちらを向かされ、熱い口づけが来た。

「……………」

「……………んん……………んあっ」

舌が熱く絡まり、渴いた音が響く。

あの日の再現のつもりかと思っただが、こうして絡まり始めると、むしろ塗り替えようとしているように思えた。

やがて唇が離れ、つうつと糸を引いた。

「八幡さん」

「何だ？」

「私……たまに不安になります」

「……………」

沈黙で続きを促す。花陽の表情は見ないでおいた。

「八幡さんと出会って、*Ms*に入って、八幡さんと恋人になって、ラブライブ関東大会で皆と優勝して……」

「ああ……」

「何か……私ばかり、いいのかなっておもっちゃいますね」

おそらく花陽は寂しげに笑っているんだろう。

「……………」

まあ、あれだ。

単純に今が幸せすぎるからだ。

幸せすぎて、それに慣れてしまって、幸せを幸せと思わなくなるんじゃないか、とか。

……いつか失くしてしまった時の事とか、うっかり考えてしまったんだ。

「花陽」

俺の呼びかけに花陽がこちらを向く。僅かに濡れた瞳は街灯に優しく輝いていた。自然と言葉が出てくる。

「結婚しよう」

「……………」

混じり気のない本音。花陽はぼかんとしている。

静寂が耳に疼くぐらいに広がる。風の音も届かなくなった。

ふと隣を見ると、花陽が過去最大に真っ赤になっている。

「……………ぴゃあああああっ!!」

「うおっ!ど、どうした!?!」

深夜の公園を揺るがすような大音量に、体が跳ね上がる。

花陽はまだあたふたしていた。

「い、い、今なんて言いました!?!」

「結婚しよう」

「け、け、結婚!?!」

「す、すまん。いきなり」

辺りをキョロキョロ見渡しながら、やがて落ち着きを取り戻した花陽は、上目遣いに

こちらを見てきた。

「え、えーと……………」

「いや、あれだ。俺は……………花陽といるのが幸せなんだよ」

「……………」

「だから、花陽の幸せは俺が何とかしてやるから……………心配すんな」

「……………八幡さん」

「返事は、その……………もうちよい先でいい」

きっと俺の顔も過去最大級に真っ赤になっているだろうと思っていると、大丈夫と囁くように、そっと手を握られる。

「……………ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

「……………こちらこそ」

「か、帰りましょうか！」

「ああ……………」

あと約1時間で今年が終わりを告げてしまう。何かやり残したことはないだろうかと考えながら、夜に溶けていく白い吐息を見つめた。

冬の夜空の下、繋がれた手の確かな温もりが、ひんやりとお互いの存在を主張していた。

チエリー

玄関のドアを開けると、小町がパタパタと駆け寄ってくる。じんわりとくる暖房の温かさが気持ちいい。

「おつかえり〜！」

「ただいま」

「お邪魔します、小町ちゃん」

「花陽ちゃん、いや、お義姉ちゃん。そんな遠慮しないで♪」

「あはは……」

「そうよ。花陽ちゃん」

小町に続き、母ちゃんがリビングからぬつと出てきた。見たところ、小町とのんびり年末を過ごしていたようだ。

「母ちゃん、帰ってたのか」

「年末はね。お父さんは明け方になるけど」

さすがは一人前の社畜……いい年迎えろよ。

「こ、こんばんは！こ、こ、小泉花陽です！あの、八幡さんには仲良くしてもらってます

「！」

母ちゃんは笑顔で手をひらひら振り、少し慌て気味の花陽を落ち着ける。

「そんなに畏まらなくて大丈夫。うちのバカ息子をもらってくれるなんて……ねえ、小町。本当なの？こんな可愛い子が……」

母ちゃんは小町にガチの質問をしていた。おい。さりげなく泣くな。俺が泣きたくなるから。

「お母さん、奇跡って起こるんだよ」

小町が事実を言う。反論の余地がない。確かにその通りだ。

母ちゃんは眼鏡の下の涙を指先で拭いながら、花陽に向き直る。だから泣くな。

「花陽ちゃん。このバカをよろしくね」

「いえ、こちらこそ。八幡さんは素敵な人ですから」

ついに母ちゃんが泣き崩れた。おそらく素敵な人というフレーズに衝撃を受けたのだろう。感動のシーンっぽいけど、なんか釈然としねえ……。

「さ、お母さん。二人つきりにしてあげよう？」

「そうね……八幡。アンタ、花陽ちゃんを泣かすんじゃないわよ」

「わかつてるよ」

「よしっ！じゃあ思う存分いちゃついてきな」

初めて気づいたが、身内からそんな事を言われるとひたすら気まずいので、止めていただきたい。

俺と花陽は一呼吸おいて、自室へ向かった。

年を跨ごうとしているのもあまり気にならなくなり、ベッドの上に並んで腰かけ、他愛ない話をする。

「素敵なお母さんですね」

「今のやりとりに素敵さの欠片も見当たらなかったがな」

「そうですか？よく似てるなって思いましたけど」

「まじか……」

「あ、あと20分で今年が終わりますよ」

時計に目をやると、11時40分だ。紅白歌合戦はどっちが勝ったんだろうな。ま

あ、いいか。

「八幡さん。今年は八幡さんにとってどんな年でした？」

「言わなくてもわかるだろ？」

「……………」

言葉にして欲しそうに頬を膨らます花陽を見ながら改めて確信し、素直に言うことにした。

「これまでの人生でダントツに最高の年だよ」

「私事です。ダントツですね」

最近、こうやって素直な感情を見せてくれるのが、たまらなく嬉しい。

窓の外に目をやると、さつきよりも白く見える。明日はきつと素晴らしい雪景色なんだろう。新春って言葉が嘘くさく見えるくらいなの。

「八幡さん」

「？」

「出逢ってくれてありがとうございます」

「……何でも先に言うなよ。立つ瀬がなくなるだろ」

「さつき言ったじゃないですか」

「あ、ああ」

公園でのプロポーズ。

とても現実的ではないし、俺らしくもない。

ただ、勢いだけではない。気持ちに嘘はない。

「叶うのはもう少し先だけだな」

言いながら花陽の髪を撫でる。

「もう、叶ってますよ」

「そうなのかな？」

「はい。私は……八幡さんのものです」

その甘ったるい言葉に、部屋の空気が変わるのを感じた。

「全部上げますから……」

花陽をいたわるような動作でベッドに横たえ、覆いかぶさりながら、見つめ合う。

そして深々と降り積もる雪に目をやり、部屋の明かりを消した。

「じゃあ、俺も俺の全部をやる。花陽……」

「はい……」

熱い吐息が混ざり合うのが感じられた。

「明けましておめでとう」

「明けましておめでとうございます」

「八幡さん……大好きです」

歩き出せ、クローバー

ぼんやりと目が覚め、新年初の朝だという事実が頭の中をのろのろとよぎる。

だが、体はまだ眠りたいと、気怠さを訴えていた。

ひとまず時間を確認しようと、無造作な手つきでベッドの上をまさぐる。

そこで、むにゅつと右手が何かを握った。

ん？これは……。

「んっ……」

「っー」

跳ね上がりそうになり、慌てて全身を押しとどめる。

すっかり忘れてた。

隣では花陽がすやすやと可愛らしい寝息をたてている。

……勿論、すっかり服を着たまま。

はい。昨晚は何も起こってはおりません。

下から聞こえてきた小町の笑い声に、お互い何故か吹き出してしまい、あとはダラダラ話している内に、眠ってしまった。

何となく右手を見つめてみる。うん、柔らかい。幻想は壊れなかった。

つまり花陽の胸が柔らかいのは事実。当たり前か。

「八幡さん……」

むにやむにやと口を動かしながら、笑顔になる花陽。

ニツト素材のシャツは、豊かな胸の形を強調しているように見える。

……一年の計は元旦にあり。

つまり、ここで俺がどう動くかによつて、今年一年の良し悪しが決まる……んなわけねーか。

しかし、幸先のいいスタートというのは大事だ。高校デビューや大学デビューなんかがいい例だろう。失敗したら取り返すのにかんがりの労力を要する。

まあ、それはさておき、ひとまず……とりあえず。

チャレンジする事もたまには大事じゃなからうか。

失敗して覚える事だつて沢山あるはずだ。

むしろ失敗しなければ、人は成長しないと断つてもいい。心に傷がつくという事は、その分だけ刻みつけられるのだから。

よし、前置き完了。

そーっと手を伸ばす。

視線はどつかのストラトスばりに、胸にロックオンされていた。

そこで、彼女の口がむにやむにやと動いた。

「八幡さん……」

花陽はふにやあつとした笑顔を見せる。

いかん。性欲に負け、大事なもの失うところだったぜ。

そつと花陽の頬を撫で、立ち上がる。

そこでずるつと滑った。シーツのせいだろうか。思いきり花陽の上に倒れ込む。

「っー」

「あうっ……」

起こしてしまった。突然のことに、花陽は何が起こったのか理解できていないようだ。

「は、八幡さん」

「……悪い」

花陽からどうこうすると、左手を通して、柔らかい感触が脳に伝わってくる。

「あ……あ……」

「あーいや、その……」

「ぴゃあああああ〜!!」

1年の計は……元旦にあり……。

「……………」

「明けましておめでとうございます……」

1年の始まりの挨拶を改めてすませる。挨拶って大事だと思う。

しかし、花陽は毛布にくるまって出てこない。

「花陽、白米食べようぜ」

「八幡さん」

「はこ」

「私は怒ってます」

毛布から可愛い声が聞こえてくるので、なんかシユールだ。多分、毛布の中の花陽は顔が真っ赤になっているはずだ……俺のせいだ。

実際、さっきの出来事で、こっちもまだ落ち着かない。顔は真っ赤だし、両手には感触が残っている。心臓はバクバク鳴っていた。

しかし、思い出す前に、今は誠心誠意謝るのが先決か。

「ごめん」

「そ、その、いやではないんですけど……雰囲気と言いますか……」

「ああ……」

「も、もう……言わせないでください!」

確かにその通りだ。話題を変えよう。

「花陽……初詣行くか」

「……はい」

花陽は返事をする、困り眉のまま、やわらかな微笑みを向けてきた。

こんなやり取りをしながら、思うことは一つ。

どうやら今年も騒がしくなりそうだ。

愛のしるし

「ありがとうございますー！」

店を出て、買った物をポケットの中に入れる。

丁寧に包装してもらったから、あとは明日までこの状態を崩さないようにさないといけない。細心の注意を払い、家までゆっくり帰ろう。

そう。明日は花陽の16歳の誕生日だ。

そして翌日……。

「花陽ちゃん！お誕生日おめでとう!!」

μ s のリーダー、高坂穂乃果のお祝いの言葉に続き、パンパンとクラッカーが鳴らされる。その賑やかな破裂音は夕暮れの街に響き渡りそうなくらい、明るく弾けた。

「あ、ありがとうございます!!」

西木野のご厚意により、西木野家で誕生日パーティーを開いている。ありがたや、ありがたや。

「花陽ちゃんも立派になったねえ〜」

「穂乃果も少しは見習って欲しいものです。」

「むう〜！私、ちゃんとしてるもん！」

「この前、1限目から4限目まで通して居眠りしていたのは誰ですか？」

「そ、その分、寝る子は育つもん！」

「どこがですか！」

「私、海未ちゃんより胸大きいもん！」

「なっ……」

園田さんは割とガチでショックを受けていた。

「まあまあ、二人共」

「まったく何くだらない言い争いしてんのよ」

「にこちゃんみたいに諦めたら楽にや〜」

「つくね〜る〜わ〜よ〜」

「痛いにや〜」

「ふふっ、仕方ないんだから」

「エリチ……もうええの？」

「ええ、もう絵里ルート始まったから」

「何言うてんの？」

「亜里沙編もそろそろ始まるよ？」

「亜里沙？」

「ちよつと……今日の主役が置いてきぼりになってるわよ」

「あはは……」

μ s 全員の怒濤のやり取りに花陽は苦笑している。

「あの……あたし、本当に来てよかつたの？」

「もちろんだよ♪」

川崎が不安げに聞くのに対して、南さんがほんわかした笑顔で答える。

「μ s だ〜！」

川崎の妹、川崎京華は南さんに抱き着く。尊い。

「こ、こらけーちゃん。ダメでしょ？」

「大丈夫だよ♪ふふつ、可愛い♪」

南さんは川崎妹の頭を撫でる。尊い。

「お姉ちゃんといつもμ s の歌を歌うの〜♪」

「け、けーちゃん！」

愛しの妹からの暴露に、川崎があたふたとあわてだす。さすがはシスコン。

「アンタ、殴るよ？」

「いや、何も言ってもないんだけど」

「何か言いたそうな目してる」

まあ、目は口ほどにものを言うしな。ぼれても仕方ないのだろう。

総武高メンバーからは、他には戸塚と材木座と戸部も来ている。材木座がさつきから落ち着かないのが鬱陶しい。

「いやー、新年早々めでたいわー」

「そうだよね。小泉さん、これからも八幡と仲良くね」

「はい、ありがとうございます！」

戸部と戸塚の言葉に、花陽は笑顔でお礼を言う。

俺は、ポケットの中のプレゼントをいつ渡すべきか、機会を窺っていた。

スピカ #2

「皆楽しんでいるみたいね」

シンクに洗い物を置いてみると、西木野が声をかけてきた。満足げな微笑みを浮かべ、

「そうみたいだな」

「あなた達、いつ見ても幸せそうね」

「幸せだからな」

「……意外と二人共のろけるし」

「……そうか？」

「花陽なんて一日一回は私と凜にのろけるわよ」

「……………」

何を言っているのだろうか、すごく気になる。私、気になります！しかし、そんな俺の疑問を余所に、西木野は俺のポケットの膨らみを見て、くすりと笑った。

「誕生日プレゼント……渡すのに、いい場所があるわよ」

「花陽」

「はい？」

おにぎりを美味しそうに頬張る花陽に声をかけると、キョトンとしている。……こっちは緊張しまくりなのにいい御身分だ。

「あー、渡すモンあるからついてきてくれ」

「あ……はい」

「わあ……」

「想像以上だな……」

俺と花陽は西木野家の屋根裏部屋にいた。壁にもたれ、足を伸ばしてくつろぎ、天窓を見上げている。

天窓からは月や星が僅かな光を小さめの部屋に届けていた。青白い明かりがぼんやり花陽を照らし、その美しさ、可憐さを儚い幻想のように見せている。

「……空、綺麗ですね」

「……………」

その頼りない現実には手を伸ばし、ここに確かに花陽がいる事を確かめた。

「八幡さん……ん」

軽く触れるだけのキス。その後、居住まいを直し、花陽に向き直る。

「花陽……これ」

「あ、ありがとうございます！」

「まあ、改めて、誕生日おめでとう」

「あ、でも、これって……」

花陽の手には小さな箱がある。中身は予想がつくだろう。

「わあ……」

開かれた箱の中、小さなピンキーリングが夜空の光に、微笑むように輝いている。花と太陽の模様も微かに眩しい。

「その……ちゃんとした結婚指輪はまだ先になりそうなんだが……」

一呼吸おいて、また花陽の目を見る。気がつけば、二人して正座で向かい合っている。「これから先も、一緒にいたい。……多分、だけど、UTX学園の前で初めて会ったその日から……俺はずっと花陽の事が好きなんだと思う」

花陽の目から涙が一筋、弧を描いて、白くやわらかな頬を撫でていく。

「私も……あの日からずっと……八幡さんが好きです」

手を伸ばし、そっと涙を拭うと、照れ笑いで返してきた。

「……何で俺達、正座してるんだろうな」

「ふふっ。おままごとみたいですね。小さい頃、こんな風に結婚式の真似しました」

「そ、そうか……」

「相手は凜ちゃんですけどね」

「そうか」

「……今、やきもち焼いてくれました？」

「ど、どうだろうな……」

姿勢を崩し、どちらからともなく、唇を重ねる。花陽の体を優しく引き寄せた。

花陽は目を閉じ、自分を捧げるように、体の力を抜く。その間も、俺の手は柔らかな曲線を辿っていた。

何かが変わろうとしている。

「ふつたりともー!!何して……あ」

いきなり顔を覗かせた高坂さんが、気まずい表情になる。

「……………」

「……………」

「し、失礼しました……」

「……戻るか」

「ふふっ、そうですね」

微笑みだけ交わし、屋根裏部屋を出る。

こうして、また花陽と少し深く繋がれた。例え人と人が完全にわかり合えなくて

も、この世界に完璧なものがなくとも、心を重ねていけば、二人の繋がりは強くなつていける。

だから何度だってこんな瞬間を重ねていこう、なんてことを柄にもなく考えていた。

スカーレット #2

『もしもし、八幡さん』

『……おう』

『今、電話大丈夫ですか？』

『ああ、大丈夫だ』

『あの……実は、今日……』

花陽は、ゆっくりと嘯み締めるように、今日あった出来事を話してくれた。そのゆったりとしたテンポは不思議な心地良さがあり、容易に情景が浮かんできて、一つ一つのものが強く深く胸を打った。

『そうか。3月までか……』

『はい……』

花陽の話によると、μ、sは3月の3年生の卒業を以て活動を終えるそうだ。

メンバー全員で今後のμ、sの在り方、在るべき姿を模索した時、ここで終わりにするという決断に至ったそうだ。

俺はμ、sの事に関しては部外者だが、それでも思うところはある。4月からμ、s

の新しい曲が聞けないとなると、やはり寂しい。ここ最近ジョギング中にずっと聞いてたのもあるだろう。

『ラブライブ……全国優勝できるといいな』

『……はい！私、頑張ります！』

今月末のラブライブ全国大会に向けて、必死に練習している花陽の忙しさやプレッシャーは、俺の想像を遥かに超えるものだろう。

何の足しにもならないとわかっていながら、それでも言葉を選び出した。

『あんな、無理すんなよ』

『ふふっ、ありがとうございます。八幡さん優しいですね』

『俺はいつも優しいんだよ』

『そうですね。本当に』

『わりーな。こういう時に気が利いた事が言えなくて』

『八幡さん、こういう時は愛してるでいいんですよ♪』

『……小町か』

『さあ、どうでしょう？』

『……愛してる』

『わ、わわ、私も……愛してます』

『……………』

『……………』

つい流れで言ってしまったが、大事な事に気づく。

『そういや、愛してるっていうのは初めてだな…………』

『そうですね…………素敵な響きです』

『今のでよかつたのか？』

『そういう事を聞くと、雰囲気は壊れるじゃないですか』

『す、すまん…………なんつーか、照れくさくて…………』

『会ってる時はもつと大胆な事するのに…………』

それは、いつぞやのアレやアレの事でしょうか？アレはですね、気持ちが高ぶりすぎたといいますか…………。俺も健全な男子である以上、花陽がどんな可愛い服を着てようとも、その服の下の事しか気にならない事があるんですよ。

『ご、ごめんなさい。変な事言いました…………』

『いや、いい。それよか、もう遅いから寝た方がいいぞ。朝練あるんだろ？』

『あ、はい。それじゃあ八幡さん、おやすみなさい』

『おう、お休み』

…………やっぱり花陽のために何かしてやりたい。

このまま、しばらく思考の海に沈んでいくのかと思ったが、カレンダーが目に入った瞬間、いい考えが閃いた。

翌日の放課後。

「あれ、比企谷」

「ヒツキーだ！」

「どうかしたのかしら？」

「……頼みがある」

ロビンソン #2

「はい、一旦休憩にしましょう！」

絵里ちゃんの号令で、皆の気が一齐に緩む。ラブライブまであと約2週間。一人一人の一生懸命さがパフォーマンスに滲み出ているような気がして、今まで以上の一体感が生まれていた。皆もそれぞれ手応えを感じているみたいで嬉しい。

しばらく踊り続けていたせいか、2月の冷たい風も心地よく思える。

「うん！良い感じだね！」

「あまりはしやぎすぎて本番前に怪我しないでくださいよ？」

「みんな。お菓子持ってきたから食べよ？」

「食べる〜！」

「あ、こら穂乃果！話はまだ終わっていませんよ！」

2年生達のいつものやりとりを微笑ましく思いながら、ことりちゃんが持つてきてくれたお菓子に手を伸ばす。

「私からのバレンタインデーチョコだよ♪」

「そういえば、すっかり忘れてたわね」

真姫ちゃんがチョコを手に取り、見つめながら言う。

「花陽ちゃんは比企谷君にあげるの!？」

穂乃果ちゃんがずっと身を乗り出してくる。

「最初は会って渡したいなって思ったんですけど、八幡さんからラブライブに集中するように言われて……」

「へえ、あいつ意外と気をつかえるのね」

「そうね。じゃあ、今度私が……」

「エリチ編始まったんやろ？」

「うん!」

「それはさておき……じゃあ、応援していただいでる分、しっかり結果を残さねばなりませんね」

「気合入れるにゃ〜!!」

「うん!!」

八幡さんも毎日頑張ってるから、私も頑張ろう!

……やっぱり会いたいけど。

夕暮れの帰り道。

疲れきった足と空腹感が頭の中を埋め尽くすのを感じながら、とぼとぼと歩く。お家

に帰ったら、白米を沢山食べて、体力を回復しよう。あ、でもあんまり食べ過ぎたら、海未ちゃんに怒られちゃう。

考えている内に、もう自宅のすぐ近くまで来ていた。

ほっとした気分になりながら、少し早歩きになる。

マンションの向かいの公園では、誰かがブランコに……

「……え？」

ふと目を向けた公園の中で、見慣れた人が、いつもの気だるげな表情でブランコに揺られていた。

「八幡さん！」

ブランコでのんびり冬の風を感じていると、聞き慣れた声が届いてくる。電話越しの密やかな響きも好きだが、やっぱり直接耳を刺激してくるこの甘ったるい響きが一番好きだ。

花陽は全力で駆け寄ってくる。

「はあ……はあ……どうしたんですか!？」

「少し落ち着けよ」

隣のブランコを促すと、花陽はすくと腰を下ろし、息を整えた。

その頃合いを見計らって、鞆からプレゼントを渡す。

「これ」

「？」

俺が左手で差し出したそれを、キョトンと見つめている。流石にいきなりすぎたか。

「バレンタイン……」

「え？」

「今日はバレンタインデーだろ？だから……」

「……え、ええー!？」

まあ、驚くのも無理はない。いきなり訊ねてきた彼氏からバレンタインデーのチョコレートを渡されたのだから。

ちなみに手作り。奉仕部、というか雪ノ下に作り方を教えてもらいながら、何とか完成させた。途中から生徒会やら何やら増えて、一大イベントになってしまったが……。

「でも今日はバレンタインデーじゃ……」

「まあ、あれだ。たまには男からでもいいだろ。……彼女が頑張ってるんだからな」

「……八幡さん。ありがとうございます！大事にしますね！」

「できれば食べてくれ……」

真つ直ぐな笑顔に思わず抱き寄せたくなるが、場所が場所だけに思いとどまる。

「じゃ、俺はそろそろ……」

「あ……もう帰っちゃうんですか？」

その子犬のような上目遣いは反則じゃないですかね。

あんまり長くいると、色々和我慢できなくなりそうだ。そのぐらい花陽が心から欲しい。しかし、それが今の花陽にとっていい事か悪い事かはわからない。

そこでいきなり俺の思考を遮断するように、今度はおつとりした声が乾いた空気を揺らした。

「二人共——!!ご飯できてるわよ——!!」

いつの間にか、公園の入り口に立って笑顔で大きく手を振る花枝さんを見て、つい感謝してしまった。

俺のすべて #2

「お母さん、おかわり！」

「はいはい」

「……………」

花陽が元氣よくお茶碗を差し出すと、花枝さんは嬉しそうにご飯をよそう。さすがは育ち盛り。どことは言わないけど。できればもう少し……けぷこん、けぷこん。

「八幡君も沢山食べてね♪」

「あ、はい…………」

……はっ！いかん。チョコを渡して帰るだけのつもりが、すっかり晩飯ご馳走になってしまっている。これがほんわか of 総本山・小泉花枝さんの力か。そして、おかわりの塩焼きも美味しいのだが、何より白米が美味すぎる。

「お母さん、おかわり！」

「あらあら」

おっと、さすがにこれは止めねばならない。園田さんからもデザート中の食事で、花陽が食べ過ぎたら止めるように言われているのだ。

「花陽」

「？」

「ラブライブ」

「はっ！わ、私ったら何を……」

花陽は震えながら箸を置き、清水の舞台から飛び降りる気持ちで食事を終えた。ついか、まだ食えるのかよ。

「そういえば比企谷君、最近花陽とはどう？」

「え？あ、いや……ど、どうと言われましても……」

「もう、お母さん！いきなりそんな事聞かないで！」

花陽があたふたしながら頬を赤く染める。本当にいきなりすぎる。さっきかがんだ時に見えた胸の谷間くらいいきなりすぎだ。

「あら、いいじゃない。男の子とほとんど話した事のない花陽がこんなに惚れてるんだもの」

そう言いながら両肩をぼんぼん叩いてくる。花陽と同じ香りに、人妻の色香とも呼べるものが漂ってきて少し緊張しながらも、いつか花陽もこういう女性になるのか、なんて想像してしまう。

結局、食事の間はそんな微笑ましい親子の穏やかでほっこりな攻防戦が繰り広げられ

ながら、時間が過ぎた。

食後は花陽の部屋でくつろぐ事になった。普通にお招きされたが、まだ2回目である。ドキがムネムネしてきた。いや、やらしい事は考えてない。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「もう、お母さんだったら」

「相変わらず仲いいな」

「それはそうなんですけど……」

「ん？これ、新曲のPVか……」

「あ、はい。ど、どうですか？」

へえ、相変わらずすげえな。お、これはいつぞやの乳トン先生ではないですか！お久しぶりです！

「ハチマンサン……」

「はいすいませんでした」

……この流れも久しぶり！帰ってきた闇花陽さん！

花陽がチョコを鞆から取り出した。目の前で感想を言ってくれるのだろう。え？さつき？何もなかった何もなかった何も……あれ？手が震えてるなあ。何でだろう？

丁寧に包装をほどく指がやけに艶めかしい。こんな仕草さえもそんな風に見える自

分がどうかしているのだろうか。考えている内に星型のチョコが花陽の指につままれていた。

「じゃあ……いただきます」

「お、おう……」

いかん。緊張してきた。

ていうか、チョコを含まうとするほんのり紅い唇が妙に色つぽい。さつきからどうしたんだろう……場の空気に酔いしれてしまっているのだろうか。

花陽はそんな事は無自覚にあどけない表情でチョコを頬張り、舌で転がす。

「……おいしいですー」

「そうか。ならよかった……」

ほっとしながらもなんか落ち着かない。

「八幡さんもどうですか?」

「ビターチョコだから俺向きじゃない」

「でもこれで……」

いきなり身を乗り出した花陽が唇を深く押しつけ、舌を押し込んできた。そして、その舌を伝ってチョコが口内にどろりと送り込まれてくる。

「……………」

「これで、少しは、甘く、なりました？」

そう言いながら微笑む顔は火照っている。

唇のチョコを拭う舌がいつもの花陽の舌より扇情的に這い回る。

それを見て体が自然と動いた。

俺は花陽を押し倒していた。

「は、は、八幡さん？」

花陽の驚きを押さえつけるように、唇を重ねる。さつきより熱く、甘かった。

「……………んん……………んんくっ」

「……………」

馬乗りになって、制服のボタンを一つ一つ外していく。自分が思うよりスムーズにできていた。あらかじめこうなるように仕組まれているみたいな気がした。

「は、八幡さん……………！」

「……………！」

体をずらし、スカートに手をかけた辺りで手が止まる。

潤んだ花陽の目が獣を見据えていた。

何がこの瞳を潤ませていたかは一目瞭然だ。

「……………めん」

起き上がり、ベッドに座り直す。

「……………」

花陽は声を発さない。まだ何が起ころうとしていたのかよくわからない沈黙が流れた。

室内にいるというのに、生温い風が二人の間をすり抜けたようだ。

「……………いいですよ」

「え？」

「……………このまま……………続けても」

「……………」

「だから……………」

彼女は湿った声で続ける。

「ずっと……………好きでいてくださいね」

「花陽……………」

花陽は後ろから抱きついてきた。

「八幡さん……………大好き……………愛してます」

左肩を濡らす声に、心臓が飛び出しそうなくらい脈打つ。こうしているだけで、花陽の考えている事がわかってしまいそうだ。

「花陽」

「はい……」

振り返り、胸を揉んでみた。

「ぴゃあっ！」

「無理すんな」

「あうう……」

花陽は胸を隠し俯く。場の空気が緩んでいくのがわかった。

「怖がらせて悪かった……」

「そんな事……」

「肩震えてるぞ」

「……ごめんなさい」

「いや、謝るのは俺の方だ」

花陽の頭を撫で、気持ちを落ち着ける。

「ボタン閉めるぞ」

「あ、すいません」

開いたシャツの間に見える下着や豊満な胸の谷間や白い素肌にどぎまぎしながらも、理性で自分を押さえつける。スカートもはだけて、黒いタイツが妄想を膨らます。

「八幡さん」

「何だ？」

「さっきの言葉は嘘じゃありませんよ？」

「そっか……」

「わ、私は八幡さんの子供なら……産みたいです」

「……え？」

「八幡さんと……家族になりたいです」

「飛躍しすぎじゃないですか？花陽さん」

「でも……本気です」

「……そっか」

この後は子供の名前だとか、何人がいいかとか、気がすむまで語り合った。

その余りにも幼くて頼りない未来図は、きつとこの先も輝き続けると心から思えた。

涙がキラリ☆ #2

「第二回ラブライブ優勝は……………」

ドラムロールがドーム内に鳴り響き、会場内に緊張感が充満する。手に汗握るという感覚を久々に実感しながらステージを見守る。

隣りに目をやると、小町も戸塚も材木座も戸部も、さらに川崎姉妹も雪ノ下も由比ヶ浜も皆一様に息を潜めている。呼吸する事すら躊躇うような雰囲気があるにはあった。

そうやっている内に、ドラムロールが鳴り止み、会場が暗闇に包まれた。

「ラブライブ優勝は……………μ，s!!!」

μ，sのメンバーにスポットライトが当たり、会場内が今度は割れんばかりの大歓声に包まれる。俺も気がつけば立ち上がり、ステージに届くようにと一生懸命拍手を送った。

我を忘れて掌を打ち鳴らしていると、小町が抱きついてきた。

「お兄ちゃん、優勝！優勝したよー」

「ああ、すげえな……………」

メンバーは最初、放心したように立ち尽くしていたが、数秒経って現実を理解したの

か、喜びが溢れてきたようにメンバー同士で固く抱き合う。

「星空さ……凜ちやーん!!!」

戸塚も小柄な体に似合わぬ凄まじい大声をステージにぶつける。

「μ，s！μ，s!!よくやったー!!!」

「つべーわ！優勝とかマジすげーわ!!!」

「ことりー！おめでとー！」

「みんな〜おめでと〜！」

「穂乃果ちやーん！やつはろー！」

「西木野さん……おめでとー！」

材木座が素に戻っていたのと、由比ヶ浜のやつはろーが気になったが、皆それぞれ喜びを爆発させている。

ここからは豆粒にしか見えないが、花陽がこちらをみて、手を振っている気がした。

こつちも豆粒だろうが何だろうが、手がヒリヒリ痛くなるくらいに拍手を送り続けた。

「皆、優勝おめでと〜!!!」

会場の外で、小町と由比ヶ浜が先陣きって祝いの言葉をかける。

「ありがとう〜！」

高坂さんが由比ヶ浜に抱きついた。やっぱ似てんだよな、この二人。胸以外は。少しくらい分けてやれよ。あと、雪ノ下姉が雪ノ下に胸を分けてやればいい。そうすれば少しは世界が平和になるはずだ。

「彩加さん！」

「凜ちゃん！」

ハイタッチが大きく幸せを奏でるのを聴きながら、この二人は案外バカツプルになりそうだな、なんて思ってしまった。

「比企谷君比企谷君比企谷君！見てくれた!？」

「は、はい……」

絢瀬さんがぐいぐいやってくる。近い近い近い！あといい香り……。

「エリチ」

「落ち着きなさいよ」

「だって絵里編が！」

「それ以上は禁止だよ」

「はい」

「それに……希編だって控えてるんやから」

「ちゅー」

……ひとまず三年生トリオはスルー推奨で。触れてはいけない気がする。

「八幡さん」

「おう」

小町の熱いハグから解放された花陽が真正面にやってくる。その表情はいつものように穏やかで、先程のステージでの姿は完全に内側に引っ込んだみたいだ。

「見ててくれました?」

「ああ、おめでどう」

「ありがとうございます」

「それとお疲れさん」

「……………」

「……………」

少し長めのアイコンタクトを交わし、どちらからともなく並んで歩き出す。今宵限りの宴の空気にまだ酔いしれていた、なんて柄にもなく思ってしまった。

冬が溶け、春が顔を出す気配と共に、何かが変わる確かな感触がそこにはあった。

胸に咲いた黄色い花 #2

「ニューヨーク？」

卒業式を無事に終えた夜、花陽から聞いた言葉が上手く飲み込めずにオウム返しする。

「はい、実は……」

卒業式シーズンが到来し、ラブライブ優勝の感動が別れの切なさに変わっていかうとしていた……はずだが、スクールアイドルのイベントがドーム会場を使って行われるらしく、イベントを盛り上げる為に海外でPV撮影を行い、さらにライブを世界中に生中継するらしい。

「スクールアイドルのため……か」

「は、はい！八幡さん。海外でライブですよ、海外でライブ！」

「俺はプロデューサーじゃない」

これはテンション上がっているというより、何が何だかわからなくなっている状態だ。はなよはこんらんしている！

「わ、わ、わたしアメリカ行っちゃうんですね……」

「ああ、そうだな……」

「は、八幡さんは？」

「行かないけど」

「何ですか!？」

「いや、いつ俺がμ，sになったんだよ……」

「そうですよね。うう……」

「もしかして飛行機怖いのか？」

「……です」

「わり、聞こえなかったからもう一回いいか？」

「八幡さんと離れるのが寂しいです！」

「い、今も離れてるような気がするんだが……」

「だってアメリカなんですもん……」

今、目の前に受話器の向こうで頬を膨らます花陽が見えた気がする。うわあやべえ、か、可愛すぎる……！

「まあ、5日間なんだろう？すぐに会えるから我慢しろよ……その、なんだ。気をつけてな」

「むう……なんかあつさりしてます。寂しいです」

「す、すまん……こういう時の言葉選びが下手なもんでな」

「もう……でも許してあげます。その代わり……」

「？」

「帰ったら……思いつきり、あ、甘えさせてほしいです」

「……ああ、わかった」

「ありがとうございます！私、頑張れそうです！それじゃあ……おやすみなさい」

「ああ、お休み」

通話を終え、天井を見上げる。最近の花陽の甘デレがやばすぎる。甘々のデレデレなので、非常に糖分過多だ。この前、千葉でデートした時に奉仕部の面々と遭遇した時も、見ている方が照れてくるから気をつけた方がいい、との感想をいただいた。

……思い出したら顔が熱くなってきたので、とりあえず置いておこう。それにしても

……

「ニューヨークか……」

海外でPVとかすげえな。芸能人かよ。

だがあんなにすごい感動を起こせるμ，sなら納得できてしまう。そのぐらいにラブライブでは心を動かされた。

「……負けてらんねえな」

俺は勢いよくベッドから起き上がり、大きく伸びをした。

「あれ？お兄ちゃんこんな時間にどっか行くの？」

「ああ、ちよつと走ってくる」

「ふうくん。気をつけてね」

「おう」

「……ふつつつぶ。安心してね、お兄ちゃん。ニューヨーク行きは小町に任せて！」
こうしてまた一つ、賑やかすぎるイベントが幕を開け始めた。

空も飛べるはず #2

「海外旅行?」

聞き慣れない単語について驚きが出てしまう。

母ちゃんの言った事が信じられなくて、ドツキリじゃないかと辺りを見回した。小町も親父も何も持っていないようだ。

ひとまず母ちゃんに向き直る。

「どうしたんだよ。いきなり……」

「あんたまだわからないの? 家族で海外旅行に行くつつつてんの」

「……いきなりだな」

「そう? 小町も高校受験合格したから、ちょうどいいと思うけど」

僕が高校受験合格した時は何もなかったようですが……気のせいですか、お母さん?

「どこに行くんだよ」

「ニューヨーク」

へえ、確か花陽達の行き先もニューヨークだったような……。

「いつ行くんだ?」

「はいからはいまで」

……あつれー？ 確か花陽達もこの日程だったような。

小町の方に目を向けると、思いつきりドヤ顔でウインクをしてきた。ドヤ顔でも可愛
いとはさすが俺の妹。

「……お前も最近頑張ってたからな」

ぼそつと呟き、親父はだらだらとした足どりで自分の部屋へ戻っていった。

「……ありがとな」

俺はこつそりとその背中に向けて礼を言った。

「お兄ちゃん、サプライズがいいと思うんだよー」

「はあ……」

目をキラキラさせてくる小町に、呆けた表情で返してしまふ。さっきの発表もかなり
サプライズなんだが……。俺は48グループのメンバーではないので、そんなにサプ
ライズは必要ない。

「日本から遠く離れたアメリカで、偶然の再会！ ロマンチックだよね〜♪」

「そうか？」

むしろ今すぐ連絡しようと思ってたんだけど。

しかし、小町は強い意志を秘めた瞳で俺を見据えてくる。この意志が1パーセントで

も勉強に向けば受験も楽だったろうに……まあ、それはさておき。

「どうやって説得したんだ？」

「何の事？」

「旅行の件だよ。お前が頼んだんだろ？」

「小町は特に何もしてないよ。お父さんの膝の上に乗って、『家族でニューヨークとか行きたいなあ〜』って言っただけ」

「お、おう……」

決定打じゃねーか。つーか、今で妹の将来がかなり心配になりましたよ？ ジャグラーぱりに男を手玉にとるようなキャラクターにはならないでね。

「それよかサブライズだよ！ 何か楽しい事したいじゃんか！」

「それが本音かよ……」

「もちろん二人の事も考えてるよ。これを機にもっと二人の愛が深まれば……きゃー」
♪

「……………」

これ以上甘デレされたら、今度こそ最後までいっちゃう気がするんですけど……。

「うーん、μ, sの皆は忙しいだろうからあまり迷惑はかけられないし……」

「そもそも会えたとしても短時間だろ」

「大丈夫！インパクトが大丈夫なんだよ！よしつ、頑張るよ、お兄ちゃん！花陽ちゃんは待ってるよ！」

「あ、ああ……」

まだ見ぬ異国の地に思いを馳せながら、比企谷兄妹の極秘プロジェクト(?)がスタートした。

ルキンフォー #2

空港は様々な目的を持った人達でごった返す。

卒業旅行で海外を旅する男女のグループ。自分の国へ帰国すると思われる背の高い白人の男性。仕事で海外へ出張する雰囲気滲み出ているスーツ姿の中年男性。ごついキャリアーバッグを引いて歩く四人家族。皆それぞれ自分の行き先に思いを馳せていた。

「お兄ちゃん！あまりキョロキョロしないで！見つかったらやうでしよ!」

「あ、ああ……」

比企谷家は全員サングラス着用で歩いている。うわあ、何だろう。この残念な空気。付き合わされている親父と母ちゃんが少し不憫に思えてくる。

とりあえず花陽には用事があつて見送りにいけない、と伝えておいたので、多分バラたりはしない……はず。

「かよちくん！こつちこつちゅー!」

「ダ、ダ、ダレカタスケテェー!」

「……………」

目の前通って行っただけ……うん、大丈夫！

「ふう、びつくりしたあ……」

小町もさすがに今のは焦ったみたいだ。

不意打ちすぎんだろ。空港ではしやぎすぎてはいけません！
すると、正面から見知った胸……顔が歩いてきた。

「お兄ちゃん、東條さんだよ」

「しっ。顔伏せろ」

やや俯きがちになり、親父と母ちゃんを盾にして歩く。

そのまますれ違い、やり過ごそうと思っただけ……

「ほな、ニユーヨークでな♪」

「……………」

東條さんは確かに俺の方を見て魔女のように微笑み、小さくそう告げた。

振り返ってみたが、何事もなかったかのように、てくてく歩き去っていく。

マジかよ……何者だよあの人……。

何はともあれ、こうして前途多難な旅路が幕を開けたのだった。

飛行機の中。ひそひそ声で小町と言葉を交わす。

「なあ、小町。これは偶然にしちゃあ出来過ぎてないか？」

「ま、まあ、お兄ちゃんだし……」

あら不思議。よりによって、このタイミングで花陽の前の席になってしまった。もちろん花陽はそんな事は知らずに、星空達とお喋りしている。

「さつきバレるかと思っただぞ」

「小町も……」

親父と母ちゃんは席に座るや否や、アイマスクを装着して、熟睡態勢に入った。普段の疲れをここで取り除いて現地で思いきり楽しむつもりらしい。いい夢見ろよ！

「トイレの時気をつけてね」

「ああ」

やがて離陸の準備が整い、機内にはアナウンスが流れた。

窓の景色を静かに楽しみながら、俺も眠ろうかなんて考えていると、後ろから声が聞こえてくる。

「どうしたの、かよちん。もしかして比企谷さんがいないから寂しいの？」

「え？あ、いや……うん、そうかも」

「か、可愛いつ♪」

や、やべえ。俺も大声で可愛いつて言いたくなってしまう。

「そうね、私も「エリチ」絵里編で絵里がまさかの……！」

「それも禁止やよ」

この二人はスルー推奨で。たまに変な電波を受信しているみたいで本当に危ない。

「比企谷君とは最近どうなんですか？」

「え?……は、八幡さんはいつも優しいし、一緒にいて楽しいですし……でも、たまにエッチな時もあります」

「へえ、比企谷君もそんな時あるんだ」

「そりやそうでしょ。あいつも男よ」

やめて!それ以上話さないで!女子トーク怖すぎて怖すぎて震えちゃう!

「どうエッチなん?」

おい、東條希!これ以上言ったらその胸……いや、いやらしい事は考えてませんよ? ハチマン、ウソ、ツカナイ。てかこの人、絶対わざと話を誘導してんだろ。そうなんだろう。

「あはは、たまに……その、胸や脚に視線が集中するとか……」

「やっぱ男の子なんやね」

「ハ、ハレンチです!」

「男って本当に……」

「ま、まあ、お年頃だし、仕方ないんじゃないかな」

くつ、耐えろ！耐えるんだ俺！まだ旅行は始まったばかりなんだからこれから挽回すればいい。

瞑目し、心を落ち着けていると、隣にいる小町から声をかけられる。

「お兄ちゃん……」

「何も言うな……」

妹のジト目に、俺は哀しげに項垂れる事しかできなかつた。

そして、前方のささやかな賑わいが寝息に変わるまで、俺は精神を削られ続けていた。

小さな生き物 # 2

「「「おお……」」」

空港を出て、比企谷一家は感動と驚愕の入り混じった声を上げる。

まだ日本と何がどう違うというのがよくわからないまま、ただただ胸が高鳴っていた。そして、空港にいる白人や黒人の比率が日本より明らかに高いのを見ると、アメリカなんだなあ……という実感が湧いてくる。秋葉原でも外国人は沢山見るけど。

「来ちゃったね」

「来ちゃったな」

「ほら、あんた達。早くタクシー乗るよ」

母ちゃんに呼ばれ、タクシーの列に並ぶ。少しだけ空港で時間を潰したので、花陽達はまだもうタクシーに乗り込んでいるだろう。行き先が同じなので、ホテルのロビーでぼつたり、なんて事もあるかもしれないが。

「そーいや、サブライズって結局何やるんだ？」

作戦会議といっても、サブライズの素晴らしさを語られただけのようない気がする。もう、ホテルのロビーで会えばよくない？

「え？サブライズ？」

「……………」

「あ、ああ！そりや、いい場所があるよ！きつと！」

あれ？この妹忘れてますよね？絶対に忘れてますよね？

「やっぱり夜だよね！」

「はあ……………」

漠然としすぎているが、ロマンチックな気はしてくる。だが俺が聞きたいのはどんなシチュエーションか、であってだな……………」

「あ、いい方法思いついた！」

「やっぱり忘れてたんじゃねえか」

「そんなわけないじゃん！お兄ちゃん耳貸して！」

「？」

俺は小町の名案とやらに耳を傾けた。

「かよちゃんが買ってきたお菓子美味しいね〜♪」

「ありがとうございます」

どうやらお菓子選びは上手くいったみたいだ。希ちゃんから頭を撫でられた。

その隣で、穂乃果ちゃんは必死に海未ちゃんの機嫌を直そうとしている。

「ほ、ほら！私のお菓子半分あげるから、機嫌直して！」

「……………んぐ」

「は、半分つて言ったのに……………もうほとんど残つてない……………」

「これで許してあげます」

「じゃあ、凜も！」

「やゝめゝてゝ！」

海未ちゃんも機嫌は直つた……………かな？

3人が行き先を間違えたと聞いて、どうなるかと思つたけど、無事にホテルにチエツクイン出来ました。八幡さん！いつか一緒にアメリカに来たら、私が案内してあげますからね！その時はこんなホテルに泊まりたいなあ。

『夜景……………綺麗ですね』

『……………花陽の方がずっと綺麗だと思う』

『そ、そんな、からかわないでくださいよ』

『花陽……………目を閉じて』

『は、はい……………』

「かよちゃん、どゝしたん？」

きやゝゝきやゝゝは、八幡さんつたら♪も、もつと言つて欲しいかも！

「い、痛い！痛いわよ、花陽！いきなりバシバシ背中を叩かないで！何なのよ!？」

「ほらほらかよちん。気持ちはわかるけど叩くんなら、にこつちじゃなくてこつちの枕にしとき」

「の、希〜！何言ってるのよ〜！」

「あんまり騒ぐと苦情が来るわよ」

はあ……八幡さん、今頃日本で何してるのかなあ。

私は遠い空にいる大事な人の顔を思い浮かべていた。

夜を駆ける #2

「驚いたにや〜！まさか二人がアメリカに来てるなんて！」

「し〜っ！凜ちゃん、声が大きいよ！」

「お前もな」

星空にメールで連絡をして、ホテル内の喫茶店に誘い出す事に成功した。どうやら東條さんは黙ってくれているらしい。まあ、あの人は事の成り行きを楽しもうとしているんだらう。どうでもいいけど、東條さんといい、雪ノ下姉といい、破壊神ビルスといい、どうして怖い人のオーラって紫っぽい？女子二人に至っては下着も紫に違いない。

「じゃあ、かよちゃん呼ぶから待ってて！」

「ストツプ！凜ちゃん」

小町が星空を止める。星空はキョトンとしていた。

「どうしたの？」

「それじゃ、ダメなんだよ凜ちゃん」

「何が？」

「面白味……ムードって大事だと思うんだよ！サプライズだよサプライズ！」

もう既にサプライズとしては成立しそうなんですがね。それと小町ちゃん、本音漏れてるよ。

「凜ちゃんも戸塚さんからサプライズされたら嬉しいでしょ?」

「さ、彩加さんが……サプライズ……えへへ」

「おや、いつの間にか名前と呼ぶようになってますね。俺も彩加って呼んでみようかな。止めとこう。」

「順調にバカップルになってきてるな……」

「ひ、比企谷さんに言われたくないや!」

「え?俺?」

心外である。俺は節度ある高校生らしい清く正しい交際を心がけているというのに。手を繋ぐ時は人ごみではぐれないようにぎゅつと繋ぐし、夜以外デーブなアレはしないと決めてるし、屈んだ時に見える胸の谷間も一日五回までしか見ないと決めてる。こんな俺達がバカップル扱いとは……。

「まあ、どっちもどっちだね……」

小町の一言で、不毛な争いはひとまず決着がついた。

「よし、わかった!じゃあ、凜に任せて!」

「頼んだよ、凜ちゃん!」

「すまん、忙しいのに」

「夜はあまり出歩かないと思うし大丈夫にや！」

「そっか」

まあ、日本とは違うしな。俺だってあまり夜に出歩く気にはならない。いや、俺の場合日本でもそうでした。

とりあえず、今後の計画の簡単な打ち合わせをしてから星空と別れ、その時になるまで観光に出かける事にした。

「あれ？凜ちゃん。どこ行ってたの？」

いつの間にかいなくなっていた凜ちゃんが笑顔で戻ってきた。

「飲み物買いに行ったら、ちよつと道に迷っちゃって」

何で嬉しそうなんだろう？何か怪しい……。

「じゃあ皆で撮影場所の下見に行きましようか」

「あ、はい！」

私は絵里ちゃんの言葉に気持ちを切り替え、ニューヨーク観光に心を踊らせながら、皆と部屋を出た。

「なあ、小町」

「どしたの、お兄ちゃん。暗い顔して」

「アメリカってMAXコーヒー置いてないのかな？お兄ちゃんショックなんだけど」
「はあ……やっぱりアメリカでも残念なんだね。お兄ちゃんは……」

妹にMAXコーヒーの素晴らしさを理解してもらうまでは、まだ時間がかかりそう
だ。

恋する凡人 #2

「あれが自由の女神ですか……」

「写真で見るよりすごいにや〜!」

いつもは落ち着いている海末ちゃんも、はしやいでいるように思える。両手を広げ、喜びを表現する凜ちゃんもいつにも増して元氣一杯だ。最初はどうなるかと思っただけ、皆徐々に開放的な気分になってきている。

「かよちくん♪」

背後からいきなり胸を掴まれる。

「ぴやあつ!」

振り向くと、希ちゃんがニヤニヤしながら、手をわしわしさせていた。

「やっぱりアメリカンサイズいくかもしれんね」

「希ちゃん! な、な、何が?」

「そりゃあ、もちろんかよちんの……」

「い、言わなくて大丈夫だよ!」

もう、希ちゃんったら……。

「ふふつ、かよちゃんも楽しまないと損やよ！」

手を引かれ、皆で写真を撮ることになった。身体を寄せ合うと、いつもより温かい。こうやってμ、sの思い出を作る機会を与えてくれた神様に感謝せずにはいられなかった。

「……で……だから、よろしくにゃ！」

「え？比企谷君が？うん、わかったよ！頑張る！」

「穂乃果、あなたが頑張る必要はないのですが」

「え？比企谷君来てるの!?!どこ!?!」

「エリチ、声が大きいよ」

「だって絵里編が中々更新されないじゃない！」

「エリチ、メタいよ」

「お兄ちゃん、花陽ちゃんへのプレゼントは決めたの？」

「ああ」

「さっすが！準備がいいね！で、どんなの？」

俺は自信满满に自分の胸に右手の親指をトントンと当てる。

「俺がプレゼントだ」

「……………うわあ」

「家族3人でドン引くの止めてくんない？何で話に入ってなかったのに親父までリアクションとってんだよ」

「あんた……花陽ちゃんに変な事してフラれないようにね？」

「……………」

母ちゃんと親父がジト目で見てくる。花陽のは可愛くてたまらんのだが、両親のは可愛くも何ともなく、イラツとしかしくない。俺の発言が原因なのだが。

「大丈夫だよ。今から買うから」

「今から？」

「せっかくアメリカ来たんだから現地調達の方がいいだろ」

「まあ、確かに…………」

「つーわけで俺はこの辺りうろついているから」

集合時間と集合場所だけ決めて、俺はプレゼント探しを始めた。

ひとまず店を決めようと思ひ、その方向性を考えていると、左肩に軽い衝撃を受けた。どうやら誰かとぶつかったようだ。

「あ、ごめんなさい」

カタコトっぽい日本語で謝られる。どうやら外国の方のようだ。

短めの銀髪が印象的で、どこか雪をイメージしてしまうような儂げな美少女だ。俺よ

り年上かもしれない。

「あ、（こちらこそ……………」

……………」

何故かじいっと見られている。目が合うとかじやない。覗き込まれている。顔が赤いのは何故でしょうか？

風邪でしょうか？

「あなた……………素敵、デスネ」

「は、はあ？」

落ち着けハチマンン！これは罠だ！ここはアメリカだぞ！

俺は美少女から距離をとる。いい香りなんて気にしない！

「アナスタシアさん」

無駄に格好いい声が背後から聞こえたので振り向くと、身長190はあるんじゃないかなろうかと思える大男がいた。しかも顔が端正ながらもかなり厳つい。

や、やばい……………」

俺が戦々恐々としてしていると、その大男は俺をチラ見しただけで、美少女へと駆け寄る。

「（ここにいたんですか」

「あ、プロデューサーさん、ごめんなさい」

「撮影が始まりますので」

「ワカリマシタ」

その美少女は大男（プロデューサー？）に促され、スタスタ歩いていく。

「……………♪」

振り返りざまに軽くウインクされた。

「……………何だったんだ」

正夢 #2

無事にプレゼント探しを終え、家族と合流する。ちよつとしたハプニングはあったが、異国の地での思い出として笑い話にでもしておこう。いやあ、あのプロデューサーさん（？）怖かった……。

「お兄ちゃん、どうだった!？」

小町がにぱつとした笑顔で聞いてくる。こっちもこっちで楽しんでいるようだ。親父の機嫌がいいのが足取りでわかる。

俺はポケットに手をつ込み、ポケットの中のプレゼントを確かめながら言った。

「……いい感じのが見つかった、と思う」

「そつか。ならオーケー」

小町にしては珍しく、それ以上は何も聞いてこなかった。小町も少しは兄離れ……いや、俺が妹離れしてきているのか。少し寂しいが、こうして色んなものが変わっていくのだろう。それは悪いことなんかじゃない。

何の気なしに青空を見上げ、もう学年も変わるんだな、と柄でも無い事を考えてしまった。

そして、もう一年経つのだと気づく。

花陽と初めて出会ったあの日から。

「ふう〜、お腹空いた〜」

「そうですね。散々歩き回ったからでしょうか」

「かよちん。白米じゃないからって落ち込まないで」

「うう……」

忘れてました……。

アメリカはパン派だということを。

でも大丈夫だよ。別に一ヶ月も二ヶ月もアメリカにいるわけじゃないし。きっと

大丈夫！……多分大丈夫。

隣を見ると、何故か凜ちゃんがそわそわしていた。さっきからしきりにキョロキョロ

していて、何かを探しているみたいだ。

「どうしたの？凜ちゃん」

「な、何でもない何でもない！」

確か前に八幡さんが、何でもないって言うてる奴が何でもなかったのを見たことがないって言うってたから、もしかしたら凜ちゃんも……。

「凜ちゃん」

その手を握り、真っ直ぐに目を見つめる。

「え？か、かよちゃん、どうしたの？」

凧ちゃんはポカンとしている。イメージしたりアクションとは違うけど、私は思った事をそのまま伝えた。

「大丈夫。戸塚先輩がいなくて寂しいかもしれないけど、皆がいるから。だから大丈夫だよ」

「かよちゃん……」

「そ、そそ、そうだよ凧ちゃん！大丈夫！私達がいるよ！」

「穂乃果、焦りすぎです」

妙に慌てている穂乃果ちゃんに、海未ちゃんが小声で注意する。どうしたんだろう？

「ち、ちよつとお花を摘んで参りますわ！」

凧ちゃんは携帯を確認すると、慣れないお嬢様言葉を使って御手洗へと向かう。リーダーになった時もあんな感じだったなあ。怪しいけど、凧ちゃんが自分から言うまで待つことにしよう。

「だ〜れだ♪」

突然視界が塞がれる。でも声でわかってしまう。もう、御手洗から帰ってきたのか

な。

それにしても……凜ちゃん、こんなに手大きかったかな？あと少し固いような気が……。

その温かな手がゆっくりと離れたので、それに合わせてゆっくりと振り向く。

「……おう」

「……………え？」

「ニューヨーク、楽しんでるか？」

「は、は、八幡さん!!」

あれ？嘘？私どうかしてるのかな？

でも目の前にいるのは間違いなく八幡さんだ。私だけが知っている優しい眼差しを間違えるはずがない。上から下まで私の記憶のままだ。

「どした？」

「本当に……八幡さんなんですよね？」

「見ての通りな」

ぽんぽんつと丁寧に頭を撫でてくれるこの感触もリズムも八幡さんのものだ。

確信を得た私は、溢れる気持ちに身を任せ、真っ直ぐにその温もりに飛び込んだ。

愛のことば #2

花陽が思いきり抱きついてきた。

いつもの場所にすっぽり収まる小さな温もりに、喜びが込み上げてくる。つい最近会ったばかりなのに、すぐく久しぶりに会ったみたいだ。

甘い香りを撒き散らしながら、彼女は笑顔を向けてくる。

「来てくれてたんですね」

「あ、ああ、まあな」

くりくりした子犬のような瞳が甘えるように見つめてくる。何度見てもこの目には参ってしまう。今なら何でも言うことを聞いてしまいそうだ。

髪をな、親指で涙を拭ってやる。

「…………泣くなつての」

「だって…………嬉しくて…………」

親指で優しく目元を拭う。

その手をとおして、花陽の気持ちが変わる気がした。

あとはお互いに、自然と唇が重なっていく。

「……………」

「……………ん」

2、3秒で唇を離し、花陽の目を見ると、もういつもの笑顔に戻っていた。

「おお……………」

「ハ、ハレンチな……………」

「わあ〜♪」

「私達がいるの忘れてない？」

「あ、あ、あんた達……………！」

「比企谷君、花陽……………希、今夜は飲むわよ」

「いや、ウチら未成年やから。それに、明日は朝から練習やから」

「かよちん、よかつたにや〜!!」

「お、お兄ちゃん！大胆すぎ！」

「あらら、若いつていいわねえ」

「……………」

気がつけば、知らない人達からも囲まれて、拍手されていた。何を言っているかはよくわからないが、とりあえず祝福してくれているらしい。

「……………！」

「~~~~~♪」

「粋な演出しやがってぼっちのくせに!……仲良くやれよ!」

「おや、なんか久しぶりに出てきやがったぞ。まあ、今日のところは許しておいてやろう。」

「よろし、今日の晩御飯は二人のおごりやつて♪」

「の、希ちゃん!」

さりげなくとんでもない事言い出すな、この人。

「まさか八幡さんとアメリカでこうして一緒にいられるなんて……夢みたいです」

「まあ、確かにな」

二人してベッドに寝転がり、頬を撫でたり、髪を梳いたりしている。

食後にホテルに戻った俺達は、花陽と星空の部屋でくつろいでいた。星空が気を利用させて二人きりにしてくれた。本当にありがたい。日本に帰ったら、戸塚との甘い場面をセッティングしてあげたいくらい。まあ、俺が何かしなくても大丈夫そうだけど。

考えながら、花陽の柔らかい頬をつまんだり、つついたりしてみる。おお、結構伸びる。

「ふあふいふあんふあん」

「どした?」

手を離す。

「……………いい」

「？」

顔を寄せ、耳を近づける。

花陽は顔を紅く染め、目を潤ませながら言った。

「もっとキス……………してください。それと……………抱きしめて欲しいです」

「……………」

やばい。

可愛すぎる。

体が火照るのを感じながら、花陽を引き寄せる。いつまでもこの温もりを包んで、やわらかな感触に包まれていたい。

この時、一つの考えが閃いた。

君は太陽 #2

「は、八幡さん。入りますね？」

「ああ……………」

タオルを巻いた花陽がカーテンを引き、泡で満たされた湯船の中へ入ってくる。泡は溢れる事はなく少しだけで浮き上がった。

ブクブクとした柔らかい感触の中で、さっきのやり取りを思い出す。

『……………よかつたら、一緒にシャワー浴びないか』

『……………え？』

『……………』

『……………ええ!?!』

『わ、悪い。忘れてくれ』

『……………いいですよ』

『え、いや、別に』

『無理なんてしてませんよ。ただ……………』

『?』

『素敵な思い出しにしてくださいね?』

『……………ああ』

そんなわけで一緒に泡風呂に入っているわけだが、一つ問題がある。

……………何をすればよろしいのでしょうか?

花陽は微笑みながらこちらを見ているが、まさかこのままぼーっとしているのも違う気がする。

「あの……………」

「ひゃいつ!？」

「ふふっ、どうしたんですか?」

「いや、なんでも……………」

久々に花陽の前で噛んだ気がする。

「そつちに……………行つていいですか?」

「……………もちろん」

花陽は泡を纏わりつかせながら、俺の足の間ですっぽりと小さく収まった。

そしてそのまま寄りかかってくる。

「髪……………綺麗だな」

「えへへ……………ありがとうございます」

「昔からショートなのか？」

「そうですね。あ、もしかして長い方が好きですか？」

「いや、ただ色んな花陽を見たくなる時があるだけだ」

「私と一緒にですね」

「俺が髪伸ばしたところが見たいのか？」

「そうじゃなくて……」

花陽は顔だけ僅かに俺の方へ向けた。

「私も色んな八幡さんを知りたいんです」

体をこっちに向かせた花陽が、小さな手を俺の頭に添え、深めのキスをしてくる。俺もそれに呼応するように、火照った舌を絡め始めた。そして、タオル一枚を通して伝わる花陽の体温がさらに熱を加速させていく。

そして、震える指先を何とかコントロールしながら、タオルを丁寧に外していく。

花陽の身体が少し反応した。

「……何だか恥ずかしいです」

「大丈夫。……すごく綺麗だと思う」

「このまま……その……私達……」

「いや、見るだけにしとく」

本能に任せて行動しているせいか、頭がぼんやりしてきた。まるで自分が自分じゃないみたいだ。

そのまま互いに存在を確かめ合う夜は、高校二年の最も熱い夜になった。翌朝の事もあるので、少し早めに戻る事にした。

頭の芯から火照っていたが、どこか心地良かった。

花陽も顔を赤くしたまま、笑顔を向けてくる。

「あつという間でしたね。もう少し一緒にいたいかもです」

「そうだな。でも、そっちは朝早いんだろ？」

「はい、八幡さんも一緒に走りますか？」

「止めとく。ジャージ持ってきてないからな。それに……μ, sとしての時間も大事なろ？」

「ありがとうございます。気遣ってくれて」

「怪我に気をつけてな……おやすみ」

「おやすみなさい」

微笑みを見届け、ゆっくりとドアを閉める。

花陽のやわらかな感触は体に残ったまま、夢にも出てきそうだった。

君だけを #2

部屋に戻ると、ベッドに寝転んでスマホを弄っていた小町が顔を上げた。

「あ、お兄ちゃんおかえり」

「おう。親父と母ちゃんは？」

「二人でバーで飲んでくるんだって」

「そっか」

まあ、たまには夫婦水入らずってやつか。せっかくだから、仲良くやつてくれ。

「お兄ちゃんはどうだった？」

「……………さあな」

「ほうほう。どうやら甘いひとときを堪能したようすな」

小町はからかうようにニヤニヤしている。萎んだ風船のように弛緩した空気が、先程とは違う意味合いで心地よい。さすが妹。こちらの心情をしつかり汲み取ってくれている。

「プレゼント渡せた？」

「いや、渡してない」

「おりよ? 何で?」

「渡すのにちょうどいい日を思い出したんだよ」

「え? …… あ、そうか!」

どうやら小町も気づいたようだ。渡す日も、渡す場所も一つしか考えられない事に。残りの滞在時間は家族とのんびり観光したり、μ, sのライブを観に行ったり、楽しく過ごす事ができた。家族で旅行なんて、もう二度と行くことはないと思っていたのが……まあ、その、結構楽しかった。いつか自分が連れて行ってやりたいと思う。

日本に戻ると、さつきまでアメリカにいた事が夢のように思える不思議な感覚がした。

「お兄ちゃん、花陽ちゃんと一緒にいなくていいの?」

「この後も用事があるんだと。それに、邪魔したくないしな」

「へえ、意外と気を使えるじゃん」

「意外とは余計だ……ん?」

何か違和感を感じた。ぼっち時代の対人センサーはまだ健在のようだ。ピンピンに反応している。

辺りを見回すと、同年代くらいの女子達がこちらを見ていた。だがもちろん俺を見ていないわけではない。その様子は何かが来るのを待ちわびているみたいだ。

「なんか様子おかしいね」

「外タレでも来るのかしら？」

「……………」

母ちゃんと親父もゲートを振り返る。そんな凄いのが乗ってたのか。後ろの方で寝ている花陽の寝顔を眺めにいくのに夢中になってて気づかなかったわー。いや可愛かったんだよ、本当に。あんまり眺めてたら園田さんに叱られたくらいだ。

「あ、来たー！」

女子の一人が色めきだった声を上げたのを合図に、他の女子達も歓声を上げ、飛び出す。

「お、あれが外タレ！……………あれ？」

「どした？……………は？」

色紙やカメラを持った女子達にあつという間に囲まれたのは外タレではなく……………μ，sだった。

「大丈夫だったか？」

「あはは……………あんなにファンに囲まれる日が来るとは思いませんでした」

「それだけじゃないだろ。動画の再生数えらい事になってるぞ」

「みたいですね……………」

電話越しに、お互い苦笑いを交わす。さすがにあの場面で声をかけるわけにはいかなかったので、意味も無くこそこそして先に帰った。花陽は暗くなる頃に、ようやく家に着いたらしい。

「しばらく秋葉原ではデートできそうもねーな」

「うう……寂しいです」

俺も寂しいが、今やμ、sの知名度は全国区だ。秋葉原、いや、人通りの多い場所で堂々とデートするのは避けた方がいい。

だがμ、sは3月でその活動を終える。それが過ぎればほとぼりも冷めていくはずなので、そこまで深刻に悩む事もない。今気にするべきは……

「ライブ……やるんだろ？」

「……はいー」

「その……なんだ……前みたいに手伝えそうな事があつたら言ってくれ」

「はい……ありがとうございますー」

こうしてμ、sの本当の最後のライブが動き始めた。

夢じやない #2

「よろしくお願いしますー！」

千葉駅付近のファミレスにて、俺と戸塚と材木座と戸部は高坂さんに頭を下げられていた。それに続き、花陽と星空も頭を下げてくる。ちなみに3人共、顔バレしないよう、ここに来るまで帽子とマスクを着用してきた。あのシニールな姿を見ただけで、今のμsの置かれていた状況の異常さが垣間見えた。

そして、俺達はライブのスタッフを依頼されているところだ。人はそこそこ集まってきたているらしいが、まだ足りないという事で、前回のスタッフに声をかける事にしたらしい。

真つ先に返事をしたのは戸塚だ。

「もちろん大丈夫だよ。僕、何かやりたいと思ってたし」

「うむ。断る理由もない！」

二人はもう既にやる気のようなのだ。戸塚は事前に星空から聞いていたのかもしれないが。次に、ニヤリと笑った戸部はいきなりスマホを弄りだした。

「こりゃ、やるしかないっしょー。じゃ、隼人君達にも頼んでみるわー」

「あ、ありがとうございますー！」

高坂さんが顔を上げ、笑顔を見せる。花陽と星空もホツとした表情を見せた。こうして、次の祭りが始まった。

改札の前で、帽子とマスクを着用した花陽が上目遣いで見てくる。……あー、どっちも外してえ。素顔が見たい。

「八幡さん、よろしくお願いします」

「ああ。そういやそっちはどうなんだ？」

「？」

「秋葉原ではファンに追われてるんじゃないかねーのか？」

「あはは……そんな追われたりはしてないですよ。変装したらバレませんし……」
変装しなければいけない状況が既に異常だと思う。そこらの芸能人よりファンがっている状態はμ'sの日常を少し窮屈にしていた。本人達がそれをそこまで辛いと思っていないのが幸いか。

「そっか……まあ、なんつーか……あんま無理すんなよ」

帽子をポンポン叩くと、花陽の体温が布越しに伝わってくる。花陽の目が嬉しそうに細められる。

「はい、ありがとうございますー！」

「あ、それと……」

「どうかしました？」

「ライブが終わったら……いや、まだいいか」

「？」

「いや、帰り気をつけてな」

ニユーヨークで買ったプレゼント。

渡すのはライブの後にしておこう。

本番までの期間は約2週間。中心となるμ'sのメンバーはやることが山積みのようにだ。選曲や練習以外にも、新曲を作ったり、各地のスクールアイドルにイベント参加を直接呼びかけに行ったりしている。

日を追う事に、勢いは増していった。

「ありがとう、沙希ちゃん」

「いいよ。ドーせ暇だったし」

「サキサキはツンデレだね〜」

「サ、サキサキ言うな！」

「サキサキって可愛いじゃない。私も呼んでいいかしら？」

「え、ええ!？」

「へえ、素敵なメロディーね」

「そ、そう？ありがとうツバサさん」

「ぐぬぬ……」

「歌詞もいいと思うわ」

「確かにそうだな。後はここから詰めていこうか」

「雪ノ下さん、統堂さん、ありがとうございます」

「ね、ねえ、穂乃果ちゃん」

「結衣ちゃん、どうかした？」

「な、何で私も踊ってるのかな？」

「お祭りは皆で楽しまなくちゃ！ね、優美子ちゃん！」

「え？あ、あーしも？」

「な、なあ、私も参加した方がいいのかな？」

「止めた方がいいっすよ。後で写真や動画を見たら、ショック受けると思うんで」

「そ、そうか……」

「大丈夫！先生が年より若いのは皆知ってるから！無理して年甲斐もないことしなくていいんですよ！」

「比企谷……変わったと思っていたが、お前の減らず口は一向に治らないようだな!!」

「あだだだだだだだだだだ！」

「八幡さんつたら……ふふっ」

に、賑やかなのは悪い事じゃない……よな。

てゆーか、花陽。見てないで助けてくれ……。

俺は平塚先生のアイアンクローを受けながら、本番とは違った賑やかさをもった祭りの準備の音に耳を澄ませていた。

スターゲイザー #2

「あの……………」

「どしたの、ゆきのん？」

「どうして私まで衣装を着せられているのかしら」

「雪乃ちゃんも踊るからだよ！」

「ゆきのん！やろくよく」

「はあ……このタイプが二人いると、とても敵わないわね」

「雪ノ下さん、すいません。穂乃果が……」

「いえ、大丈夫よ。園田さん」

「……………」

「……………」

二人の視線が、お互いの体のある部分に集中している。

「雪ノ下さん、今度きちんと話し合いましょう」

「ええ、そうね。お互いの成長の為に」

「二人共、どーしたん？」

「仲良くして何よりやな」

「いいパフオーマンズができそうね」

「くっ……」

由比ヶ浜、東條さん、絢瀬さん、もうその辺で……。

「さ、さすがにこれは恥ずかしいかな……」

「そう？ 似合ってるけど……」

「ありがとう。頑張るよ！ 元生徒会長同士って事でよろしくね！」

「そうね。このライブで失恋の痛みを全て断ち切るわ！ そして絵里編でまた読者の予想を裏切って見せるわ！」

「その意気だよ、お姉ちゃん！」

「最後の最後まで発言が危なっかしいわね……何でにこ編があまり期待されていないのかしら。需要……あるわよね？ ね？ ね？」

「ないんじゃない？ ことりのお母さんの方がまだ需要あるかも」

「う、うるさいわね！ 真姫編がクリスマスから開始だからって調子にのるんじゃないわよ」

「べ、別に調子にのってなんかないわよ！」

何故だろう。あの会話にはあまり触れない方が良さそうだ。

時折、こんな冗談交じりの会話が入りながらも、着々と祭りの準備が整っていた。

「賑やかですね」

「ああ」

音ノ木坂学院の屋上で花陽と並んで夕陽を見ながら。その響きには、単にその場の空気を楽しむだけでなく、もう戻る事のない時間を、懐かしむような哀愁が感じられた。

「なあ、花陽」

「はい？」

「俺……東京の大学、受験しようと思ってる」

「……え？」

「そしたら、こっちに住む事になるから……その時はよろしく」

「……はいっ！楽しみですね！」

花陽が抱きつくように肩にもたれかかってくる。いつもの甘い香りが、鼻腔をくすぐりだした。

「まあ、その……いつでも泊まりにきていいようにはしとく」

「むっ……いやらしい事考えてますね」

「どうだかな」

「もう……せつかくの雰囲気は台無しです。八幡さんのほか」
「それでもない」

赤く燃える夕陽に見とれる花陽を引き寄せ、一瞬だけのキスをする。

「は、八幡さん！ここ学校ですよ!？」

「……いつでも、どこでも、したくなるんだよ。世界中の誰より可愛いのが隣にいるからな。つい……」

「あわわ……」

花陽が夕陽に負けないくらいに赤くなり、手をわたわたさせる。俺はその小さな手を優しく握り締めた。

「どした？」

「は、八幡さんが、そんな事言うなんて珍しいです！熱でもあるんですか!？」

失礼だろ。しかし、確かにそうかもしれない。花陽と出会うまで、ずっと逃げてきた事だから。

「……今後はなるべく伝えたい事は伝える。花陽みたいに」

「よ、よろしくお願ひします」

「……()ちら()そ」

空はすっかり茜色になり、今日の夕陽は燃え尽きていった。

魔法のコトバ #2

空は青く澄み渡っていた。どこまでもどこまでも続いていきそうな青空は雲一つ見当たらなかった。

柄にも無く見とれていると、ポケットの中のスマホが震える。画面を確かめると、花陽からだ。本番前で人目もあるので、さすがに直接会うのは止めておこうと、前日に二人で決めた。

「あ、八幡さん。今、大丈夫ですか？」

「おう、どした？」

「えーと……本番前に声が聞きたくなっちゃって」

「そっか。じゃあ、千葉の素晴らしさを存分に語って……」

「空、晴れましたね」

「あ、ああ……」

あれ？あまり興味がない？かなり語り尽くせる自信があるんだけど。まあ、いいか。

「八幡さん」

「？」

「ちやんと見ててくださいいねー」

スクールアイドル・小泉花陽はもうエンジン全開のようだ。

確信した。きっと最高のライブになる。

「ああ、見てる……ずっと」

スクールアイドル達のライブは、最初から最後まで幾つもの笑顔が弾ける、楽しいライブになった。μ'sのメンバーは勿論、各地方から集まったスクールアイドルや、いつもはクールな印象が強いA—RISEも楽しそうにはしゃいでいる。そして、高坂さんから半ば強制参加させられた総武高校の女子もぎこちないながらも楽しそうだ。しれっと小町も参加しているから写真に収めねば。平塚先生？俺らと一緒にいます。結婚前にキズモノにするわけにはいきませんので。……何度も言うが、はやく誰かもらつてやってくれよお。

……話が逸れたが、言葉にし難い大きな感動がそこにはあった。今、確かに秋葉原の街は一つになっている。

「……すげえな」

誰に言うでもなく眩きながら、手が赤くなっても、最大限の拍手を送り続けた。

ライブが終わり、片づけを終えた後によくやく花陽に電話をかける事が出来た。

花陽はすぐに出た。

「八幡さん！」

「お疲れさん。最後まで凄かったな」

「ふふっ。まだ終わりじゃないですよ」

……はて、この後何か予定はあったのだろうか。

「まだ、楽しみはこれからです♪」

そう言つて、隠し事をする子供のような笑みが溢れた。

「わあ、ここがアキバドームかあ。僕、初めて来たよー」

「我は数回来た事があるな」

おそらく声優のライブだろう。それ以外考えられない。まあ、材木座だしな。

「ゆきのんは来たことあるの？」

「海外からミュージシャンが来日した時に観に行ったりするくらいね」

「あ、あーしもあるし！」

三浦が雪ノ下と張り合おうとするが、夏の時と違い、そこにはあまり棘はなかった。

夕陽も完全に沈みきつた時間、スタッフやメンバーの関係者、スクールアイドル達はアキバドームまで来ていた。μ, s からのご招待なので、ここまで来ればやる事はわかりきっている。

集められた人々は、会場中央の特別ステージの周りで、今か今かと待ちわびていた。

そして学校のチャイムのような音が鳴り……突然大音量のシャウトがドーム内に響いた。

「イエー……イ!!!」

ぐああああ!!!

会場に集まった皆が一様に耳を抑えてうずくまる。

「穂乃果!!」

「何やってんのよ、もう!!」

「ダ、ダレカタステエ……」

「……前もこんな事があつたよね……」

「さすが穂乃果ね……」

「相変わらずにや……」

「まあ、ウチらしいんじゃない? うう……」

「まったく……しようがないわねえ……」

「あはは、ごめくん」

μ, s のやり取りに、会場が温かな空気に包まれる。きつと誰も知らない所で、彼女達はこんなやり取りを重ねていたのだろう。無論、笑顔だけではなく、時にはぶつかり合ったりもしたのだろう。多分、涙も流したのだろう。それでも彼女達が行き着く先は

最高の笑顔だった。

「……………」

少しだけ、涙が零れそうになってしまふ。

……今、花陽が目の前にいたら、絶対泣く。

「お待たせしました。それでは、μ, sの本当のラストライブを始めます！」

深呼吸をして、その姿を見届けるべく、ステージに目をやる。

案の定、ステージ上の花陽と目が合う。

そこには、アイドルに憧れ続けた少女の綺麗な笑顔が咲いていた。

春の歌

昨日に引き続き、今日も雲一つ見当たらない秋葉原の空の下。行き交う人波を眺めながら、今日も小さく変わり続ける街の片隅で、俺はぼんやりと立っていた。

昨日の盛り上がりとは質の違う賑わいに、体を馴らしていると、待ちわびた声が聞こえてくる。

「八幡さんー！」

「おう」

μ, sのファイナルライブの翌日。俺は花陽をUTX学園のビルの近くに呼び出した。

帽子と眼鏡を着用した花陽は、小走りで俺の元へ駆け寄ってくる。初めて出会った日を思い出し、そんな遠い昔でもないのに、懐かしさに頬が緩む。

「はあ……はあ……お、お待たせしました」

「急ぎの用事とかじゃないんだから、焦らなくていいぞ」

上目遣いに見つめてくる花陽の瞳を見つめながら、頭をポンポン撫でる。帽子を着用しているせいで柔らかな髪の感触が味わえないのが残念なところだ。

「ごめんなさい。昨日は碌に見送りも出来なくて」

「そつちも気にすんな。……ライブ、最高だった」

「八幡さん、泣いてましたね」

「……やつぱり見えてたんじゃねえかよ」

はい。思いきり号泣してしまいました。小町が隣でドン引きするくらいに。

「私、びつくりしちやつて歌詞飛んじやうところだったんですよ」

「……すまん」

「ふふつ。でも楽しんでもらえたなら、それで幸せです」

満足そうに笑う姿に照れくさくなり、それを誤魔化すようにポケットに手を突っ込み、小さな箱を取り出す。

「……これ」

「え？これって……」

「その……なんだ、本当は昨日だったんだが……」

「昨日……あつ」

プレゼントの理由に思い至った花陽が、潤んだ瞳を向けてくる。

「覚えて……くれてたんですね」

「……当たり前だったの」

今日は花陽と初めて出会ってからちようど一年。

俺の毎日を変えてくれた日だから。

「開けていいですか？」

「ああ」

箱の中から出てきたのは、花と太陽の可愛らしい絵が刻まれたペンダント。

「これ……」

「……ニューヨークで見つけたんだよ。気に入ってもらえるかはわからんが」

後頭部に手を当てながら言うと、花陽はペンダントを胸に抱きしめた。

「八幡さん……ありがとうございます。大事にしますね」

「……あ、ありがとう」

「ふふっ。お礼を言うのは私ですよ」

「いや、なんつーか……出会ってくれてありがとう。……まあ、色々あると思うが、これからもよろしく頼む」

「……私も……出会ってくれてありがとうございます」

花陽が言い終わると同時に、一瞬だけ唇を重ねた。この柔らかさに触れ、本当の心の温もりを知った気がする。そして、それは多分これからも思い知らされるのだろう。

花陽は頬をほんのり紅く染め、少し膨らみました。

「もう……人前なのに」

「行こう」

花陽が言い終わる前に歩き出す。後でMAXコーヒーでも奢ってやろう。

「……はいっ」

特に予定はないが、花陽がいればどこでもいい。

「あ、すいません！」

「い、いえ、こちらこそ……」

「……すいません、うちの妹が」

少し離れたところで、いつか見た光景が繰り返されていた。三人でいそいそと地面に散らばった荷物を拾い集めている。荷物の持ち主の女子と、ぶつかった少女の兄らしき男子は、途中で何度か目を合わせては逸らしている。

「八幡さん？どうかしましたか？」

「……いや、何でもない」

俺はその光景に背を向け、花陽の小さな手をとり、ゆつくりと歩き出す。

その温もりを確かめるように握ると、そこには新しい物語の確かな予感があった。

AFTER STORY

夏の魔物 #2

高校三年、八月。

受験を控えた俺にとつては、最も勉強に身を入れなければならない月だろう。いや、むしろこの炎天下に出たくないから、家でクーラーで涼みながら勉強するのが賢い過ごし方といえる。エアコン最高。

しかし、現在俺の部屋は別の意味で涼しい……いや、涼しいを通り越して寒かった。原因は………

「八幡さん」

「はい」

「これは何の勉強に使うんですか？」

冷え冷えとするような声音の花陽は、俺の前にセクシーな女性が表紙を飾っている雑誌を置いた。ちなみに俺と花陽は正座で向かい合っている。

「いや、これは………人生の参考書というか……」

「……………」

「ごめんなさい」

花陽は俺が出来心で購入したお宝を一つ一つ、顔を赤くしながら表紙を確認する。時折「むむつ」と唸り、その度に少し癖のある長い髪が揺れる。ショートカットも可愛い
が、これはこれで最高だと思う。

俺と花陽の交際は、まあ順調だ。互いにやる事が多く、会える時間は決して多くはないが、それでも会える日はこうやって……………」

「八幡さん」

はい、すいません。怒られてる最中でした。

「ど、どうした？」

「金髪ポニーテールのクォーター美女……………誰かに似てますね」

「き、気のせいだろ」

あれ？背中から汗が……………。

「巨乳巫女特集……………へえ」

「たまたま……………ですよ？」

「ツンデレお嬢様図鑑……………ふふふ」

「……………」

あれ?おかしいな。体が動かないや。

「黒髪ストレートの大和撫子のあられもない姿」

「お、おう」

「ロリツ子のセクシーシヨット……うんうん」

花陽の口元に次第に冷たい笑いが浮かんできて、こちらは生きている心地がしない。

「脱いだらすごいメイドさん……」

「……………」

「和菓子屋の元気娘の限界シヨット……」

「は、花陽……そろそろ……」

「シヨートカット特集……」

「頼む!もうやめてください!」

「八幡さん」

「はい」

「八幡さんって、本当に勉強熱心なんですな♪」

「い、いやあ、それほども……」

クレヨンしんちゃん風に言ってみたが、部屋の温度は下がるばかりで、この状況が好転する事はなかった。

「まったくもう……八幡さんは……」

「ごめんなさい」

小一時間の説教をされた後、ようやく正座を崩す事ができた。うわあ、足が痺れてかなり辛い……。花陽と付き合い始めてから一番怖かった。

「あの……」

「？」

「な、なんで、私に似たのはなかったんですか？」

花陽は不安そうな目を向けてくる。

「いや、それは……色々……」

そんなもん見た後に花陽と会ったら間違いなく……。

俺の表情を見た花陽は何かを察したのか、柔らかな笑顔を作り、ぴったりくっついてくる。

「そんなに、が、我慢しなくていいのに……」

「別に……そんなんじゃ……」

「じゃあ、これは捨てておきますね♪」

「はい……」

「八幡さん！」

「どした？」

「今日……泊まっついていいですか？」

「あ、ああ」

「ていつ♪」

花陽が抱きついてきた。

長い髪からは、いつもと同じ香りがふわりと漂い、安らいだ気持ちになる。

「ふふっ。ば、罰として今日は……可愛がつてくださいね」

「いや、だから……」

上目遣いでそういう事言われると、今度こそ理性が吹っ飛びそうになるんですが、いいんでしょうか？

もしそうなってしまったら、勉強なぞほっぽり出して、花陽に溺れてしまいたい。それを恐れている。

花陽がどう思っているのかはわからない。ただ、もう少し時間が欲しい。

「……………」

「……………ん」

甘すぎず、深すぎないキスを交わす。

その温もりは体に馴染んでいて、花陽の気持ちの方が前より多く流れ込んでくる気がし

た。去年の夏は、こんな事想像もしなかった。
今年の夏は去年よりも熱く高鳴っていた。

君は太陽 #3

『ねえ、八幡君!』

『は、はい?』

『絵里編はどう!?この後も○○で○○な展開がくるそうよ!』

『な、何の事ですか?ていうか何故水着……』

『八幡君はウチに惚れたんよ♪』

『え?』

『私としつとりとチュンチュンするんだよ♪』

『な、何の事でしょうか……』

『八幡、私達はあんな出来事を乗り越えてきたのよ!私が一番よね!』

『あ、え……』

『わ、私には付き合う前からあんなハレンチな事してたのに……八幡……』

『えー……』

『わ、私だって……頑張ります!八幡さん』

『お、おう……』

『穂乃果編はそろそろだよ♪』

『あ、亜里沙編もきつと……』

『なあんてに編は予定も立っていないのよ!』

さつきから何が起こってるんだ?

『ほら、八幡』

『そろそろ起きるにゃ!』

『八幡さん、起きてください』

「……花陽?」

聞き慣れた声にうつすらと瞼を開ける。

ぼんやりとした何かの輪郭が次第にはつきりしてきた。そこで、さつきまでののが夢だったのだと気づく。

完全に目が覚めると、そこにはこちらを覗き込む花陽がいる。いつものやわらかな笑顔がそこにあつた。

「おはようございます。朝御飯出来てますよ」

「ありがとうございます」

のろのろと体を起こし、伸びをすると、朝食を並べるエプロン姿の花陽がそこにいる。

……そろそろ一ヶ月か。この光景もだいぶ見慣れてきた。

東京の大学に合格した俺は、ワンルールの賃貸に引越した。そして引越してきてからというもの、花陽がほぼ毎日こうして食事を作りに来てくれる。朝は朝練があるので頻度は少ないが、それでも来れる日は必ず来てくれた。

「……いつも悪いな」

「いえ、私がやりたくてやってるんです」

頭をほんほんとしてやると、気持ち良さそうに目を細め、そのまま俺の空いた手を握ってくる。

「な、なんか、新婚さんみたいですわね」

「……もう5回くらい聞いたぞ」

「そういう事言うなら……」

いきなり唇を塞がれた。

「……………ん」

「……………」

朝日が射し込むような爽やかなキスは数秒間、今日の花陽を注ぎ込んできた。

「あ、もうこんな時間！」

「朝から4杯も飯食うからだよ……」

「白米ですから！」

「あ、ああ、そうだな……ほら、片付けは俺がやるから」
「ありがとうございます！」

花陽は。パタ。パタと忙しく動き、そこが微笑ましい。

「じゃ、気をつけてな」

「八幡さんも二度寝しないでくださいね」

「お、おう……」

……さすが、俺の行動をよくわかってらっしゃる。

この前二度寝して怒られたばかりだから気をつけよう。

「八幡さん……」

花陽は目を閉じ、俺を待っている。

朝に花陽が来た時はこれも定番になっている。

少し照れくさくはあるが、やっぱり幸せだと思える。

今日もその幸せを確かめよう。

「いってらっしゃい……」

「……………」

また新しい一日が始まる。

一番深い場所

「♪」

花陽が、sの歌を口ずさみながら、台所でせっせと料理を作っている。この匂いはカレーに間違いない。白米は既に花陽自身の手で準備されている。

「もうすぐ出来ますから、待つててくださいね♪」

こちらを振り返りながら、とろけるような柔らかい笑顔を向けてくる花陽。

好きだ!!

……いかん。キャラが変わってしまった。

しかし、本当に綺麗になったと、ここ最近は何度も思う。

あれから俺は大学3年に、花陽は2年になった。お互い二十歳を超え、付き合い始めてから3年以上の時間が過ぎた。最近の変化といえ、花陽が俺の住んでるアパートに引っ越してきて、同棲を始めたことだ。とはいっても、花陽の両親が住んでいるマンションは近いので、たまに二人で泊まりに行くことにしている。

そして……意外なのかもしれないが、未だに一線は越えていなかった。

「八幡さん、どうかしました?」

「え？あ、いや……」

考えごとをしている内に、テーブルの上には料理が並べられていた。手伝い忘れたことを申し訳なく思っていると、花陽がジト目をこちらに向けていた。

「……Hな事でも考えてましたか？」

「……そんなわけないだろ」

「昨日、私のパソコンの閲覧履歴に、sの水着PVがありましたよ？」

「誰の作業だろうな」

「誰の作業でしょうね？」

「……………」

「……………」

お互いじいっつと見つめ合う。花陽のくりくりした瞳は、もう大人の色気が漂っている。今日はどうも頭がおかしいようだ。うっかりしていると、材木座のように再び中二病を発症してしまいそうだ。

そんな事を考えている間も、花陽の視線が逸らされる事はなかった。

「……………」

「……………(めんなさい)」

「よろしい♪」

まさか、「履歴を消し忘れていたとは。俺とした事が……。

「そんなに私の水着姿が見たかつたんですか？」

「……ああ」

「そんなに絵里ちゃんの水着姿が見たかつたんですか？」

「ああ」

「……そんなに希ちゃんの水着姿が見たかつたんですか？」

「ああー！」

今でもお世話になっているのは内緒である。た、たまにしか見てないんだからねっ！

「八幡さん」

「は、はい……」

花陽から威圧感を感じる。

「洗い物、お願いしますね」

「はい」

食事を終え、洗い物を片付け、花陽の姿を探していると、寝室から花陽が顔だけひよこつと出している。

「どした？」

「あ、あの……見てもらいたいものが……」

花陽は少しだけ逡巡し、スローモーションで寝室から出てきた。

その姿に、思わず俺は息を飲んだ。

「は、八幡さん……」

「どうしたんだ？その格好……」

花陽は黄緑色のビキニを着用して、少し恥ずかしそうにもじもじしていた。豊かな胸の膨らみ、しっかりとくびれた腰、身長割に長い脚が、剥き出しになり、ただひたすら魅力的だった。言葉で表現するのが、憚られるくらいの美貌だった。

「どう、ですか？」

「……すごく、綺麗だ」

「ありがとうございます。その……いつでも着てあげますから……」

「？」

「私だけ……見ててくださいいね」

「……当たり前だろ」

「ば、罰として今日は……沢山ぎゅつとして欲しいです」

そう言いながら、花陽は俺の胸に顔を埋めてくる。ふわりと漂ういつもの香りが心地良い。

髪を撫でていると、自然と口が動く。

「花陽は……その……いつも、可愛いし、最近はさらに綺麗になったと思う」

「そ、そんなに褒められると、照れちやいますよ……」

「たまには、きちんと言葉にしておきたい」

「ふふっ。じゃあ、私も……」

花陽は背伸びして、唇を重ねてきた。

日課のようなキスも、どんどん深く体に馴染んでいく。

いつもより意識しているせいか、体が熱くなってきた。

今なら何でもできそうな気がした。

「花陽」

「はい」

「その……俺は……今までで一番、花陽が欲しい」

花陽は目を見開き、唇を震わせたが、やがて小さく頷いた。

甘い沈黙の中、時計だけがチクタクと音を刻んでいた。

灯りを暗くした部屋のベッドの上、熱く見つめ合っていた。今、世界から切り離され、本当に二人きりになれた感覚が脳を支配している。

窓から射す月の灯りに照らされた花陽は、瞳を潤ませながら、甘く囁いた。

「八幡さん……愛してます。ずっと……」

「……俺もだ。明日はさらに好きになる」

花陽の体温と息遣いを心に刻みながら、俺達は今までで一番深い場所で重なった。